俺と彼女の非日常

零堵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺と彼女の非日常

【Ｎコード】
Ｎ５０２８Ｕ

【作者名】
零堵

【あらすじ】
俺こと、南山真琴は、普通の日常を過ごしていた。
そんなある春の日、俺の下駄箱の中に一通の手紙が入っていた。
中身は「放課後、音楽室で待ってます」だった。
俺は、放課後になり、音楽室に行ってみると・・・
そこにいたのは、同じクラスで、クラスのアイドルとも言われた、
汐崎美咲（しおざきみさき）がいた
俺に何の用と思っていたら、彼女が、ある爆弾発言をしていったのである・・・

それがきっかけで、俺の日常が、非日常になってしまったのであった・・・

七月一日から、第三十二話で一学期編終了。第四十七話から、二学期編突入しました。第百話突破！！八月一日に挿絵追加しました。連載開始して、四ヶ月目で、ＰＶアクセス数十万人突破！！ありがとうございます。

第一話～俺と彼女～

季節は春の日、暖かな風がそよそよと吹いている今日この頃
俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、人生の選択を迫られていた
まあ、ぶっちゃけて言うと、俺は高校生で、顔はまあ平均の平均と言われるほど、運動も百メートルを五人で走って、3着ぐらいだし、テストだって全教科５００点中２５０点ぐらいだったりするわけで・・・

まあ何が言いたいのかと言うと、シンプルイズベスト、まあ普通っちゃ普通なんだよな、これが・・・
そんな俺が、何故人生の選択を迫られているのかと言うと・・・
朝、いつもどおりに学校へと向かって、ちなみに俺の通っている学校と言うのは、公立の山野辺高校と言う、まあ受験して面接して、受かる確率と言うのが１００人いたとすると５０人は受かるだろうなとまあ、そんな学校なわけで、そんな学校の昇降口にある俺の下駄箱の中に一通の手紙が入っていた事が始まりなわけで
その手紙が入ってる事で考えられるのは、普通なら女子か男子から「放課後、体育館の裏で待ってます」とか「昼休み、屋上でお待ちしております」とかそんな手紙だと普通期待するだろ？いや普通なら期待するね、俺もそう思ったし？
で、その手紙を受け取ったからには、内容が気になるだろ？普通だからこそ俺は、誰にも見つからないようにその手紙を開けて内容を見てみたわけなんだけど、そこに書いてあった内容はと言うと・・・

「放課後、誰もいない音楽室の中で待ってます、逃げないでね・・・」

と書かれてありました、ええ、そう書いてあったんです
はっきり言いましょう、怖いです、最後に「・・・」付けるあたりが怖いです

でも一体誰が待ち構えているか気にはなるし、それに「逃げないでね・・・」から察するあたり、逃げたら一体どんな事が待ち構えているかさえ分からないし・・・
だから俺は、内心びくびくしながらも放課後になったら、音楽室に行く事にする事にした

そして、授業がいつもどおりに終わり、時刻は約束の放課後
俺は決心して、山野辺高校の南校舎3階の奥にある、音楽室に向かった
いざたどり着いてみると、やっぱりドキドキはする、一体何があるのか気になってはいたし・・・、入ろうか帰ろうか悩んだ末、俺はそ～っと扉を開けて中に入った
音楽室の中は、ピアノと歴代の作家が飾ってある額縁があり、よく学校の怪談とかに使われる「音楽室の鳴り響くピアノ」とか「額縁の目がギョロギョロ動く」とかそう言った学校の怪談が本当に起こりそうな音楽室だった
そんな音楽室の中で待っていたのはというと・・・
「待っていたわ・・・南山さん」
そう言ったのは、同じクラスの汐崎美咲（しおざきみさき）だった
彼女は、クラスの中ではダントツの可愛さを誇り、彼女にしたいランキングも上位で、ＭＩＳＡＫＩファンクラブとか言うＭＫＦＣ（美咲ファンクラブ）とか言うのもあったり、そんな大人気な彼女が俺に向かって、待っていたわと言って来たはっきり言おう、これは何かの冗談か?またはどっきりか?とか思ってしまった
そう思うのも無理はない、だって今まで、一度もクラスの中でも校舎の中でも会話した事が無かったからだし、一体何の用なんだとも思ってしまった
「えっと・・・何の用・・・」
そう言って、俺は彼女の様子を伺った

彼女は、少し俯きながら徐々に顔を上げていって、俺に向かって、飛び切りの笑顔でこう言ってきた
「好きです！彼女にして下さい！」
そう爆弾発言してやがりました、普通ならここで「はい、よろこんで！」とか「是非、お願いします！」とか言うのだが・・・一つ重大な問題が発生していた
「あの・・・自分、女なんですけど・・・」
そう、俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、出席番号２７番の正真正銘女の子なワケで、まあ一人称は自分か俺と言っているけど、紛れも無く女の子なワケなのです
「分かってて言ってます！」
おい、この場合どうすればいいんだ・・・と回答に俺は、困っていた
「えっと・・・友達からなら・・・」
と、俺は妥協な線で言ってみた
「嫌です、他の女に取られたくないから彼女にしてくれと言っているんです！」
即答かよ！？しかも他の女に取られたくないからとな！？
なんで取られるのが女限定何だろう、男に取られるとか一切考えてないのか？こいつは？
まあ、今は男に興味は全く無いのは、事実なんだが・・・はっきり言って、俺は困っていた
「えっと・・・とりあえずなんで自分？」
そう聞いてみた、すると彼女はこう言ってきた
「初めて見かけた時、一目ぼれしたんです、貴方であんな事とかこんな事とか妄想もしちゃったし」
ええ！？何という爆弾発言！さすがに俺もかなり動揺してしまった
「だから、絶対に私の物にしたいと思って、手紙を送ったんです！他の女に取られたくないから！」
うわ～、しかもやっぱり女に取られると思っちゃってるよ、この子
実際、俺はそんなに女子にもてているとかそういうのは全くと言っ

ていいほどないんだがな・・・
「駄目ですか?こんな私と付き合うの」
そう彼女は男が見たら一発で惚れそうな眼差しでそう言ってきた
本当に俺は返事に困った、ここでＯＫしてしまったらどうだろう
世間からどう言った目で見られるか安易に想像できる、彼女はファンクラブまである人気者だし?
じゃあ断ったらどうなるか・・・それも仮想シュミレーションとして想像してみる
「ごめん」「何でですか!」「いや、よく知らないし・・・」「じゃあ私の事、隅々まで知ってから決めてください!」「ちょ、何で脱ぐ!?」「だってその方が速いから・・・私、貴方に何されても・・・」
はい、ＮＧ!というか、何という妄想してしまったんだ、俺は!?
はあ・・・どうしたものか・・・そう悩んでいると、放送で「下校の時刻になりました、速やかに帰りましょう」とアナウンスが聞こえてきた
「あ、下校時刻だし、自分は、もう帰るね!」
「あ、待って下さい!」
そう言って、俺はダッシュで逃げ帰る事にした
次の日、何て言われるかはまだ分からないが、逃げて正解だったな・・・と俺は思っていた
もし断ったら、さっきの妄想通りになりそうな雰囲気だったし・・・
そんな、俺のふつ～の日常が非日常に変わった瞬間でもあったのであった・・・

第一話～俺と彼女～（後書き）

はい、零堵です。いきおいとのりで書いたらこんな風にw
感想くれると作者のやる気がかなりあがります。
書いてて結構楽しい（え？）ので、続き、近いうちに載せようかな・・・と思ってたりします。

～第二話～俺と親友～（前書き）

俺こと南山真琴は、一通の手紙からふつ～の日常が、非日常になってしまったのであった。

～第二話～俺と親友～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、普通の人間である
だって、いきなり異世界に飛ばされたり、神様？とかあって、都合のよい力、所謂チート能力？を与えられたりもしないし？そんな当たり前の日常を過ごしていたりする
いつものように起きて、いつものように学校の支度をして、制服に着替えて、いつもの時間に出かける、そんな当たり前な日常、そんな毎日である
でも、今日の俺はいつもと少し違っていた、何故かというと・・・
昨日の放課後の音楽室で、同じクラスの汐崎美咲（しおざきみさき）に「好きです、付き合ってください」と告白されたからだ、普通の男なら「はい、よろこんで」とか「よろしくお願いします」とか言うだろう、何せ汐崎美咲には、ファンクラブまである大人気の女子らしいし？
そんな汐崎美咲に告白された俺はと言うと、そんな告白を聞いて逃げ帰ったのだ
まあ、何故かと言われると、まず俺は男じゃないし、俺とか自分とか言っているが正真正銘の花の高校の女子高生だったりする訳で、それに彼女と付き合ったら、どうなるか予想出来たからだった
そんな訳で逃げ帰った訳だが、実際にこの問題は全く解決していないと言ってもいいだろう、まず彼女に会ったら何て言えば言いのか・・・それさえも分からないままだからだ
そんな考えをぶつぶつ考えながら歩いていて、気がついた時には俺の通っている高校、山野辺高校に辿り着いていた
学校に辿り着いたので、昇降口に向かい、自分の靴箱を開ける、中には昨日の帰りに入れたと同じく上履きが入っているだけで、昨日は手紙が一枚入っていたけど、今日は入って無かったので、とりあえずほっと安心して、上履きに履き替えて自分のクラスへと向かったクラスの中に入ると、もう既に汐崎美咲は席に着いていて、中の良

い女友達と楽しそうに話しているのを見かけた、それを羨むように
数人の男子生徒が彼女を見ていたりもする
もしかしてこいつらって、美咲ファンクラブのＭＫＦＣのメンバー
かも知れないな・・・と俺は、思ってしまった
俺が席についても、汐崎美咲はとりあえず何も言って来ないみたい
なので、俺は安心する事にした、席に座って教科書を机に入れる作
業をしていると、俺に話しかけて来る者がいた
「おはよ～、まこ～」
「おはよう」
俺に話しかけてきたのは、同じクラスで席も近く、中学の頃からい
つも一緒にいた親友と呼べる奴かはまだ分からないが、栗谷美鈴（くりやみれい）だ
った、美鈴は俺の事を真琴からまこと呼んでいいとか言っていない
のに、勝手に呼んでいたりする
「まこ、どうしたの？なんかあった？」
そう言って美鈴は俺の顔を心配そうに見つめて来る、うん、意外に
鋭いなコイツ・・・
確かに何かはあったんだよ、昨日な？俺がびっくりする出来事がな？
でもこいつに言っていいのだろうか？なんかコイツに言っても解決
しそうにないなと思って、俺はあえて誤魔化す事にした
「いや、何も・・・ふつ～だよ」
「そう？そうは見えないんだけどな～？まこ？悩みがあったら、ど
～んと私に頼っていいよ？すぐにぱぱっと解決してあげるよ～」
そう美鈴は笑顔で言ってきた、うん、あきらかに作り笑いだと言う
事が解る、そう言えば前にこいつに相談した時も同じ事言って、最
後に結局「ごめん、やっぱ無理、なはは」とか言っていたな？
よし、こいつに相談するのはやめる事に決めた俺だった
そう話していると、汐崎美咲とその女友達の会話が聞こえてきた
「ねえ、実はね？私」
「うん、何？」
「好きな人が出来たんだ」

「え、ほんと!?」
「うん、でね?その人に昨日呼び出して、思い切って告白したの」
「凄いじゃん、じゃあ告白は成功したの?」
「ううん、返事聞く前に逃げられちゃった、私、どうしたらいいかなあ・・・」
そう俺に聞こえるように言ってきた、何これ!?新手の苛めですか!?俺にも聞こえるもんだから、それを聞いた男子生徒が「誰だ、美咲様の告白をぶっちした野郎は!」とか「許さねえ!俺だったら即OKするのに!」とか聞こえるし!なんで、俺に聞こえる風に言うかな!?普通!
「その人の事、あきらめてないんでしょ?」
「うん、私、本気なんだ」
「じゃあ、諦めないでガンガンアタックしてみたら?きっと効果あると思うわよ?」
「そう?じゃあ、そうしてみるね?」
おい!何煽ってるんですか!?ガンガンアタックしてとか・・・何言っちゃってるの!?
俺は本当に困ってしまっていた、そんな顔を見てか美鈴が
「大丈夫?なんか気分悪い?まこ?」
「い、いや・・・何とか大丈夫だよ・・・」
俺は親友に悟られないように作り笑顔でそう返していた、ほんとどうしたらいいんだ?
なんで、俺のふつ~の日常がこんな、非日常になってしまったんだ・・・神様、俺、何か悪い事しましたか?・・・そう思っていると、キーンコーンとチャインが鳴り、先生がやって来たので、いつものように授業が始まったのであった・・・
俺は、本当にこう思っていた、マジでどうしたらいいんだと・・・

～第二話～俺と親友～（後書き）

はい、零堵です。いきおいあまって続編書きました。
うん、やっぱり書いていて楽しいですね、これ本当にｗ
感想お待ちしております。
では～

～第三話～俺と親友その2～

俺こと南山真琴（みなみやままこと）は、どうしようか迷っていた、まあ何故迷っていたかといわれると、事の始まりはこうである・・・
俺が昨日、クラスのアイドル的存在の汐崎美咲（しおざきみさき）に「大好きです、付き合って下さい」と告白され、どう返事したら良いかと思っていた所、彼女の友人が「ガンガンアタックしていったら？」とアドバイスしちゃいやがったからである、これでは断っても、しつこくアタックしてくるだろう？全く・・・なんて事をアドバイスしてくれたんだ・・・と、そう思ってしまったのである
そして授業が終わり、放課後、帰る用意をしていると、俺の親友？の栗谷美鈴（くりやみれい）が、俺に話しかけて来たのであった
「まこ～、ちょっとお願いがあるんだけど？」
「何？」
俺がそう言うと、美鈴はこう言ってきた
「明日、暇かな？まこ？」
明日？明日は確か・・・学校が無い日、まあ普通に休みだから、一日中ごろごろとしていられる事だって出来る、まあぶっちゃけて言うと、何も予定は入っていない
「まあ、暇な事は暇だけど」
「よかった、じゃあね・・・明日、私に付き合ってくれる？」
はい？何ですと？付き合う？その言葉を聞いて、俺はちょっと考えてしまった
なんせ、昨日同じ事を汐崎美咲に言われたからである、まああっちはかなり強引な感じだったけど・・・俺は、とりあえずなんでか聞くことにした
「え～と、付き合うって・・・」
「あのね？明日、一緒に行って欲しい所があるんだ、まこ～いいでしょ？」

明日行って欲しい所ね・・・さて、どうするか・・・
確かに俺は明日の予定はまるで入れてないし、暇と言われれば暇なんだが・・・一体何の用なんだ?と俺は思ったので、聞いてみる事にした
「行って欲しい所って?」
「実はね?明日、限定のイベントがあるんだ、だからまこを誘おうと思ってね?駄目?」
駄目と言われてもな・・・限定のイベントねえ・・・
俺はどうしようか、迷ってはいたが、まあどんなイベントか気にはなったし、結局引き受ける事にした
「わかった、自分はOKだよ」
「ありがとう~、じゃあ明日の八時、駅前に集合ね?じゃね?まこ」
そう言って、美鈴は教室から出て行った
さて俺も帰るかと、席を立つと背筋がぞくっとした、それは何故かと言うと・・・
まだ帰ってなかったのか、俺を睨むように見ていたのは、汐崎美咲だった
その目はまるで、親の仇を見るような眼にも見えて、ちょっとというかかなり怖かった
何で睨まれなきゃいけないんだ?と俺は思ったが、話しかけられるとなんか嫌なので、俺はそそくさと教室から出て行って、家路に着く事にしたのである
そして次の日の学校が休みの日、俺は出来る限りの軽装で外に出た
時刻は八時になっていなく、家から駅まで数分なので、予定時刻には十分間に合った
駅前にたどり着くと、もう既に美鈴がやって来ていて、俺に向かってこう言ってきた
「よかった~来ないかと思ったよ~まこ~」
「いや、約束は守るよ、来るって言ったし」
「そうだよね?さすがまこだよね~」

さすがって何だ？まあ、気にしないでおこう・・・
「で、一体何処に行くの？」
「あ、言ってなかったっけ？」
言ってない、何処に行くか全くと言っていいほど、言ってないぞ
「えっとね？ここから電車に乗って、ある場所に行くんだ、だから着いてきて？」
「電車に乗るとか聞いてないんだけど、結構遠いの？」
「いや、そんなには遠くないよ？ここから3駅ぐらいだし」
「そう」
「じゃあ、行きましょう」
そう言って、美鈴は切符を買って改札に向かった、俺も美鈴と同じく切符を買って改札に向かう
そして電車に乗り、たどり着いた場所はと言うと・・・
「ここって、秋葉だよね？」
「そうだよ～」
たどり着いた場所は、オタクやマニアが集まったり大手電器街が立ち並ぶ、言わずと知れた秋葉原であった
ここに来たと言う事は・・・イベントってもしかして・・・
「ねえ、限定イベントって・・・・」
「うん、天空カイザーの限定コスプレイベントだよ～」
やっぱり！そう言う事だろ～と思ったよ、しかし天空カイザー？何だそれ？って感じなんだが
「もしかして嫌だった？まこ？」
「いや、嫌というか・・・まあ、せっかく来たんだし、最後まで付き合うよ」
「ありがと～、さすがまこ～」
そう言って人前だと言うのに思いっきり抱きついてきやがった、恥ずかしくないのか？こいつは・・・と、俺は思ってしまった
「じゃあ、その会場に行きましょう」
そう言って、美鈴はすたすたと慣れているのか、目的地に進んで行

ったようである

俺は、その後ろを無言でついて行ったのであった・・・

～第三話～俺と親友その2～（後書き）

はい、零堵です。三話目投稿です。うん、やっぱり書いてて楽しいですね、この物語、

補足
天空カイザー
毎週日曜日午前１０時からやっている、特撮を中心にしたアニメ
主人公カイザーが、悪の帝王デルウイングの手下達を倒すという
痛快アクション作品、ビジュアル的に女性に大人気のアニメ

うん、これからも出来る限り頑張って書こうかな？と思います。

～第四話～俺と親友その３～（前書き）

俺は、美鈴に連れられて、秋葉原にたどり着く、そこでやらされたのはと言うと・・・

～第四話～俺と親友その3～

俺こと南山真琴（みなみやままこと）は、休日の日、親友の栗谷美鈴（くりやみれい）に「一緒に行って欲しい場所があるの」と言われて、たどり着いた場所は、オタクとかが集まる聖地、秋葉原であった、どうやら俺は、そこで行われる天空カイザーとか言う、アニメのコスプレ会に参加させられるみたいでもある、はて、その天空カイザーとか言うアニメの、一体何のコスプレさせられるんだろうな？俺は・・・出来ればまともなのがいいな・・・とも、思っていた

こうして、俺は美鈴に連れられて、天空カイザーのコスプレをやるお店にたどり着いていた

「まこ～、このお店でやるんだよ」

「このお店？」

そのお店は、店の名前は「ラブ喫茶、アイライク」と書かれてあったうっわ～まともな人物が入るような店じゃないよな・・・だって、店はデコレーションで飾ってあるし、店内を覗いてみたら、男ばっかりだし、店員の恰好もメイド服っぽい衣装を着ているしな・・・絶対に普通の店じゃ無いだろ・・・俺は、そう思っていた

「じゃあ、早速入りましょう」

「あ、ああ」

そう言って、中に入ると、店員がこう言ってきた

「いらっしゃいませ、お嬢様方」

「やっほ～来たよ～」

「あ、れいれい～待ってたわよ」

「うん、じゃあ早速準備するわね」

「ＯＫ，じゃあこっちよ」

「うん、じゃあまこ？行こうか？」

「う、うん」

何だ？美鈴はこの店でれいれいと呼ばれてるのか？何故だ？

しかもなんか店員と仲がいいみたいだし・・・うん、謎だ、こいつ普段、何やってるんだ?
控室に案内されて、俺は美鈴に疑問に思った事を聞く事にした
「なあ、美鈴」
「なに?まこ」
「お前、この店でれいれいと呼ばれてるの?」
「うん、そうだよ?だって、この店でバイトしてるからね?」
「そっか・・・」
なんかなっとくした、だからこの店の店員と仲が良かったのか・・・ところで・・・
「で・・・結局、自分は何を着れば・・・?」
「あ、そうだった、これ着てみて?」
そう言って渡されたのが、上下黒っぽい服だった、あきらかに男物だとは思う
「これ、着るの・・・?」
「うん、絶対に似合うと思うんだ!」
美鈴がかなりの勢いで言ってきた、そこまで言われちゃ嫌だとは言えないよな・・・
俺は、結局しぶしぶ着る事にした、そして数分後
控室に用意してある鏡に映っていたのは、黒っぽい服を上下着た姿が映っていた、うん、自分で言うのもなんだけど、なかなか似合っているとは思うんだが・・・
「きゃ~!まこ~似合う!ほんと、レキそっくり!」
レキ?誰だそりゃ・・・と、俺は思っていた
「レキって・・・?」
「天空カイザーの仲間のクールな美形キャラのレキって言うの、髪型もまこそっくりだし、レキのコスしたら似合うんじゃないかな~とか思ったけど、ほんと似合ってる!」
なんかえらいはしゃいでるな美鈴・・・ちなみに美鈴は、白っぽい服に着替えていて、コスしているキャラは一応、天空カイザーに出

てくるヒロイン、アカリと言うキャラになりきっていた
「じゃあ、早速、撮影会しちゃいましょう！」
そう言って、俺の手をとって、控室から出ていく、控室の外に出ると、待ち構えていたのは、さっきまでいた男どもではなく、いつの間にか女の子で溢れていた
そして、マイクを持った店員らしき人がこう言う
「は～い、今日は特別企画、天空カイザーコスプレ会で～す、皆さん、楽しんでってくださいね～」
「は～い！！」
と、その場にいた女の子の殆どが、そんな声をあげていた、うん、なんか凄いキラキラしてる目で見てるな、この女の子達・・・
そして、パシャパシャと撮影会らしき物が始まった、お店の客、ほとんど女子が、携帯のカメラやら、普通のインスタントカメラとか持って、俺と美鈴、そして天空カイザーのキャラに扮装したこの店の店員を撮っている、特に俺に向かって、写真を撮っていた女の子はと言うと
「かっこいいです」やら「本物そっくりです！素敵～！」やら「付き合ってる人いるんですか？いないなら私と・・・」とか言って来た、さすがに困った、そう言う女の子には、ただ愛想笑いを浮かべていたけど、問題はないと思う、多分・・・
そして、無事？に撮影会が終わって、普通の服装に着替えて、家路に帰る事にした
帰り際に、美鈴がこう言ってきた
「今日はありがとね？まこ？すっごく似合ってたよ？ほら、私、携帯の待ち受け画像にしちゃったし？」
「な、なんで？」
「だって、本当に良い画像なんだもん～、これでご飯は三倍はいけるかも～」
何を言っているんだ？こいつは・・・俺は、そう思った
「今日は本当に楽しかった、また誘っていい？」

俺は、そう言ってきた美鈴にどう答えようか迷ったが、こう答えた
「普通の場所なら付き合うよ・・・」
「普通って?たとえば?」
「普通に買い物とか、映画とかかと・・・」
「それじゃ付き合ってるカップルみたいじゃない、ま、私は、それでもいいけどね?」
しまった、墓穴を掘ってしまったみたいである、じゃあなんて言えばよかったんだ?
「じゃあ、また学校でね?じゃね?まこ~」
そう言って、美鈴は俺の傍から去って行った
こうして、俺のいつもとは違う、休日が終わりを告げたのであった・・・

～第四話～俺と親友その3～（後書き）

はい、零堵です、勢い余ってまた書いてしまいました
うん、やっぱり書いていて楽しいです、本当に
感想くれると作者のやる気がかなりあがったりします
これからも出来る限り続けようと思うので、よろしくです
では～

～第五話～俺と彼女と妹～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、休みの日に親友の栗谷美鈴（くりやみれい）に連れられて、秋葉原の天空カイザーとか呼ばれるアニメの、限定コスプレ会に強制的？に参加させられて、そこで色々な女の子に写真撮られて、まあ写真撮られるのはまあよしとしよう・・・でも、その後美鈴がその俺が演じたレキだっけ？そのコスプレ衣装を着た画像を携帯の待ち受けにしたらしい、うん、勘弁して欲しいというか、出来ればやめてほしいなと、俺は思っていた

まあ、そんな休みの日が終わり、次の日、いつもと同じく俺の通っている山野辺高校の登校日、俺はやっぱりというかいつもの時間に起き、いつもの制服に着替えて、いつもと同じ時間に家を出る

ここまではまあ、普通の日常だ、そしていつも同じ時間に学校について、昇降口へと入って行くと、下駄箱の前に、立っていた人物がいた、その人物はと言うと・・・

「おはようございます、南山さん」

そう言ってきたのは、今、俺の悩みの種でもある人物、汐崎美咲（しおざきみさき）であった、何故この汐崎美咲が悩みの種だと言うと、先日、俺こと南山真琴に向って「好きです、付き合って下さい」と、言って来たからだ、普通の男なら彼女は結構クラスの中でも人気あり、ファンクラブ、ＭＫＦＣまであるので、「是非ＯＫです」とか「よろしくお願いします！」とか快く引き受ける事だろう、じゃあ何で俺が悩んでいるのかと言うと、俺はこう言った話し方だが、正真正銘彼女と同姓、つまり、俺も女の子な訳である、だから、告白されてどう返事したらいいかと、悩んでいたりもしているのである

「えっと・・・おはよう」

俺は、ぎこちながらも挨拶だけはしっかりとした、すると彼女は、笑顔でこう言ってきた

「実は、南山さんに言いたい事があるんです」

「は、はい？言いたい事？」
はて、何だろう？もしかして前回と同じく「彼女にして下さい」とかだろうか？でも、ここは人気のある昇降口、男子生徒や女子生徒だっている、そんな場所で俺に一体何を言おうとしているんだ？この女は？
「今日のお昼、屋上に来て下さい、お待ちしておりますね？逃げないでくださいね・・・」
そう言って、彼女は俺の前から去って行った、彼女に言われた事はつまり
［今日の屋上に来て下さい］だそうだ
一体何の用なんだ？しかも最後に逃げないでね・・・と言いやがったなんか逃げたら何されるか分からないよな・・・俺は、ちょっと恐怖を感じながら、靴から上履きに履き替えて、教室に向かう事にした
教室の中に入ると、すぐに美鈴が俺に向かって話しかけてきた
「おっはよ～、まこ～」
「おはよう・・・」
「どったの？なんか顔青いけど？辛いの？」
「いや・・・別に」
そう言って俺は、自分の席に着く、席に着いて汐崎美咲の方を見てみると、相変わらず女友達と会話していたので、とりあえず俺はほっとする事にして、教科書を机に入れる作業をしていると、再び美鈴が話しかけてきた
「まこ～、昨日はありがとね？私、本当に楽しかったよ？」
「そう・・・あ、美鈴」
「何？まこ」
「ケータイの待ち受け、見せて」
「え？いいよ？、はい」
そう言って、美鈴は何も疑わずに俺に、自分の携帯を渡す
美鈴から携帯を受け取ると、中の画像を見た、携帯の待ち受け画面には、昨日言っていたのと同じく、俺＝レキの格好をした姿が収め

られていたので、俺は即刻デリートボタンを押して、にこやかにこう言った
「はい、ありがと、じゃあ返す」
「いえいえ・・・って、何で画像消えてんの!?」
「自分の画像だから、消させて貰いました、以上」
「ひ、ひどいよ~まこ~・・・、何も照れて消す事ないじゃんか~」
誰が照れて消しただ!全然違うぞ!そう言ってやろうと思ったが、キーンコーンと授業開始を知らせるチャイムが鳴ったので、言うのをやめにしたのであった・・・
そして授業もいつもどおりに終わり、お昼の時間
俺は、汐崎美咲に屋上に来るように言われたので、屋上に向かう事にした
屋上に向かおうとすると、美鈴が俺に話しかけてきた
「あれ?まこ?何所に行くの?」
「ちょっと、用事が出来て・・・」
「え~?一緒にご飯食べようと思ったのにな~?そんなに大事な用事なの?」
「ま、まあ・・・そうなのかと」
「ふ~ん、じゃ、ま、いっか、行ってらっしゃい~」
そう言ってきた、まあついていく~とか言われないだけマシか・・・と俺は、そう思ったのであった・・・一体屋上で何が待ち構えているのか?考えても分からなかったので、とりあえず俺は屋上へと向かう事にしたのだった・・・

～第五話～俺と彼女と妹～（後書き）

はい、零堵です
うん、やっぱり書いてて楽しいですね。
近いうちに続き、書こうと思います。では～

～第六話～俺と彼女と妹その２（前書き）

俺は、汐崎美咲に呼び出されたのであった。

～第六話～俺と彼女と妹その2

俺こと南山真琴（みなみやままこと）は、いつもと違った日常だった、まあ何故かと言うと、いつもと同じように家を出て、いつもと同じように俺の通っている学校、山之辺高校に辿り着く、まあここまでは、いつもと同じなんだが、今日は違っていた・・・何故かと言うと、昇降口で俺の悩みの種でもある、汐崎美咲（しおざきみさき）が、「今日のお昼、屋上に来てください」と言って来たからだ、だから俺は言われたとおりに、お昼の時刻、学校の屋上へと向かったのだった

屋上に向かうと、春の日差しがかんかんに照り付けていて、ちょっと暑く感じたりもしている、その屋上にいたのは、俺を呼び出した人物、汐崎美咲だった

「待っていました、南山さん・・・私、来ないかとおもっちゃいました」

いや、断ったらどうなるか判っていたから来たんだが・・・何故なら彼女は、ファンクラブまである大人気、その彼女の誘いを断った事をファンクラブのメンバーに知られたら、何されるか判らなかったからな？

「で・・・一体、自分に何の用・・・」

俺は、そう聞いてみた、すると彼女はこう言って来た

「実は、これを貴方に食べてもらいたくて、来てもらったんです」

そう言って俺に渡してきたものは、お弁当箱らしき物体だった

「え？お弁当・・・？」

「はい、貴方の事をおもって、朝五時から一生懸命作ったんです、友達も言ってましたし「ガンガンアタックしていったら？」と、だから受け取って下さい・・・」

そう顔を赤くしながら言ってきた、さてどうしよう・・・これが普通の男なら一発で「よろこんで受け取ります」とか「ありがとう！」とか言うだろう、普通ならばだが？

だが俺は普通の男じゃないし、まず汐崎美咲と同姓、まあ女の子な訳であって、よろこんで貰う理由がないんだよな・・・、別に女の子大好き！とかじゃあないし・・・

「えっと・・・自分のお弁当あるし・・・」

そう、俺は教室にある自分のかばんの中にお弁当を持参していたのだ、ちなみにこの山之辺高校は、給食が無く購買部で買うかお弁当を持参して来るのが当たり前になっている、ちなみに俺は弁当持参派だ、自分で作ってはいないけど

「そのお弁当ってもしかして・・・彼女に作って貰ったんですか！？」

言ってる事がおかしいよ！？何故俺が彼女がいるとか思われてるんだ？

「い、いや、普通に家族だけど・・・」

「何だ・・・そうですか・・・、良かったです、もし貴方に彼女がいたら即刻別れさせようと思ったので・・・」

怖いよ！何この子！

「じゃあ、これ・・・貰ってくれますよね・・・？」

「う、うん・・・とりあえず・・・ありがとう」

「いえ、貴方によろこんで貰えてよかったです、あ、あの・・・」

「何・・・？」

「貴方の事、まこって呼んでいいですか？貴方にむかって、栗谷さんがそう呼んでるのを聞いたので」

「ま、まあそれぐらいなら・・・」

「ありがとうございます！じゃあ私の事も美咲と呼んで下さいね？」

そう笑顔で言いやがりました、男が見たら一発で惚れちゃいそうな笑顔で

「そ、そう・・・じゃあ美咲さんと呼ぶよ・・・」

「出来れば呼び捨てで呼んで欲しかったんですけど・・・まあ、いいでしょう、あ、じゃあ私、戻りますね？」

そう言って、美咲は屋上から出て行った、残された俺はと言うと、

この弁当を食べるか、教室に戻って持参している弁当を食べるかそう迷っていたのであった・・・

そして放課後、結局俺は美咲に貰った弁当と持参していた弁当を両方食べる事にした

美咲に貰った弁当の中身を見て驚く、何故ならご飯の上に「ＬＯＶＥ」とハートマークが書かれてあったからだ、うん、かなり恥ずかしい、人に見られたら死にたくなるような恥ずかしさだろ?これ・・・

だから俺は人に見られないように隠しながら、両方のお弁当全て完食した、ちょっと食いすぎてお腹痛くはなったけど・・・

そして授業も終わり、帰り支度をして家に帰って、ただいまと言うと

「お帰り～お姉ちゃん～」

そう言って来たのは、俺の妹である、南山亜季（みなみやまあき）だった、年はそんなに離れてなく、中学生である

「うん、ただいま」

「どうだった?私が作ったお弁当」

そう、俺は亜季にお弁当を作って貰っていたりしていたのだ、普通なら親や自分で作るのだが、何故か亜季が「お姉ちゃんのお弁当は私が作る!」と宣言して、実際に作って貰っている

まあ、亜季は俺と違って料理が得意なので、助かっていたりもしている

「美味しかったよ、いつもありがと、亜季」

「ううん、お姉ちゃんに喜んで貰えて嬉しいから、毎日作るね?」

うん、お姉ちゃん思いの良い妹だよな、良い意味で

そう言って自分の部屋に向かおうとすると

「お姉ちゃん・・・これ何?」

そう言って亜季が指差したのは、美咲に貰ったお弁当箱だった

「あ、これは・・・その・・・お弁当箱」

「何で、お姉ちゃんがお弁当箱持ってるの?私が作ってあげてるのに・・・?」

あの・・・笑顔でそう言ってるけど、なんていうか雰囲気がどす黒く感じるのは気のせいなんだろ～か？
「え～と・・・その、貰っちゃって」
俺は正直に話した
「誰から？」
「同じクラスの女子から」
「！、お姉ちゃん！」
「は、はい！」
「もうそういったのを貰ったら断って！私が作ってあげるんだがら！」
「う、うん」
「お願いね！」
「判った・・・」
「じゃあ、明日もその先もず～っと私が作るからね！」
なんか独占されてる気分になるのは気のせいだろ～か？まあ助かってるから別に問題は無いと思う・・・
こうして、俺の少し違った日が終わりを告げたのであった・・・

～第六話～俺と彼女と妹その２（後書き）

はい、零堵です。妹登場です
これからもちょくちょく出ると思います
感想くれると作者のやる気があがります
近いうちに続き書こうと思います、では～

～第七話～俺と勉強～（前書き）

俺の妹が出てきた次の日、教室にて

アクセス数６００超えました。ありがとうございます。

～第七話～俺と勉強～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、至って普通の人間である、運動だって平均だし、学力も平均クラスである、そんな普通の日常をだらだらと毎日過ごしていたのだが、その普通の日常が、ちょっとずつ変わっていった、何故変わったのかというと、いつもと同じく山野辺高校に登校したある春の日、下駄箱の中に一通の手紙が入っていたからである、その手紙の内容は「放課後、音楽室で待ってます」だった、その手紙を貰ってから、俺の普通の日常が非日常へと変わっていくのであった

そしていつものような時間に起き、学校へと行く支度をして家へ出ようとすると、妹の南山亜季（みなみやまあき）が話しかけてきた

「お姉ちゃん、はい、お弁当」

「いつも、ありがとう、亜季」

「ううん、作るの楽しいしね？お姉ちゃん？昨日も言ったけど・・・他の人にお弁当貰っちゃ駄目だからね！」

「う、うん、じゃあ行ってきます」

そう言って俺は家を出る、うん、出来た妹だよね？最後の台詞はちょっと怖かったけど・・・

そう思いながら、俺の通っている山野辺高校に辿り着く、昇降口に入り、下駄箱に向かうと

「おはようございます、まこ」

昨日と同じく、汐崎美咲（しおざきみさき）だった、なんでいるの？と思ったが、俺はとりあえず挨拶してみた

「おはよう、美咲さん」

「あの・・・今日も作って来たので、貰ってくれますよね？」

そう言ってきた、ちなみに作って来たというのは、昨日屋上で渡されたお弁当の事だとは思う

でも、俺は妹に言われた事を言う事にした

「ごめん、受け取れない」
「何でですか！」
「妹にそう言われたから」
「妹さんに？」
「そう、「お姉ちゃんのお弁当は私が作るから、他のは断って！」って、そう言う訳だから、じゃあ」
「あ、待って下さい！」
そう言って俺は、上履きに履き替えて、自分の教室へと向かった、その場に残ってたら一体何を言われるか・・・と思ったからである教室に辿り着くと、既に何人かは登校していて、他愛のない会話を続けていた
俺は自分の席について、教科書を机に入れる作業をしていると、やっぱりと言うか今日も、俺の親友の栗谷美鈴（くりやみれい）だった
「おっはよ～、まこ」
「おはよう」
「もうそろそろだよね？」
「何が？」
「何がって・・・テストだよ～、この時期ってそうでしょ？」
あ、確かにそうだった、去年の今頃も、この時期中間テストとか呼ばれる、国語、社会、理科、数学、英語の五教科の総合テストが開始されるのである
「あ、確かにそうだね」
「でね？今日、まこの家で勉強会しようと思うんだけど？駄目？」
いきなり勉強会とな？まあ、それもいいかも知れないけど、なんで俺の家でやる事が決まっているんだ？
「・・・美鈴の家じゃ駄目なの？」
「私の家はちょっとね・・・、まこの家行くの久しぶりだし、いいでしょ？」
う～ん、どうしようか・・・まあ、断るのも一つの手だが、別に断る理由も無いしな？俺は、とりあえずＯＫする事にした

「まあ、ＯＫかな」
「ありがと～まこ、じゃあ今日の放課後から毎日だね」
は？毎日ですと？と言う事は毎日来るのか？こいつ・・・
まあ、ＯＫしちゃったし、しょうがないか・・・と、俺は思っていたのであった・・・

～第七話～俺と勉強～（後書き）

はい、零堵です。いきおいあまってここまで書きましたうん、まだまだ続けますね、この物語出来る限り近いうちに投稿したいと思います。

～第八話～俺と勉強その2～（前書き）

何故か勉強会をする事になった俺、さあ、どうなる？

～第八話～俺と勉強その２～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、どうやら試験勉強会をやる事になったみたいである、何故かと言うと、いつものように登校して教室に入って席に着くと、話しかけて来たのは俺の親友でもある栗谷美鈴（くりやみれい）だった、美鈴は俺に「もうすぐ、試験だから勉強会をしよう」と提示して来たので、俺はＯｋした、まあ・・・勉強会をやる場所が何故か俺の家に決まってしまっているんだが、問題は無いと思う・・・多分そんなこんなで放課後、帰りの支度をしていると、美鈴が話しかけてきた

「さあ、まこ～行こう」

「行くって、どこに？」

「何、とぼけてるの？朝言ったでしょ？勉強会するって、だからまこの家に出発～」

「出発って・・・」

何で楽しそうに言うんだ？こいつは、ただ勉強をするだけだと思うんだがな？

そう思っていたが、考えるのも何なんで家路に向かうとした

下校中、美鈴が話しかけて来た

「そう言えば、まこの家に行くのって、随分久しぶりだったよね？」

「そうだっけ？」

「そうだよ、今年に入って、まだ一回も行った事が無かったと思うんだよね？私」

「そうかな・・・まあ、美鈴がそう言うんだったらそうなのかも」

「うん、だから思いっきりまこの家で遊ぶんだ～」

おい、勉強会じゃなかったのか？遊ぶって何だよ

「遊ぶって、勉強会じゃ・・・」

「だって～ず～っと勉強してたら頭の中がオーバーヒートしちゃうよ？少しは休ませないとね？」

「そういうもんかな」
「そういうものだよ、あ。まこの家、到着～」
確かに俺の家に到着していた、うん、話しながらだと時間とか忘れるもんなんだな・・・
まあ着いたので、俺は玄関の扉を開ける事にした
「ただいま」
「お帰り～、姉さん・・・・・・と、誰」
出迎えて来たのは、俺の妹の南山亜季（みなみやまあき）だった、なんか長い沈黙だったな・・・あれ？そういや美鈴と亜季って会った事あったっけ？
「お久しぶり～亜季ちゃんだったっけ？」
「・・・だから誰です？」
うわ、何気に酷い事言ってないか？我が妹よ
「あっれぇ～？覚えてないかな？私、美鈴だよ？ほら、去年会ったでしょ？」
「すみませんが覚えてません、私の頭の中は好きな事と好きな人物の事しか頭にないので」
それってはっきり言うと「お前の事なんか嫌いだから覚えてないぞ」って意味じゃないか？
「・・・まこ～・・・」
うわ、なんか美鈴が涙目になって、こっち見てる・・・さて、どうしよう？
「あ、亜季・・・せっかく来てくれたんだから、ちょっとそれは失礼だよ」
そう優しく言ってみると、亜季はこう言った
「すみません、お姉ちゃん・・・お姉ちゃんが家に女の人連れてくるとは思わなかったので・・・」
「じゃあ、私がもし男の人を連れてきたら・・・」
「即効追い出します、お姉ちゃんに付きまとってる害虫です、それは」
うわ！即答だよ！なんか怖いよ！？

「な、なんか凄い妹だね？まこ・・・」
「そ、そうかな・・・まあ、とりあえず勉強するとしようか、亜季、今日は美鈴と勉強しに来たから、邪魔しないでね？」
「そうですか・・・分かりました、お姉ちゃん」
「じゃあ、早速私の部屋で、勉強しようか」
「ｏｋ～、じゃあ行こう～」
こうして、俺の家での勉強会（初日）が始まったのであった・・・

～第八話～俺と勉強その2～（後書き）

はい、零堵です。ついに八章まで行きました
まだまだ続けたいと思います。
よかったら見てやってくださいね？では～

～第九話～俺と勉強その３～（前書き）

勉強会、初日

～第九話～俺と勉強その3～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は親友の栗谷美鈴（くりやみれい）を家に連れて、テストが近いので勉強する事になったのであった

「まこの部屋来るの、ほんと久しぶり～」

そう美鈴が言う、そんな久しぶりだったっけ？まあ、妹の南山亜季（みなみやまあき）が忘れるぐらいだから、そんな久しぶりかもしれないのだが

「じゃあ、早速勉強始めようか」

「そうだね、まず、どの教科からやろうかな？」

「そうね・・・じゃあ、最初は国語からやろう」

「りょ～かい」

そう言って、国語の教科書とノートと筆箱を取り出して言う

「で、どこだっけ？試験範囲？」

「先生が言ってなかった？「ここからここまでが試験範囲だって、美鈴、授業中聞いてなかったの？」

「なはは・・・その時、夢の国に旅立ってたかも・・・」

夢の国って何だ？はっきり言うとそれって、つまり寝てて聞いて無かったって事じゃあないのか？

「ちなみにね？その夢って、まこと私がらぶらぶで踊ってる夢だったよ？」

何ちゅ～夢を見てるのだこいつは・・・そういう願望があるのか？と思ってしまうじゃないか・・・

「・・・とりあえず、ここからここまでだから、ノートに書き写そう？」

「りょうかい～」

そう言って、俺と美鈴は教科書に書かれてある文字をノートに書き写す

「あ、まこ～この字何て読むの？この、纏（まとい）って文字だけど？」

「これは確か・・・纏って言うんじゃないかと」

「さんきゅ～まこ」
そんな感じで黙々と書き写す作業していた
そして時間が過ぎ、約二時間ぐらいは経過したであろうと思った時、
美鈴が突然こう言った
「あ、もうこんな時間、家に帰らなくちゃ！」
「何かあるの？」
「うん、私のお気に入りのアニメ、天使世界（エンジェル・ワールド）がやるんだ、じゃあ、
私、帰るね～」
天使世界？また、知らないアニメだな、まあ俺はほとんどアニメとか見ないというか、やってる時間知らないだけなんだが・・・
「あ、そう、じゃあまた、明日」
「うん、明日ね～じゃね～まこ」
そう言って美鈴は俺の家からダッシュで帰って行ったのであった
俺もず～っとペンを動かしていたので、疲れたので今日はここまでにしようかな？と思って、書く作業をやめて自分の部屋から出ると、
妹の亜季が話しかけてきた
「お姉ちゃん、勉強終わったの？」
「うん、まあ、やれるとこはやったから今日はもういいかなと」
「あの人は？」
「あれ？逢わなかった？物凄い勢いで帰って行ったけど」
「そうなんだ・・・よかった・・・」
そう亜季は笑顔で言いました、うん・・・何が良かったんだろう？
と疑問に思ったが、聞かない事にした
「あ、お姉ちゃん、夕食作ったから食べて？」
「本当？じゃあ、頂こうかな」
「うん！」
こうして、俺は妹の亜季と一緒に亜季の作った料理を食べた、まあ普通親とかが作るようなものなのだが、俺の家族は三人家族で、まあ母親は仕事で夜遅くに帰ってくるので、いつも夕食は亜季と二人だけで食べていたりするのである

「おいしい？お姉ちゃん」
「おいしいよ」
俺は本心からそう言っていた、まあ妹の亜季は料理が上手いので、本当に俺は幸せ者だとは思う
「嬉しい、好きな人に食べて貰うのが一番うれしいんだ～」
・・・これはラブじゃなくてライクの方だよね？家族愛と言う意味で・・・
そう思いながら俺は、亜季の作った料理を完食し、風呂に入ってパジャマに着替え、明日の準備をして眠る事にしたのであった・・・
こうして、俺の試験勉強初日が、終わりを告げたのである・・・

～第九話～俺と勉強その3～（後書き）

はい、零堵です。うん、書いてて楽しいですねほんと、
これからも頑張って書いていこうと思います

補足
天使世界（エンジェル・ワールド）
毎週月～金曜日の夜7時から15分だけやるアニメ
主役の天使、ミファエルが人間と出会い、さまざまな問題を解決していくというハートフルストーリー、少々恋愛、コメディ要素あり

～第十話～俺と勉強その４～（前書き）

テスト勉強二日目
アクセス数が、１３００行きました、ありがとうございますｗ

～第十話～俺と勉強その４～

俺の家に親友の栗谷美鈴（くりやみれい）が試験勉強しに来て、次の日、俺こと南山（みなみや）真琴（まこと）は、いつものような時間に起き、学校の支度をして、登校する、まあ、そう言った普通の日常打たりするわけで・・・変わった事と言えば、一通の手紙が下駄箱に入ってからだとは思う、あと最近、美鈴とばっかりいるよ～な気もするのだが、気のせいだとは思う
そしていつものように俺の通っている学校、山野辺高校に辿り着き、上履きに履き替えて、教室の中に入る、中に入ると数人の生徒はもう既にいえ他愛のない会話をしていたりする、そんな中、いつもみかけている俺に手紙をくれた人物、汐崎美咲（しおざきみさき）の姿は無かった
いつもは、友達と話しているのに、どうしたのかな？とは思ったが、もともとそんなにも仲良くはないので、ほっとく事にして、自分の席に着く
席について、ぼ～っとしていると、美鈴がやって来て、俺に話しかけてきた
「おっはよ～まこ～」
「おはよう」
「昨日はありがとね～、じゃあ今日もよろしく～」
今日もって・・・やっぱり毎日来る気なんだな・・・こいつ・・・
「今日も来る気？」
「前に言ったでしょ？毎日行くよ～ってもしかして駄目？」
「いや・・・駄目じゃあないけど」
「ならよかった」
そう話していると、キーンコーンと授業を知らせるチャイムが鳴ったので、授業に集中する事にした、ちなみに結局、今日、汐崎美咲は、今年初めて、休んだらしかった・・・
そして授業が終わり放課後、今日はいつもと雰囲気が少し違っていた、まあ理由は何となく分かる、何故ならこのクラスのアイドル的

存在の、汐崎美咲が休みだったからである、多分汐崎美咲のファンクラブ、通称ＭＫＦＣ（美咲ファンクラブ）のメンバーもこのクラスの中に数人いたと思われるからである
、まあ俺には関係ないと言えば関係ないのだが・・・
そう思っていると、やっぱりというか、美鈴が話しかけてきた
「じゃあ行こうか？まこ～」
「そうだね」
そう言って、二人揃って教室を出る、昨日と同じく、俺は美鈴を連れて、自分の家へと帰ったのであった
玄関の扉をあけると、中はし～んとしていた、まだ妹の南山亜季（みなみやまあき）が帰っていないらしく、家の中は、がら～んとしていた
「あれ？まこの家、誰もいないの？」
「うん、そう見たい、母さんも妹もいないみたいだし」
「ふ～ん、じゃあ二人っきりかあ・・・どきどきしちゃうね？」
何を言ってるんだ？こいつは・・・？俺は呆れながら、家の中へと入って行った
「・・・」
「あ、無視しないでよ～まこ～」
そう言って後ろから美鈴が付いてくる、そして昨日と同じく、俺の部屋で勉強を始める事にした
「昨日は、国語を中心にやったから、今日は社会を中心にやろうか」
「りょ～かい、あ、まこ～社会の範囲ってどこだっけ？アメリカとかだっけ・・・」
「それじゃあ地理になるよ、社会は確か、日本史が出題される筈」
「日本史か～、じゃあ問題ないかと」
「なんで？」
「だって、私、いっつも高得点だもん、日本史はね？」
そうなのか？それは初耳なんだが・・・
「そう、じゃあ、試験範囲を重点的にやっとこうか」
「了解～まこ～」

そう言って俺と美鈴は、勉強を始めた
そして数時間後、あたりは薄暗く、夜になろうかと言う時間、とりあえず試験範囲は重点的にやったので、問題は無いはずである
「もう、遅くなってきたし、帰るね？」
「そう、じゃあ、さよ～なら」
「なんか言い方が冷たいけど・・・また、明日ね～まこ～」
そう言って、美鈴は俺の家から出ていく、数分後・・・
「お姉ちゃん！」
いつの間にか、帰っていたのか、妹の亜季が俺の部屋に入って来た
「な、なにかな？」
「またあの人来たの！？」
「あの人って、美鈴の事？」
「そう！」
なんでそう怒っているんだか、不明なんだが・・・
「お姉ちゃんが呼び込んだの？」
「呼び込んだと言うか・・・テスト勉強しようと言ってきたのは、美鈴の方だし」
「そうなんだ、じゃあいつまであの人来るの？」
「いつまでって・・・明日も来るよ、まあ明後日が試験だから、明日までだとは思う」
「そう、お姉ちゃん？」
「な、何？」
「あの人とずっといないで、少しは私の事も構ってよ・・・」
そう泣きそうで我が妹は言いました、一体どうすればいいんだ？こういう場合・・・
「分かったよ、テストが終わったら、一緒に遊んであげるから、それでいいでしょ？」
「ほんと？約束だよ？お姉ちゃん」
「う、うん」
こうして、俺の、テスト勉強二日目が終わりを告げたのであった・・

～第十話～俺と勉強その４～（後書き）

はい、零堵です、この物語も十話目突入です。
これからも頑張って続けたいと思うので、よろしくです。
では～

～第十一話～俺と勉強その5～（前書き）

勉強会三日目
アクセス数、１８００行きました、ありがとうございます
そういえば、一話から日数的に、一週間ぐらいしか経過してないんですよねｗ

～第十一話～俺と勉強その5～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、今日も元気である、まあ風邪引いたり、熱が出たりしないかぎり、学校を休む事は無いのである、まあずる休みという手もあるが、基本的に俺は至って真面目なので、ずる休みとかしないのであった
そして、いつものような時間に起き、学校へ行く支度をして、いつもと同じ時間に家を出る、ここまではいつもと同じであったが、今日は少し違っていた
「おはようございます、まこ」
俺に話し掛けて来たのは、昨日学校に来なかった、汐崎美咲（しおざきみさき）であった
「お、おはよう」
「会えて嬉しいです・・・」
そう赤らめて言って来た、何故、彼女が顔を赤らめたのかというと、理由がある
その理由とは・・・俺の事が好きだからである、まあ何で俺がその事を知っているのかと言うと、数日前、俺の下駄箱の中に一通の手紙が入ってあって、その中身は「音楽室で待ってます」だった、で、言ってみると、彼女が待っていた訳で、俺に向かって「彼女にして下さい」と言ってきたからである、まあここまでだったら、普通の男ならば「お願いします」とか「ＯＫです」とか言うだろう、何故なら彼女はクラスの中でも大人気で、ファンクラブ、ＭＫＦＣ（美咲ファンクラブ）まであるからである、だが・・・俺は、普通の男では無かった、まあ彼女と同姓、女だし？
「そ、そう・・・何で嬉しいのかは、聞かないよ・・・」
「そうですか？実は私・・・昨日、風邪を引いてしまって、学校休んだんです・・・出来れば、貴方にお見舞いに来て欲しかったです、家に電話したんですけど・・・妹さんでしたっけ？その方が出て「お姉ちゃんはいません！」と言ってましたけど、昨日、自宅にいな

かったんですか？」
はて？昨日は確か、親友の栗谷美鈴（くりやみれい）と一緒に、社会の試験勉強してた筈なんだが？
「昨日は、家で試験勉強してたよ、でも電話が鳴ったのは気がつかなかったかな」
「そうでしたか・・・、あの・・・私が遊びに誘うとした時、今度はちゃんと出て下さいね？妹さんに出てもらうのではなくて」
「は、はあ・・・なるべくそうします・・・」
てか、遊びに誘うのか？俺を・・・一体何所に連れて行くのか、全く分からないのだが・・・
そう話しているうちに、俺の通っている高校、山野辺高校に辿り着き、教室の中へと入る
中に入ると、男子生徒がいきなり「美咲さま～！昨日は寂しかったです！」とか言って来た奴がいた、多分というかおそらくＭＫＦＣのメンバーかと思われる
美咲は「心配してくれてありがとう、もう大丈夫よ」と笑顔でそういった、その笑顔を見て「おお～」とか騒いでいたりする、うん、さすが人気者だよな、俺と大違いだなって感じがする
俺はそう思って、自分の席に着くと、今日も美鈴が話しかけて来た
「おっはよう～まこ～」
「おはよう」
「今日はびっくりしちゃった」
「何が？」
「だって、クラスのアイドルの汐崎美咲とまこが一緒にやって来たんだもん、一体どう仲よくなったの？」
どう仲良くなったか？いや・・仲良くは・・・なったのか？ただ一緒に来ただけだと思うんだが・・・
「一緒に来ただけだって、偶然だよ」
「そう？いよいよ明日がテストだから、今日もまこの家で勉強だね」
「一昨日と昨日は国語と社会やったから、あとは数学、英語、理科

をまとめてやる感じかな」
「そうだね、うわ～大変そう・・・、でも頑張るしかないかあ・・・」
「そうだよ」
そう言ってると、キーンコーンとチャイムが鳴ったので、話すのをやめて、授業に集中する事にした
そして放課後、今日も美鈴を連れて、俺は家へと帰る
家の中に入ると、すでに南山亜季（みなみやまあき）が帰っていたらしく、「お帰りなさい、お姉ちゃん・・・・・と、その他の人」と言って来た
その他の人って・・・やっぱり随分と我が妹は美鈴の事を嫌ってる感じだよな・・・と思った
「あ、そう言えば亜季？」
「何？お姉ちゃん」
「昨日、電話あったんでしょ？何で自分に言わなかったの？」
「何で、お姉ちゃんが電話あった事知ってるんですか？」
「かけた相手が、自分に言って来たからだよ」
「だって・・・「まこの家ですよね？まこ、私の大好きなまこ、出て来てください」って言って来たから「お姉ちゃんはいません！」って言って、切りました、お姉ちゃん、一体誰です？そんなふざけた事を言ってる人は」
うわ、目が怖いですよ？妹よ・・・
「え～と・・・まあ、忘れて？」
「忘れるわけにはいきません！私が一番お姉ちゃんの事が好きなんですから！」
「お～まこ、モテルねえ～、まあ私がまこの事を一番好きだけどね？色々と知ってる事あるし？」
美鈴まで爆弾発言してない！？・・・何で、俺はこう、同姓ばかりにもてるんだ？
妹にクラスメイトに親友、この中で選べってか？無理だろ、普通・・・

「・・・勉強しに来たんだから、行くよ、美鈴、亜季は邪魔しないでね？」
そう言って、俺は自分の部屋へと行く
「あ、待ってよ、まこ～」
「お姉ちゃん・・・」
亜季が何か言っていたが、気にしないことにした
自分の部屋に入って、早速英語と理科と数学の教科書を開く
「今日は、三教科一気にやるよ」
「うん、大変だけど・・・やろうか・・・」
俺達は、黙々と書いたり消したり、読み書きをしたのであった
数時間後・・・
外を見ると、月が出ていて真っ暗だった、時間を見ると、夜の十一時を過ぎている
ざっと計算して、五時間は勉強した事になるなあ・・・さすがに疲れていた
「ふ～、こんぐらいでいいよね・・・もう、疲れたし・・・」
「そうだね・・・」
「じゃあ、帰るね？お互い、明日、がんばろ～ね？まこ」
そう言って、美鈴は帰って行った、俺はと言うと、お風呂に入って、亜季の作ってくれた夜食を食べて、明日の用意をして、眠る事にしたのであった
こうして、俺の三日間の勉強会が終わりを告げたのである・・・

～第十一話～俺と勉強その5～（後書き）

零堵です、うん、この物語書いてて楽しいですｗほんとこれからもがんばって書こうと思います。
よろしくお願いしますね。

～閑話～キャラ設定～挿絵つき～（前書き）

俺と彼女と非日常のキャラ設定です
挿絵追加しました。随時、追加していきたいと思います。

～閑話～キャラ設定～挿絵つき～

キャラ設定

＞ｉ３３４５８―２９７１＜

南山真琴（みなみやままこと）年齢１７歳、山野辺高校２年
身長大体１７０ぐらい、体重５０？いかないかぐらい
家族構成、母親と妹の３人ぐらし
黒髪のショート、大変スレンダーな体、天空カイザー（つまりぺったんこ）のレキのコスプレするとそっくりと言われる
一人称、俺か自分
この物語の主人公、普通な日常を過ごしていたが、ある日、それが非日常に変わってしまった、ある意味不幸な人物、なぜか異性より同姓にもてる（笑）
突っ込み体質でもある

＞ｉ３２９６６―２９７１＜

汐崎美咲（しおざきみさき）年齢１７歳、山野辺高校２年
身長１６０ぐらい、体重４５？ぐらい
家族構成、両親と３人家族
一人称私
黒髪のストレートで、グラビアアイドルのような体、クラス一の美

少女、好きな人物南山真琴
この物語のヒロイン1?真琴にラブレターを送った人物、容姿端麗、運動抜群で成績も優秀
美咲ファンクラブ、通称（ＭＫＦＣ）があったりする
真琴が好きすぎて、少々暴走気味な妄想もする、真琴が絡むとヤンデレ化もする（笑）
真琴がもし男と付き合うような事があったら、全力で別れさせようとも思っている

＞ｉ３２８０６―２９７１＜

栗谷美鈴（くりやみれい）年齢１７歳、山野辺高校２年
身長大体１５５ぐらい、体重５０キロぐらい
家族構成、両親と弟の四人家族
一人称私
栗色のストレートで、幼児体型、アニメやゲームにはまっている、腐女子
バイト、ラブ喫茶「アイライク」で働いている
真琴の親友でヒロイン2?アニメが大好きで、コスプレもしたりしている、真琴と一緒に行動するのが好きなので、よく一緒にいようとする

＞ｉ２９５８５＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞２９７１＜
南山亜季＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞みなみやまあき＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞年齢１５歳、山野辺中学３年
身長１５０ぐらいで、体重４０ぐらい

黒髪のツインテール、幼児体型、真琴の妹
一人称私
真琴の妹で、料理が得意、真琴、つまりお姉ちゃんの事が大好き、
お姉ちゃんに近づく者は、誰であろうと嫌だと思っている、姉の事
になると、ヤンデレ化もする

ＭＫＦＣ（美咲ファンクラブ）
美咲のファンクラブ、美咲を彼女にしようと色々と行動しているが、
当人に断られている
クラスの中でも数人はいる程度

書いてくうちに、キャラが増えるかもです。とりあえずここまでで
すかね？

～閑話～キャラ設定～挿絵つき～（後書き）

はい、零堵です、キャラ設定を投稿しますね。

～第十二話～俺とテスト～（前書き）

テスト開始

～第十二話～俺とテスト～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、気合いが入っていた、まあ何故かというと、
栗谷美鈴（くりやみれい）と一緒に勉強してきたので、その成果が試されるテストが、
実施されるからである
そんな訳で、いつものような時間に起き、制服に着替えて家を出る、
昨日、夜遅くまで勉強してたせいか、少し眠かったが、何とか俺の
通っている高校、山野辺高校に辿り着いた
教室の中に入り、自分の席に着くと、やっぱりと言うか、ここのと
ころ毎日話しかけてくる、親友の栗谷美鈴（くりやみれい）が話しかけてきた
「おっはよ～、まこ」
「おはよう」
「なんか寝むそうだね？、夜遅くまで起きてたの？」
「まあ、そうかな・・・ちなみに美鈴は？」
「私の目を見ればわかるでしょ？」
そう言って、顔を俺に近付ける、確かに顔を見ると、寝不足なのが
分かった、だって、目に隈が出来ていたし？
「一体何時まで起きてたの？」
「う～ん、夜中の四時かな？ネトゲにはまっちゃってね～」
おい、勉強して寝不足じゃあないのか？ネトゲって・・・ネットゲ
ームをしてたってことは、遊んでたのか・・・こいつは
「今日の試験、大丈夫なの？」
「大丈夫でしょ～赤点無ければ、私、怒られないし～」
えらく楽観的な考えだな・・・まあ、俺もそんな感じか
そう話していると、キーンコーンと鳴ったので、試験に集中する事
にした
一時間目、国語
国語の問題は、なんなくすらすらと書けた、まあ日本人だから、漢
字とか文章の事を知っていれば、高得点は取れると思う

二時間目、数学
これは、ちょっと苦戦した、二等辺三角形とか、円形の面積を求めよとか、円周率１０ケタ書けとか、絶対日常生活で使わないだろ？これ・・・それに、覚えたってすぐ忘れると思うぞ？
三時間目、理科
理科の問題は、主に生物の事を中心に問題に出されていた、まあライオンとかキリンとかそう言うのはわかる、動物園とかにいそうな生物とかだとね、化石の名称を答えよとかむずいと思うのは俺だけか？
四時間目、社会
社会は、比較的簡単だった、まあどこどこの名産品を答えよとか、都道府県名を出せとかだったから、暗記していればすらすらと書けると思う、実際に地理とかは大事だし？
五時間目、英語
はい、無理！和訳を訳しなさいとか無理だって、第一英語って、外国に行かない限りほとんど使わないだろ、それになんで訳すと変な文とかあるんだ？例えば「Ｍｙ　ｆａｔｈｅｒ　ｂｅｃａｍｅ　ｎｅｗ　ｈａｌｆ，　ａｎｄ　ｉｔ　ｗｏｒｋｅｄ　ａｔ　ｔｈｅ　ｂａｒ．（俺の父親が、ニューハーフになって、バーで働きました）とか「Ｗｈｏ　ｉｓ　ｔｈｉｓ？Ｉｔ　ｉｓ　ｆｏｏｌ'ｓ　ｐｅｒｓｏｎ．（これは、誰ですか？それは、アホの人です）とか問題に出されてるし・・・
こうして、何とかテストは、終わりを告げた
結果はどうなったのかと言うと、国語、５０点、数学４０点、理科、６０点、社会、７０点、英語、３０点だった、うん、大体は普通な成績だとは思う
ちなみに美鈴は、ほとんど赤点、美咲は、ほとんど高得点を叩き出していたのであった・・・

～第十二話～俺とテスト～（後書き）

はい、零堵です、十二話を投稿します。
うん、これからも書き続けたいと思います～

～第十三話～俺と状況説明～（前書き）

エラーが出たので、内容を変更して、書き足します。

～第十三話～俺と状況説明～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、いつもと同じだった、まあいつもと同じ時間に登校、いつものような時間に高校、山野辺高校に辿り着き、いつもと同じ時間に教室へと入る
そして自分の席へと座り、いつもと同じく教科書を机に入れたりしているのである、まあ変わった事と言えば、先日、テストがあった事と一通の手紙が来たぐらいなのである
まあ、その一通の手紙が来たせいなのか？俺の日常は、ちょっとずつ変わっていったのも確かである、まず変わった事その1、手紙を差し出した張本人からのアプローチが多くなった事、今までは、全く会話がなく、ただのクラスメイトな感じだったのだが、手紙を俺に出した女、汐崎美鈴（しおざきみれい）からのアプローチが多くなったのである、何故、多くなったのかというとその手紙の内容は「貴方が好きです、彼女にして下さい」だったからである、普通の男なら「よろこんで」やら「ＯＫです！」とか言うだろう、普通ならばだが、だが俺は・・・普通じゃ無かった、なんせ汐崎美咲と同じ、俺とか自分とか言っているが、正真正銘俺も女なのである、だから俺は、少しというかかなり困っていたりする
変わった事その2、その手紙が来てからか、俺の親友の栗谷美鈴（くりやみれい）と俺の妹の南山亜季（みなみやまあき）が、俺によく話しかけてきたのである、親友の美鈴は、俺の事を認めてもいないのに、勝手にまこと呼んでるし、妹の亜季にいたっては、俺に近づく者を誰であろうと、嫌がっていると思われる節がある、しかも亜季は美鈴の事が大嫌いらしく、昔に会ったというのに、誰ですか？とか言ったり、俺に近づくなとかそういうオーラも出している感じがする、はっきり言って、シスコンなんだろ～か？俺の妹は・・・
そんな感じで、俺の日常は、ちょっとずつ変わっていった
これから先、一体どうなるんだろな？まあ、深く考えないでおこう

と・・・心に決めたのである・・・

～第十三話～俺と状況説明～（後書き）

はい、零堵です、中身を変更して、お送りします。

～第十四話～俺と遊園地～（前書き）

はい、続き書きます～

アクセス数、２８００行きましたｗありがとうございますｗ

～第十四話～俺と遊園地～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、ある場所に来ていた、その場所とは・・・山野辺アイランドと呼ばれる、総合レジャー施設、まあ所謂遊園地と呼ばれる場所に、遊びに来ていたのである、何故、遊びに来ているのかというと、テストが終わって、次の学校が休みの日、俺の妹の南山亜季（みなみやまあき）が「休みだから、一緒に遊びに行きたい」と言ってきて、俺は、妹をかまってやる約束をしたので、それを了承、そして何所がいいか、二人で相談した所、山野辺アイランドに行きたいと妹が言ってきたので、そこに行く事になったのである、ちなみに母親は、「楽しんでらっしゃい、あ、お土産忘れずにね？」と言って、家で留守番していたりする

そんな訳で、動きやすい格好に着替えた俺は、妹の亜季を連れて、山野辺アイランドに来ていたのであった

「お姉ちゃん、今日は楽しもう～」

「そうだね」

妹はかなりご機嫌らしく、俺の手を掴んで、そう言っている、うん、嬉しいのはわかるよ？もう少し人の視線を感じてくれると嬉しいかな・・・と、俺は思っていた

「まず、何乗る？」

「そうだね・・・、え～と人があまりいない場所は・・・」

そう言って、山野辺アイランドの中を歩いていく、数分歩いて、人があまり並んでいないアトラクションに辿り着いた

「あ、ここにしよ？お姉ちゃん」

その場所は、スプラッシュ屋敷と書かれてあった、うん・・・内容が全く分からない・・・

「スプラッシュ屋敷・・・・亜季、これに乗る？」

「うん、これにする」

「りょ～かい」

そう言って、二人で並ぶ、数分たって、俺たちの番になると、係員がこう言ってきた
「スプラッシュ屋敷にようこそ、ひとつ注意点があります、このアトラクションは、水を使うのでお客様の衣類が濡れてしまう可能性があります、もし濡れるのが嫌でしたら、こちらに合羽を用意してありますので、使うというのでしたら、私に言ってください」
「どうする?使う?」
「私はいいや、お姉ちゃんは?」
「自分もいいかな、別に濡れてもかまわないし、じゃあ、自分たちは使いません」
そう係員に告げると、了解しましたと言って、案内してくれた
このスプラッシュ屋敷というアトラクションは、コースターに乗って、周りの景色を見るとかいわれる、まあジェットコースターみたいな感じの乗り物みたいである、俺と亜季は、何故か一番前の座席に案内されて、席につく、妹は「楽しみ~」とか言っていて、かなり笑顔であった
そして、係員が「グットラック」と言うと、コースターが発進、かなりのスピードで動く、これ・・・ジェットコースターと同じだな・・・と思っていると、いきなり水の中へと数秒入った、これって、濡れてしまう可能性とかいうより、１００%濡れるだろ!、携帯とか水に弱い電化製品、駄目になるんじゃないか?これ・・・
そんな感じで、なんとかスプラッシュ屋敷が終わった
「楽しかった~、お姉ちゃんは?」
「ま、まあまあかな・・・」
そう言っていた、うん、あんまりこういうスピード系は、苦手なんだよな・・・俺は・・・
「じゃあ、次の乗り物乗りに行こう?」
そう言って俺の手をとる、なんでいちいち俺の手を掴むのが謎だが、まあ、俺は気にしない事にした
次に俺達が向かったのは、フリーフォールと呼ばれる、座席をベル

トで固定して、垂直に上昇、頂上から一直線に落下をする、絶叫系アトラクションだった
「さっきのジェットコースターの次は、これに乗るの・・・？」
「うん、駄目・・・？」
そううるうるな顔で言ってきた、その顔は卑怯じゃないか・・・断りずらいんだが・・・
「わ、分かったよ」
「ありがと～お姉ちゃん」
そう言ってきた、うん、なるべく下を見ないようにしようと、決めたのであった
数分後
「・・・・」
「だ、大丈夫!?お姉ちゃん」
「だ、大丈夫・・・」
危うく意識が飛びそうになった、さすがに絶叫系は苦手だな・・・と、意識した瞬間でもある
「亜季・・・次は、絶叫系じゃなくて、もっと軽いものにしてね・・・」
「う、うん、お姉ちゃんがそう言うなら、そうするね？」
ふ～、これで何とか絶叫系には乗らなくて済むだろう・・・そう、俺は思っていた
そして、次に向かったのが、どこの遊園地にもある、メリーゴーランドだった
うん、こういうゆっくりな回転の動く乗り物で、心を落ち着かせようと、俺は思ったのである
以外に人があまり並んでなかったので、俺と亜季はメリーゴーランドの中の機械に乗った、亜季が馬車の中に入り、俺が白馬をイメージした乗り物に跨る
そして、数分が過ぎ、メリーゴーランドの回転が終わると、お腹がすいてきたので、食事場所に向かう事にしたのであった・・・

そこで、出会ったの人物はと言うと・・・

「あれ?まこ〜!」

「まこ、まさか、ここで会えるなんて・・・嬉しいです・・・」

そう、何故かそこにいたのは、俺の親友の栗谷美鈴と、俺に手紙を送った人物、潮崎美鈴(しおざきみれい)が、いたのであった・・・

～第十四話～俺と遊園地～（後書き）

零堵です、続きの話を投稿します。

～第十五話～俺と遊園地その２～（前書き）

続きです

～第十五話～俺と遊園地その2～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、どうしようか迷っていた、何故、迷っていたのかというと、テストが終わって、休日、妹の南山亜季（みなみやまあき）が、遊びに行きたいと言ってきたので、それを了承して、遊びに向かったのは、山野辺アイランドと呼ばれる遊園地だった
その遊園地の中で出会ったのは、俺の親友の栗谷美鈴（くりやみれい）と、俺に手紙を送った人物、汐崎美咲（しおざきみさき）の姿があったのである、さて・・・どうなる事やら・・・

「まこ～、まさか会えるなんて思わなかったなあ」
そう言ってきたのは、俺の親友の美鈴、うん、何でいるんだ？こいつ
「まこ・・・会えてうれしいです・・・」
そう言ったのが、俺に手紙を送り、クラスの中でも大人気で、ファンクラブまである、汐崎美咲だった
「え～と・・・何でいるの？」
俺は、そう聞いてみた
「私はね？この山野辺アイランドで開催される、天空カイザーショーを見に来たんだ～」
ちなみに、天空カイザーと言うのは、美鈴がはまっているアニメである、前に、そのキャラのコスプレを俺もやったから、覚えているのである
「私は、何も用事がなかったので、母がくれたチケットをもらったので、そのチケットで遊びに来たんです、そしたら同じクラスメイトの栗谷さんを見つけて、話しかけていた所、まこがやってきたと言う訳です」
そう美咲が言ってきた、なるほど・・・そう言う事だったのか・・・
「お姉ちゃん・・・この人は？」
そう妹の亜季が美咲を指さして言う、そっか、美鈴は家で会ったけ

ど、美咲は会ってなかったっけ？
俺は、とりあえず紹介する事にした
「えっと、この人は、同じクラスの汐崎美咲さんだよ、亜季」
「ふ～ん・・・えっと、妹の亜季です」
そう亜季が言うと
「貴方が妹さん？随分とまこの事にしがみついてるけど、それはいつもなの？」
いつの間にか、亜季は手を繋ぐというより、腕を組む形を取っていたりする、あの～・・・別に逃げたりしないから、がっちりとつかまないでほしいんだが・・・俺は、そう思った
「もしかして・・・前に電話してきたのって、貴方ですか？」
「そうよ？」
「！、貴方に言っとく事があります！お姉ちゃんに二度と近づかないで下さい！お姉ちゃんは渡しません！」
・・・妹が何気に凄いこと言ってない！？周りの視線が痛いよ！？
なんか会話も「あれって、三角関係？しかも妹と彼女？百合百合だな～？」とか聞こえるし！？
「・・・それは許可できないです、必ずまこは、私のモノにしますから！」
美咲も大胆な事言ってない！？って、いつの間にか美鈴がその場にいなくなってるし！？
美鈴の事を探してみると、とおくの方にいて、天空カイザーのショーがやってる所にいるのを発見した
「お姉ちゃん、行こ！」
「あ、うん・・・じゃあ、また、美咲さん」
「あ、待って下さい！私も一緒に・・・」
美咲がそう言っていたが、追いかけて来なかった、何故かと言うと、他の男性数人に声をかけられていたからである、しかも途切れ途切れに「ファンです」とか聞こえるので、恐らく美咲ファンクラブ、通称、ＭＫＦＣ（美咲ファンクラブ）だと思われた

まあ、そんな訳で色々とあったが、食事をとって、しばらく遊んで、夕方になった頃、さすがに疲れたので、夜にやる「ヤマノベパレード」は見ず、家路につく事にしたのである
家路に帰る途中
「お姉ちゃん」
「何？亜季」
「あの美咲って人の事、す、好きなの・・・？」
・・・どう答えればいいんだ？いや、確かにラブレターらしきものはもらったが、返事してないし、なるべく関わらないようにしてるから、好きか嫌いかで言われると、微妙なんだが・・・
「ん～・・・好きでもないし、嫌いでもないかな、まあ同じクラスだしね」
「そう・・・お姉ちゃん、私、あの人にはお姉ちゃん、取られたくないから、あの人と仲良くしちゃ駄目！分かった！？」
「・・・う、うん」
俺は、そう答えていたのであった
こうして、俺のまたまた変わった休日が、終わりを告げたのである・・・

～第十五話～俺と遊園地その2～（後書き）

はい、零堵です。この物語も十五章め突入しました
これからも書き続けようと思います。
評価が少し上がったのが、嬉しい感じかな？
では～

～第十六話～俺と後輩～（前書き）

続きを書きます、アクセス数が一週間で２０００以上超え、ほんと読まれてるのが嬉しいです。

～第十六話～俺と後輩～

季節が雨がよく降る季節になり始めてた頃、俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、いつものように起き、いつものように着替えて、いつものように外に出る、そんな毎日を過ごしている、まあ、普通、いきなりそんな日常が変わったりとか滅多に無いし、でもそんな当たり前のような日常が、ある日ちょっとずつ変わっていった

まず変わったのは、同じクラスの汐崎美咲（しおざきみさき）に話しかけられる事だった

今まで全く彼女から話しかけて来なかったのに、どう言う訳か俺が手紙を受け取った日から、よく話しかけて来るようになったのであるまあ、手紙の内容が「好きです、彼女にして下さい」だったから、仲良くなりたいと言うか、俺と付き合いたいと言う願望があるらしいので、話しかけて来るのだろう

普通の男ならば「はい、よろこんで！」とか「お願いします！」とか言うだろう、普通ならばだが・・・俺は、普通じゃ無かった、まず、俺は男では無いからである、一人称が俺とか自分とか言ってるが、俺は正真正銘の女の子だし、まあ、髪が短いので、服装を変えると男に見えるのかも知れない、実際に親友の栗谷美鈴（くりやみれい）に、アニメだが天空カイザーのキャラのレキ（男キャラ）のコスプレさせられて、似てる！と言われたほどである

あと最近と言うか、遊園地で俺の妹の南山亜季（みなみやまあき）が、美咲と会ったからか、いつもと倍以上に俺といる時間が長くなった気がする・・・気のせいではなく、最近お風呂も「一緒に入ろ？」と言って来たし・・・今までは、そんな事言って来るの全く無かったのだが・・・

そんな日常を過ごしていたりもするのであった

そして、遊園地に行って次の日、俺はいつもと同じ時間に起きて、俺の通っている高校、山之辺高校に向かう、そしていつもと同じ時間に到着する予定だったのだが・・・

俺に話しかけてくる者がいたのである

「あの・・・先輩」
「はい？」
俺に話しかけてきたのは、俺の事を先輩と言って来た、と言う事は、俺は2年なので、後輩の1年生なんだろう、その後輩君が一体俺に何のようなんだ？
「これ読んで下さい！」
そう言って、俺に一枚の手紙を渡して、俺の傍から離れて行ったのであった
「・・・手紙・・・」
これで、手紙を貰うのは二枚目だな・・・、そう思い、手紙をしまおうとすると
「まこ～、見たよ？」
俺に話しかけて来たのは、俺の親友の美鈴だった
「見たって・・・これ？」
「そう、今の子って、東雲玲君（しののめあきら）じゃん」
「東雲玲・・・？知ってるの？美鈴」
「知ってるも何も、新入生の中で大人気の彼だよ？ちなみに何故大人気なのかと言うとね？同姓に大人気なんだよ～ああ～あの子にあのコスプレさせて愛でて見たいわ～」
そう言って何かしらの妄想をしているようであった、ふむ・・・同姓に人気と言う事は・・・東雲玲と言う人物は、男なのに男に告白されてるって事か？うん・・・何だろう、他人のような気がしないのは気のせいか・・・？
「で、まこ？その手紙って、中身なんなの？」
「さあ・・・」
「もしかして、まこの事が好きで、手紙を書いたとか？今時手紙って・・・もっと他にやりようがあると思うんだけどね～？」
今時と言われても、俺は過去にその手紙を受け取ったのだよ、まだ返事はしてないけど
「で、見ないの？」

「あとでみるよ・・・」
俺はそう言って、鞄の中に手紙をしまって、校舎の中へと入っていった
「あ、おいてかないでよ～まこ～」
そう言って、美鈴も後ろからその後をついてくる
そしてキーンコーンがなる前に、無事に教室に辿り着き、早速手紙の内容を見てみると・・・
「今日の放課後、音楽室で待ってます」だった
なんか近視感(デジャブ)を感じるんだが・・・、前に貰った手紙とほとんど同じじゃないか?それに流行ってるのか?呼び出しが音楽室って・・・
校舎の裏とか、屋上とかじゃあなくて・・・
俺は、そう思いながら、キーンコーンと鳴ったので、授業を受けて、放課後、音楽室に行く事にしたのであった・・・

～第十六話～俺と後輩～（後書き）

零堵です、ここにきて新キャラ登場しました
さて、どう書こうかまだ考えてませんが、近いうちに続き書こうと思います～
では～

～第十七話～俺と後輩その2～（前書き）

アクセス数が、３０００超えましたｗ
読まれてますね～、嬉しい限りですｗ

～第十七話～俺と後輩その2～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、どうしようか迷っていた、何故かというと、いつものように学校へ向かう途中、後輩の東雲玲（しののめあきら）から、手紙を受け取ったからである、しかも書いてある内容が「音楽室で待ってます」だった、前に貰った手紙とほとんど同じ内容だったからである、前に貰った手紙は、同じクラスの汐崎美咲（しおざきみさき）からで、今回のは後輩の東雲玲からだった、一体俺に何の用なんだろ～な・・・と、思ったのである

そして、時間はいつもどおりに過ぎていき、放課後

俺は、教室を出て、南校舎3階にある、音楽室へと足を運んだ

うん、今回もなんかどきどきしてきた感じがする、前回と同じく、告白だったらどうしようかな・・・とか、思っていたのである

まあ考えたって仕方がないので、俺は音楽室の扉を開けた

中に入ると、既に後輩の東雲玲がいて、俺に話しかけてきた

「待ってました、南山真琴さん」

「何で、自分の名前を・・・？」

確か、俺は自分の名前を名乗っていない気がするんだが？

「色々と調べたんです、姉さんに言われたので」

「お姉さんに？」

一体、何で俺の事が調べられてるんだ？

「あの、この写真、先輩ですよね？」

そう言って、東雲玲は一枚の写真を、俺に見せた

「これ・・・」

そこに映っていたのは、前に親友の栗谷美鈴（くりやみれい）に連れられて、辿り着いた場所、ラブ喫茶「アイライク」で天空カイザーのキャラのコスプレをした、俺の姿が映っていた

な、何で持ってるんだ・・・？こいつが？

「確かに・・・自分だけど・・・これをどこで？」

「姉さんに渡されたんです、じゃあ、これ・・・先輩に間違いないんですね？」
「う、うん、間違いじゃないよ」
「よかった、実は、僕が手紙を出したのは姉さんに言われたからなんです「この写真に写ってる人物を探し出して」って？美鈴先輩が連れてきた人らしいので、同じ学校に美鈴先輩がいたから、もしかしたらと思ってたら・・・先輩がいたので、手紙を出したんです」
「そ、そう・・・じゃあ、何で音楽室に？」
「あ、それはこういったのは秘密なのがいいかな？と思って、音楽室にしたんですけど、何かまずかったですかね？」
まずいも何も同じ内容の手紙をもらったので、二回目？と思ってしまったんだが？
「い、いや、じゃあ自分を呼び出したのって」
「はい、先輩に行って欲しい所があるんです、知ってますよね？ラブ喫茶「アイライク」と言う場所」
「うん、知ってる、美鈴に連れられてそこに行ったから」
「姉さんが来てほしいっていってるんです、今度の休みの日に、顔を出して下さいませんか？」
「休みの日ね・・・」
休みの日は、予定があるのかと聞かれたら、全くないのである
まあ、やる事もないし、なんで呼び出したか気になるし、俺は、Ｏｋする事にした
「ま、まあいいかな」
「ありがとうございます、じゃあ、僕は行きますね？」
そう言って、東雲玲は、音楽室から去って行く
ふむ・・・東雲のお姉さんね・・・一体、どんな人物なんだ・・・？と思いながら、次の休みの日、ラブ喫茶「アイライク」に行く事に決めたのであった・・・

～第十七話～俺と後輩その2～（後書き）

零堵です、続き投稿します。
まだ時間軸でいうと、一か月もたってない気がしますねえ

～第十八話～俺と後輩その3～（前書き）

は～い、続きの話です。
アクセス数が、４０００行きましたＷ
ありがとうございます。

～第十八話～俺と後輩その３～

二枚目の手紙を貰って、次の休みの日、俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、出かける事にした、何故出かけるのかというと、俺に手紙を送った人物、後輩の東雲玲（しののめあきら）が、「ラブ喫茶アイライクに来て下さい」と、言ってきたからである
ちなみにこの、ラブ喫茶アイライクは、前に一度、俺の親友、栗谷（くりや）美鈴（みれい）に誘われて、行った場所であるから、迷う事は無いだろうと思っていた
朝早くに起きて、動きやすい軽装な恰好をして、家をでる
家の中に俺の母親と妹の亜季（あき）がいたが、声をかける事無く、そ～っと出かけて行ったのである、まあ、行く場所が、そのラブ喫茶アイライクがある、秋葉原なので、普通は言えないなあ・・・と思っていたのであった
そして電車に乗り、数分後、俺は再び秋葉原の町に着くうん前来た時と変わらず、大変にぎわっているな・・・とそう感じた通行人をよく見てみると、アニメかなんかのイラストが描かれたTシャツを来ていたり、アニメのキャラのイラストが書かれた紙袋を持って歩いている人物もいる
うん、ホントに自由だな・・・と言うか・・・恥ずかしくないのか？そう、思った
まあとにかく俺は、その秋葉原の町中にある、喫茶店、ラブ喫茶「アイライク」に向かう事にしたのである
数分後、ラブ喫茶「アイライク」にたどり着いて、中に入ると「いらっしゃいませ～お嬢様」と言ってきた、うん、確かに俺は女だし、お嬢様と言うのも分かるけど、そう呼ばれるのはなんか恥ずかしいな・・・と思っていたら喫茶店の奥の従業員部屋から一人出てきてこう言った
「待ってました、真琴さん」

そう言ってきたのは、ここの喫茶店のイメージ制服なのかやたら可愛い格好をした人であった、あれ?でも、どっかで見た事あるよ〜な?

「あきらちゃん〜注文おねが〜い」

「は〜い、ただいまうかがいますぅ〜」

そうあきらと呼ばれた人物は、客の座っている座席に注文を取りに行く

注文を受け終わって、再び俺の所まで来てこう言った

「じゃあ、こっちに来て下さい」

「う、うん」

俺は、そう言って言われたとおりに、スタッフの控室に入る

中に入ると、もう既に一人いた

「待ってました、真琴さん、私が店長の東雲紫(しののめゆかり)です」

「店長さん?あれ?じゃあ、さっきあきらって呼ばれてたのって・・・」

「う、うん、僕だよ・・・先輩」

そう言ってウィッグを取ると、現れたのは・・・

学校で会った、東雲玲(しののめあきら)だった

「え〜と・・・女だったの?」

「違うよ!?これは姉さんに無理矢理やらされて・・・」

「別にいいじゃない?玲、人気あるし?嬉しいでしょ?」

「嬉しくないよ!?それにここで働いてからか、異様に男から告白されるんだけど!?」

「あら、リアルでBL?私は家に彼氏紹介されてもOKよ〜」

「嫌だ!誰が彼氏なんか紹介するもんか〜!」

・・・なんか凄い姉弟だな・・・というか、外見からして姉妹に見えるんだけど?

「・・・で、自分が呼び出された理由って・・・」

「あ〜、そうでした、実は・・・南山さん、ここで働いてくれませんか?実はお客様から、先日、天空カイザーショーをやったその後

「レキ役をやってた人はいないんですか？」とかが大量に言って来まして，私たちアイライクスタッフは、お客様のご要望をなるべく答えようと思うんです、南山さん、引き受けて下さいませんか？」
そう言ってきた、さて、どうしよう？別に働く事はＯＫだし、まあ学校があるから休日しか出来ないかと思われる、それに美鈴も働いてるし？
「ちなみに、給料ってどれくらいかと・・・？」
「貴方なら、これくらいですかね？」
そう言って、金額を提示してきた、うわ、かなり多くない！？
俺は引き受けようか、迷ったが、別にいいかな？と思って、承諾する事にした
「じゃあ、一日だけならＯＫですかね？」
「それで構いません、じゃあ仕事の内容を教えますので、来週の休日から来てくれますね？」
「はい、よろしくです」
「あと、ここでの名前を決めましょうか？美鈴さんはれいれい、弟の玲は、あきら、南山さん、ここでの呼び名は、どうします？」
「じゃあ、美鈴がいつも言ってるので、まこでお願いします」
「了解しました、これからもよろしくね？まこさん」
「姉さん？まこ先輩が入ったから、僕、抜けてもいい？」
「あら、駄目よ？貴方は人気なんだから、それは却下ね」
「そうなんだ・・・はあ・・・」
こうして、俺は、休日の一日だけ、ラブ喫茶「アイライク」で働く事にしたのであった・・・

～第十八話～俺と後輩その3～（後書き）

零堵です。この物語もそろそろ２０話行きますね。
まあ、目指せ百話っていきおいなので、終わりは当分ないと思います。

～第十九話～俺と後輩その４～（前書き）

はい、続きです

～第十九話～俺と後輩その４～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）が、秋葉原に行って、次の日
いつものように起きて、いつものように着替えて、いつものように
高校へと向かう
まあ、そんな当たり前の日々、でも、今日はそのいつものような事
とは、少し違っていた
何故かというと・・・
「おはようございます、まこ先輩」
そう俺に話しかけた者がいた、話しかけたのは、俺に手紙を送った
人物でもある、東雲玲（しののめあきら）だったのである
「おはよう」
「まこ先輩、昨日は姉さんの頼みを聞いてくれて、ありがとうござ
いました」
「いや、お礼を言われるほどじゃあないかなと」
「それでもです、お店では、困った事があったら言ってくださいね
？なるべく対応するので」
「わかった」
「じゃあ、今週の休みからよろしくです、では、僕は先に行きます
ね？」
そう言って、玲は先に行く
ちなみに頼みというのは、東雲玲の姉の東雲紫（しののめゆかり）から「バイトしませ
んか」と誘われて、俺は一日だけだけど、ＯＫしたのである
まあ、休日にいつもやる事とかなかったし、まあいいかな？と思っ
て、引き受けたのであった
玲と別れた後、俺もゆっくりと歩いて、数分後、俺の通っている山
野辺高校に辿りつく
校舎の中に入り、教室の中に入って、自分の席に着くと
「おっはよ～まこ～」

そう俺に話しかけてきたのは、俺の親友でもある栗谷美鈴（くりやみれい）だった
「おはよう」
「昨日はどうしたの？」
「昨日って？」
「昨日、まこの家に行ったらさ？亜季（あき）ちゃんが出てきて「お姉ちゃんは、いません」って、言ってたんだ、昨日、何所に行ってたの？」
「昨日は、秋葉原に行ってたかな」
「え・・・な、なんで誘ってくれないの？まこ～、私、まこを連れてそこに行こうとしてたんだよ？」
何で、俺を連れてそこに行こうとしてたんだ？
「何で？」
「だって、午後からバイト入ってたし、午前中から行って、遊ぼうと思ってたんだよ？」
「バイトって、あのラブ喫茶「アイライク」？」
「そうだよ～」
ふむ、実は俺もそこで働く事にしたんだと、言ってやろうか？
でも、自分から言うのもなんだしな・・・まあ、黙ってるか・・・
「ふ～ん・・・じゃあ、次の日の休みもバイト入れてるの？」
「うん、毎週学校が休みの日は入れてるよ」
「そう」
「？？まこ？何でそんな事聞くの？」
「いや・・・なんでもない、気にしないで」
「そう？」
そう話していると、チャイムが鳴ったので、話すのをやめて、授業に集中する事にした
そして、時が過ぎ、昼休み
俺は亜季に作ってもらったお弁当を持って、教室から出る事にした
何故教室から出て行くのかと言うと、教室の中に俺に手紙を送った人物、汐崎（しおざき）美咲（みさき）とそのファンクラブ、ＭＫＦＣのメンバーが美咲に向って「一緒にお弁当食べましょう」と言っていたからである、じ

ゃあ何故俺が教室から出て行くのかと言うと、その場にいたら呼び止められるかと思ったからである、実際に俺の方を見ていて、声をかけようと動こうとしているのが見えたからである、まあその美咲の周りをファンクラブメンバーが囲っていて、その場から移動させないようにさせてるみたいなので、俺は助かっていたりするのであった

そんな訳で、俺は屋上でお弁当食べる事にした

屋上に出ると、何やら声が聞こえてきたので、なんの話をしてるのか、気になったので隠れて聞いてみることにした

「来てくれて、さんきゅうな？」

「なんです？僕に一体・・・」

「実は・・・お前が好きだ！嫁に来てくれ！」

「言ってる事おかしいよ！？それに・・・僕は、男だあ！」

「それでも構わん！さあ、俺の胸に飛び込んでこい、マイハニー！」

「誰がマイハニーだ！」

うん・・・聞いちゃいけない内容だったな・・・内容からにして「男が男に告白してる」って事か・・・うん、ここはバレナイヨウに退散しよう・・・

そう決めて、屋上から離れようとすると

「・・・あ！まこ先輩！」

そう言って、俺の所にやって来たのは、朝に出会った、玲であった

「見つかった？じゃあ、自分はお邪魔みたいなので」

そう言って、立ち去ろうとすると

「ぼ、僕、まこ先輩が好きだから、貴方とは付き合えないです！じゃあ、さよなら！行こう、まこ先輩！」

「な、何だと！？」

おい！？なんか爆弾発言してない！？それに無理矢理、手を握られてというか引っ張られて、何所に行くんだ！？

玲に引っ張られて、屋上から離れると、玲はこう言った

「すいません、まこ先輩」

「・・・いいから、手を離してくれると助かる」
「あ、すいません」
そう言って手を離す
「え～っと・・・さっきのは？」
「呼び出されたんです・・・で、屋上に行ってみたら、あの男の人がいて、それで・・・」
「そう、なんか似てるな・・・」
「似てると言うと？」
「自分も何故か同姓にモテテルから・・・」
「そうですか・・・お互い大変ですね、あ、さっきはあんな事言ってすいません、さすがにああ言わないと、あきらめてくれそうになかったので・・・じゃあ、僕は教室に戻りますね？では、まこ先輩、さよならです」
そう言って、玲は去っていった
うん・・・やっぱり話してて思ったのが、童顔なのか、かわいい女の子みたいだし、ウィッグつけたら女装完璧だな・・・と思ったのである
俺は、とりあえず、亜季の作ったお弁当を食べて、教室に戻る事にしたのであった・・・

～第十九話～俺と後輩その４～（後書き）

はい、零堵です、うん、まだまだ続きますね
これからも頑張って書こうと思います～

～第二十話～俺とアルバイト～（前書き）

いよいよ２０話こえました～
うん、まだまだ書き続ける感じですね

～第二十話～俺とアルバイト～

俺こと南山真琴（みなみやままこと）は、休みの日になったので、早速出かける事にしたのであった
出かける準備をして、いや行こうとすると、俺に話しかけて来る者がいた
「お姉ちゃん、何所行くの？」
そう言ったのは、俺の妹である南山亜季（みなみやまあき）だった
「ちょっと、バイトしにね」
「バイト！？お姉ちゃんが！？」
おい、何でそこまで驚くんだ？別に俺がバイトしたっていいと思うんだが・・・？
「一体何所でバイトするの？お姉ちゃんが働いてる場所、私も行きたいし」
さて、どうしよう？別に言ったっていいのだが、普通のバイトじゃあないからな・・・それに俺の親友の栗谷美鈴（くりやみれい）だって、働いてるんだし？
とりあえず、俺は言うのもやめて、隠す事に決めたのであった
「いや、教えないよ、来られるとちょっと困るしね」
「え～・・・お姉ちゃんがどんな場所で働くか、気になったのに・・・ほんとは、一緒に行きたいけど、今日は約束があるし・・・じゃあ、お姉ちゃん、また今度教えてよ？」
「・・・気が向いたらそうする・・・じゃあ、行くね」
そう言って、俺は家を出たのであった
外に出て、電車に乗り、秋葉原へと辿り着く
秋葉原は、休日なせいなのか、人であふれかえっていた
その中をかき分けて進んでいくと、辿り着いた場所はラブ喫茶「アイライク」だった
その店内に入ると、いらっしゃいませ～と言ってきたのが、俺の親

友の栗谷美鈴(くりやみれい)だった、ちなみにこの店では、美鈴はれいれいと呼ばれているらしい
「あれ?まこ?一体どうしたの?」
「おはよう」
「何でまこがここに?あ、もしかしてここが気に入ったとか、私に会いたかったから来たとか?も~それなら、携帯に連絡入れてよ?すぐに時間作って、会おうとしたのに~」
・・・何を言ってるんだ?こいつは・・・、そう思ったが
「いや、そうじゃなくて、美鈴、店長の紫(ゆかり)さんはどこにいる?」
「紫さん?紫さんなら、奥の控室にいるけど・・・なんで、まこが紫さんの事知ってるの?」
「ちょっとね、控室にいるのね?ありがと」
俺はそう言って、控室にの中に入る、後ろで美鈴が「な、なんでまこが?控室に?」とか言っていたが、気にしない事にした
控室の中に入ると、そこにいたのは、この喫茶店の店長である、東雲紫(しののめゆかり)と、ウィッグをつけていて完璧に女の子に見えるが、紫の弟の俺の学校の後輩の東雲玲(しののめあきら)だった
「よく来てくれました、まこさん」
「まこ先輩、おはようございますです」
うん・・・改めて玲を見ると、本当に女の子に見える
紫さんと姉妹って言われても、ああそうか・・・とか、納得できるレベルじゃないか?これは
「じゃあ、早速ですが、この制服に着替えて下さい」
そう言って、紫さんに渡されたのは、スーツらしき物と、長ズボンだった
「え~っと・・・これに着替えろと?」
「はい、あ、もしかして、メイド服をイメージしたのがよかったですか?そっちがいいなら、そっちを渡しますけど?」
「いや、いい・・・」
メイド服を着るより、こっちのほうがいいかな・・・と、思った俺

は、更衣室を借りて、早速着替えた
、いざ、着替えて鏡を見てみると、イケメンな感じな俺がそこにいた、なんかホストっぽいイメージ何だが、それかギャルソン？
着替え終わって更衣室から出ると
「よく似合ってますよ、まこさん」
「凄いですね・・・普通の女の子なら、惚れるレベルじゃないですか？」
「あら、じゃあ、玲も見とれちゃったの？」
「僕は、女の子じゃないよ・・・姉さん」
「判ってるわよ、そんな事、冗談よ冗談」
「ほんとうにもう・・・」
なんか・・・仲がいい姉妹に見えるのは、気のせいか？
「じゃあ、着替えた事だし、早速仕事内容を教えるわね、まあ、基本的にここは喫茶店だから、お客様のオーダーを聞いて、出来上がったものをお客様に運ぶのが主な仕事よ？あと、たまに特定イベントやるから、それも考えておいてね？で、ここのスタッフだけど、今いるのが、接客中のれいれいと、玲、それに私、で、あと、もう一人いるんだけど、今日はシフトに入ってないから休みね、で、まこさんには、れいれいと同じく、接客をして欲しいの」
「了解、美鈴と同じようにすればいいって事？」
「まあ、そんな感じね、じゃあ早速ホールの方に行ってくれるかしら？玲、サポート頼むわよ？」
「了解、姉さん、じゃあ、まこ先輩、行きましょう？」
「う、うん」
こうして、俺のアルバイトが始まったのであった・・・

～第二十話～俺とアルバイト～（後書き）

はい、零堵です、うん、やっぱりこの物語書いてて楽しいです。
アクセスを見てみると、毎日読まれてるんだな・・・と、しみじみ思ってます。
これからもがんばって書こうとおもうので、よろしくです。

～第二十一話～俺とアルバイトその2～（前書き）

はい、零堵です。また、評価があがりました
ありがとうございます～

～第二十一話～俺とアルバイトその2～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、アルバイトをする事にした
まあ、一日だけだが、やってみるのもいいかも知れない
ちなみにアルバイト場所は、俺の親友の栗谷美鈴（くりやみれい）と同じ、秋葉原にある、喫茶店
ラブ喫茶「アイライク」であった
そこの店長の東雲紫（しののめゆかり）に「バイトやらないか」と誘われたので、ＯＫしたのである
そして、服が用意されていたので、それに着替えて、バイトを始めたのであった・・・

「は～い、今日からみんなと一緒に働く事になった、まこさんです、まこさん？挨拶よろしくね？」
そう、店長の紫さんが言う、俺はこう言った
「毎週一日だけですが、働く事になった南山真琴です、よろしく」
「ええ～！？まこがここで働くの！？」
そう言ったのは、俺の親友の栗谷美鈴だった
「そうだよ、言ってなかったっけ？」
「言ってないというか、聞いてないよ？」
まあ、言わなかったしな？知らないのも当然か
「とりあえず、一応自己紹介して？みんな」
店長の紫さんがそう言うと
「は～い、じゃあ私から、れいれいだよ～よろしく～」
「じゃあ、次はボクだね、ボクはあきら、よろしくね？」
「あと一人いるんだけど、今日は休んでるので、一応名前だけ教えとくね？休んでる子は、さなちゃんと言って、れいれいと同じく、接客担当の子よ」
「そうなんですか」

「ええ、じゃあ今日も張り切って頑張りましょう～」
「了解～」
「分かったよ～」
「う、うん」
こうして、俺のバイトが始まった
主に俺の仕事は、お客様から呼び出しを受けたら、その席に向かって、オーダーを取る係だった
しばらく見ていると、男性客と女性客が入ってきて、注文を取っていく
俺も女性客に呼ばれたので、行ってみて、こう言った
「はい、今日はどのような品にしますか？」
「あれ・・・？初めて見る顔ですね？新入りさんですか？」
「はい、今日から働く事になった、まこと言います、よろしくです」
「きゃ～！！カッコいい！！かなり美形ですね！」
・・・なんかやたらとテンションが高いのだが・・・
「えっと・・・ご注文は・・・」
「あ、はい、この悪魔の息吹と、天使の微笑みお願いします！」
「は、はい…悪魔の息吹と、天使の微笑みですね・・・かしこまりました」
そう言って、注文取ったので、調理場に向かう
それにしても・・・悪魔の息吹に天使の微笑みね・・・全くどう言った品か、想像出来ないんだが・・・
数分後、調理場から「悪魔の息吹と天使の微笑みあがりました～」と聞こえて、俺はそれをトレーに乗せて運ぶ、うん、悪魔の息吹＝コーヒーで、天使の微笑み＝ショートケーキだったのか・・・
俺は、それを注文した客の所へと持っていく
「お待たせしました、悪魔の息吹と天使の微笑みです」
「ありがとう、あの・・・」
「はい？」
「携帯の番号とか教えてくれませんか？貴方の事知りたいので・・・

」
そう赤らめて言ってきた、はて・・・？なんで顔を赤らめるのが疑問なんだが、生憎俺は、携帯を持ってないので、教える事は不可能なんだが・・・
「い、いや無理かと・・・」
「どうしてですか！？」
「だって、持ってない・・・」
「え！？持ってないんですか！？じゃあ、何所に住んでるかとか教えて下さいません？」
「い、いや、それもちょっと・・・」
「そうですか・・・じゃあ、このバイトは毎日やってるんですか？」
「いや、週に一回ですけど・・・？」
「じゃあ、貴方に会いに毎週通いますね？」
・・・なんかちょっと怖いんだが・・・お客様だし、文句は言えないか・・・
俺は、そう思っていたのであった
そして、時間が過ぎて、夕方
さすがに疲れたので、あがらせて貰って、朝着てきた服に着替えなおして、外に出る
外に出ると、待っていたのか美鈴がそこにいた
「まこ～帰ろうか？」
「待ってたの？美鈴」
「うん、じゃ、行こう？」
そう言って、美鈴と二人で電車に乗って、家へと帰る事にしたのであった
帰る途中
「まこ？今日は人気だったね？特に女子に？」
「うん・・・」
そうなのである、「まこさん～」と呼んでくるのが、ほとんど女子だった

男性客もいたのだが、男性客は「あきらちゃん～」と言って、あきらを呼んでいたからである

「まあ、来週もよろしくね～？まこ」

「りょ～かい」

こうして、俺のバイトは、終わりを告げたのであった・・・

～第二十一話～俺とアルバイトその2～（後書き）

零堵です。評価が上がってうれしい感じです
まだまだ続きます～

～第二十二話～俺と雨の日～（前書き）

はい、零堵です。アクセス数が急激に増えていて驚いてますｗ
まあ、感想がないのがちと残念ですが・・・
続きの話です。時間軸で言うと、六月の前半？ぐらいですかね？

～第二十二話～俺と雨の日～

季節が夏に近づき、雨がよく降る季節になり始めた頃、俺こと南山(みなみや)真琴(まこと)は、今日もいつものように学校へと向かっていた、まあ、いつも晴れていたけど、今日はどしゃぶりの雨が降っていて、傘をさして俺の通っている、山野辺高校へと行く
登校途中、俺に話しかけて来る者がいた
「おはようございます、まこ」
「おはよう・・・」
俺に話しかけてきたのは、俺と同じクラスで、俺に手紙を送った人物汐崎(しおざき)美咲(みさき)であった
普通なら、安心してあいさつとかするようなものだが、彼女から来た手紙の内容は
「好きです、彼女にして下さい」だったので、どう返事していいか、本当に困っているのである
「まこ・・・やっぱり、私と付き合えませんか・・・？」
そう彼女が聞いてくる、普通なら付き合えないだろう?だって、俺と言ってるが、俺も彼女も同姓だし?
「えっと・・・付き合うのは、ちょっと・・・」
「ど～してもですか・・・？」
「ど～しても」
「・・・分かりました、でも、私、諦めませんから、絶対にあなたに好きって言ってもらいます！」
そうガッツポーズを決めて言う、そう言われても困るんだが・・・
まあ、もしもそう心変わり?とかしたら、そうなるかも知れないけど・・・
そう話していると、校舎についたので、中に入る事にした
校舎の中に入って、教室の中に入る
教室の中に入ると「おはようございます、美咲様」と、男子の数人

がそう言ってきた
美咲は、その言ってきた男子に向かって、「おはようございますね？」と優しく言っている
その言葉を聞いた男どもは、うおお！とか異様に盛り上がっていた、ほんと・・・大丈夫か？こいつら？
俺は、そう思いながら自分の席に着く
席に着くと、やっぱりと言うか俺に話しかける者がいた
「おっはよ～まこ」
「おはよう」
俺に話しかけてきたのは、俺の親友でもある、栗谷美鈴（くりやみれい）だった
「まこ～、まこが私と同じ場所で働くなんてびっくりしたよ？でもなんで？」
「・・・誘われたから？」
もとはと言えば、美鈴が原因なんだが
「ふ～ん、そっか、じゃあ休日もまことといられるのか～なんかいいかも？」
・・・何がいいんだかよく不明なのだが・・・
そう話していると、チャイムが鳴ったので、授業に集中する事にした
そして、昼休み
いつものように俺は、俺の妹、南山亜季（みなみやまあき）が作ってくれた弁当を食べる事にした
お弁当箱を開いて、食べていると、俺に話しかけてきたのは
「まこ～一緒に食べよ？」
そう言ってきたのが、美鈴だった
「別にいいけど・・・あれ？美鈴っていっつも購買部に行ってなかったっけ？」
「そうだけど、今日は自分で作ってみたんだ、あ、そうだ？まこ、ちょっと食べてみて？」
そう言って美鈴は、お弁当箱を開ける
中に入っていたのは、ハンバーグに玉子焼き、お結びとまるで、お

子様が好きそうなメニューばっかりだった
「えらく子供っぽいメニューだけど？」
「うん、私、こういうの好きだからさ？こういうレパートリーにしたんだよ～」
「そう」
そう言って、俺はとりあえず、玉子焼きを食べてみる
うん・・・一言で言うと、しょっぱい、砂糖と塩、間違えたんじゃないか？と思う
「これ・・・しょっぱいよ」
「え？ほんと？・・・・あ、ほんとだ・・・まあ、こういう事もあるよね～」
いや無いだろ、普通は
そう言って、二人でお弁当を食べる
お弁当が食べ終わると、チャイムが鳴ったので、午後の授業に集中する事にした
午後になって、授業が終わり、放課後
いつものように帰る用意をしていると、再び美鈴が話しかけてきた
「まこ～？」
「何？」
「今日さ？遊びに行かない？」
「どこに？」
「まあ、私についてきて？きっとまこも楽しめると思うんだ～」
「そう・・・」
俺は、どうしようか迷ったが、生憎朝から降り続いている雨だし、家に直行で帰っても、何もする事ないし、俺はとりあえずＯＫして、美鈴の後を着いて行く事にしたのであった・・・

～第二十二話～俺と雨の日～（後書き）

零堵です。これからも書き続けようと思います。
アクセス数が、５０００以上超えました。
まだ初めて１２日なので、かなり読まれていて、驚いていたりしています。

～第二十三話～俺と雨の日その2～（前書き）

続きの話です。アクセス数が６０００超えしました
このいきおいだと、一万は行きますね
ありがとうございます

～第二十三話～俺と雨の日その2～

俺こと南山真琴（みなみやまこと）、雨の日、親友の栗谷美鈴（くりやみれい）が
「遊びに行こう？」と言ってきたので、学校が終わって、放課後
雨の中を傘をさして、街中へと制服のまま、出かけるのであった
俺の住んでる町、山野辺市は、結構な住宅街と商店街がある、地域
としては、結構な広さで、人も多く、商店街は、人でにぎわっている
そんな山野辺市を、美鈴と一緒に歩く
「で、一体どこに行くの？」
「それは、ついてからのお楽しみだよ～」
「そう」
一体、何所に行く気なんだ？俺は、そう思っていた
数分後、山野辺市商店街の中にある、一軒の建物にたどり着いた
「ここだよ？まこ」
「ここって、ゲームセンター？」
「そう、ゲーセンだよ？まこはよく行くの？」
「いや・・・全くと言っていいほど、行かないかと」
「そうなんだ、じゃあ一緒に楽しもう？」
「・・・まあいいか」
こうして、俺と美鈴は、ゲームセンターの中へと入る
ゲームセンターの中に入ると、中は冷房が効いてるせいか、涼しく、
人が多くいた
「今日は、私がおごってあげるよ～、まずこれからやっとく？」
そう言って、美鈴が指さしたのは、首都高ロワイヤルと呼ばれるレ
ースゲームだった
「まこは、やった事ある？」
「いや、初めてやるかな」
「じゃあ、操作方法教えるね？」
そう言って、俺にこのゲームのやり方を説明する

「じゃあ、早速バトルしよ～、負けたらジュースのおごりね？」
「・・・こっち、不利なんじゃないかな？」
「・・・っふ、勝負と言うのは時には非常な物なのだよ～？負けても恨みっこなしね？」
うわ、なんか言い方がムカツク・・・こうなったら、全力でやってみるか・・・と、思い
俺は、こう言った
「分かった、さっき教わった通りに、やってみて、全力でやるよ」
「おお？そうこなくちゃね？じゃあ、始めるよ～」
そう言って、座席にお互いに座る、コインを投入して、アーケードモードの対戦バトルと言う項目をセレクトして、レース開始を待つ数秒後、画面上にお互いの操作する車が映し出されて、スタート地点に並んだ
「あ、ちなみにね？私、このゲームのハイスコアランキングの上位者だよ～」
・・・何だと？と言う事は・・・こっちが、思いっきり不利な状況じゃあないのか？
まあ、やるからには全力で相手をしてやろうと思い、俺は、ゲームに集中する事にした
そして・・・結果は、どうなったのかと言うと
「な、なんで～？？」
何故か俺が勝てました、美鈴がこう悔しがっているあたり、手加減はしていない筈
うん、運がよかったのか？それか実力か？
「美鈴・・・手、抜いたの？」
「ぬいてないよ～？私、全力で相手したんだけど？」
「じゃ、自分の実力かな」
「うわ、なんか言い方がむかつくなあ～、運がよかっただけでしょ～？」
「じゃ、約束どおりにおごってよね？」

「解ったよ～、次は私が勝つけどね？」
そう言って、美鈴は自販機で、ジュースを買う
俺はそれを受け取ると、一気に飲み干す
飲み終わって、空き缶をゴミ箱に入れると、次に美鈴は、こう言ってきた
「次は、これやろ～？」
そう言って指差したのは「太鼓の神様」とか言う、太鼓を鉢で叩く、リズムゲームだった
「解った」
「うん、ランクはどうする？優しいから激ムズとかあるけど」
「やさしいで、お願い」
「りょ～かい」
そう言って、コインを入れてプレイする
画面上に天使のわっかをつけた白ひげの爺が出てきて「これをプレイするのじゃな？まあ頑張るのじゃ」とか言ってきた
うん、なんかやなじ～さんだなとか、思っていると、美鈴が曲を選択する
選択した曲はと言うと「天空カイザーＯＰ～光の空へ～」とかいうタイトルだった
そう選択して、俺と美鈴はバチを持って、太鼓を叩く
数分で曲が終わり、なんとかぎりぎりで成功
そしてさっきの爺が出てきて「まあまあじゃな？もっと上を目指すがよいぞ」とか言っていた
何で上から目線なんだ？この爺は？
２曲目は、アイドル曲の「スターマリン」とか言う曲をプレイした
この曲はちょっと難しかったので、クリア失敗してしまい、そしてさっきの爺が出てきて「この程度とは情けない、コンテニューするかの？」とか言ってきた
やっぱりむかつくな・・・この爺・・・
「う～ん、失敗しちゃったね？どう？楽しめた？まこ？」

「う～ん・・・まあ、誘ってくれてありがとね？美鈴」
「いえいえ、あ、もうこんな時間だ？じゃあ、帰ろうか？」
「そうだね」
そう言って、俺と美鈴は、ゲームセンターから、出て行ったのであった・・・

～第二十三話～俺と雨の日その2～（後書き）

はい、零堵です。
この物語も結構進みました
まあ、まだ全然終わらせる予定はないので、これからも続くと思います。

～第二十四話～俺とバイト仲間～（前書き）

はい、零堵です。
アクセス数が７０００超えしました。この勢いだと、１万は超える日も近いかもですね。

～第二十四話～俺とバイト仲間～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、次の休みになったので、再び秋葉原に行く事になった
まあ、何で行くのかというと、その町の中にある、喫茶店、ラブ喫茶「アイライク」で働く事になったからである
朝、いつもの通りに起きて、出かける準備をする、数分で準備が出来て、いざ、出かけようとすると、俺に話しかけて来るものがいた
「お姉ちゃん？こんな休日の朝から、何所に行くの？」
そう言ったのは、俺の妹の南山亜季（みなみやまあき）だった
「ちょっと、バイトに行って来るね？」
「お姉ちゃん・・・バイトって、毎週入れてるの？」
「うん・・・まあ、一日だけだけど」
「そう・・・じゃあ、私も一緒に行く！」
何故だ？別について来ても、構わないのだが・・・俺についてくる理由が全くと言っていいほど不明なのだが・・・
「え～と・・・なんで？」
「だって・・・私、お姉ちゃんがどこで働いてるか知りたいし、それにお姉ちゃんに近づこうとする者がいたら、それを阻止したいし・・・ついて行っちゃ駄目・・・？」
そう、うるうる顔で言って来る、まあ、別に断る理由もないので、俺はＯＫする事にした
「分かったよ、じゃあ行こうか」
「うん、行こう」
こうして、妹と二人で、外に出る事になったのであった
二人で歩いて、駅に向かって、電車に乗って、辿り着いた場所はと言うと
「お姉ちゃん・・・この町で働いてるの・・・？」
「うん、まあ・・・」

その町は、秋葉原と呼ばれていて、相変わらずの人だかりだった
俺と亜季は、その街中を歩いて、目的の場所へと移動する
数分後、その場所に辿り着いて、店内に入る
「おはようございます」
「おっはよ～まこさん、今日はちょっと早いですね」
そう言って来たのは、このお店、ラブ喫茶「アイライク」で、店長をしている、東雲紫(しののめゆかり)さんだった
「じゃあ、早速着替えて準備してくれるかな?まこさん?」
「はい、分かりました」
「～で・・・まこさんの隣にいる子は?もしかして・・・彼女?」
何で彼女って言うんだ?普通に考えて、そう思わないだろ?
「違いますよ、妹です」
「ほうほう、それは姉妹的な関係(スール)なのかなあ?」
「いや、本当に妹・・・ほら、亜季」
「えっと・・・南山亜季です・・・」
「何だ、じゃあ本当に妹さんだったんだ?それにしても、お姉さんと違って、可愛い感じねえ～?まこさんは、かっこいい感じだけどね?」
「あ、ありがとうございます・・・確かにお姉ちゃんは、かっこいいです・・・」
・・・何で、そういう話になる?というかかっこいいって・・・妹に言われるのも複雑なのだが・・・
とりあえず俺は、控え室に行って、俺専用の制服に着替える
このお店は、メイド風な衣装が用意されているのだが、俺のは違っていた
俺のは、ギャルソンとかそういった感じの制服だったりする
着替え終わって、鏡を見ていたら、誰か入ってきた
「だ、誰!?」
入ってきた人物は、初めて見る顔だった
「誰と言われても・・・えっと、もしかして・・・貴方がさなさん

？」
「あ、はい、桐谷佐奈（きりやさな）です、もしかして・・・貴方が新しく入ってきた、真琴さん？」
「ええ、南山真琴といいます、一週間に一日だけですが、よろしくお願いしますね？」
そう、営業スマイルで言ってみると
「は・・・はい・・・」
何故か顔を赤らめてそう言ってきた、何で顔を赤らめたのが疑問なんだが・・・
まあ、軽い挨拶して、控え室から出ると、妹の周りに、店長の紫さん、その弟の玲（あきら）、俺の親友の栗谷美鈴（くりやみれい）が集まっていた
「お、お姉ちゃん！？」
「あ、まこ～、おっはよ～、うん、今日も似合ってるねえ～」
「うん、僕もそう思うよ？まこ先輩」
「さすがまこさんですね、着こなし抜群です」
「あ、ありがとう」
「じゃあ、全員集まった事だし、今日も元気に働きましょうね？お客様は神様と思って、頑張りましょう」
そう紫さんが言うと、その場にいた全員が元気よく挨拶していた
「お姉ちゃん・・・こんな場所で、働いてるの？」
「うん、まあ、そうなるかな・・・もしかして、嫌だとか？」
「ううん・・・ちょっと驚いただけ・・・」
「で、どうする？亜季、もう自分の仕事場は分かったでしょ？家へ帰る？」
「ううん、お姉ちゃんが終わるまで、ここにいるよ、さっき店長さんと話してたけど、ここの控え室にいていいと言われたから、そこにいるね？」
そう言って、亜季は控え室の中へと入っていった
亜季が控え室に入った後、美鈴が話しかけてきた
「亜季ちゃん、本当にまこの事好きなんだね？なんか羨ましいかな」

「何で、羨ましいの？」
「だってまことといる時間が多いんでしょ？私だって、まこと長い時間いたいものだしさ～？」
「・・・」
そんな事言われても、困るのだが・・・
こうして、俺の二回目のアルバイトが始まったのであった・・・

～第二十四話～俺とバイト仲間～（後書き）

零堵です。毎日ほんとに暑いです。書く気力もなくなってきます。
まあ、なんとか毎日書いてる感じですが・・・

～第二十五話～俺とバイト仲間その2～（前書き）

毎日更新してましたが、昨日は物凄い体調悪くて、執筆できる状態じゃありませんでした
アクセス数８０００超えしました、ありがとうございます

～第二十五話～俺とバイト仲間その2～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、アルバイトをしていた
そのバイト先は、秋葉原にあるラブ喫茶「アイライク」と言う、ちょっとと言うか、かなり変わった感じのお店だった
何で、俺がそのバイトをする事になったのかと言うと、そのお店の店長の弟、東雲玲（しののめあきら）に学校で呼び出されて、「姉さんが呼んでるので、このお店に来て下さい」と言われて、辿り着いた場所と言うのは、ラブ喫茶、アイライクだったわけである
その姉さんと言うのが、そのお店の店長、東雲紫（しののめゆかり）さんだった
紫さんに「バイトしませんか？」と誘われて、一週間に一日だけだけど、バイトをする事になったのである
で、俺のバイト仲間と言うのが、俺の親友で同じクラスの栗谷美鈴（くりやみれい）と、店長の弟、お店ではウィッグをつけて、女装をしている、弟の玲、そして桐谷佐奈（きりやさな）だったのであった

「さあ、今日も頑張りましょうね～」
そう店長の紫さんが言うと、は～いと言って、それに答えていた
俺も、ここの制服に着替えて返事をする
ちなみにここの制服は、メイド服をイメージして作ってあるが、俺のは違っていて、どっちかと言うとウエイターかギャルソンタイプの格好をしていた
他の皆が言うには、その姿は大変似合ってるらしく、かっこいいとか言われてしまった
うん、自分ではそうは思わないんだけどな・・・
そして、俺のバイトが始まった
ここのバイトは、喫茶店なので、お客様の呼び出しに答えて、注文をとり、出来たら持っていくという、普通の喫茶店と同じような感じだった

ただ違うというのは、何故か俺を呼ぶ客が、女性ばっかりだったのである
男性客もいるのに、男性客は「あきらちゃん～」と言って、玲を呼んでいたりする
中身が同じ同姓だと言うのに、知らないということは恐ろしいって感じだな・・・と、俺は思っていた
そう思っていると、まこさん～と呼ばれたので、お客の所に行く
「ご注文は、おきまりでしょうか？お嬢様」
そう、営業スマイルで言うと、お客は顔を赤らめながら、「こ、これ、お願いします」とか言ってきたので、俺は「かしこまりました」と言って、厨房に入る
そして、出された物をお客様の所に持っていた
「お待たせしました、天使の微笑みです」
「あ、ありがとうございます」
「いえ、では、ごゆっくり」
そういった感じのが、何回かあって、休憩時間になったので、俺は控室に向かった
中に入ると、一緒に来ていた妹の亜季（あき）が、ジュースを飲みながら、ぼ～っとしていた
「亜季？退屈だったら帰っていいよ？」
俺がそう言うと、亜季はと言うと
「ううん、お姉ちゃんが終わるまで、待ってるよ？それにしても・・・お姉ちゃんに声かけるの、女子ばっかだね・・・凄いね・・・お姉ちゃん」
「・・・凄いかどうかは、微妙なんだけど・・・」
そう話していると、控室に佐奈さんと玲が入ってきた
「お疲れ様です、まこさん」
「お疲れ様、まこ先輩」
「お疲れ様、あれ？美鈴は？」

「れいれいなら、まだ休憩時間じゃないので、ホールですよ」
「それにしてもまこ先輩、人気が凄い上がってますよ?まあ、女子限定なんだけど・・・」
「そうよね、あきらちゃんは、男に人気あるものね?」
「さなさん、それ、しゃれになってないです・・・はっきり言って嫌ですよ・・・」
「え?あの中に付き合いたいな?とか思うのいないの?」
「いません」
即答しました、まあ玲はね・・・?実情を知らないのかな?佐奈さん・・・
休憩時間も終わり、再びホールに戻ると、さっそく呼び出しがかかって、その場に行くと
「今日もあなたに会いたくて、来ちゃいました・・・」
そう言ったのは、先週も来た、お客様だった
「えっと・・・とりあえずありがとうと言っておきますね、で、お客様、ご注文は?」
「お客様じゃなくて、私、汐崎茜(しおざきあかね)と言います、だからあかねって言ってください」
汐崎茜?なんか同じ名字の人物を一人知っているんだけど・・・
「えっと、ちょっと聞いていいでしょうか?汐崎美咲さんという方、知ってます?」
「知ってるも何も、私の従姉妹よ、美咲はね?でもなんで、美咲の事知ってるの?」
「同じクラスなので」
「へ~じゃあ、美咲と同じクラスなんだ?じゃあ、高校生よね?私は社会人だから、美咲のお姉ちゃん的な存在になる感じかな」
「そうなんですか・・・あ、茜さん、ご注文お願いします」
「そうね、じゃあこれね?」
「かしこまりました、すぐにお持ちしますね」
そう言って、俺は注文を受け取ったので、厨房に入る

数分後、注文を受け取って、茜さんの所に行く
「お待たせしました、魅惑のフルーツ載せです」
そう言って、魅惑のフルーツ載せ＝フルーツパフェをテーブルに置く
「ありがとう、それにしても・・・本当にかっこいいわね～」
そう、茜さんが言う、なんか毎回毎回そんな事言われてないか?俺・・・
「は、はあ、ありがとうございます・・・」
「ほんとよ?よし、決めたわ」
「何をですか?」
「貴方を題材に漫画を描くわ、私、一応漫画家志望でね?だからこの街にネタ探しに来たけど、貴方を主人公にした漫画でも描いてみるわ、ね、いいかな?」
漫画?俺を主人公に?なんか、恥ずかしいんだが・・・断る理由もないので
「はい、ＯＫですよ」
「ありがとう、じゃあさっそく家に帰って、描かなくちゃ、じゃあね」
そう言って、茜さんは、お金を払って、店から出て行ったのであった
そして時間が過ぎ、バイト終了時刻になったので、店長にあがらせてもらいますと言い、控室に入り、いつもの服装に着替えて、亜季と一緒に、家へと帰って行ったのであった・・・

～第二十五話～俺とバイト仲間その2～（後書き）

零堵です
続きの話を投稿します。

～第二十六話～俺と身体測定～（前書き）

はい、零堵です。もうすぐアクセス数が一万いきますね
今は、９０００超えですし

～第二十六話～俺と身体測定～

季節も梅雨入りに入り、雨の日が多くなった頃、俺こと南山真琴（みなみやままこと）は、いつものように学校へと登校していた
俺の通っている学校というのは、山野辺高校と呼ばれていて、そんなに大きい学校ではなく、普通な感じの高校であった
俺はいつものような時間に起きて、制服に着替えて、妹の亜季（あき）と母親の美鶴（みつる）母さんと、朝食を取って、外に出る
今日は、雨が降っていなく、快晴であって、夏が近いからちょっと、暑いな・・・と思っていた
数分歩いて、目的地の山野辺高校にたどり着き、校舎の中へと入る
下駄箱で、上履きに履き替えて、自分の教室へと向かった
教室の中に入ると、数人は来ていたらしく、談笑している者や、ノートに何かを書きうつしている者がいたりしている
俺は、自分の席について、カバンの中から教科書とノートとか、授業に必要な物を、机の中に仕舞う作業をする事にした
作業をしていると、俺に話しかけてくる者がいた
「おはようございます、まこ」
「お、おはよう・・・」
俺に話しかけてきたのは、いつも教室では話しかけてこなかった、汐崎美咲（しおざきみさき）だった、俺は、この子から手紙を貰って、内容が呼び出しだったので、行ってみて、そこで言われた言葉が、彼女にして下さいだったので、どう返事したらいいか、悩みの種でもあるのであった
「実は、茜姉さんから聞いたんです、「まこさんって、美咲と同じクラスなのよね？いいわね～」って、まこ・・・茜姉さんと、何所で知り合ったんですか？」
どう答えればいいんだ？正直に話すと、その茜姉さんと言うのは、汐崎茜（しおざきあかね）と言って、汐崎美咲の従姉で、出会った場所が秋葉原のバイト先、ラブ喫茶「アイライク」だしな？

とりあえず俺は、こう言う事にした
「えっと、バイト先で声をかけられて・・・」
「まこ・・・バイトしてたんですか?何で私に言ってくれないんです?」
何で、言う必要が?まったく関係ないと思うのだが・・・
「えっと・・・言う必要ある?」
「・・・私、まこの事色々知りたいんです、私の事だったら何でも教えられます・・・」
そう赤らめて言ってきた、うわ!?よく見てみると、美咲を見ていた男どもがなんかこっち見て、驚いてないか?それに「何で美咲様が、顔を赤らめて・・・まさか!?」「おい、そういうのは考えるな!美咲様は、そういった趣味ではないはずだ!」とか聞こえてくるし!?
多分というかこいつら・・・絶対に美咲ファンクラブ、ＭＫＦＣのメンバーだろ・・・
そう、俺は思っていた
「えっと、バイト先教えたら、美咲さんはもしかして来るつもり?」
「当り前じゃないですか、まこが行く所、どこだって行きます」
・・・これって、ストーカー発言じゃないか・・・?
「えっと・・・とりあえずバイト先は、美鈴と同じ場所なんだけど・・・」
「美鈴って・・・もしかして、同じクラスの栗谷さんですか?」
「うん、まあ」
「そうですか・・・栗谷さんと・・・確かに見てる限り、まこと栗谷さん、仲いいですものね・・・少々妬けるぐらいに」
そう見えるのか?普通に話してるだけだと思うのだが・・・
「とにかく、自分からは言わないよ・・・茜さんか、美鈴にでも聞いてね」
俺がそう言うと、汐崎美咲は、こう言った
「・・・分かりました、自分で調べる事にします、貴方に嫌われた

くないですし・・・」
そう言って、俺のそばから離れて行った
そして、チャイムが鳴り、いつもどおりに授業が始まる
いつもどおりに担任の朝崎翠(あさざきみどり)先生がやって来て、こう言った
「あ～お前ら、今週から身体測定があるので、こころしてかかるように、以上」
そうけだるそうな感じで言ってきた、まあ、この先生は前からそういった感じの先生だったので、もうクラスメイトは、馴れたらしく、誰も何も言ってこなかったのである
一つ、分かった事は、授業をつぶして、今週から身体測定があるという事が分かったのであった・・・

～第二十六話～俺と身体測定～（後書き）

零堵です。うん、終わりが全く見えません
あと、お気に入り登録してくれるのはありがたいんですけど、一声かけてくれるとうれしい限りです。

～第二十七話～俺と身体測定その２～（前書き）

はい、続きの話です

～第二十七話～俺と身体測定その２～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、集中する事にした
梅雨入りの季節に、俺の担任の翠（みどり）先生が、「身体測定がある」と言っていたからである
ちなみにこの山之辺高校の身体測定は、身長や体重、視力や聴力を測ったり、あと、体力測定も兼ねているので、それを全学年で行われるので、授業がまるまる潰れたりするのである、しかもそれを数日間行ったりする
こうして、俺は身体測定に備えて、体操着に着替えて、最初に身長や体重、胸囲を計る事にした
この高校は、クラスごとではなく、全学年の生徒が一斉に計る方針になっているので、早くたどり着いた者は、早い時間に家へ帰れるのであった
俺は、身長や体重、胸囲を測っている保健室に辿り着くと、もう既に見知った人物がいた
「あ～まこ、まこもここから測る事にしたんだ？」
そう話しかけてきたのは、俺の親友であり、クラスメイトの栗谷美鈴（くりやみれい）だった
「うん、まあ」
「じゃあ、ついでだから一緒にまわろうよ？」
「・・・まあいいけど」
「よし、決まりね」
そう言って、俺は、列に並んで、身長と体重を量って貰う事にした
結果は、１６９ＣＭで体重４９？だった、うん・・・普通かな・・・と、俺は思う
美鈴は、１４７ｃｍで４７？だった、それなのに「ダイエット必要かな～」とか言っている
いや・・・必要ないと思うのだが・・・

そして、胸囲を測ってもらった時に、医師から
「まだまだ成長するわ、頑張ってね」と言われた
うん、余計なお世話だと思うぞ?それに・・・別に胸を大きくしたいとか思ってないし
巨乳って肩が凝りそうだと思うしな?
とりあえず、計り終ったので、俺と美鈴は、体育館に向かう事にした
体育館で測っていたのは、反復横とびと、５０Ｍ走の短距離のタイムを測っていた
まず計ったのが、反復横とびで、最初に俺が挑戦して、美鈴に計ってもらう事にした
数分がたって、美鈴が「５５回だよ、まあ平均かな?」と言って来たので
ああ、そう・・・と言い、今度は美鈴のを計る事にした
結果は俺より、回数が低く、４０回だった、その結果に関して美鈴はというと
「こういうの苦手なんだよ～、まこなら分かるでしょ～?」
いや・・・全くと言っていいほど、分らんのだが・・・
次に５０メートル走のタイムを計る事にした
最初に俺が走って、美鈴にタイムを計って貰う事になった
いざ、俺の番になり、俺はとりあえず走る
結果は、美鈴からこう聞かされた
「９秒ジャスト、まこ、早いね～?」
「そう?」
「私、１０秒ぐらいだよ?それに比べたら、早いって」
そういうものなのか?そう思っていたが、口に出さないでいた
そして、美鈴の番になり、俺がタイムを計る
確かに美鈴が言った通り、美鈴のタイムは１０秒過ぎていた
走り終わった美鈴が、息を切らしながらこう言ってきた
「っはっは・・・ね?言ったでしょ?」
「うん、まあ確かに・・・」

「今日計ったのを、先生に提出して、帰ろうか？」
「そうだね・・・まあ、明日も測定会あるし」
「うん、じゃあ帰ろう～」
そう言って、俺と美鈴は、計った内容の紙を、先生に提出して
先生から「明日もあるので、頑張ってね、明日のために朝食抜きとかしないように」とか、言われて少し戸惑いながら
俺は、体操服から制服に着替えて、美鈴と一緒に、高校から出て行ったのであった・・・

～第二十七話～俺と身体測定その2～（後書き）

はい、零堵です。
うん、まだまだ続きます
ちなみに二十七話もいったのに、まだ時間軸で言うと、一学期の前半なんだよね～w
二学期編は、何話からになるのか・・・まだ全く考えてないかもって感じです・・・

～第二十八話～俺と身体測定その３～（前書き）

アクセス数が、１万超えましたｗ
ありがとうございますｗ

～第二十八話～俺と身体測定その３～

身体測定が行われて、次の日、俺こと南山真琴（みなみやままこと）は、いつものように家を出る
今日も昨日と同じく、身体測定があるので、授業が潰れるのであったいつものような時間に辿り着き、教室に入る
そして、直ぐに体操服に着替えて、チャイムが鳴って先生が来るまで、教室で待機していると、担任の翠（みどり）先生が入って来て、こう言った
「お前ら、今日も身体測定あるので、こころしてかかるように～、あ～今日も授業はないから、測り終った者から帰って良し、以上だ」
そう言って、先生は教室から出ていく
「まこ～、今日も一緒に行こうか？」
そう言ってきたのは、俺の親友の栗谷美鈴（くりやみれい）だった
「そうだね、まあいいよ」
「よし、じゃあ一緒に行こう」
そう言って、俺と美鈴は、教室から出ていく
最初に移動した所は、校庭にした
校庭で、測っているのは、百メートル走と砲丸投げだった
まず、俺と美鈴は、最初に百メートル走を測る事にした
まず、最初に俺が並んで、タイムを美鈴に測って貰う事にした
そして、俺の番になったので、一生懸命走る
結果は、美鈴が「１３秒だよ～、まあまあじゃないかな？」とか言ってきた
まあ、五人で走って、３位だったから、そのようなもんか・・・と思い
俺は、美鈴のタイムを測る事にした
美鈴のタイムは、俺と同じようなタイムで、１３秒ぐらいだった
走り終って、美鈴がどうだったか聞いてきたので、俺は
「まあまあじゃない？」

と言う事にした
次に、砲丸投げを測る事にした
まず、最初に俺が計る事になって、ボールを持って、思いっきり投げる
投げたボールは、速いスピードとはいかないまでも、真っ直ぐ飛び、地面に落下
記録係の人が「２０Ｍです」と言っていたので、それが俺の記録となった
「じゃあ、次は私ね～」
そう言って、美鈴がボールを持って、投げる
投げ方がよかったのか、ボールは真っ直ぐ飛び、軽く３０Ｍを超えて
記録係が「３３ｍです～」と言っていた
それを聴いて、美鈴は
「や～った～まこに勝った～」
とか言っている、いや・・・勝ち負けとか気にしないんだが・・・
俺は
こうして、校庭での記録は終わったので、校舎の中に入って、聴力と視力の検査に向かう事にした
まず、最初に受けたのが、聴力で、機械を耳に当て、音が聞こえたらボタンを押すと言われて
俺は、言われたとおりにボタンを押す
医師が「正常です」と言ってきたので、とりあえず問題はないな・・・と思った
美鈴も、問題なく終わったようである
次に計ったのが視力で、片方の眼を塞ぎ、普通なら○が空いている方を指差して、答えるのだが
何故か漢字だった
しかも文字に使われていたのが、数字で、一から九の漢字だった
俺はとりあえず答えて言って、言われたのが
「席替えしなくても大丈夫ですね」とか言われた

美鈴はと言うと、「眼鏡必要なレベルというか、頭大丈夫?」とか言われていた
うん・・・美鈴、一体何したんだ・・・?とか、思ってしまったのである
計り終わって、美鈴が
「じゃあ、帰ろうか?まこ~」
「そうだね、全部計り終わったし、いつまでも学校にいることないしね」
「うんうん、まこも分かってるじゃん~」
そう言って、体操服から制服に着替えて、校舎を出る事にしたのであった
こうして、俺の身体測定が、全て終わったのである・・・

～第二十八話～俺と身体測定その３～（後書き）

零堵です。まだまだ続きますね、この物語は
これからも頑張って書こうかなと、思います。

～第二十九話～俺とプール～（前書き）

アクセス数が、１万超えましたｗありがとうございます。
うん、登場人物も結構増えてきましたね

～第二十九話～俺とプール～

季節もすっかり暑くなり、夏になったこの頃、俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、いつものように、高校へと向かっていた
俺の通っている高校と言うのは、山野辺高校といって、まあ、普通サイズ？ぐらいの高校かと思われる
季節もすっかり夏になったので、制服を着て、登校するのがちょっと辛い、まあ、汗かくしな・・・
朝だと言うのに、朝、テレビで天気予報を見てみたら、「今日は夏日になるでしょ、日射病に気をつけてください」とか言っていた
うん、この暑さなら倒れるんじゃないか？水分補給とかした方がいいかも知れない・・・
そう思いながら、高校に辿り着いたので、校舎の中へと入っていく
中に入って、下駄箱から自分の上履きを取り出し、履き替えて、自分のクラスへと向かった
自分のクラスの中に入ると、もう既に何人かはいて、他愛のないか会話をしている者や、団扇で仰いでいる者、机でぐて～っとしてる者もいた
うん、皆も暑さで多少参ってるんだな・・・と思うほどである
とりあえず俺は、自分の席に座って、鞄から教科書を取り出して、机の中へ入れる
今日は、普段なら親友の栗谷美鈴（くりやみれい）とか、同じクラスの汐崎美咲（しおざきみさき）とかに声をかけられるのだが、今日は全く声をかけられなかった
そして、チャイムが鳴り、俺の担任の朝崎翠（あさざきみどり）先生がやって来て、こう言った
「今日の放課後、プール開きを行うぞ、ちなみに水着は新品のを全員分用意してあるから、問題はない、あ～用件は伝えたから、で、一時間目は私が受け持ってるのだが、私は眠い、というか寝させろ・・・、だからお前ら、このプリントをやっておくように、出来たら

自由にしてOKだ、ただ、私の眠りを妨げるというのなら、容赦はしないぞ、では、お休み」
そう言って、翠先生は、生徒にプリントを押し付けると、どこから用意したのか、マイ枕を使って、本当に寝てしまった
・・・これでいいのか・・・このクラスは・・・
まあ、この先生の言動にも、皆、なれたらしく、誰も何も言ってはいなかったのである
仕方がないので、俺は、まじめにプリントをやるのであった
そして、時間が過ぎて午後
先生に言われたとおりに、俺たちのクラスは、校庭に出て、右側にある、プールに向かう
プールの控室に入ると、中には確かに人数分のスクール水着が用意されていた
俺は、それに着替えて、目を消毒して、プールサイドに出る
俺たち女子が、プールサイドにやって来ると、おお～とか歓声があがった
特に聞こえるのが「美咲様、さすがです！」「うおお！来てよかったぜ！」と男子から聞こえる
まあ、このクラスには、クラス一のアイドル的存在の汐崎美咲がいるからな・・・
多分というか、こいつら、その美咲のファンクラブ、ＭＫＦＣのメンバーじゃないか？と思われる
「は～い、皆、準備は出来たかな～？」
子供番組の歌のお姉さんみたいな調子で、そう言ったのは、この山野辺高校の体育教師で、水泳担当の川原芹（かわはらせり）先生だった、この先生は、男女ともに人気が高く、「せりちゃん～」とか呼ばれているらしい、まあ、俺は川原先生とか呼んでいるけど
「じゃあ、まず準備体操から始めましょう～」
と、芹先生が言っていたので、準備体操をして、プールに入った
「まこ～、きもちいいね～」

いつの間にか隣にいたのか、親友の美鈴が、俺に話しかける
「まあ、暑かったしね、気持ちいいかな？」
「うんうん、で、まこはさ？泳げるの？」
「失礼な、カナヅチじゃあないし、そういう美鈴は、どう？」
「私？私だってカナヅチじゃないよ？バリバリ泳げるし？じゃあさ？まこ、競争しない？」
「何で？」
「いいじゃない？ほら、芹ちゃんも「今日は自由行動ですよ～」って言ってるしさ？
どっちが速く泳げるか、バトルしよ？」
俺は、そう言ってきた美鈴に、どう答えたらいいか迷ったが、まあ、別に嫌というわけじゃあないので
「まあ、いいよ」
そう言っていた
「じゃあ、決まりね？５０ｍを先に泳いだ方が勝ちね？負けないよ？まこ？」
「こっちだって、負けないよ」
そう言って、俺と美鈴は、プールのコースに立つ
俺が一番コースで、美鈴が二番コースだった
「あ、芹ちゃん、今からまこと勝負するから、計って？」
そう、美鈴が言うと
「そう、解ったわよ、じゃあ南山さん、栗谷さん、スタート位置について？」
「了解～」
「解りました」
そう言って、俺と美鈴は、スタート位置につく
「じゃあ、行くわよ？よ～い・・・初め！」
芹先生がそう言った同時に、俺と美鈴はプールに飛び込む
俺は、クロールが出来るので、それを使って、一生懸命に泳ぐ
数分後、決着がついた、まあ、どっちが勝ったかと言うと

「やった～私の勝ちだね？まこ？」
そう、勝ったのは美鈴だった、美鈴は、スタートと同時に、潜水して、そのまま２５Ｍを泳ぎ、後半は背泳ぎで泳ぎきったのである
美鈴・・・そんなに泳げるのなら、水泳部とか入った方がよくないか？と、思ってしまった
「は～い、時間なので、今日はこれにて、終了です～？みんな～？風邪引かないようにね～？」
そう、芹先生が言ったので、俺達は控室に入り、タオルで体を拭いてから、制服に着替えた
そして、教室に戻り、プールに入ったせいか、ちょっと涼しく感じていたりもしていた
「あ～ＨＲを始めるぞ～」
そう、気だるい感じで言ったのが、担任の翠先生だった
「必要事項は～、まあ来週から夏休みに入る、ただそれだけだな・・・あ、ひとつ言っとくけど、校長の話は、まともに聞いても意味ないぞ～、あれはスリープの呪文みたいに聞こえるしな～あとは～、なんかあったっけ・・・まあいっか、そんじゃあ、これにて解散、ではな」
本当にいいのか・・・？こんな感じで・・・？
そう言って、翠先生は教室から出ていく
俺は、帰り支度をして、家へ帰る事にしたのであった・・・

～第二十九話～俺とプール～（後書き）

零堵です。

この物語も、二学期編に突入近いかもって、感じですねえ

～間話～俺とキャラ紹介その2～挿絵つき～（前書き）

キャラ紹介、その2です

～間話～俺とキャラ紹介その2～挿絵つき～

＞ｉ３３４５８＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞２９７１＜
南山真琴＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞みなみやままこと＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞年齢１７歳、山野辺高校２年
身長大体１７０ぐらい、体重５０？いかないかぐらい
家族構成、母親と妹の３人ぐらし
黒髪のショート、大変スレンダーな体（つまりぺったんこ）、天空カイザーのレキのコスプレするとそっくりと言われる
週に一回、ラブ喫茶「アイライク」でバイト
一人称、俺か自分
この物語の主人公、普通な日常を過ごしていたが、ある日、それが非日常に変わってしまった、ある意味不幸な人物、なぜか異性より同姓にもてる（笑）
突っ込み体質でもある

＞ｉ３２９６６―２９７１＜
汐崎（しおざき）美咲（みさき）年齢１７歳、山野辺高校２年
身長１６０ぐらい、体重４５？ぐらい
家族構成、両親と３人家族
一人称私
黒髪のストレートで、グラビアアイドルのような体、クラス一の美少女、好きな人物南山真琴
この物語のヒロイン１？真琴にラブレターを送った人物、容姿端麗、運動抜群で成績も優秀

美咲ファンクラブ、通称（ＭＫＦＣ）があったりする
従姉に汐崎茜がいる、茜の事をお姉ちゃんと言っている
真琴が好きすぎて、少々暴走気味な妄想もする、真琴が絡むとヤンデレ化もする（笑）
真琴がもし男と付き合うような事があったら、全力で別れさせようとも思っている

＞ｉ３２８０６―２９７１＜
栗谷美鈴（くりやみれい）年齢１７歳、山野辺高校２年
身長大体１５５ぐらい、体重５０キロぐらい
家族構成、両親と弟の四人家族
一人称私
栗色のストレートで、幼児体型、アニメやゲームにはまっている、腐女子
バイト、ラブ喫茶「アイライク」で働いている
真琴の親友でヒロイン２？アニメが大好きで、コスプレもしたりしている、真琴と一緒に行動するのが好きなので、よく一緒にいようとする

＞ｉ２９５８５＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞２９７１＜
南山亜季＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞みなみやまあき＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞年齢１５歳、山野辺中学３年
身長１５０ぐらいで、体重４０ぐらい
黒髪のツインテール、幼児体型、真琴の妹

一人称私
真琴の妹で、料理が得意、真琴、つまりお姉ちゃんの事が大好き、お姉ちゃんに近づく者は、誰であろうと嫌だと思っている、姉の事になると、ヤンデレ化もする

ＭＫＦＣ（美咲ファンクラブ）
美咲のファンクラブ、美咲を彼女にしようと色々と行動しているが、当人に断られている
クラスの中でも数人はいる程度

＞ｉ３３５８５＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞２９７１＜南山美鶴＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞みなみやまみつる＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞年齢３９歳、真琴と亜季の母親
一人称私
真琴と亜季の母親で、女優、普段家にいなく、家事を娘にまかせっきり

＞ｉ３３６１７＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞２９７１＜東雲紫＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞しののめゆかり＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞　年齢２２歳
身長１５７ｃｍ　体重５０ぐらい
ショートカットな黒髪、モデル体系
一人称私
ラブ喫茶「アイライク」の店長さん、腐女子なので、美鈴と話があう
弟の玲をおもちゃにしている

＞ｉ３３７５３＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞２９７１＜
東雲玲＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞しののめあきら＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞　年齢１５歳、　山之辺高校一年
身長１５０ぐらい、体重５０ぐらい
短髪の黒髪で、童顔
一人称僕
真琴の後輩で、ラブ喫茶アイライクで、女装して働いている
同姓によくモテル、真琴の事を先輩と言っている

桐谷佐奈（きりやさな）年齢１８歳
身長１４７ＣＭ　体重４５?ぐらい
茶髪の髪の毛で、ポニーテール
一人称私
ラブ喫茶アイライクで働いてる、真琴を見ると、ちょっとどきどきしてしまうとか思っている

汐崎茜（しおざきあかね）年齢２１歳、　漫画家
身長１５５ぐらい　体重５０ぐらい
黒髪のストレート
一人称私
汐崎美咲の従姉、漫画家志望、真琴をメインに漫画を書く事にした

まあ、このぐらいですかね?

～間話～俺とキャラ紹介その2～挿絵つき～（後書き）

キャラ紹介です。

～第三十話～俺と仲間達～（前書き）

アクセス数が、１２０００行きました。
ありがとうございます。この物語もついに３０話目ｗ
まだまだ続くので、よろしくです～

～第三十話～俺と仲間達～

プール開きが開催されて、次の休みの日
俺こと南山真琴（みなみやままこと）は、出かける事にした
出かける場所は、決まっていて、秋葉原の喫茶店、ラブ喫茶「アイライク」である
なぜ、その場所に向かうのかというと、そこの店長さんの東雲紫（しののめゆかり）さんに、「バイトしませんか？」と、誘われたからである
だから、俺は、そのバイトを一日だけだけど、引き受けたので、俺の通っている学校が休みの日になったので、バイトに向かうのであった
電車に乗り、数分後、秋葉原に辿り着く
街中は、休日のせいか、人でにぎわっていて、人の多さにちょっと目眩がしそうになった
その人ごみの中を歩いて、目的地の場所、ラブ喫茶「アイライク」へと、辿り着く
中に入ると、「いらっしゃいませ～」と、声をかけて来た
「こんにちは、佐奈さんだったよね」
「あ、まこさんでしたか・・・いらっしゃいませ」
「店長さんは、もう来てるの？」
「はい、店長は、奥の控え室で、事務の仕事してますよ」
「そう、じゃあ、自分も着替えて、すぐにホールに出るね？」
「あ、はい・・・お願いします・・・」
うん・・・なんで、顔を赤らめながら言うんだ？熱でもあるのか？と、思ってしまった
そして、俺は控え室に入り、用意された制服へと着替える
ここの制服は、メイド服が基本なのだが、俺のは違っていた
俺が着る事になっている服は、どっちかというとウエイターか、ギャルソンタイプの服だったからである

それに着替えて、ホールに行くと、さっき会話した佐奈さんが、こう言ってきた
「まこさん、本当に似合ってます・・・」
「え～っと・・・ありがとう、佐奈さんも可愛いよ?似合ってるしね?」
「!あ、ありがとうございます!」
うん・・・なんでますます赤くなるんだ?よく分らんが・・・
そう話していると、俺の親友の栗谷美鈴(くりやみれい)と、俺の後輩の東雲玲(しののめあきら)がやってきた
「おっはよ～まこ～」
「おはようございます、まこ先輩」
「おはよう」
「まこ～今日さ?バイト終わったら遊びに行こうよ?」
「遊びに?どこに?」
「もちろん、この町の中を案内するさ～、で、いいでしょ?」
さて、どうしよう・・・別に家に真っすぐ帰っても、する事が・・・いや
妹の亜季(あき)が何か言ってくるかもしれないな・・・
でも、やっぱり予定はないので
「まあいいよ」
「あ、あの・・・私もいいですか?」
「お?佐奈～も来る?」
「は、はい、行きます!」
「あきらちゃんは、どうする?」
「僕ですか?・・・そうですね・・・お邪魔じゃなければ、ご一緒してもいいですか?」
「いいよ～じゃあみんなで遊びに行こう?はい、決まり～」
そう美鈴が言うと、皆は、了承したようだった
そう話していると、奥の部屋から店長の紫さんがやってきて
「あら、皆で遊びに行くの?じゃあ、私も入れてね～じゃあ、今日

はいつもより早い時間に閉店させましょうっと」
とか言っていた
・・・いいのか？まあ、店長がそう言うのだったら仕方がないか・・
・
とりあえず、俺はそう思う事にするのであった
「じゃあ、今日も頑張って働きましょうね～では、皆さん、よろしくお願いしますね～」
「了解です～」
「僕も解ったよ」
「私も解りました」
「自分もＯＫです」
俺達は、そう言って、バイトを始めるのであった

～第三十話～俺と仲間達～（後書き）

零堵です。アクセス数が伸びてるのが、うれしい限りですｗ

～第三十一話～俺と仲間達その2～（前書き）

はい、続きです。
アクセス数が１３０００超えました。
うん、凄い読まれてますね

～第三十一話～俺と仲間達その2～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、働いていた
働く場所は、秋葉原にあるラブ喫茶「アイライク」という、普通の喫茶店とはちょっと違ったバイト先だった
何故、働く事になったのかと言うと、そのお店の店長の東雲紫（しののめゆかり）さんに、「バイトしませんか？」と誘われたからである
それに対して、俺は、一週間に一回だけならＯＫだして、働く事になったのであった
そのバイト先での服装は、メイド服をモチーフにした衣装だったけど、俺が着る事になった服装は、ウエイターやギャルソンタイプの服装だった
それを着て、接客するのである、あ、一応言っておくけど、俺とか言っているけど、正真正銘俺は、女子高生で女の子なんだが・・・
お客様から声をかけられて呼ばれるのは、いつも女性からだった
男の客は、同じく働いている俺の通っている高校の後輩、東雲玲（しののめあきら）を呼んでるみたいであった
そんな訳で、バイトをするのだが、今日は早くお店が終わった
何故かと言うと、店長の紫さんが「今日は、早く閉店します」と言ったからである
早く終わったので、俺は控室に行って、私服に着替えて、皆で遊びに行く約束をしていたので、着替え終わって、外で待っていると、店から最初にやって来たのは、桐谷（きりや）佐奈（さな）さんだった
「あ、まこさん、お待たせしました」
「佐奈さんも、おつかれさま、私服ってそれなんだ？」
「あ、はい、動きやすい恰好で来たので」
佐奈さんの恰好は、黄色のワンピースに青のジーンズだった
まあ、俺の服装も動きやすいように、白いワンピースに緑のジーンズだけど

「まこさんの服装も・・・あの、かっこいいです・・・」
「あ、ありがとう・・・」
え～っと素直に喜んでいいのかどうかは微妙なんだが・・・、俺はとりあえずお礼を言った
「あ、まこ～、準備できたよ～」
「こっちも出来ました」
そう言ってやってきたのは、俺の親友の栗谷美鈴（くりやみれい）と、俺の後輩の玲だった
俺は、玲が気になったので、小声で聞いてみた
「なんで、ウィッグ付けたままなの？」
「だって、佐奈さんがいますから、僕、佐奈さんには自分の身分、明かしてないんですよ」
「なるほど」
そう話していると、最後に
「お待たせ、全員揃ったわね？」
そう言って来たのは、紫さんだった
「店長、皆集まったし、どこ行きます？」
美鈴がそう言うと、紫さんはこう言った
「そうね～、まずは何か食べに行きましょうか？今日は、私が奢るわよ」
「姉さん、いいの？」
「大丈夫、私にまっかせなさい～」
そう言って、笑顔で言う
まあ、大丈夫ならいっか・・・と、俺は思っていた
あ、そう言えば、俺は美鈴にこう言う
「美鈴、携帯貸して？」
「ん～？まこ、どったの？」
「家に連絡しないと、亜季（あき）がご飯作ってるかも知れないし」
「あ、そっか、じゃあ、はい」
そう言って、俺に携帯を渡す

俺は、携帯を受け取って、自宅にかけた
数秒コール音がなって、相手が出る
「はい、南山です」
「あ、亜季？」
「あ、お姉ちゃん？一体、どうしたの？」
「実はね、バイト仲間と食事する事になったから、亜季、自分の分の食事作らなくていいよ？」
「え・・・！お、お姉ちゃん・・・私の作る料理、嫌になったの・・・」
「い、いや、そういう訳じゃないよ？」
「じゃあ、早く帰ってきてよ・・・お姉ちゃんの分も作ろうと思ってるんだから・・・」
・・・そう言われて困ってしまった、どう返事すればいいんだ？と悩んでいると
「亜季ちゃん～、まこは私達と一緒にいるから、大丈夫だよ？だから安心して、好きな事やっててていいよ～」
そう美鈴が言うと
「貴方がお姉ちゃんを！！」
なんか電話越しに、殺意？見たいな感じの波動を感じるんだが・・・
気のせいか？
「あ、亜季？」
「お姉ちゃん！その人と一緒にいちゃ駄目！すぐに帰ってきて！」
「そう言われても・・・店長さんが食事に誘ってくれて、断るわけにもいかないし・・・」
「そうだよ～店長さんが言ってるからね？」
「・・・・・・・・・・分かりました、お姉ちゃん・・・早く帰ってきてね？・・・」
「う、うん、じゃあね？亜季」
そう言って、携帯の電源を切る
なんか・・・偉い沈黙が長かったんだが・・・ま、まあ、気にしな

いでおこう・・・
俺は、携帯を美鈴に返す
「話はついた?じゃあ、行きましょうか～」
「あ、はい」
「りょ～かい」
こうして、俺達は、秋葉原の街中を歩くのであった
そして・・・食べ終わって、ちょっと遊んでから家へと帰ると
涙目の亜季がいて、ちょっと驚いてしまったのであった・・・

～第三十一話～俺と仲間達その2～（後書き）

ハイ、零堵です。そろそろ一学期編も終わりって感じですかね。

～第三十二話～俺と閉会式～（前書き）

やっと、一学期編終わりです。うん、長かったなあ
次からは、夏休みと二学期編突入って感じですね

～第三十二話～俺と閉会式～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、ちょっとうかれていた
何故かと言うと、今日学校行って、明日から夏休みに突入するからである
一か月以上の休みがあって、まあ部活やってるやつは、夏休み中も学校に行くかも知れんが、俺は、部活やってないので、まるまる一カ月は休み確定？って感じなのである
そんなわけで、いつものような時間に起きて、着替えて外に出る
そして、いつもと同じ時間に、俺の通っている高校、山野辺高校に辿り着く
そして校舎の中に入り、上履きに履き替えて、自分のクラスへと向かう
クラスの中に入ると、ちょっと騒いでいた
主に騒いでいたのは、男子で「美咲様と一カ月以上も会えないなんて！」とか「美咲様に毎日会いたいぜ！」とか言っていた
それに対して、クラスメイトの汐崎美咲（しおざきみさき）は
「あはは・・・さみしいのはわかるけど、また二学期会えるんだから、落ち込まないで？」とか言っていた
それを聞いて「はい、了解です！美咲様！」とか言っている
うん・・・いいのか？こんなんで・・・
そう思って自分の席につく
今日は、閉会式だけなので、鞄の中には、何も入れてなかった
机の中に入ってる教科書とかを鞄の中に入れる
そういう作業をしていると、キーンコーンとチャイムが鳴って、担任の朝崎翠（あさざきみどり）先生がやってきて、こう言う
「あ～お前ら、明日から夏休みだ～、休みだからと言って、ハメを外して、はしゃぎ過ぎるなよ？あと、犯罪とか犯して、学校に連絡というのもやめてくれよな、ま、それじゃ、校長の長～い無駄話が

あるから、体育館に集合な?」
翠先生は、そう言って教室から出ていく
俺は、先生に言われた通りに、体育館に向かう事にした
体育館の中に入ると、閉会式という垂れ幕があり、もうすでに全学年の生徒が集まっていて、きちんと並んでいた
俺のクラスも、その列に参加して、きちんと並ぶ
数分後、校長先生が壇上にあがる
「え~明日から夏休みに入る、嬉しいのはわかる、わかるぞ?誰だって休みは嬉しいからな?まあ、ワシだって休みだったら家族に甘えて、家でのんびりと行きたい所じゃ、それなのに学校に行きなさいだと?全く・・・先生というのも面倒なもんなんじゃな・・・」
そんな事を言っていた
こんなんでいいのか?一応、この学校のトップだろ?
そんなグダグダな会話も終わり、連絡事項も特に無いみたいだったので、閉会式は、意外にすんなり終わったのであった
教室に戻り、持って帰る物は、鞄に入れて、帰り支度をしていると
「あ、まこ・・・」
そう言ってきたのは、俺のクラスメイトの美咲だった
どうもこの子、ちょっと苦手なんだよな・・・まあ、理由は色々とあるんだけど
「え、えっと・・・何?」
「いつになったら私を彼女にしてくれます・・・?」
いきなり爆弾発言しましたよ!?まあ、何故彼女がそう言ってくるのかというと、俺に手紙を送ったからである
普通の男なら「よろこんで!」とか言うのだが・・・俺は、違っていた
まあ、彼女と同じ、同姓、つまり俺も女だし・・・
「彼女って・・・断っちゃ駄目?」
「!私の事、嫌いなんですか?」
「嫌いか好きかと言われたら、どっちでもないんだけど・・・」

「じゃあ、私にもチャンスはまだあるって、事ですよね？私、諦めませんから」
「・・・・そ、そう・・・・」
俺は、そう言うしかなかった、他にどう言えと？
こうして、俺の一学期最後の日は、終わりを迎えたのである
うん・・・何も解決していないのは、気のせいだと思いたい・・・

～第三十二話～俺と閉会式～（後書き）

零堵です。一学期編終わりました
うん、長いですね、次は夏休みから、書こうと思います。

～第三十三話～俺と母親とドラマ撮影～（前書き）

夏休み編突入です。
アクセス数が１４０００超えしたので、うれしいですｗ

～第三十三話～俺と母親とドラマ撮影～

俺こと、南山真琴は、とある場所に来ていた
その場所というのは、山野辺撮影所と呼ばれる、ドラマとかバラエティー番組を作ったりしている場所である
何で、俺がそこに来ているのかというと・・・
「許さないぞ！デルウイング！俺達が相手になってやるぜ！」
「は～い、カット、まこと君、なかなかいいよ～」
「あ、ありがとうございます」
そう、俺は、二時間スペシャルドラマ「天空カイザー、カイザーＶＳデルウイング」に役者として出演しているのである
何故、俺がこのドラマに出演しているのかというと、事の始まりはこうだった・・・

山野辺高校が閉会式をやって、次の日、夏休みに入ったので、何しようかな・・・と考えていた所、母親の南山美鶴（みなみやまみつる）母さんから、こう言われたのであった
「真琴、今日から夏休みでしょ？」
「うん、まあそうだよ」
「じゃあ、私の仕事手伝ってくれない？丁度、真琴にぴったりの役があるのよ」
母さんの仕事は、女優なので、そういう仕事が入ってくるのであった
「自分にぴったりの役？」
「うん、断るわけないわよね？真琴？」
「・・・う、うん」
「なら、ついてきなさい、あ、亜季（あき）はお留守番ね？」
「え～私も行きたいよ～」
「だ～め、いい子にしてるのよ？」
「は～い、分かりました～」

そう言って、母さんに連れられて、たどり着いた場所は、山野辺撮影所だったのである
そこで控室に案内されて、メイクさんに化粧させられて、スタイリストに衣装を着せられて、出来上がったのが
天空カイザーに出てくるレキの格好をした俺だったのであった
前にコスプレで、レキの格好をした事があるから、なんか・・・近視感（ジャブデ）を感じたのであった
俺は、母さんに問い詰める
「母さん、この衣裳って・・・」
「あなたの役名はね？天空カイザーの仲間の、レキと言う役よ？はい、これ台本ね？」
そう言って、母さんは台本を俺に渡す
「あ、ありがとう・・・って、そうじゃなくて、仕事ってドラマの手伝い？」
「っそ、丁度この話が入って来た時、キャスト、ほとんど決まったのはいいけど、レキ役だけは、なかなか決まらなかったのよ、で、資料を見てみたら、なんか真琴そっくりじゃない？だから、連れてきたのよ？分かった？」
「そう・・・あ、じゃあ、母さんの役は？」
「私？私はね？悪の首領、デルウイングの部下、冷笑のミレイユとか言う役よ？」
「そうなんだ、ところで・・・何で冷笑？」
「さあ？台本にそう書いてあるから、そうなんじゃないの？」
「そう・・・」
とりあえず、俺は深く考えない事にした
そして・・・冒頭のシーンに戻るのである
俺は、台本に書かれてあった通りに、台詞を言う
少々駄目だしは食らったが、何とかやれてる感じであった
ドラマの撮影が順調に進んで、休憩時間に突入して、母さんと一緒に休んでいると

一緒に共演している役者さんが話しかけてきた
「美鶴さん、お疲れ様です」
そう言ったのは、天空カイザーの主役、カイザー役の暮見翔（くれみかける）であった
「お疲れ様、翔君も主役、大変じゃない？」
「ええ、ちょっと大変ですが、やる気はありますよ？えっと・・・美鶴さん、美鶴さんが連れてきた人って」
「ああ、真琴の事？真琴は、私の子よ、真琴、挨拶しなさい」
「了解、南山真琴です、よろしく」
「まことか～、俺は、暮見翔、翔でいいよ？俺も、まことって呼んでいい？」
「はい、いいですよ」
「じゃあ、まこと、まだ撮影続くけど、お互い頑張ろうぜ？」
「そうだね」
「じゃあ、俺は他の人に挨拶していくな？じゃな」
そう言って、翔は、俺から離れて行った
「母さん、もしかしてさ？」
「何？真琴」
「俺の事、男だと思ってるのかな？翔の奴」
「多分そうなんじゃないかしら？まあ、レキって男だしね？男がやってると思ってるんじゃない？どうする？翔君に真琴の本当の性別、話す？」
「いや、いいよ、なんか面倒だし」
「そう？じゃあ、私からは言う事はないわね、あ、休憩、終わるみたいよ？」
そう言って、再び撮影がスタートした
俺は、レキ役なので、台本に書かれてある台詞を言う
「カイザー！助太刀するぜ！」
「レキ！・・・分かった、頼む！」
「ああ、行くぞ！黒の黒剣！黒い刃（ダークジェノサイドブレード）！」
「カーット！ＯＫです！」

うん・・・なんか恥ずかしい、普段こんな台詞言わないしな・・・
こうして、撮影が進み、今日の分は終了したので、母さんと一緒に
家へと帰る事にしたのであった・・・

～第三十三話～俺と母親とドラマ撮影～（後書き）

零堵です。一学期編が終了したので、夏休み編突入です。

～第三十四話～俺と母親とドラマ撮影その2～（前書き）

はい、零堵です。夏休み編突入しました

～第三十四話～俺と母親とドラマ撮影その2～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、役者をしていた
何故、役者をしているのかと言うと、事の始まりは、俺の母親、南山美鶴（みなみやまみつる）母さんから、「やりなさい」と言われて、ドラマに出る事になったのである
ちなみに、俺が出演する事になった、ドラマはと言うと「天空カイザー、カイザーＶＳデルウイング」という、元はアニメで、それを実写ドラマ化したのであった
俺は、そのドラマで、主人公の仲間のレキ役をやる事になったのである
そんな訳で、俺は、母親に付き添って、撮影現場へと向かうのであった
撮影場所は、山野辺撮影所と呼ばれる場所で、行われている
俺と母さんが、その撮影所に入ると、すぐに控室に案内されて、メイクさんにメイクさせられて、スタイリストに衣装を着せられて、俺と母さんは控室を出る
撮影現場に向かうと、既に役者の何人かは、集まっていて、打ち合わせをしていた
その中にいた、一人が俺達に声をかけてきた
「おはようございます、美鶴さんにまこと」
そう話しかけて来たのは、天空カイザーのカイザー役の暮見翔（くれみかける）であった
「おはよう、翔君」
「おはよう」
「まこと、今日もお互い、がんばろうぜ？」
「そうだね」
俺は、そう言った
そして、撮影が始まって、台本通りに台詞を言う

「カイザー！ここは、俺に任せろ！」
「でも、レキ！大丈夫なのか！？」
「大丈夫だ！任せろ！」
「カ～ット！はい、ＯＫです！翔君もまこと君もミスが無くて、助かります、では、次に美鶴さん、お願いします」
そう、監督が言う
「は～い、分かりました」
「では、シーン１２、アクション！」
そう、監督が言うと、母さんが演技をする
「オホホホホ！カイザー！わたくしの前に、ひれ伏すがいいわ！」
母さんの役は、デルウイングの手下の、冷笑のミレイユと言う役だった
うん・・・聞いてて思ったけど、母さん・・・なんかハマりすぎ・・・
家では聞いた事が無かったけど、なんか似合ってるって感じがするなあ・・・
「ッく！おのれミレイユ！・・・だが！この程度で俺はやられたりはしないぞ！」
「カ～ット！はい、ＯＫです！、では、ちょっと休憩にしましょう」
そう、監督が言う
監督の言葉を聞いて、俺達は休憩する事にした
休憩中、俺に話しかけてくる者がいた
「えっと、まことさんですよね？」
「そうだけど」
「私、今日から入る事になった、蓮城麗華（れんじょうれいか）と申します、よろしくね？」
「よろしく、え～っと、蓮城さんでいいのかな？」
「麗華でいいわ、私もまことって呼ぶし、いいわよね？」
「いいけど、じゃあ、麗華って、何の役なの？」
「私？私はね、天空カイザーのヒロイン、アカリ役よ」

「そうなんだ、じゃあ、台詞多いの？」
「まあ、多いわね、でも頑張るつもりよ」
「そう、頑張ってね」
そう話していると、休憩終わりです～、と言うのが聞こえたので、撮影に集中する事にした
「カイザー！私も助太刀するわ」
「アカリ！頼む、レキ、大丈夫か？」
「ああ、こっちは大丈夫だ、いつでもいけるぜ！」
「ミレイユ！覚悟しろ！」
「オホホホホ！かかってらっしゃい！」
「行くぜ、天空剣（カイザーブレード！）」
「私も行くわよ！ルナティックイレイザー（ダークジェノサイドブレード）！」
「俺も行くぜ！黒い刃！」
「キャアアアアア！覚えておれ～～～～！！」
「カ～ット！はい、ＯＫです！」
うん・・・疲れたというか、結構体力使うな・・・これ
叫び台詞あるし・・・
そうして、時間が過ぎて、今日の分の撮影は、無事終わったのであった
撮影が終わったので、帰ろうとすると
「よ、お疲れ、まこと」
「お疲れ様、まこと」
俺に話しかけてきたのは、翔と麗華であった
「お疲れ様」
「どうだった？やっぱり疲れただろ？」
「まあね・・・叫び台詞とかあったしね、麗華は？」
「私も疲れたわ、家に帰って休みたい気分ね」
「そうだな、俺もなんか疲れたし、家に帰ってそっこう寝るかな」
「翔、あんた、いつもそうよね～」
「あれ？二人は、知り合いなの？」

「ええ、私と翔って幼馴染なのよ、翔が俳優で私がアイドルやってるのよ」
「そうなんだ」
それは知らなかったな?どうりで仲がいいわけだ
そう話していると、母さんがやって来た
「真琴、帰るわよ」
「うん、分かった、じゃあね?二人とも」
「じゃあな~まこと」
「まこと、お疲れ様~」
二人はそう言っていた
こうして、今日の撮影は終わったのであった・・・

～第三十四話～俺と母親とドラマ撮影その2～（後書き）

零堵です。この物語も夏休み編突入したので、色々な話を入れようかな?とか思っていたりします。

～第三十五話～俺と母親とドラマ撮影その3～（前書き）

アクセス数が1万5千超えしました。もうすぐ日間ランキングにも載りそうな勢いって、感じです

～第三十五話～俺と母親とドラマ撮影その３～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、今日も役者をする事になった
何故、役者をする事になったのかと言うと、俺の母親、南山美鶴（みなみやまみつる）母さんが、女優なので、その関係で、スペシャルドラマ「天空カイザー、カイザーＶＳデルウイング」の、レキ役として参加する事になったのである
俺の母さんは、悪役の冷笑のミレイユと言う役になり、親子で敵役と味方に分かれたのであった
今日も、俺は、母さんと撮影スタジオに入り、控室に入って、メイクをして貰って、衣装に着替える
俺の服装は、男役なので、黒っぽい衣装だった
それを着て、撮影現場に向かうと、もう既に何人か集まっていて、ミーティングとかをしていた
俺と母さんは、撮影場所に来たので、挨拶をする
「おはようございます」
「おはよう」
「はい、おはよう、今日で、全ての撮影を終わらせる予定だから、頑張りましょうね」
そう、監督が言う
「はい、分かりました、真琴、頑張るのよ」
「分かった」
そう言って、撮影がスタートする
今日で、残りのシーンを取るので、いつもよりエキストラ、役者の数が多かった
「シーン２６、スタート！」
そう、監督が言うと、俺の台詞があったので、言う
「カイザー！デルウイングの居場所がわかったぞ！」
「本当か！レキ」

「ああ、場所はここだ、準備は出来てるか？」
「俺は大丈夫だ、アカリは？」
「私もＯＫよ、問題は無いわ！」
「じゃあ、行くぜ！敵本陣に乗り込むぜ！」
「おお！これで終わりにしてやるぜ！」
「カーット！はい、ＯＫです！」
うん・・・やっぱり、なんか恥ずかしいな、まあ普段、こんな台詞とか使わないしな・・・
そう言って、どんどん撮影が進み、休憩時間になったので、俺は休んでいると
「おつかれ～まこと」
「お疲れ様、まこと」
俺に話しかけてきたのは、天空カイザーのカイザー役の暮見翔（くれみかける）と、そのヒロインの蓮城麗華（れんじょうれいか）であった
「お疲れ様」
「まこと、今日で撮影も終了だな？」
「そうだね」
「なんかちょっと寂しいけど、結構楽しかったわね」
「ああ、俺も楽しかったぜ？まことはどうだ？」
「俺？そうだな・・・」
確かに、ドラマの撮影は大変だったけど、何というか、まあ・・・俺も楽しんで演技していたんだと思う
「俺もそう思ったぜ」
「だと思った、今日でラストだけど、最後まできっちりやっとこうぜ？」
「そうだな」
そう話していると、監督の「休憩終了です～撮影を再開します～」と言ってきたので、撮影がスタートした
「フハハハハハ！よく来たな、カイザーと仲間達！」
「お前がデルウイングか！」

「いかにも！我がデルウイングだ！、カイザー！我はここでやられる訳にはいかんのだ！勝負だ！」
「望むところだ！レキ！アカリ！加勢してくれ！」
「分かったわ！」
「俺もＯＫだぜ！」
「行くぜ！俺達の力、見せてやる！うおおおおお！」
「な、何、この力は！ば、馬鹿な・・・！我が何も出来ないだと！？」
「喰らえ！究極奥技！天空爆裂剣（カイザーブレードインフニティー）！」
「そんな馬鹿なぁぁぁ！」
「やったな、カイザー！」
「これで世界は、平和になったのね」
「ああ、俺たちが世界を救ったんだ！」
「カーット！はい、ＯＫです！これで後はナレーションの台詞どりだけなので、役者の皆さんは、帰っていいですよ、お疲れ様でした」
そう言われたので、俺は控え室に入り、私服に着替えて、母さんと合流して、家路につく事にしたのであった
家へ帰る途中
「真琴、どうだった？」
「どうだったって？」
「ドラマよ、無理矢理誘い込んで、悪かったわね？」
「ううん、結構楽しめたし、別に問題はないよ」
「そう？さすが自慢の息子ね～」
「母さん・・・ナチュラルに嘘つかないでよ、息子じゃないし・・・」
「冗談よ、さあ、亜季（あき）も待ってる事だし、帰りましょう」
「うん」
そう話しながら、家へと帰っていく
こうして、俺は、これで役者をする事はなくなったのであった・・・

～第三十五話～俺と母親とドラマ撮影その3～（後書き）

零堵です。この物語は、まだ、当分は続くと思います。

～第三十六話～俺とお祭り～（前書き）

はい、零堵です。
一日平均、５０人以上読まれてるので、うれしい限りです。

～第三十六話～俺とお祭り～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、行く所があった
その場所は、秋葉原にある、ラブ喫茶「アイライク」である
夏休みに入って、休みが多くなったけど、前から週一と決めていたので、今日がその日なので、行くのであった
電車に乗り、秋葉原に辿り着く
夏休みに入ってるせいか、人がかなり多く、おまけに夏というだけあって、結構暑い
皆の格好が、薄着や涼しそうな格好をしていたりする、まあ、俺も動きやすくて、涼しい格好をしているけど・・・
その秋葉原の街中を歩いて、目的地、ラブ喫茶「アイライク」へと、辿り着いた
中に入ると、もう既に何人かお客様がいて、ちょっと賑わっている
俺は、早速控え室に入り、用意された服に着替えて、ホールへと出るのであった
ホールに出ると、親友の栗谷美鈴（くりやみれい）が、話しかけてきた
「おっはよ～まこ」
「おはよう」
「まこ～？」
「何？」
「昨日ね？一緒に遊びに行こうとして、電話したんだけど、妹の亜季（あき）ちゃんが出て、「姉さんはいません」と言ってたけど、何所行ってたの？」
何所って、確か・・・昨日は、美鶴（みつる）母さんに連れられて、ドラマの撮影を手伝っていたけど・・・どうしよう？ここは正直に話すか？でも、やっぱり恥ずかしいから、ごまかす事にした
「ちょっと出かけててね、妹も電話があったよとか言わなかったし」
「そう、あ、そうだ知ってる？」

「知ってるって？」
「なんとね？来週あたりに、二時間スペシャルドラマ「天空カイザーＶＳデルウイング」が放送するんだ！まこは見るの？」
それって・・・俺が出演したドラマじゃないか・・・
うん、自分が出てるドラマ、見るか・・・いや、やっぱやめとこ
そう思って、こう答える
「いや、見ないよ」
「え～何で！？レキ役の人、まだ情報が未定なんだよ～？気にならない？」
気にならないも何も俺だしな・・・そのレキ役って
「い、いや、気にならないよ・・・」
「そう？じゃあ、そのドラマ見たら、まこに教えるね？」
何でだ？何故教える必要がある？
そう思ったが、言わない事にした
美鈴と話していると、店長の東雲紫（しののめゆかり）さんが、話しかけてきた
「二人とも、お客様がいるのだから、話はそこまでにしてね？」
「は～い、了解です」
「わかりました」
そう言って、仕事に入った
俺の主な仕事は、ウエイター？見たいな仕事で、お客の注文を聞いて、出来た品物をお客様に届けるという事をしていた
そして、数時間が過ぎて、休憩時間になり、控え室に入って、休んでいると
店長の紫さんがこう言ってきた
「まこさん、来週ね？ここの店舗じゃなくて、海の貸し店舗で営業する事にしたの」
「そうなんですか？」
「ええ、だからまこさんも一緒に来てくれない？」
俺は、どうしようか迷ったが、海に行くのもいいかな・・・と思ったので、了承する事にした

「はい、自分はＯｋです」
「よかった、じゃあ来週お願いね？」
そう言って、店長は控え室から出て行った
そして、休憩も終わり、仕事に移る
相変わらず、俺を呼ぶ客は、女性客ばかりだった、男性客は後輩の東雲玲（しののめあきら）がよく、呼ばれていたりする
俺は、出来るだけ笑顔でそれに、答えて接客をする
そして、時間が過ぎて、上がっていいわと言われたので、控え室に入り、着替えて、店の外に出ると
美鈴がいた
「まこ、お疲れ様」
「お疲れ様」
「今日さ？知ってるよね？」
「知ってるって何が？」
「何がって・・・山之辺祭りに決まってるじゃないさ？毎年やってるのに、忘れちゃったの？」
「あ、確かにそうだった」
「もう～、だからさ？お祭り、一緒に行かない？」
「でも、結構遅い時間になるんじゃない？」
「だったら、明日も行こうよ？二日間やってるしさ？今日は、見回り程度でさ？」
俺は、どうしようかと迷ったが、ＯＫする事にした
「そうだね、じゃあ行こうか」
「うん、行こう行こう」
こうして、俺と美鈴は、山之辺祭りに行く事に、したのであった・・
・

～第三十六話～俺とお祭り～（後書き）

零堵です。
アクセス数も一万5千越えしましたし、近いうちに2万いきますね、
この調子だと

～第三十七話～俺とお祭りその2～（前書き）

アクセス数がもうすぐ二万いきそうです。
ありがとうございます。

～第三十七話～俺とお祭りその2～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、親友の栗谷美鈴（くりやみれい）と、一緒にお祭り、山野辺祭りに行く事になった
まあ、行くと行っても、バイトが終わってから、行く事になったので、もうすっかり、夜になっていた
バイト先の秋葉原から、山野辺市に向かう
山野辺市に辿り着き、山野辺祭りが行われている会場に向かう
数分後、その祭り会場に辿り着いた
「まこ～、結構賑わってるねえ」
「そうだね」
「屋台もいっぱい出てるし、うん、お腹すいてきたし、なんか食べよっか？」
「そうだね」
俺達は、屋台が出ているので、何か買う事にした
人が多いので、人を掻き分けて進んでいくと、色々な屋台が出ている
「まこ～何がおいしそうかな？」
「そうだなあ・・・」
俺は、色々な出店を見てみる、確かに、色々あった
たこ焼きにお好み焼きにチョコバナナにカキ氷にりんご飴に焼きそばとりあえず・・・たこ焼きを買う事に決めた
「たこ焼きにしない？」
「Ｏｋ～じゃあ、買おう？」
「うん」
俺と美鈴は、そう言って、たこ焼きの屋台の前に出る
そして、注文をして八個入りの大入りたこ焼きを二つ購入した
たこ焼き屋のおっちゃんが「可愛い子だね～、よっしゃ、サービスじゃ～」とか言って、いっこおまけをくれた
いいのか？そんな事して・・・？

まあ、くれると言うからには、貰っといたほうがいいだろうと思い、
とりあえず何も言わないでおくことにした
「じゃあ、何処か休める場所で、食べようか？」
「そうだね」
そう言って、休める場所を探す、人が多いので、なかなか見つから
なかったが
丁度ベンチが空いているのを見つけて、そこに座った
「ふ～、ほんと、人多いねえ～」
「確かに、まあ、お祭りだしね」
「まあ、そうなんだけど・・・、皆、考える事は一緒って事よね～」
「そう言う事」
「じゃ、さっき購入したたこ焼きでも食べよ？」
「うん」
俺と美鈴は、そう言ってたこ焼きを食べる
うん、なかなかイケル、屋台も捨てたもんじゃないな・・・と思っ
ていた
たこ焼きを食べ終わった後、どの屋台が出ているかを見ながら、歩く
すると、放送で「もう遅い時間なので、これにて今日の祭りは終了
します、明日もやるので、是非来て下さい」と聞こえてきた
「あ、終わりみたいだね？じゃあ、帰ろうか？」
「そうだね、あ、明日はどうするの？」
「私が、まこの家に行くよ～」
「了解、じゃあ待ってる」
「うん、じゃあ、帰ろう？」
そう言って、俺と美鈴は家へと帰る
俺が家に帰ると、妹の亜季（あき）が、こう言って来た
「お姉ちゃん、お帰りなさい、遅かったけど、どこ行ってたの？」
・・・何かちょっと、怒ってる風に見えるのは、気のせいか？
「何所って、バイトが終わって、今日、祭りだったから、そっちに
行ってたの」

「そうなんだ・・・何で私に連絡くれないの!?、私、お姉ちゃんと行きたかったのに・・・」
「う・・・い、いや、忘れてて」
「もう!お姉ちゃん、明日は、私と一緒に行こ!」
俺は、どうしようかと考えたが、美鈴も来るので、その事を言う事にした
「明日、美鈴も来るけど、一緒でいいかな?」
「・・・・・・・・・お姉ちゃんがそう言うなら、分かりました、本当は二人っきりで行きたかったけど・・・・我慢します」
えらい沈黙が長かったけど、どうやら、了承してくれたみたいでとりあえず安心した
「じゃあ、決まりね?もう遅いし、今日は寝るよ、お休み」
「お姉ちゃん・・・お休みなさい」
そう言って、俺は眠りにつく事にするのであった・・・

～第三十七話～俺とお祭りその2～（後書き）

零堵です。この物語も四十話いきますね。まあ、目標は百話以上ですから、当分は終わりはないかと思います。

～第三十八話～俺とお祭りその3～（前書き）

アクセス数が、1万8千こえました、そろそろ二万いきますね～
ありがとうございます～

～第三十八話～俺とお祭りその3～

お祭りに行って、次の日、俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、今日もお祭りに行く事になった
俺が行くお祭りというのは、山之辺祭りと呼ばれていて、地域としては、結構大きなお祭りでもある
そんな、山之辺祭りに行く事になり、昨日は、親友の栗谷美鈴（くりやみれい）と行って、今日も、美鈴と、あと妹の亜季（あき）と、行く事になったのである
昨日、バイトして疲れたせいか、起きたら、時刻はもう、昼を過ぎていた
普通なら、俺は高校生なので、学校に行くのだが、今、現在、夏休み真っ最中なので、学校に行く事はなく、昼過ぎまで、寝ていても大丈夫なのである
俺は、起きて、リビングに向かうと
「あ、まこ、おっはよ～」
もうすでに、美鈴がいた
「美鈴・・・来てたんだ」
「昨日行ったじゃない？まこの家に行くよ？って、で、来て見たら、まこ、寝てるんだもん、よっぽど疲れてたの？」
「いや、そう言う訳ではないとおもうんだけど・・・」
「そう？でね？中に入ろうとしたら、亜季ちゃんが物凄い顔で睨んできてさ？ちょっと、びっくりしたよ、まあ、美鶴さんが、入れてくれたけどね」
そんな事があったのか・・・
「あれ？そういえば、母さんと亜季は？」
「美鶴さんが、亜季ちゃんを部屋に連れてって、それっきりだよ」
「ふ～ん」
そう、話していると、リビングに亜季がやって来た
「お姉ちゃん、どう？」

やって来た亜季の服装は、水色の浴衣を着ていた
普段、見慣れない浴衣姿なので、ちょっと驚いてしまった
「亜季、浴衣に着替えたんだ？」
「うん、お母さんが着せてくれたの、似合う？」
「うん、似合うよ、カワイイ」
「ありがとう、お姉ちゃん！」
「まこ～、私も浴衣姿なんだけど・・・？私には言ってくれないの～？」
確かに、美鈴も、浴衣姿だった
美鈴の浴衣は、緑色に向日葵のイラストが描かれている
「あ、うん、美鈴も似合ってるよ」
「なんか言い方が適当だよう～、まあ、いいけど・・・」
そう話していると、母さんがやって来た
「どう？亜季、似合うでしょ？真琴も浴衣、着る？」
母さんが、そう言って来たので、俺は、どうしようかと迷ったが
断る事にした
「いや、この格好で行くよ、浴衣とかいいよ」
「そう？真琴も似合うと思ったけど、まあ、強制はしないわ、じゃあ、私は、仕事があるから、行くけど、お祭りに行くんだったら、何か、お土産買っといてね？それじゃあ」
そう言って、母さんは、家を出て行く
「ねえ、まこ？」
「何？美鈴」
「美鶴さんの仕事って何？」
「母さんの仕事？女優だよ」
「え！？嘘！？」
「嘘ついてどうするのさ？」
「じゃ、じゃあ・・・何のドラマとか、出てるの？」
「確か・・・天空カイザーのドラマに出てたかな」
まあ、俺もそのドラマ、役者として出たけど、俺の事は、言わない

でおこう・・・
「え、本当!?どんな役なの!?」
なんか、物凄い驚いてるな・・・美鈴
「確か、冷笑のミレイユとかいう役だったかな」
「そうなんだ!へえ～あの、美鶴さんがね～、私、放送されたら、絶対に見よっと!」
ふむ・・・と言う事は、俺が出てるのも、バレルのかもな・・・
まあ、後で何を言われるか・・・、今は考えないでおこうっと
そう、話していると
「お姉ちゃん、そろそろお祭りに行こう?」
妹の亜季が、そう言って来たので
「あ、そうだね、じゃあ行こうか、美鈴、行くよ」
「りょ～かい、お祭りにレッツゴ～」
こうして、俺は、美鈴と亜季を連れて、お祭りに向かう事にしたのであった・・・

～第三十八話～俺とお祭りその3～（後書き）

零堵です。うん、この物語も四十話いきます
あと、もうすぐ連載初めて、一ヶ月になります～

～第三十九話～俺とお祭りその４～（前書き）

もうすぐ、二万いきますね、明後日で、連載初めて、一か月です

～第三十九話～俺とお祭りその４～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、妹の亜季（あき）と、親友の栗谷美鈴（くりやみれい）の三人で、山野辺祭りに、行く事にした
俺の家から、数分歩いて、山野辺祭りが行われている会場に、辿り着く
祭りと言うだけあって、人が多くいた
「さっすが、お祭り、人多いねえ～」
「確かに、そうだね」
「お姉ちゃん、なんか食べよ？」
「うん、分かった、何、食べようか？亜季」
「え～っと・・・お好み焼きかな」
「りょ～かい、じゃあ、屋台探すかな」
そう言って、お好み焼きの屋台を探す
数分歩いたら、お好み焼きの屋台を見つけた
「あ、見つけた」
「うん、いい匂い～」
「じゃあ、早速買おう？お姉ちゃん」
「そうだね」
俺は、屋台のおじさんに「お好み焼き下さい」と言う
おじさんは、「よっしゃ、毎度あり～」と言って、お好み焼きを焼いて、俺たちに渡した
「お～美味しそう、どっか座れる場所で食べよっか？」
「じゃあ、あいてる場所、探そう」
「お姉ちゃん、あそこ、あいてない？」
そう、亜季が言うと、確かに、ベンチがあいているのを見つけたので、そこに座る事にした
お好み焼きを、食べていると、俺たちに声をかけて来る者がいた
「あれ？まこと」

「あ、翔？」
「おう、まさかこんな所で会えるなんてな？」
そう言ってきたのは、二時間ドラマ、カイザーＶＳデルウイングで、一緒に共演した、カイザー役の暮見翔（くれみかける）だった
「それにしても・・・まこと、モテモテだな？」
「は？」
「だって、女子二人と一緒にいるだろ？」
確かに、俺は、女子二人と一緒にいるけど・・・
片方は妹だし、もう片方は、親友だしな・・・
「二人って・・・妹と親友なんだけど？」
「そうなのか？」
「うん」
「お姉ちゃん？この人、誰？」
そう、亜季が言うと
「お姉ちゃん？・・・まこと・・・お前・・・」
そう言えば、翔に俺が女だって事、言ってなかったな
「まこ～？一体、何所で知り合ったの？」
何所でって言われてもな？ドラマで一緒に共演したから、知り合ったし
「何所でって、まあ、美鶴母さんの仕事場で知り合ったって、感じかな」
「そうなんだ」
「え～っと・・・お姉ちゃんということは・・・まこと・・・お前、女だったのか・・・？」
「女だったのかって・・・まあ言わなかったしね」
「そ、そうか・・・じゃ、じゃあ俺、行くな・・・」
そう言って、翔は、人ごみの中に入って行った
なんか、えらく驚いてるな？そんなにびっくりする事か？と、思っていた
「お姉ちゃん、そろそろ行こう？」

亜季が、そう言ってきたので、俺達は移動する事にした
色々見て回って、時間が過ぎて、夜になり、さらに人が多くなった
神輿が出てるみたいなので、それを見物する事にした
「凄い賑わってるね～」
「確かに、そう思う」
「ちょっとうるさい・・・」
「まあ、お祭りというのは、そういうものだと、思うよ？」
神輿も見終わって、母さん用のお土産を買って、かき氷を買って、
食べていると
放送で「ただいまを持ちまして、時間なので、山野辺祭りを、終了
したいと思います、来年も、よろしくお願いします」と、聞こえて
きたので、俺たちは、帰る事にした
帰る途中
「楽しかったね～、まこ」
「まあ、そうかも」
「私・・・お姉ちゃんと、二人っきりで行きたかった・・・はっき
り言って、邪魔」
「亜季ちゃん、何か言った？」
「いいえ、何でもないです」
・・・何て、言えばいいんだ・・・？
「じゃあ、私、こっちだからまたね？じゃね～」
そう言って、美鈴は、離れて行った
「お姉ちゃん、今度は、二人っきりで行こう？」
「・・・なるべく、考えとくよ」
俺と亜季は、そう言って、家へと帰って行ったのであった

～第三十九話～俺とお祭りその４～（後書き）

零堵です。お気に入りも増えて、評価もあがって、嬉しい限りです

～第四十話～俺と海の家～（前書き）

はい、零堵です。明日で、丁度連載初めて、一カ月ですアクセスも１万９千いきました

～第四十話～俺と海の家～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、ある場所に来ていた
その場所というのは・・・
「海だ～！」
そう、俺は、海に来ているのである
何故、海に来ているのかというと、俺の働いている、バイト先の店長、東雲紫（しののめゆかり）さんが、「海で、営業する事になったから、来ない？」と、言ってきたので、それをＯｋして、俺は、海に来ているのである
ちなみに、あと誰がいるのかと言うと、店長の紫さん、その弟の玲（あきら）、同じ職場で働いている、桐谷佐奈（きりやさな）さん、あと親友の栗谷美鈴（くりやみれい）で、来ているのであった
海の近くの、貸店舗に入り、看板に「ラブ喫茶アイライク、～海岸店～」と、書き込んであった
そこで、俺達は、用意された衣装に着替える
佐奈さんは、青色をイメージにしたメイド服、玲は、緑色をイメージにしたメイド服、美鈴は、赤色をイメージにしたメイド服を着ていた
俺もメイド服を着る事になるのか？とか思っていて、用意された服をみると
俺のだけ、Ｔシャツだった、柄に「アイライク」と、描かれているうん、メイド服を着ないだけ、マシかな・・・と、思っていた
着替えが終わって、外に出てみると、店長の紫さんが、こう言った
「皆さん、よく似合ってますよ」
「あの、自分のだけ、違うんですけど・・・」
「あら、まこさんも、メイド服の方がよかった？」
「い、いえ、これでいいです」
「なら、ＯＫね？さあ、着替えた事だし、お客様を入れて、開店しましょうか、皆さん、今日も、頑張りましょうね」

「了解～」
「分かりました」
そう言って、お店を開店させた
最初は、全くと言っていいほど、人が入ってなかったが、一人、また一人と入ってきて、すぐに大繁盛した
主に男性の客が多く、俺以外、メイド服っぽい衣装を着ているので、お客から「萌え～」とか、聞こえてきた
うん・・・大丈夫か？こいつら・・・と、思ってしまった
そして、時間が過ぎて、休憩時間になり、控室で休んでいると
「まこ～」
美鈴も、休みになったのか、俺に話しかけてきた
「何？」
「見たよ！」
「何が？」
「二時間ドラマ、天空カイザー、カイザーＶＳデルウイングだよ、まさか、まこが出演してるなんて、どうして、言ってくれなかったの！？」
「いや・・・言う必要あるかな？ってね・・・」
「まこ、物凄いかっこ良かったよ・・・」
そう、赤らめて言ってきた、うん・・・なんか、照れるな・・・
「ところで、また、なんかドラマとか出るの？」
「いや、それは無いんじゃないかな・・・、たまたまやってって、言われて、やっただけだし」
「そうなんだ・・・まあ、もし他のに出てたら、私、絶対に見るからね？」
何で、見る必要が？と、思っていた
そう、言っていると、休憩時間が終わったので、仕事に戻った
店内は、いつの間にか男性客から、女性客の方が、多くいた
そして、俺の姿を見つけて、こう叫びだす
「あ、あの！」

「は、はい？」
「まことさんですよね？天空カイザーのレキやってた」
「は・・・はあ、まあ、一応・・・」
そう言うと、周りからキャー！とか、悲鳴じみた歓声が聞こえてきた
「私、ドラマを見て、ファンになりました！握手して下さい！」
「ま、まあ、そのぐらいなら・・・」
そう言って、俺はお客に握手する
他の客も「写真撮っていいですか？」とか「私の事好きって言って下さい！」とか、言っていた
うん・・・なんか、怖いぞ・・・
そんな感じな事があって、時間が過ぎて、閉店時間になり
店長の紫さんが、こう言った
「皆さん、お疲れ様、もうこんな時間だけど、これから戻るのもなんだし、泊って行きましょう？皆さんは、それでよろしいですか？」
「私は、ＯＫです」
「私もＯｋだよ～、わ～い、御泊り～」
「自分は・・・ま、いいかな、あとで家族に連絡すればいいし」
「じゃあ、決まりですね」
こうして、俺達は、海の貸店舗に、泊る事になったのであった・・・

～第四十話～俺と海の家～（後書き）

零堵です。アクセス数がもうすぐ2万いきます、うれしい限りです。

～第四十一話～俺と海の家その2～（前書き）

連載初めて、今日で一カ月ですｗ
それと、アクセス数が二万こえましたｗ
ありがとうございます。

～第四十一話～俺と海の家その2～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、海に来ていた
海の近くに建てられている、貸店舗に、泊まる事になり、そこで一泊過ごして、次の日
俺は、朝早くに目が覚めたので、海に行って見る事にした

朝、早いせいか、人が全くいなく、海から来る風が、結構気持ちよくて、う～んと伸びをしていると
「まこさん、朝、早いですね」
そう話しかけて来る者がいた
俺に話しかけてきたのは、俺の働いている店の店長、東雲紫（しののめゆかり）さんだった
「あ、店長」
「紫さんって、呼んでくれないかしら？」
「あ、分かりました、紫さんも、朝、早いですね？」
「ええ、何故か知らないけど、ぐっすり眠れたからね、あ、ちなみに玲（あきら）は、まだ寝ているわ」
玲と言うのは、紫さんの弟である
「そうですか」
「それにしても・・・やっぱり、まこさんもメイド服着て、接客する？」
そう言ってきたので、俺はと言うと
「いえ、結構です、似合いませんし」
「そう？貴方に合わせて、黒色のメイド服、用意したんだけど、まあ、貴方がそう言うなら、強制はしないわよ？」
「そうしてくれると、助かります」
「そう？そうだわ、今日は、午前中だけ営業して、午後は皆で遊びましょうか？」

「それ、いいですね、自分は賛成です」
「じゃあ、決まりね、そろそろ戻りましょう」
「あ、はい」
そう言って、俺と紫さんは、貸し店舗へと戻って行った
そして時間が過ぎて、営業時間になり、俺達は、用意された制服に着替えて、ホールに出る
ホールに出ると、事務服を着た紫さんが、こう言う
「今日は、午前中だけの営業にしますね?午後は、自由時間とします、では、皆さん、今日も、頑張りましょう〜」
「りょ〜かい」
「分かりました」
こうして、お店がスタートした
季節が夏だと言うだけあって、お客も水着を着た客がやって来ていた
俺達は、注文を聞いて、品物をお客様に、出す作業をしていた
そして、時間が過ぎて、午後になり、お店を閉めて、自由時間になったので、服を着替える事にした
「じゃ〜ん、見て?まこ〜似合う〜?」
そう言ってきたのは、俺の親友の栗谷美鈴(くりやみれい)で、青色の水着を着ていて、俺に見せてきた
「似合うんじゃない?」
「そう?ありがと〜、これ新しく買ったんだ、まこに見せようと思ってね〜」
何故、俺に見せようと?
そう思っていると
「あ、あの、私も似合いますか?」
そう言ってきたのは、バイト仲間である、桐谷佐奈(きりやさな)さんだった
佐奈さんは、赤色の色っぽい水着を着ている
「それ、ちょっと大胆かと?」
「佐奈?ナンパとかするから、そういう水着選んだの?」
「い、いえ!違います、母さんが、勝手にこの水着を荷物に紛れ込

ませてたので・・・」
「そうなんだ」
「はい・・・ちょっと、恥ずかしいです・・・」
「でも、似合ってるよ～、私ももうちょっと胸あったら・・・似合いそうかな?まこも、そう思わない?」
何故、俺にふる?
「いや、俺が言うことじゃ、ないかと・・・」
「そう?」
「そうだよ」
「ところで、まこさんは、着替えないんですか?」
そう、佐奈さんが聞いてきたので
「いや、俺はいいよ、泳ごうと思ってないし」
「え～、まこの水着姿、見たかったのに～」
「美鈴、そう言うな」
「はあ、そうですが・・・ちょっと残念です」
そう話していると、紫さんがやってきた
「皆、着替えた?じゃあ、遊びに行きましょう」
「わ～い、泳ぐぞ～!」
「わかりました」
こうして、俺達は海へと、遊びに行ったのであった
何故か玲の姿が、見えなかったが気にしないで、おくことにした
まあ、男だし、女子の着替えの中には、入れないな・・・と、思っていたのである・・・

～第四十一話～俺と海の家その2～（後書き）

これからも、この物語を、よろしくお願いしますw

～第四十二話～俺と海の家その3～（前書き）

はい、続きの話です。
アクセス数が、二万千越えました。
ありがとうございます～

～第四十二話～俺と海の家その3～

俺こと、南山真琴（みなみやままことは、海に来ている
まあ、何故、海に来ているのかと言うと、店長の東雲紫（しののめゆかり）さんが、「
海の貸し店舗で、営業します」と、言ったからだ
こうして、俺は、海の近くの貸し店舗で、働く事になり、二日目
午前中だけ、働いて、午後は、皆で遊ぶ事になったのであった
「海風が気持ちいい～」
そう言ったのは、俺の親友の栗谷美鈴（くりやみれい）だった
夏というだけあって、皆、海水浴や日焼けをしていたりしている
俺の姿はというと、水着ではなく、普通のTシャツを着ていた
他の皆は、水着を着ていたりする
「ねえ?まこは、やっぱり泳がないの?」
「うん、泳がないよ」
「何で?気持ちよいと思うんだけどな～?」
そうか?まあ、確かに、こんな暑い日差しなので、泳ぐと気持ちい
いかもしれないな?
でも、俺は、泳ぐ事はしない事にした
「自分はいいよ、美鈴は、泳いできたら?」
「うん、そうする～」
そう言って、美鈴は、海へと入っていく
そんな美鈴を見ていると、俺に話しかけて来る者がいた
「まこ先輩、こんにちは」
そう言ったのは、紫さんの弟の玲（あきら）であった
玲も、俺と同じくTシャツを着ていたりする
「玲は、水着着ないの?」
「僕が着れるわけ無いじゃないですか・・・まあ、姉さんが水着を
僕に渡しましたよ?でも・・・
あきらかに女物の水着だったんですよ・・・しかも「大丈夫、貴方

なら似合うわ！」とか言ってくるし・・・」
「そ、そう」
うん、イロイロ大変なんだな・・・なんか、ちょっと同情してしまった
「で、さっきから男からしつこく話しかけて来るんですよ・・・なんでなんだろ・・・」
ちなみに、今の玲の格好は、Tシャツにウイッグをつけているので、全く男に見えない
と言うか、かなりの美少女？にみえたりしている
なんか・・・分かるような気がするな・・・、男どもの動機が不純だとは思うけど
「じゃあ、そのウイッグ取ったら？」
「姉さんが、「それ取ったら、罰ゲームよ？」と言ってきたので、取れないんですよ・・・」
「そうなんだ・・・」
うん、完全に遊ばれてる感じがするな・・・
そう話していると、俺達に声をかけて来る者がいた
「お～可愛いね？俺と、一緒に遊ばないかい？」
いかにもチャラ男？みたいな、感じのヤツが俺達に話しかける
それにしても・・・どっちに向かって言ってるんだ？こいつは？
「え～っと・・・僕に言ってるの？」
「おお、ボクっ娘か！萌えるね～！こんな奴ほっといて、行こうぜ？」
どうやら、玲に話しかけてるみたいだった、おい・・・俺の事を、こんな奴呼ばわりか？
玲は、それを聞いて、こう言った
「僕、連れがいるので、お断りします」
「そんな事言うなよ？ほら、行こうぜ？」
そう言って、玲の手を取ろうとする
玲は、それを素早くかわして、俺の後ろに隠れるように、男から離

れた
これって、普通、逆じゃないか？
「あん？お前、こいつの何なんだ？彼氏？」
「・・・・とりあえず、ボコる！」
俺は、チャラ男に向かって、鉄拳制裁を食らわす
あきらかに馬鹿にした態度だったので、むかついたからだった
男は、俺の攻撃をまともに食らって、伸びてしまった
「あ、ありがとうございます、まこ先輩」
「まこ～かっこいい！」
「なんか哀れですね、でも、まこさん、よくやりました」
いつの間にか、美鈴と紫さんがいた
「い、いや、こいつがむかついたから」
「そうですね、こんな奴、そのままにしましょう」
「賛成～」
そう言って、伸びている男を、ほっとく事にした
そして、時間が過ぎて、山野辺市に帰る事にした
家へ帰ると、妹の亜季（あき）が、何故か怒っていた
「お姉ちゃん！」
「な、何？」
「どうして、勝手に泊まったの！？私も連れてって欲しかったよ！？」
「ご、ごめん」
「今度は、私をおいてけぼりにしないでね？」
「分かったよ、亜季」
こうして、俺の海の出来事は、終わりを迎えたのであった・・・

～第四十二話～俺と海の家その3～（後書き）

零堵です。そろそろ、夏休み編も終わりって、感じですかね？

～第四十三話～俺と天体観測～（前書き）

はい、零堵です。
この物語も、五十話行きそうな、勢いって感じですね

～第四十三話～俺と天体観測～

俺こと、南山真琴（みなみやままことは、家で出された宿題をしていた
夏休みも、後半に入ったので、そろそろやっとかないと・・・と、思ったからである
朝から、ず～っと宿題と格闘していると、妹の亜季（あき）が、話しかけてきた
「お姉ちゃん」
「何？亜季」
「今日ね、ニュースでやってたけど、流星群が見られるんだって」
「流星群？」
「うん、流れ星の大群が見れるって言ってたよ？」
流れ星の大群か・・・それは、凄そうだな・・・
「だから、お姉ちゃん？今日、一緒に見に行こうよ？」
亜季がそう言って来たので、俺は、どうしようか迷ったが、断るのもなんだし
Ｏｋする事にした
「判ったよ、所で何所に見に行くの？」
「よく見えそうなのは、大和山（やまとやま）かな？そこの頂上だと、よく見えると思うよ？」
大和山か・・・、大和山といえば、家からだと、歩いて一時間ぐらいで、たどり着く場所だったな・・・確か
「じゃあ、そこにする？」
「うん、私、お弁当とか作って、用意するね？お姉ちゃんは？」
「自分は、宿題があるから、それを終わらせたら、準備するよ」
「判った、じゃあ、早速お弁当の準備してくるね？」
そう言って、亜季は、笑顔で、俺から離れて行った
うん、本当に嬉しそうだな・・・って、思った

とりあえず、俺は、宿題を終わらす作業に戻る
ず～っと、書いてるせいか、指とか肩とか痛くなってはいたが、何
とか全ての宿題を終わらせる事に、成功した
宿題が終わったので、俺は、出かける準備をする
星を見るという事は、必要なのは、よく見えるように、双眼鏡とか
かな？とか、思っていた
そして時間が過ぎて、夕方
手持ちのバックに必要な物を入れて、準備万端だった
亜季も、準備が出来たらしく、こう言って来る
「お姉ちゃん、準備できたよ」
「こっちも、準備できたよ、ところで、流星群って、何時ぐらいに
見えるの？」
「ニュースで言ってたのは、夜の８時ぐらいから、見えるって言っ
てたよ？」
「そうなの、じゃあ、今から行けば、間に合うね？」
「うん、十分間に合うよ？」
「ところで、母さんは？仕事？朝から、見かけなかったけど」
「お母さんは、ドラマの撮影が入って、朝早くから出かけて行った
よ？お姉ちゃん、寝ていたから、知らなかったんでしょ？」
「まあね・・・」
「たまには、休みでも早起きした方がいいと思うよ？」
「まあ・・・努力はしてみるよ、じゃあ、準備できたし、早速行こ
うか？」
「うん！」
こうして、俺と亜季は、大和山に向かう事にしたのであった
大和山は、そんなに高い山ではなく、登山客にも人気があり、頂上
は、空気が美味しく、自然豊かな光景が広がっている場所でもあった
俺と亜季は、家から一時間歩いて、その大和山を目指す
山の天気は変わりやすいと言えば、そうなのだが、この日は、そん
な心配はなく、快晴だったので、スムーズに行けたのであった

そして、一時間歩いて、無事に大和山に到着した
辺りを見渡してみると、すでに何人かは集まっていて、望遠鏡やら、機材をセッティングしたり、食事しながら語り合っている者もいた
「お姉ちゃん、なんかお腹すいたから、もう食べよう?」
「そうだね?歩いて、ちょっと疲れたし、食べよっか?」
「うん」
そう言って、レジャーシートを地面に敷いて、亜季は、お弁当箱を取り出す
中身は、カレーが入っていた
何故?カレー?と思ったが、せっかく亜季が作ったんだし、文句を言わないで、それを食べる
「美味い!、亜季、美味しいよ?」
「よかった、結構時間かけて作ったんだ、よろこんで貰えて嬉しい!」
そう話しながら、カレーを食べる
全部食べ終わって、しばらく休憩していると、八時になったので、周りが騒ぎ出した
「お姉ちゃん、もうすぐ来るよ!」
「そうみたいだね」
そう言って、俺と亜季は、夜空を見上げる
双眼鏡とかを使い、じ〜っと、見ていると
数分後、星の流星がいっせいに動いて、幻想的な夜空を映し出していた
「凄い綺麗〜!」
「ほんとだ!」
そんな光景が、数分間続いて、唐突に終わりをむかえたのであった
流星が終わってから、亜季が、俺に、こう言って来た
「お姉ちゃん、何かお願い事した?」
「いや、してないよ?亜季は?」
「私はね・・・お姉ちゃんとず〜っと、一緒にいられますようにっ

て、願ったよ？」
それは・・・よろこんでいいのか、微妙なんだが・・・
「そ、そう・・・じゃあ、星も見たし、遅くなるとまずいし、帰ろうか？」
「うん、お姉ちゃん」
そう言って、俺と亜季は、大和山を下山する事にした
家に帰ると、美鶴(みつる)母さんが
「今日は流星群が見れる日だったわね？家にいなくて、何所に行ったか？と思ったけど、星を見に行ってたのね？私も行きたかったわ～・・・」
とか、愚痴を零していたのであった・・・

～第四十三話～俺と天体観測～（後書き）

零堵です。もうそろそろ、夏休み編も、終わりかな？って感じです。

～第四十四話～俺とある夏の一日～（前書き）

零堵です。
アクセス数も二万二千以上、超えましたｗ
ありがとうございます

～第四十四話～俺とある夏の一日～

夏休みも、おわりに近づき、俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、家で、のほほんと過ごしていた
まあ、夏休みの宿題も全て終わったし、何所も行く予定も無いし、朝から、美鶴（みつる）母さんも、妹の亜季（あき）もいないので、一人でいるのである
さて・・・何をしようかな？と思い、とりあえずテレビをつけてみると、いきなり、母さんが現れて、驚いたのであった
「オホホホ！勝負よ！、カイザー！」
どうやら、天空カイザーＶＳデルウイングの、再放送をやっているみたいである
ちなみに、母さんの役は、冷笑のミレイユと言う役で、実は、このドラマに、レキとして、俺も参加しているのであった
何か・・・見るのも恥ずかしいので、テレビを消す
次にどうしようかな？と思って、とりあえず、ぶらぶらと出かける事にしたのであった
家の鍵を閉めて、外に出る
外は、快晴でかなり暑いと言うか、暑かった
汗がかなり出るので、自販機で飲み物を買って、飲み歩く
しばらく歩いていると、山之辺商店街に、辿り着いていた
山之辺商店街と言うだけあって、かなり賑わっていて、人も多くいたそんな人ごみの中を歩いていると
「あ、まこ、お久しぶりです」
そう話しかけてきたのは、俺のクラスメイトで、俺に手紙を送った人物
汐崎（しおざき）美咲（みさき）だった
「お、お久しぶり」
「この夏休みの間、会えて嬉しいです・・・」
そう赤らめて言う、何故、彼女がそうなっているのかと言うと、俺

の事が好きだからである
俺は、ちょっと困っていた
「そ、そう・・・」
「ところで、まこは一体何をしてなんですか？」
「ただ、適当に歩いてるだけだよ、目的とかはないかな」
「そうなんですか・・・私も、一緒に行きたい所だけど、行く所があるので、残念です・・・それじゃあ」
そう言って、美咲は、俺から離れて行く
用事って何だ？と、思ったが、深く追求しない事にした
しばらく歩いて、とりあえず、涼みに建物の中に入る
建物の中に入ると、その中にゲームセンターが、あったので、そこに入る事にした
店内は、色々なゲーム機が置いてあって、クーラーが効いていて、かなり涼しく、感じられた
その店内を移動していると、格闘ゲームに熱中している、俺の親友の栗谷美鈴（くりやみれい）とその反対側で、対戦相手をしている、ラブ喫茶アイライクの店長、東雲紫（しののめゆかり）さんがいた
「美鈴、やるわね？」
「紫も、なかなかだよ？でも、私のウルトラコンボには敵わないんじゃない？」
「っふ、そういうなら、私のトリックコンボを食らわせてあげるわ」
「お～言うね？じゃあ、戦闘開始だよ！」
「望む所よ！」
うん、盛り上がってるな・・・ここは、邪魔しないで、退散しとくか・・・
そう思い、声をかけずに移動しようとすると
「あれ？まこ先輩？」
そう、話しかけてきたのは、紫さんの弟の東雲玲（しののめあきら）だった、今日は、ウイッグをつけていなく、普通に男の子に見える
「玲？」

「はい、そうですよ？って何で疑問系なんです？」
「いや・・・ウィッグつけてないから」
「僕、そんなに、付けてませんよ・・・あれは、仕事の時だけです って・・・」
「そうなんだ、あ、じゃあ今日は、遊びに来てるの？」
「はい、今日はアイライクの店舗改装日なので、姉さんと美鈴先輩と、遊びに来てるんです、姉さんと美鈴先輩に会いませんでしたか？」
「さっき会ったよ、対戦ゲームやってたけど・・・」
「そうですか、じゃあまこ先輩も一緒に遊びません？姉さん達、呼んできますけど？」
俺は、どうしようか迷ったが、まあ暇なので
「分かった、遊ぶ事にするよ」
そう言っていた
「分かりました、じゃあ行きましょう」
そう言って、二人で美鈴達が、対戦している台へと行く
台に行くと
「私の勝ちね？美鈴～」
「く、くやしい！」
どうやら決着が、ついたみたいである
「姉さん、まこ先輩が、いましたよ」
「あ、まこさん、いたんだ？」
「まこ～、一緒にあ～そ～ぼ～」
何で美鈴は、子供が言いそうな事を言っているんだ？
「二人とも仲がいいね？」
「まあね、何か紫と話が合うし？」
「私も、そうね、美鈴と話、合いますし」
二人で、ね～とか言っている
うん、とりあえず・・・話が合うって何だ？
気にはなったが、気にしないでおく事にした

こうして、四人で遊ぶ事にしたのであった
最初にやったのは、四人で遊べるレースゲームで、写真を撮って、
それをプレイヤーの顔に出来ると言う代物で、各自写真を撮って、
レースゲームをやった
結果は、美鈴が一位で、紫さんが2位、俺が三位で、玲がビリだった
そんな感じで、遊んでいると、暗くなったので、皆と別れて、俺は、
家に帰る事にした
家に帰ると、亜季が既に帰っていて、食事の用意をしていた
俺も、少しは手伝おうと思い、亜季に「手伝おうか?」と言うと
「お姉ちゃんはじっとしてて?私が、お姉ちゃんのを作りたいから」
そう言ったので、お皿の用意だけをする事にしたのだった
食事が出来て、美鶴母さんも帰ってきて、三人で食事をする
いつもは、妹の二人だけの食事だったので、今日はなんか新鮮な感
じがした
食事が終わり、風呂に入って、自分の部屋に戻り、寝る準備をして
いると
亜季がやって来て「一緒に寝ていい?」と言って来た
俺は、別に断る理由もないので
「いいよ」
と言って、亜季を部屋に入れる
何故か母さんも「ずるい~私も真琴と一緒に寝るわ~」とか言って
きたので
結局三人で、寝る事になったのであった
こうして、俺の夏のある一日が、終わりを迎えたのである・・・

～第四十四話～俺とある夏の一日～（後書き）

そろそろ夏休み編、終わりって感じですかね？

～第四十五話～俺とコミックマーケット～（前書き）

はい、零堵です。この物語も、四十五話目突入です。

～第四十五話～俺とコミックマーケット～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、親友の栗谷美鈴（くりやみれい）と、一緒に、とある場所に来ていた
その場所とは・・・
「まこ～、到着したね～、ビックドームに～」
そう、俺と美鈴は、ビックドームと呼ばれている、建物に来ているのであった
何故、このビックドームに来ているのかと言うと、事の始まりは、こうである・・・
俺は、朝起きて、いつものように朝食を取っていると、電話が鳴ったので、それに出る
「はい、南山です」
「あ、まこ？私だよ？」
「は？私？そんな人は知りませんが？」
「って、まこ・・・ちょっと、酷くない～？美鈴だよ？」
「冗談だ、と言うか何？こんな朝から電話してきて？」
「うん、それなんだけどね？まこ？今日暇？」
美鈴がそう言ってきたので、俺は、とりあえずこう言った
「まあ、暇だよ、用事とか、全くないし」
「良かった、じゃあ、今すぐ駅前に来れない？」
「駅前って、山之辺駅？」
「そそ、じゃあ、待ってるね？」
そう言って、電話が切れる
俺は、一体何なんだ・・・？と、思い、とりあえず出かける準備をして、家を出たのであった
数十分歩いて、山之辺駅に着くと、美鈴が、既にいて、大きなボストンバックを持っていた
「まこ～、待ってたよ」

「一体呼び出して、何なの？」
「これからさ？ビックドーム行かない？」
「ビックドームって、あの大型総合施設だよね？何で、そこに？」
「実はね？、今日、そこで大掛かりなイベントがあるんだ、一人で行くのも何だしね？だから、まこを誘ったんだよ？今日、暇なんでしょ？じゃあ、行こうよ？」
美鈴が、そう言ってきたので、俺は、どうしようか迷ったが、まあ、ぶっちゃけて言うと、この後の用事とかは全く無いし、それに、何のイベントをやってるか、気にはなったので
「分かったよ、じゃあ、一緒に行くよ」
そう言う事にした
「じゃあ、決まりね？では、早速出発～」
そう言って、俺と美鈴は、電車に乗る
電車で、一時間ぐらい乗って、たどり着いた場所がビックドームなのであった
ビックドームを見てみると、物凄い数の人が、並んでいて、ちょっとビックリしたのであった
「なんか、凄い人、並んでない？」
「まあ、今日は、イベント初日だからね～、人も沢山来るよ、少なくとも十万人は、いるんじゃない？」
うわ、それは、物凄く多くないか？
「じゃあ、私達も並ぼう？まこ」
「あ、ああ・・・」
そう言って、俺たちも列に並ぶ
並んでみたはいいが、全く動く気配が無かった
おまけに炎天下のせいか、汗も噴出して、ちょっときつく感じたりもしている
「一体、いつになったら、動くんだ？この人の列は・・・」
「う～ん、開店が十時だから、今、九時五十分だし、あと、十分程度かな？あ、まこ、飲み物、用意してあるから、飲む？」

そう言って、ボストンバックから、スポーツドリンクを取り出したので、俺は、それを受け取って、飲む事にした
そして、十分過ぎて、十時になり、やっと、人の列が、動き始めたさすがに、最後尾のほうだったので、会場に入るまで、物凄い時間がかかり、中に入れたのは、開店してから、三十分以上も過ぎていたのだった
中に入ると、物凄い数の本と、人と机が沢山あった
「もしかして、これって・・・」
「そう、今日は、同人誌即売会、つまり、～コミックマーケット、ＩＮ、ビックドーム～だよ～」
「やっぱり・・・」
俺は、やってる事は知っていたけど、来るのは、初めてだった
まあ、普通の一般人は、こんな所には、来ないだろ・・・とは、思う・・・
こうして俺は、初めての即売会を、体験する事になったのであった・・・

～第四十五話～俺とコミックマーケット～（後書き）

零堵です。今日、栗谷美鈴の挿絵、追加しました
随時、追加する予定です。

～第四十六話～俺とコミックマーケットその2～（前書き）

はい、零堵です。
昨日は、体調悪くて、執筆できませんでした
今回、いつもより、ちょっと長めです
アクセス数が、二万四千いって、うれしい限りです。

～第四十六話～俺とコミックマーケットその2～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、ビックドームと呼ばれる、場所にいた
そこで、行われてるのは、同人誌即売会、通称～コミックマーケット～であった
何故、そこにいるのかと言うと
親友の栗谷美鈴（くりやみれい）に、誘われたからである
こうして、俺の初めての、同人誌即売会なのであった・・・

「うわ、凄い人・・・」
会場内に入ると、人が多くいて、数々の本が売られていた
「まあ、ここは、大きいからね～、人もたくさん集まるよ」
俺の隣にいる、美鈴が、そう言う
「こんなにたくさんいて、暑くないのかな？」
「暑いと思うよ？熱気が凄いし、さてと～、とりあえず・・・ほしい本でも、ゲットしに行くかな～」
そう言って、美鈴は移動する
俺は、残されるのも何なので、そのあとをついていく事にしたのであった
そして、たどり着いた場所は、天空カイザーをメインとした同人誌を、売っているスペースだった
「お、カイザー本発見～、じゃあ、まこ？買ってくるね？まこの分もいる？」
「い、いや、自分はいいよ・・・、ここで待ってる」
「そう？じゃあ、行ってくるね」
そう言って、美鈴は、本を買うために並んでいた
そして、数分後、目的の本を買えたからか、笑顔で、戻ってくる
「うん、こういうのいいね～」
「そういうもんなの？」

「うん、まこもせっかく来たんだし、楽しまないとね？まこも色々と見て回る？」
俺は、どうしようかと迷ったが、確かに、何があるのか？と、気にはなったので
「うん、そうする」
「じゃあ、私、ここのスペースで待ってるから、見終わったら、ここにきてね？」
そう言って、俺にこの会場の案内図を見せる
「うん、わかった、じゃあ行ってくるよ」
そう言って、俺は、美鈴から離れて行った
まず何所に行こうかと悩んで、とりあえず見て回る事にした
移動していると、知っている人物を見かけたので、声をかけてみた
「あれ・・・茜さんと美咲さん？」
そこにいたのは、売り子をしている汐崎茜（しおざきあかね）さんと汐崎美咲（しおざきみさき）であった
「あ、まこさん、こんな所で会えるなんて、偶然ですね」
「まこ・・・こういった場所に興味があるんですか？」
「い、いや、美鈴に誘われて、ここに来ただけなんだけど・・・」
「また、栗谷さんですか、本当に仲がいいですね、羨ましいです、私も、まことといたいのに・・・」
「あら？美咲？もしかして・・・」
「ええ、茜お姉ちゃん、前に言ったと思うけど、そうです」
「ふ～ん、そうなんだ？」
・・・美咲さん？貴方は茜さんに、何を言ったんだ・・・？物凄い気になるのだが・・・
「所で、ここにいるという事は、本を売ってるんですか？」
「ええ、同人誌書いたのよ？あ、そうだわ、まこさん、プレゼントしますよ、せっかく会えた記念にね？」
そう言って、俺に一冊の本を渡す
「え、いいんですか？」
「ええ、構わないわよ？ね？美咲」

「あ、はい、まこに読んでくれると嬉しいです、私も少し手伝いましたから・・・」
「そ、そう・・・じゃあ、ありがたく頂くね・・・？じゃあ、自分はこれで・・・美鈴、待たせてるので」
「そうですか・・・じゃあ、さよならです・・・」
「まこさん、また、お店に行くから、その時に会いましょうね？」
「あ、はい」
そう言って、俺は、移動したのであった
とりあえず、美鈴の所に戻る事に決めて、戻ると
「お帰り～まこ？どうだった？」
「どうだったって、まあ、知り合いに会ったよ」
「え？誰？」
「同じクラスの汐崎美咲」
「え、嘘？こんな場所に興味無いと思ったんだけどね？」
「なんか、従姉の茜さんと一緒にいたから、それの手伝いかと」
「ふ～ん、そうなんだ？あ、じゃあ、そろそろ行こうか？」
「行くって、何所に？」
「ふっふっふ、この日のために、用意していた物があるんだよ～、とりあえずついてきて？」
「？？分かった」
こうして、俺は、美鈴のあとをついていく事にした
美鈴のあとに、ついていくと、控室に入った
そこで、美鈴は、ボストンバックを開ける
中に入っていたのは、何かの衣裳だった
「さあ、まこ、これに着替えて？」
は？何でだ？
「ええ？何で？」
「だって、まこと一緒にコスプレしたくて、持ってきたんだよ～、着てくれないの？」
そう、うるうる顔で言ってきた

「・・・解ったよ・・・着ればいいんでしょ？」
「よかった、じゃあ、着替えよう？」
そう言って、服を脱ぎだす
俺も、脱いで、用意された衣裳に着替える
うん、着てみて思った事
なんか恥ずかしいし、それに、何でサイズが合ってるんだ？と、思った
「ねえ？何で、サイズ合ってるの・・・？」
「まこのサイズって、身長以外、私とほとんど同じなんだよ？知らなかった？」
「そうなのか？」
「うん、だから、お揃いだね～」
「・・・ところで、この衣裳は？」
「これはね？魔女っ子メイルというアニメのキャラのコスプレだよ？ちなみに私が、魔女メイルのコスで、まこが魔女レイラのコスだよ～」
「そう・・・」
何のアニメかは、全く知らなかったが、深く追及するのは、やめといた
着替えたので、コスプレスペースに出ていく
そこで、いっぱい写真を撮られた
しかも、ポーズとってくださいとか、メルアド教えて？とか、そう言ってくる奴もいたりして、かなり困ってしまった
一時間ぐらい過ぎて、さすがに疲れたので、私服に着替えて、帰る事にした
帰る途中
「ねえ？まこ？明日も、今日みたいな、イベントやってるけど、行く？」
「いや、行かない！もう、疲れたし、断る」
「ええ～？なんでぇ～？」

そんな会話をしながら、家へと、帰って行ったのであった・・・

～第四十六話～俺とコミックマーケットその2～（後書き）

零堵です。夏休み編に突入して、結構書いたかと思われます。
補足
魔女っ子メイル
毎週日曜、朝八時半からやっている、少女マンガ原作のアニメ
主人公メイルが、仲間たちと一緒に、悪の帝王、キレトルの戦いを描いている
笑いあり、涙ありの、百合要素有りのアニメ

～第四十七話～俺と二学期～（前書き）

零堵です。
この回から、二学期編、突入です
もうすぐ、五十話行くって感じですね

～第四十七話～俺と二学期～

夏休みも、終了して、俺こと、南山真琴（みなみやまこと）は、学校へ行く事にした
朝、おきて、約一ヶ月ぶりに制服を着る
そして、朝食を取り、学校へ行く準備をして、家を出たのであった
通学路も約、一ヶ月ぶりなので、ちょっと新鮮な感じがした
数十分歩いて、俺の通っている高校、山之辺高校に、辿り着く
校舎の中に入り、昇降口で上履きに履き替えて、自分のクラスへと向かった
クラスの中に入ると、ちょっとした騒ぎが起こっていた
「美咲様～、会えて嬉しいです！」
「この一ヶ月間、寂しかったです！」
そんな事を言っている
うん・・・こいつら、あれか？このクラスで、一番人気の汐崎美咲（しおざきみさき）のファンクラブ、ＭＫＦＣ（美咲ファンクラブ）かと、おもわれる
それに対して、美咲はと言うと
「私も、皆さんに会えて、嬉しいですよ？」
と、笑顔で言っていた
それを聞いて、かなり盛り上がっている男子達
うん・・・かなりというか、アホだろ・・・こいつら・・・
そう思いながら、自分の席につく
席について、ぼ～っとしていると
「おっはよ～まこ」
俺に、話しかけてきたのは、俺の親友でもある、栗谷美鈴（くりやみれい）だった
「おはよ」
「まこ？夏休みの宿題って、もう終わってる？」
「普通、終わらせるもんなんじゃないの？というか、美鈴・・・・・
もしかして？」
「う、うん・・・全部終わらなかったよぅ～・・・まこ、写させて

くれない？」
「嫌だと言ったら？」
「もう、まこと遊んであげない」
「じゃあ、嫌だ」
「って、冗談だよ～、本当にお願い！」
「・・・はあ・・・判ったよ、はい」
そう言って、俺は、美鈴に宿題を書き写してある、ノートを渡す
「ありがと～、何だかんだ言って、まこは優しいよね？そういう所、大好きだよ～」
・・・そう聞いて、俺は、どういった反応を取ればいいんだ？
そう話していると、チャイムが鳴って、俺の担任の朝崎翠（あさざきみどり）先生がやって来た
「あ～お前ら、十分な夏休みだったか？まあ、私は、ネトゲ三昧だったがな～、ったく、セリめ・・・アイテムぐらいよこせっつの・・・それに、戦闘中に勝手にログアウトするなって言いたいな・・・おっと、話がそれたな、今日から二学期だ、体育館で、校長のありがたくもなんとも無い、くそつまらない話があると職員室で言っていたから、寝ながらでもいいから、とりあえず聞いとくように、じゃあ、移動しろ～」
うん・・・本当に、こんな担任でいいのか？と、思ってしまう
そして、俺達は体育館に移動して、校長の話を聞いた
確かに校長の話はつまらなかったというか、他に気になる事が出来た
校長の髪の毛が、以上に増えているのである
一ヶ月前と、ありえない増え方で、これは、どうみてもカツラ？と思われる
そんなカツラをつけた校長が「皆さん、隠し事はいけませんぞ」とか、ほざいている
まず、あんたが隠してるだろ！？とか、つっこんでやりたかった
そんなつまらない校長の話も終わり、今日は、授業が無いので、帰る事にした

帰る途中
「まこ・・・」
俺に、話しかけてきたのは、同じクラスの美咲だった
「えっと・・・な、何?」
「いつになったら、私を彼女に、してくれます?私は、いつでもかまいませんのに・・・」
そう、爆弾発言しました
はっきり言って、かなり困った、ここは、一般道路
通行人がぎょっとして、こちらをうかがってしている、しかも
「百合展開キター!」とか、叫んでるやつもいたりしてるから、本当に困った
「じゃあはっきり言うけど、ごめん」
そう言ってみる
すると、彼女は泣きそうになりながら
「!、私、諦めませんから!必ず、付き合って見せます!」
と、言ってきた
ええ~・・・諦めてくれないの・・・?とか、悩んでいると
「あの、私の事が大嫌いだから、そう言ったんじゃないんですよね・・・?」
「え?う、うん、嫌いじゃないけど・・・」
「なら、良かったです、私、貴女に好かれるように、頑張りますから、それじゃあ」
そう言って、美咲は、離れて行く
「頑張ると言われても・・・困るんだけどな・・・」
俺は、そう言って、考えても仕方が無いので、家へと帰っていったのであった・・・

～第四十七話～俺と二学期～（後書き）

零堵です。
この回から、二学期編突入です。

～第四十八話～俺と学園祭準備～（前書き）

零堵です。ちょっと短めでお送りします
新キャラ二名追加しました
近いうちに、キャラ紹介として、紹介すると思います

～第四十八話～俺と学園祭準備～

季節もすっかり、秋に突入して、夏の気候と違って、ちょっと涼しく感じる頃
俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、いつものように、学校へと向かっていた
俺の通っている、山野辺高校に辿り着く
上履きに履き替えて、自分のクラスの中に入ると
何やら集まって、話しているのを見かけた
「あ、南山さん、おはよう」
そう言ってきたのは、このクラスで、委員長をしている
西崎彩香（にしざきさやか）であった
「西崎さん、一体何の話をしているの？」
「実はね？今度の学園祭の、出し物を何にしようか、皆で相談しているのよ、今の所、男子の意見がメイド喫茶、女子の意見が劇とお化け屋敷って、言っているの、南山さんは、どれにしたらいいと思う？」
そう言ってきたので、俺は、どれにしようか悩んだが
劇とか面白そうなので
「じゃあ、自分は劇に一票入れるよ」
「解ったわ、南山さんは、劇に一票ね」
そう言って、紙に何かを書いていた
たぶん、このクラスのアンケート表だと、思われる
とりあえず、答えたので、俺は、自分の席に座る事にした
そして、チャイムが鳴り、担任の朝崎翠（あさざきみどり）先生が、やって来て、こう言った
「あ～、今のＨＲの時間に話す事があるぞ、来週、学園祭をやるのだが、このクラスでの、出し物を決めたいと思う、委員長、あとは頼む」
「はい、分かりました」

そう言って、西崎さんが、こう言う
「さっき、クラスで何の出し物をやろうと、アンケートした結果、メイド喫茶と、お化け屋敷と劇が候補にあがって、で、結果はというと、一票差で、劇が多いです
皆さんは、劇でよろしいですか？」
一票差と言う事は・・・もしかして、俺の票で、決まったのか？
クラスの皆は「異議な～し」とか、言っていたので、これは、決まったな・・・と、思ったのである
「じゃあ、劇で問題はないですね、では、何の劇をやるかですけど、何が良いと思います？」
「名作をアレンジしたのが、やってみたいかも？」
そう言ったのは、クラスメイトの有栖川美紀子（ありすがわみきこ）であった
「私、演劇部だから、台本は任せて？」
「じゃあ、有栖川さんに、お任せしていいですか？」
「うん、ＯＫだよ」
「じゃあ、台本は有栖川さんが出来たら、言って下さい、出来た台本をやりたいと思います、皆さんは、それでいいですね？」
「問題ないよ～」
そう、美鈴（みれい）が、言っていた
「先生、劇という事で、決まったのですが、よろしいですか？」
「劇か・・・じゃあ、体育館のステージを申請しとくよ、それでいいか？」
「分かりました、それで構いません、じゃあ、これでＨＲを、終わらせてよろしいでしょうか？」
「ああ、じゃあ、授業を始めるぞ」
そう言って、授業が始まるのだった
こうして、学園祭の出し物は、どうやら、劇に決まったのである
一体、何をやるのか・・・、まだ分からないままだったが、変な役とかは、やりたくないな・・・と、思っていたのであった・・・

～第四十八話～俺と学園祭準備～（後書き）

零堵です。
新キャラ、二名追加しました。

～第四十九話～俺と学園祭準備その２～（前書き）

アクセス数も二万五千以上いって、うれしいかぎりです

～第四十九話～俺と学園祭準備その２～

学園祭で、出し物を決めた次の日、俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、いつものように学校へと向かった
俺の通っている山野辺高校に辿り着いて、教室の中に入る
教室の中は、既に何人かいて、雑談していたりしていた
俺も、自分の席に座って、鞄から教科書とかノートを机の中に入れるしばらくすると、俺の親友の栗谷美鈴（くりやみれい）がやって来て、こう言ったのであった
「まこ～おはよう」
「おはよう」
「学園祭さ？劇する事になったよね？」
「そう見たいだね？」
「一体何の劇をやるか、楽しみじゃない？」
そうか・・・？俺は、少なくとも楽しみとは、思っていなかったりするのである
「そう？」
「まこは、楽しくないの？」
「いや、まだ何やるかわからないし・・・」
「まあ、そっか、そうだよね」
そう話していると、チャイムが鳴り、担任の朝崎翠（あさざきみどり）先生がやって来て、こう言う
「あ～、ＨＲを始めるぞ、で、連絡事項だが・・・、学園祭で劇をやるといったら、駄目とかほざいた奴がいたが、権力を振りかざしたら、Ｏｋしてくれたので、使用は問題ないぞ」
一体、何したんだ？この先生・・・
「それじゃあ、委員長、あとは頼む」
「は、はい、分かりました」
そう言って、このクラスの委員長、西崎彩香（にしざきさやか）が、黒板の前に立つ

「じゃあ、昨日も言いましたが、このクラスで、劇をする事になりました、それで、有栖川(ありすがわ)さん？台本は、出来ましたか？」
そう委員長が言うと
「うん、徹夜して書いたからちょっと、眠いけど、一応は出来たよ、はい、これが台本ね？」
そう言って、有栖川は、彩香に台本を渡す
「では、拝見します・・・・・・・・・・・じゃ、じゃあ、配役を決めましょう」
・・・えらく沈黙が長かったんだが、一体何が書いてあったんだ？
「配役は、全部で六人です、これは童話シンデレラをモチーフにした、オリジナル作品みたいなものなので、配役票を書きますね」
そう言って、彩香はチョークで、黒板に文字を書く
「配役は、全部で６人、王子、シンデレラ、継母、意地悪な姉１、魔法使い、ナレーションとお城の兵隊です、お城の兵隊はセリフが少ないので、ナレーションと一緒にします、じゃあ、この中から平等に、くじ引きで決めましょう」
そう言って、委員長は、クジを作って、箱の中に入れる
「では、皆さん、ひとりずつ順番にくじを引いてって下さい、キャストに外れたものは、雑用とか衣装係をやって貰います」
そう言って、くじ引きがスタートした
最初は男子から引いていく、男子は、ハズレを引いたらしく、がっかりしていたり、嘆いていたりしている者もいる
どうやら、男子全員、くじを引いて、キャストには当たらなかったみたいである
次に女子の番になって、くじを引く
まず最初にキャストを引き当てたのは
「私が、シンデレラ見たいです・・・」
このクラスの人気者、汐崎美咲(しおざきみさき)だった
次に引き当てたのが
「私は、継母役だ～」

美鈴だった
そして、次に引き当てたのが
「王子・・・私が？」
このクラスで、かなり地味な存在感のある人物、住吉愛子（すみよしあいこ）で
「私が魔法使い・・・ま、いっか～」
そう言ったのが、有栖川美紀子（ありすがわみきこ）で
俺はというと
「あ、ナレーション役と兵隊役だ・・・」
俺は、ナレーション役と兵隊役に決まったのであった
そして、最後に
「・・・私が、意地悪な姉ですか・・・むずかしい・・・というか、出来るの・・・？」
委員長の、西崎彩香が意地悪な姉を引いたのであった
こうして、キャスト全て、決まったので、委員長は、こう言う
「キャスト全て、決まったので、練習は、授業が終わってからの、放課後に集まって、やりたいと思います、キャストの皆さん、よろしいですね？」
「私は、ＯＫだよ」
「私もＯＫ～、さ～って、がんばるぞ～」
「・・・私も」
「自分もＯＫかな、まあ、遅くなると妹に何言われるかだけど・・・」
「私も、家族に何言われるか、分かりませんが、まあ大丈夫だと思います」
「じゃあ、決まりですね、先生、決まりましたので、終わりにしていいですか？」
委員長がそう言うと
「そうだな、よし、ＨＲを終わりにして、授業を始めるぞ」
そう言って、授業を始めるのであった
こうして、放課後、六人で残って、練習する事になったのである・・

～第四十九話～俺と学園祭準備その2～（後書き）

新キャラ、もう一名追加しました。

～第五十話～俺と学園祭準備その３～（前書き）

零堵です
気が付いたら、五十話達成しましたｗ
百話まであと半分ですねえ、行ける所まで、書こうと思います

～第五十話～俺と学園祭準備その3～

学園祭での役が、決まって、その日の放課後、俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、劇の練習をする事にした
教室は、衣装や小道具を作る人で、使うので、別の部屋で、練習する事にしたのである
使われた場所は、多目的ルームと、呼ばれている場所であった
「じゃあ、ここで、練習を始めたいと思います」
そう、委員長の西崎彩香（にしざきあやか）が言う
そう言って、委員長は、人数分の台本を、俺たちに配る
俺は、その台本に目を通してみて、驚いた
なんせ、タイトルが「シンデレラ～ヤンデル乙女たち～」だったからである
これを書いたのが、同じクラスの有栖川（ありすがわ）さんなので、一体何を考えて、これにしたんだ？と、問い詰めたくなったが、まあ、聞くのをやめる事にした
配役は、朝のＨＲで決めたので、俺の役は、最初の冒頭を言う、ナレーションと兵隊の二役であった
ちなみに、他の役はと言うと、王子が、住吉愛子（すみよしあいこ）で、継母が、親友の栗谷美鈴（くりやみれい）、意地悪な姉が委員長の西崎彩香で、魔法使いが、この台本の昨夜の有栖川美紀子（ありすがわみきこ）で、最後にシンデレラが、汐崎美咲（しおざきみさき）に、決まったのであった
「じゃあ、最初のシーンから、皆で読みましょうか？南山さんから、お願いします」
委員長が、そう言ってきたので、俺は、台本を読む事にした
「じゃあ、始めるね、昔、昔、ある所に、シンデレラと言う、少女がいました」
俺が、ナレーションの台詞を言って、台本の読み合わせが、始まったナレーションと言うだけあって、台詞が結構多く、しかも兵隊役も

やる事になっているので、これは、覚えるの大変だな・・・と、思っていた
そして、数時間の練習が終わり、暗くなってきたので、今日の練習は、終わりにして、帰る事にした
帰る途中、帰る方向が同じなので、美咲と美鈴との、三人で、歩いていると
「それにしても、まこ？」
「何？美鈴」
「まこが、王子様だったら、よかったな～って、私、思うかな？」
「あ、それは、私もです、まこが王子様だったら、私も、全力でシンデレラやるのに・・・」
そう言われてもな・・・俺は、どう答えればいいんだ？
そう話しながら、家に着いたので、二人と別れた
家に入ると、既に妹の亜季（あき）は、帰っていて、夕飯の準備をしていた
「お姉ちゃん、お帰りなさい、今日は、遅かったけど、何してたの？」
「何してたって、来週学園祭だから、それの準備かな？」
「学園祭の準備？お姉ちゃん？一体何をやる事になったの？」
「自分のクラスは、劇をやる事になったんだ」
「劇？お姉ちゃんは、何の役なの？私、絶対に見に行くね？」
「自分は、ナレーションと兵隊の二役だよ、亜季・・・来るの？」
「うん、学園祭の日って、確か、休日の日だから、私、お姉ちゃんの学校に行くね？お姉ちゃん、時間が出来たら、一緒に見てまわろう？」
亜季が、そう言ってきたので、俺はと言うと
「まあ・・・そんな時間が出来たら、そうしようか・・・」
そう言う事にした
そして、時間が過ぎて、亜季の夕飯も完成して、二人で食べて、明日の準備をして、寝る事にした
こうして、俺の、劇の練習一日目が、終わりを告げたのである・・・

～第五十話～俺と学園祭準備その３～（後書き）

零堵です。
五十話達成しました～
まだまだ続けたいと思います～

～閑話～俺とキャラ紹介その３～（前書き）

五十話、過ぎたので、キャラ紹介その３です

～閑話～俺とキャラ紹介その3～

＞ｉ３３４５８＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞２９７１＜
南山真琴＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞みなみやままこと＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞年齢１７歳、山野辺高校２年
身長大体１７０ぐらい、体重５０？いかないかぐらい
家族構成、母親と妹の３人ぐらし
黒髪のショート、大変スレンダーな体（つまりぺったんこ）、天空カイザーのレキのコスプレするとそっくりと言われる
週に一回、ラブ喫茶「アイライク」でバイト
一人称、俺か自分
この物語の主人公、普通な日常を過ごしていたが、ある日、それが非日常に変わってしまった、ある意味不幸な人物、なぜか異性より同姓にもてる（笑）
突っ込み体質でもある

＞ｉ３２９６６―２９７１＜
汐崎美咲（しおざきみさき）年齢１７歳、山野辺高校２年
身長１６０ぐらい、体重４５？ぐらい
家族構成、両親と３人家族
一人称私
黒髪のストレートで、グラビアアイドルのような体、クラス一の美少女、好きな人物南山真琴
この物語のヒロイン１？真琴にラブレターを送った人物、容姿端麗、運動抜群で成績も優秀

美咲ファンクラブ、通称（ＭＫＦＣ）があったりする
従姉に汐崎茜がいる、茜の事をお姉ちゃんと言っている
真琴が好きすぎて、少々暴走気味な妄想もする、真琴が絡むとヤンデレ化もする（笑）
真琴がもし男と付き合うような事があったら、全力で別れさせようとも思っている

＞ｉ３２８０６―２９７１＜
栗谷美鈴（くりやみれい）年齢１７歳、山野辺高校２年
身長大体１５５ぐらい、体重５０キロぐらい
家族構成、両親と弟の四人家族
一人称私
栗色のストレートで、幼児体型、アニメやゲームにはまっている、腐女子
バイト、ラブ喫茶「アイライク」で働いている
真琴の親友でヒロイン２？アニメが大好きで、コスプレもしたりしている、真琴と一緒に行動するのが好きなので、よく一緒にいようとする

＞ｉ２９５８５＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞２９７１＜
南山亜季＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞みなみやまあき＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞年齢１５歳、山野辺中学３年
身長１５０ぐらいで、体重４０ぐらい
黒髪のツインテール、幼児体型、真琴の妹
一人称私

真琴の妹で、料理が得意、真琴、つまりお姉ちゃんの事が大好き、お姉ちゃんに近づく者は、誰であろうと嫌だと思っている、姉の事になると、ヤンデレ化もする

ＭＫＦＣ（美咲ファンクラブ）
美咲のファンクラブ、美咲を彼女にしようと色々と行動しているが、当人に断られている
クラスの中でも数人はいる程度

＞ｉ３３５８５＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞２９７１＜
南山美鶴＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞みなみやまみつる＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞年齢３９歳、真琴と亜季の母親
一人称私
真琴と亜季の母親で、女優、普段家にいなく、家事を娘にまかせっきり

＞ｉ３３６１７―２９７１＜
東雲紫（しののめゆかり）　年齢２２歳
身長１５７ｃｍ　体重５０ぐらい
ショートカットな黒髪、モデル体系
一人称私
ラブ喫茶「アイライク」の店長さん、腐女子なので、美鈴と話があう
弟の玲をおもちゃにしている

＞ｉ３３７５３＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞２９７１＜
東雲玲＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞しののめあきら＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞　年齢１５歳、　山之辺高校一年
身長１５０ぐらい、体重５０ぐらい
短髪の黒髪で、童顔
一人称僕
真琴の後輩で、ラブ喫茶アイライクで、女装して働いている
同姓によくモテル、真琴の事を先輩と言っている

桐谷佐奈（きりやさな）年齢１８歳
身長１４７ＣＭ　体重４５?ぐらい
茶髪の髪の毛で、ポニーテール
一人称私
ラブ喫茶アイライクで働いてる、真琴を見ると、ちょっとどきどきしてしまうとか思っている

汐崎茜（しおざきあかね）年齢２１歳、　漫画家
身長１５５ぐらい　体重５０ぐらい
黒髪のストレート
一人称私
汐崎美咲の従姉、漫画家志望、真琴をメインに漫画を書く事にした

川原芹（かわはらせり）年齢二十五歳　体育教師
身長１６０ぐらい、体重５０ぐらい
黒髪のショート
一人称私

山野辺高校の体育教師、せりちゃんと言う愛称で、呼ばれて
生徒にも先生にも人気がある
朝崎翠と、同期で、同じネットゲームをやる仲でもある

朝崎翠（あさざきみどり）年齢二十六歳　国語教師
身長１７０ぐらい、体重五十ぐらい
黒髪のロング
一人称私
山野辺高校の国語教師で、真琴のクラスの担任
性格は大雑把でかなりマイペース、授業中に寝るなど、勝手な行動
も多く、また、上の秘密を握ってたりしている
ネットゲームやゲーム大好き人間でもある
ちなみに川原芹と同期で、仲が良かったりしている

暮見翔（くれみかける）　俳優
年齢十八歳　体重六十ぐらい
短髪の髪
一人称俺
俳優として、色々と出ていたりしている、脇役や主役もやったりし
ていて
天空カイザーのドラマをやった時、真琴の事を男だと思っていたり
していた
蓮城麗華（れんじょうれいか）とは、幼馴染で、友達以上恋人未満な関係だったりしている

蓮城麗華（れんじょうれいか）アイドル
年齢十七歳　体重四十五キロぐらい

茶髪のショート
一人称私
バラエティーやドラマ、歌を歌ったりしている、国民的を目指しているアイドル
暮見翔とは、幼馴染で仲がよい

西崎彩香（にしざきあやか）　年齢十七歳　山野辺高校2年
身長百六十ぐらいで、体重五十ぐらい
黒髪のお下げ
一人称私
真琴のクラスの委員長、しっかりしようと、常に努力している
クラス委員長なので、色々と頼まれる事が多い

有栖川美紀子（ありすがわみきこ）年齢十七歳　山野辺高校2年
身長百五十五ぐらいで、体重四十五ぐらい
黒髪のポニーテール
一人称私
真琴のクラスメイトで、演劇部員
面白い事が大好きで、周りを巻き込む事を多々あったりしている

こんな感じですかね？

～閑話～俺とキャラ紹介その3～（後書き）

アクセス数が、二万七千以上超えて、うれしいです

～第五十一話～俺と学園祭準備その４～（前書き）

はい、続きの話です
アクセス数も、二万八千いって、うれしいです

～第五十一話～俺と学園祭準備その４～

学園祭で、劇をする事になって、その練習をして、次の日
俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、いつものように家を出る
そして、いつもと同じ時間に高校に辿り着き、教室の中へと入る
教室の中は、学園祭に向けてか、作業している者がいたりしていた
俺は、劇の役者をする事になっていたので、台本を手元に置いていたりしている
自分の席に着いて、しばらくぼ～っとしていると
「おっはよ～まこ」
そう話しかけて来たのは、俺の親友の栗谷美鈴（くりやみれい）だった
「おはよう」
「まこは、家に帰って、練習とかしたの？」
「そう言う美鈴は、やったの？」
「私？私は、全然やんなかったかな、見たいアニメに夢中でね～」
「そう・・・自分も、やらなかったかな」
「何だ、同じなんじゃん」
いや、全く違うと思うのだが・・・
そう話していると、キーンコーンと、チャイムが鳴ったので、話すのをやめて、先生が来るのを待つ事にした
数分後、担任の朝崎翠（あさざきみどり）先生がやってきて、こう言う
「皆、おはよう、今日は、学園祭の準備をする事に決まったので、授業はやらないぞ、まあ、こっちも楽できるから嬉しいけどな、じゃあ、おまえら、しっかりとやるんだぞ～」
そう言って、懐から小型のゲーム機を取り出して、ピコピコ遊んでいるのであった
うん・・・てか、遊んでいいのか？仮にも教師だろ？と、思うのだが・・・
まあ、話しかけた男子生徒が、「黙れ！邪魔をするな！」とか言わ

れていたので、黙ってる事にした
午前中は、劇の準備をする事にした
そして、午後は、六人で集まって、多目的ルームで、台本の読み合わせをする事にしたのであった
ちなみに六人と言うのは、俺、美鈴、美咲（みさき）、美代子（みよこ）愛子（あいこ）、彩香（あやか）である
ちなみに全員、俺も含めて女子なので、気軽に話しながら、台本の読み合わせをしているのであった
「じゃあ、今日は、途中からのシーンから、言いましょうか」
そう言ったのは、委員長の彩香で、それに皆はうなずいた
「じゃあ、私から行くね～」
そう言ったのは、美鈴で、美鈴は継母の役なので、そこから台詞を言う
「うふふふ、今日もまた一人・・・餌食になったわ・・・」
「お母様・・・いい方が怖いです、それに人じゃなくて、これ魚ですよ・・・」
「あら、いいじゃない・・・人も魚も変わらないわよ・・・うふふふふ」
うん・・・聞いてて思った事、あきらかに変な台本だとは思うというか、怖いぞ・・・なんか・・・
そんな感じで、進めていって、暗くなって来たので、今日の練習は、やめにするのであった
練習し終わって、帰り道
今日も美鈴と美咲の三人で、帰る事にした
「まこ、今日も疲れたね～」
「何言ってんの、まだ若いでしょ？」
「そりゃそうだけど～、まこは疲れなかったの？」
「まあ、疲れたと言えば、疲れたかな？」
「じゃあさ？ちょっと寄り道していかない？近くのケーキ屋さんとかに、寄って行こうよ？」
「あ、私も、それに賛成です、まこ、行きましょう？」

そう言って俺の手を掴む美咲
いきなり掴まれてびっくりしたが、別に嫌じゃあなかったし、そのままにしといたのだった
「あ、私もまこと、手をつなぐ～」
そう言って、もう片方の手を勝手に握ってくる美鈴
うん、三人一緒に手を繋ぐなんて、明らかに変だろ？と思ったが、ま、いいか・・・と思い、やっぱりそのまま行く事にしたのであった
ケーキ屋さんによって、ケーキを食べて、二人と別れて
家に帰ると、誰もいなく
いつもなら妹の亜季（あき）がいるのだが、今日はいなかった
丁度誰もいないようなので、俺はと言うと、一人で台本の読み合わせをする事に決めたのであった
こうして、俺の練習二日目が、終わりを告げたのである・・・

～第五十一話～俺と学園祭準備その４～（後書き）

零堵です。まだまだ続きます～

～第五十二話～俺と学園祭準備その5～（前書き）

零堵です。アクセス数もそろそろ三万行くって、感じですかね？

～第五十二話～俺と学園祭準備その5～

劇の練習も順調に進み、学園祭も迫って来た頃、俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、いつものように学校へと向かっていた
俺の通っている山野辺高校に入ると、学園祭が近いからか、他のクラスの生徒が、慌ただしく動いているのが確認できてたりしている
自分のクラスに向かう途中、声をかけられた
「あ、先輩」
声をかけてきたのは、俺の後輩で、同じバイト仲間の、東雲玲（しののめあきら）だった
「あ、玲？その衣装は・・・」
玲は、何故かチャイナ服を着てたりしている
うん、しかも・・・かなり似合ってる、全く違和感がない、かつらやウィッグもつけていないというのに、ショートの美少女に見えてるから、かなり不思議な感じだった
「あ、これですか？実は、僕のクラスの出し物、最初、普通の喫茶店だったんですけど、クラスの皆が、それじゃあ面白くないから、コスプレ喫茶にしようとか言い出して・・・で、僕の衣装が、これになったんです・・・」
「そ、そうなんだ…その衣装、どうしたの？」
「クラスの女子が、自作で作ってきてtらしくて、しかも・・・僕のサイズぴったりなんですよ・・・
ちょっと恐怖を感じました・・・、ところで、先輩のクラスは、一体何をするんですか？」
「こっちのクラスは、劇かな」
「そうなんですか、じゃあ、僕、姉さんが来ると言ってるから、姉さんと見に行きますね？じゃあ、僕は、自分のクラスに戻ります」
そう言って、玲は、自分のクラスへと帰って行った
俺も、自分のクラスの中へと入る
中に入ると、劇に参加するメンバーが、衣装を着ていた

「あ、まこ～、どう？似合う？」
そう言ってきたのは、俺の親友の栗谷美鈴（くりやみれい）で、美鈴の役は、継母なので、それっぽい衣装を着ていたりする
「似合うんじゃない？」
「そう？ちょっと太っちゃったと思ったけど、きつくなくて、よかったよ～」
そうなのか？全然太ったようには、見えないんだが・・・
そう思っていると、キャーっと、歓声があがった
何事か？と思うと、王子の衣装を着た、クラスメイトの住吉愛子（すみよしあいこ）が、困った顔をしていた
うん・・・すげえ似合ってる、というか・・・かなりのイケメンに見える、化粧のおかげか？とか、思ってしまった
「あ、南山さん、おはよう」
そう愛子が、話しかけてきたので
「お、おはよう」
「ど、どうかな・・・この衣装、私に似合ってる？な、なんか、クラスメイトが、凄い騒いでるのがちょっと気にはなるんだけど・・・」
「ばっちり似合ってるよ？まこもそう思うよね？」
「うん、凄い似合ってる、イケメンに見えるよ」
「そ、そう・・・、私としては、ちょっと嬉しくないかな・・・、私、女だし・・・」
なんか小声でぶつぶつ言っていたが、気にしない事にした
そう話していると、魔女の恰好をした、有栖川美紀子（ありすがわみきこ）が、話しかけて来た
「南山さん～、貴方の衣装も出来たから、着てみてね？はい、これ」
そう言って、俺に衣装を渡してきた
受け取った衣装を見てみると、ＲＰＧとかに出てくる、兵士の衣装だった
俺は、ナレーションと兵士役なので、その衣装に着替えてくる事に

した
着替え終わって、教室に戻ると
「まこ・・・似合ってます・・・」
そう、赤らめて言ってきたのが、継ぎ接ぎだらけの衣装を着た、シンデレラ役の、汐崎美咲（しおざきみさき）だった
似合ってるって言われてもな・・・どう、反応していいか、分からないんだが・・・
皆で、劇の衣装を着て、早速台本の読み合わせをする事にした
そして、時間が過ぎて、放課後
今日は、練習をやらないで、真っすぐ帰る事にして、家路へと着く
家に着くと、もう既に妹の亜季（あき）がいて、夕飯の支度をしているのであった
「あ、お姉ちゃん、お帰り、今日は早いんだね？」
「そう言う亜季こそ、早いね？」
「まあね、学校終わったら、直ぐに帰ってるからね？」
「そうなんだ」
「あ、もうそろそろ夕飯出来るから、待ってて？お姉ちゃん」
「分かった、そうするよ」
俺は、そう言って、待つ事にする
そして、夕食ができて、今日は母親の美鶴（みつる）母さんが、遅いので
二人で夕飯を取る事にした
食事が終わって、お風呂に入って、なんかえらく疲れたので、さっさと寝る事にするのであった
こうして、俺の一日が、終わりを迎えたのである・・・

～第五十二話～俺と学園祭準備その５～（後書き）

まだまだ続きます～

～第五十三話～俺と学園祭～（前書き）

零堵です。もうすぐ三万いきますね、うれしい限りです～

～第五十三話～俺と学園祭～

学園祭の日、俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、いつもとちょっと早い時間に学校へと向かった
今日は、授業が無いので、制服だけ来て、俺の通っている山野辺高校に向かう
そして、山野辺高校に辿りつくと、もう既に賑わっていた
学園祭というだけあって、校門前に学園祭のネームプレートが飾ってあったりしている
そして、クラスの中に入ると、もう既に何人か集まっていた
俺は、自分の席に座って、ぼ～っとする事にした
しばらくすると、俺の担任の先生がやって来て、こう言う
「今日は、学園祭だ、授業は無いので、いつもとは違う、で、劇だが、午後からやる事がきまったぞ、で、午前中は自由にしていいぞ、では、私は色々と見回りがてら、回ってくる事にする、ではな」
そう言って、先生は教室から出ていく
先生が出て行ったあと、クラスの連中は散らばって行った
俺も、何所かに行こうかな？と思っていると、教室の中にやってきたのは、妹の亜季（あき）だった
「お姉ちゃん」
「あ、亜季、来たんだ？」
「うん、お姉ちゃんと一緒に学園祭に回りたくてね」
「そう、じゃあ、行こうか？」
そう言って、俺と亜季は、校舎の中を見て回ることにした
学園祭と言うだけあって、外からの客が結構いて、大変にぎわっている
俺は、歩きながら、亜季に聞いてみた
「そう言えば、母さんは？」
「お母さんは、仕事だって、ここに来たかったとか、言ってたよ？」

「そうなんだ・・・」
とりあえず俺達は、何か食べる事に決めて、後輩の玲がいる、クラスへと向かった
玲のクラスに入ると、既に何人かいて、注文を頼んだりしている
それにしても・・・さすがコスプレ喫茶、色んな服装がいたりしている
ナースに軍服にメイドに巫女にバニーガール（しかも男）がいるから、ちょっと驚いてしまった
「お姉ちゃん、何食べる？」
俺と亜季は、空いている席に座って、メニューを見る
「じゃあ、定番のおにぎりでいいよ、亜季は？」
「私は、オムライスにするかな、すいません、店員さん～」
そう亜季が言うと、チャイナ服の格好をした人がやって来た
「はい、お嬢様方、一体何の用でしょうか・・・って、先輩？」
そう、チャイナ服を着ていたのは、玲であった
うん・・・めっちゃ似合ってる・・・というか、男に全く見えないな・・・
「玲？」
「はい、来てくれたんですね？先輩」
「まあね」
「お姉ちゃん？知り合い？」
あれ？前に亜季は、俺の働いているバイト先、ラブ喫茶アイライクで、一度会っては無かったか？
あ、その時は、ウイッグをつけてたから、別人に見えたのか・・・
「まあ、知り合いと言えば、知り合いかな？」
「ふ～ん、あ、じゃあ注文頼むね？おにぎりとオムライスひとつ」
「かしこまりました、オムライスとおにぎりですね、少々お待ちくださいませ」
そう言って、玲は、俺と亜季のそばから、離れて行った
そして数分後、注文したメニューを持ってきたので、それを食べて、

別の所へと、見に行く事にした
そして、時間が過ぎて、放送が聞こえてきた
「え～、放送部です、午後から体育館で、二年の劇をやります、興味がありましたら、是非、見に行ってください」
「あ、そろそろ時間か、じゃあ準備に行くかな」
「お姉ちゃん、がんばって?私、応援してるからね?」
そう言って、俺は、亜季から離れて、体育館の裏手に行く事にした
体育館の裏手に行くと、既に劇に参加するキャストは、全て集まっていて、衣装もばっちり着ていた
俺も。兵士役なので、その衣装に着替えて、ナレーションも兼任しているので、ちょっとというかかなり緊張した
「頑張ろうね?まこ～」
そう言ってきたのは、俺の親友の栗谷美鈴(くりやみれい)だった
「そうだね、せっかく劇やる事になったんだし、楽しまないと・・・」
「うんうん」
そう言って、時間を待つ
そして、時間になり、俺達の劇が、始まるのであった・・・

～第五十三話～俺と学園祭～（後書き）

零堵です。うん、この物語も結構続きましたね～
まあ、まだまだ続くと思うので、よろしくです～

～第五十四話～俺と学園祭その2～（前書き）

アクセス数三万こえしましたw

～第五十四話～俺と学園祭その2～

俺こと、南山真琴は、劇をする事になった
それは、学園祭で、行われるのである
そして、時間になったので、劇を始めるのであった
～シンデレラ～ヤンデレル彼女たち～
昔、昔、ある所に、とても奇麗な少女がいました
少女の名前は、シンデレラと呼ばれていて、結構な美少女でもありました
そんなシンデレラに、突然、ある出来事が起こったのです
それはと言うと・・・
シンデレラの父親が、再婚したのです
そして、再婚した母親には、一人娘がいて、その年齢がシンデレラより年上だったので、血の繋がってない姉ができたのでした
そんなある日、シンデレラの父親が、病気になってしまい、いなくなってしまいました
そして、シンデレラに残されたのは、血の繋がっていない母親と姉が出来て、三人で暮らす事になったのでした・・・
「うふふふふ、今日もまた一人・・・・捌いたわ・・・・・」
「お母様・・・それは魚です、せめて一匹と言っていいのでは・・・」
「貴方も裁かれたいの・・・」
「いえ・・・」
シンデレラの継母は、包丁を持つと不気味に笑っていました
はっきり言いましょう、怖いです、まるで人を殺せそうな眼光をしていたりしてました
「シンデレラ、掃除はやったの？」
「やりましたけど・・・」
「なら、こっちもお願いね、私、もう寝るわ～音をうるさくすると、

どうなるかわかってるわね?」
「は、はい・・・」
シンデレラの姉は、そうやっていっつも何かを押し付けていたのでした
そんなある日、お城では、こんな事が行われてました
「うむ・・・困った・・・」
「どうかされました?王子様」
「父上が、そろそろ嫁でも取れとかほざいてな、そんな人物は、いないんだが・・・とか、答えたら、探せとか言ってきたのだ、一体どうしたらいいんだ?」
「なら、舞踏会とかを開いてみたら、いかがかと」
「舞踏会か・・・あまり気乗りせんが、仕方がない、やるか・・・」
「では、準備します」
「頼んだぞ」
「全く、これできまればいいんだがな・・・」
そう、王子は呟いていいました
そして、王子様が舞踏会を開くとお触れが出たので、その噂は、シンデレラが住んでいる家でも、聞こえてきたのでした
「王子様が開く舞踏会ね~、よし、行こうかな?」
「なら、私も・・・うふふ、楽しそうね・・・」
母親と姉は、そう言うのでした
シンデレラはと言うと
「なら、私も・・・」
「あら、貴方はだめよ」
「そう、家で待ってなさい、貴方はお留守番よ」
「・・・分りました」
そう、シンデレラは、家で待つ事にしたのでした
そして、母親と姉は、ドレスに着替えて、王子がいる、お城へと出かけて行きました
シンデレラは、家にいます

シンデレラは、こう思っていました
「はあ～、私もお城に行けたらなあ・・・」
「その願い、叶えてあげるわ～」
そう言った者がいました、その声に驚いて、外を見ると
いかにも怪しい格好をした、帽子に黒マントをかぶっていました
そんな姿を見て、シンデレラはというと、台所から凶器を持ってきて
「ど、泥棒・・・家を守らないと・・・大丈夫、イタイのはサイショダケ・・・ウフフフフ」
その眼は、かなりいっちゃった目をしたりしました
「ストーップ！私を殺す気ですか！？イタイのはサイショダケって、かなりヤバイデショ！？私は、魔法使い、貴方の願いをかなえに来たの、だから、そんな物騒なもんは、しまって」
「・・・そう、私の願いを？」
「え、ええ、貴方はシンデレラと言うのよね？」
「なんで名前知ってるの？まさかストーカー・・・」
「ちっが～う！魔法使いは、何でもお見通しなの！、はあはあ・・・つ、疲れる・・・、え～ごほん、シンデレラ、貴方、お城に行きたがってたわね？」
「え、ええ、まあ、そう言われればそうだけど・・・」
「じゃあ私がその願いをかなえてあげましょう、まずは衣装チェンジね？行くわよ、レッツ、イリュージョン！」
魔法使いの魔法？みたいな白い煙が現われて、煙が晴れると、そこにいたのは
奇麗なドレスを着た、シンデレラがいました
「こ、これが私？」
「そう、あとこのガラスの靴を貸してあげるわ、あくまで貸すだけよ？で、十二時になったら、返してほしいわね」
「なんで、十二時？」
「色々とこっちはこっちで、あるのよ、じゃあ、行きましょう、私が、お城まで連れってってあげるわ」

「そう、解ったわ」
こうして、魔法使いに連れられて、お城へと向かったのでした
お城の中は、既に舞踏会が行われていて、王子は悩んでいました
「一体、誰に決めたらいいんだ？」
そう言っています、そこにシンデレラと魔法使いがやって来ました
それに気がついた継母と姉はと言うと
「まさか、シンデレラ！？何故ここに・・・」
「というか、あの衣装、うちに無いやつね・・・どうしたのかしら？貰いもの？」
そんな事を言っていたのでした
そして、その姿を見た王子はと言うと
「美しい、お嬢さん、ぜひ私と踊ってくれ」
そう手を取っていました、手を取られた者は、困惑しました、それは何故かと言うと
「え・・・・・・・・・私？」
そう、王子が手に取ったのは、きれいなドレスを着ているシンデレラでは無く、隣にいる魔法使いなのでした
「王子様？何故、私と・・・」
「一番好みだからさ」
それを聞いた、シンデレラは言うと
「お・う・じ・さ・ま？何を言っているんです？ふつうは、私に声をかけるんじゃないんですか・・・うふふふふ、これじゃあ私、ここに来た事、馬鹿らしいじゃないですか・・・」
「あ、いや、そんな事は・・・」
「許しませんよ・・・うふふ・・・」
シンデレラは、隠し持っていたのか、いきなり凶器を出しました
それを見て、魔法使いはと言うと
「私、いなくなったほうがいいですね、で、では～さよ～なら～」
その場から凄い速さで、いなくなりました
「あ、ま、待ってくれ！おいてかないでくれ！」

「王子様・・・？」
「う・・・あ～もう、私が悪かった！確かに君も美人だ、可愛い、その衣装だってとても似合っている！だから、その武器をしまってくれ～」
「分かればいいんです、王子様、こんな私と踊ってくれますか・・・？」
「あ、ああ・・・」
こうして、シンデレラは、王子と踊りました
そして、十二時になったので、シンデレラは、魔法使いに言われた事を思い出して、こう言いました
「私、時間なので、失礼します！」
「あ、ま、待ってくれ！せめて名前を！」
王子はそう言いましたが、シンデレラには聞こえてなかったらしく、シンデレラは家へと帰ってしまったのでした
後日、王子は、兵隊に言います
「おい」
「はい、何でしょう」
「舞踏会で、踊った相手を見つけてきてくれ、頼むぞ」
「はあ、解りました、でも何でです？」
「気にいったからだ、文句はあるか？」
「いえ、別に、では、行ってきます」
「頼んだぞ」
そう言って、兵隊は、王子の元からさりました
そして、すぐにシンデレラが何所にいるか、わかったので、シンデレラがいる家に行って、こう言います
「シンデレラ様、王子が呼んでいます、来てくれますか？」
「よろこんで！」
即答でした、一瞬の迷いもありませんでした
こうして、シンデレラは、王子に嫁ぎ、継母と姉もお城で暮らす事になって、仲良く暮らす事になったのでした

シンデレラは、王子によく、こんな事を言っていました、それはと言うと・・・

「王子様・・浮気したら、許さないからね?ウフフフ・・・」

「あ、ああ・・・」

こうして、シンデレラは、末永く王子と暮らしましたとさ、めでたしめでたし・・・

～第五十四話～俺と学園祭その2～（後書き）

今回は、劇パートメインです。

～第五十五話～俺とヒロイン～（前書き）

はい、零堵です。
もうすぐ文字数が、十万文字いきます

～第五十五話～俺とヒロイン～

学園祭も無事に終わり、俺こと南山真琴（みなみやままこと）は、行く所があった
それはと言うと、バイト先の秋葉原である
俺は、電車に乗り、秋葉原に辿り着く
季節は夏と違い、秋に突入しているので、あんまり暑いとかは、無かった
人もそんなに多くなく、スムーズに街中を歩けたり出来ている
俺は、数分歩いて、俺のバイト先、ラブ喫茶アイライクの中へと、入って行った
「いらっしゃい、あ、まこさんでしたか」
そう言ってきたのは、俺の同僚の桐谷佐奈（きりやさな）さんだった
「うん、おはよう、じゃあ早速着替えてくるね」
「分かりました、お待ちしていますね？」
そう言って、俺は、控室へと入る
控室に入ると、もう既に美鈴（みれい）がいた
「あ、やっほ～まこ」
「おはよう、美鈴、早いね」
「そう？いつもどおりだと思うけど？」
「そう、じゃあ、着替えるね？」
そう言って、俺は、服を脱いで、用意された制服へと着替える
着替えている途中
「ねえ？まこ？」
「何？」
「なんか痩せた？とってもスマートに見えるけど？」
「そう？別に変ってないと思うけど？」
「そう？私も、思い違いかな？」
「そうだよ」
そう言いながら、俺は着替えた

俺が着る服装は、ここのお店の衣装は、メイド服をモチーフにしているが、俺が着てるのは、ギャルソンタイプの服だった
それに着替えて、美鈴と一緒に、ホールに出て、仕事をする
仕事をしていると、俺に話しかけて来る者がいた
「あれ・・・?真琴?」
「いらっしゃいませ・・・って、もしかして・・・麗華(れいか)?」
「そうよ?久しぶりね～」
そう言ったのは、夏休みに、ドラマに出たので、そこで一緒に共演した蓮城麗華(れんじょうれいか)が、いたのであった
「久しぶり」
「一体何してんの?こんな所で?」
「何してると言われても、この服装からして分かるだろ?ここで、働いてるの」
「へえ～以外、真琴はてっきり、他のドラマとかに出演してると、思ったわ?それかモデルね」
何でそう思うんだ?かなり疑問何だが・・・
「とりあえず、お客様だから、ご注文は?」
「そうね・・・じゃあ、この天使の微笑み、頂こうかな?」
「かしこまりました、天使の微笑みですね、では、直ぐにお持ちいたします」
俺は、注文を聞いたので、厨房へと入る
そして数分後、天使の微笑み＝ショートケーキをトレーに乗せて、麗華の所に持って行った
「お待たせしました、天使の微笑みです」
「ありがと、あ、そうだ、真琴?この後あいてる?」
「この後?バイトが終わったら、とくに用事はないけど・・・」
「じゃあ、決まりね?私、ここで待ってるから、必ず来てね?」
そう言って、俺に一枚の紙を渡す
中には、地図が描かれてあって、そこに赤い丸印が記してあった
「この赤い丸印の所に行けばいいの?」

「そう、じゃあ、待ってるわ」

そう言って、いつの間にか食べ終わった麗華は、店を出ていく

俺は、どうしようか迷ったが、結局仕事が終わってから、その場所に行く事にしたのであった・・・

～第五十五話～俺とヒロイン～（後書き）

凄い書いたなあ、と今更、実感しました

～第五十六話～俺とヒロインその2～（前書き）

零堵です。文字数十万達成かな？

～第五十六話～俺とヒロインその2～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、ラブ喫茶アイライクで、働いていた
そこにやって来たのは、以前、ドラマで共演した、蓮城麗華（れんじょうれいか）であった
麗華は、俺に、「この場所に来て？」と言って、一枚の紙を渡し、
お店を去っていったのである
俺は、どうしようか迷ったが、気にはなったので、バイトが終わってから、行く事にしたのであった
バイトが終わって、俺は、私服に着替えて、渡された紙を頼りに歩く
そして、数十分後、その場所に辿りついた
その場所は、大きな建物で、その外に、麗華がいた
「あ、真琴、待ってたわ」
「一体、ここで何するの？」
「私のパートナーとして、ある番組に参加して欲しいのよ」
「ある番組？」
「そう、クイズ・リミックスと言う番組、聞いたことがない？」
「あ、夜にやってるクイズ番組だよね？たまに妹と見てるよ」
「真琴、妹いるんだ？真琴に似てるの？」
「いや、似てはないかな・・・まず、背が全然違うし」
「まあ、真琴、背、高いもんね？まあ、兄としては背の高い方なんじゃない？」
「いや・・・兄じゃなくて、姉だけど・・・」
「え？真琴・・・女だったの？」
「そうだけど・・・もしかして、男だと思ってたの？」
「だって、ドラマでは男役だったし、お店ではウエイターの格好してたでしょ？男だと思ってたわ」
「そう・・・」
「ま、まあ性別の事は置いといて、真琴、私と一緒に参加してくれない？」

俺は、どうしようかと、迷ったが、せっかく来たので、参加する事に決めた
「まあ、いいかな」
「ありがと～、じゃあ行きましょう」
そう言って、俺は麗華の後をついていく
そして、辿りついた場所は、スタジオの中で、回答席が用意してあって、そこに俺と麗華は、座った
他の参加者もいるので、ちょっと緊張してしまった
そして、時間が過ぎて、番組収録がスタートした
司会者の男性が、こう言う
「はじまりました、クイズ・リミックス！今回初登場してくれたのは、アイドルの麗華さんです！麗華さん、何か一言」
「は～い、麗華です～、クイズ、がんばります～」
「は～い、ありがとうございます、おや？ところで、隣にいる彼は？」
「あ、この人は、私が出演したドラマ、天空カイザーのレキ役をやってた、真琴さんですよ」
「ほう、あのドラマのですか、真琴さん、何か一言お願いします」
「え？あ、よ、よろしく」
「ありがとうございます、では早速始めましょう、クイズ・リミックス！」
司会者がそう言うと、はい、ＯＫです～とスタッフらしき人が言ったので、番組収録が中断した
「なあ・・・あの司会者、自分の事、彼って言わなかった・・・？」
「あ、確かに、まあ、いいんじゃない？」
「何故？」
「今更本当の性別言う？レキ役って男の役だったでしょ？」
「まあ、確かに・・・」
「じゃあ、そのままでいいじゃない」
そういうものか？とか思ったが、言わない事にした

そして、番組の収録がスタートする
俺や麗華は、分かる問題は答えていき、分からなかったら、用意されているボタンを押さなかった
そして順調に収録が続いて、何とか無事に番組の収録が終わったのであった
番組収録が終わって、あたりはもうすっかり暗くなったので、俺は、帰る事にした
帰ろうとすると
「真琴、今日はありがとね？あ、これ、私の携帯番号、なるべく出るようにするわ、だから、真琴の番号も教えて？」
「そう言われても・・・実は、ケータイを持っていないんだけど？」
「え？そうなの？じゃあ、どうやって真琴と遊べばいいの？」
「じゃあ、美鶴（みつる）母さんに聞いてみてよ？母さんなら、何とかしてくれると思うし」
「分かったわ、仕事場で会うときに、聞いてみるわね？」
「じゃあ、帰るね？」
「りょ～かい、じゃあ、さようなら～」
そう言って、俺は、家へと帰る
家に帰ると、妹の亜季（あき）が、不機嫌な顔をしていた
「お姉ちゃん・・・」
「あ、亜季？」
「なんでこんなに遅かったの？私、お姉ちゃんのために、御馳走用意して、待ってたのに・・・いつもなら、もう既に帰ってきていて、私と一緒にいる筈でしょ？お姉ちゃん・・・」
「ご、ごめん、ちょっと人と、会っててね」
「誰と？まさか・・・男？」
「いや、女だけど・・・」
「どういう関係？もしかして、お姉ちゃんの事好きだとか？そうだとしたら、お姉ちゃんは渡せないよ・・・？」
「い、いや、どう言う関係と言われても・・・まあ、芸能人だし・・

・」
「そうなの？」
「まあね、だから、滅多に会うことはないから、亜季、安心して？」
「そう・・・お姉ちゃんが、そう言うなら・・・、じゃあ、ご飯で来てるから、一緒に食べよ？」
「そうね」
俺は、そう言って、亜季と一緒に夕御飯を食べる
そして、以外に疲れたのか、眠くなったので、寝る事にした
こうして、俺の一日が、終わりを告げたのであった・・・

～第五十六話～俺とヒロインその2～（後書き）

零堵です、この物語も続きますね～、まあ、まだまだ続きます～

～第五十七話～俺と先生とネットゲーム～（前書き）

アクセス数が三万超えして、うれしいです～

～第五十七話～俺と先生とネットゲーム～

季節もすっかり秋になり、紅葉やら落ち葉とかが目立つ頃
俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、いつものように学校へと向かっていた
通学路をいつものように歩く、そして数十分後、俺の通っている山野辺高校に、たどり着いた
校舎の中に入り、上履きに履き替えて、自分のクラスへと入る
クラスの中に入ると、既に何人かは、集まっていて、色々な話をしていた
俺は、自分の席に座り、教科書やノートを机の中に入れて、それからぼ～っとしていた
そして、時間が過ぎて、チャイムが鳴り、担任の朝崎翠（あさざきみどり）先生が、入ってきて、授業が始まった
普通に授業が始まって、そして数時間が過ぎて、お昼
俺は、妹の亜季（あき）が用意してくれたお弁当を、食べる事にした
中身を見てみると、驚いた
何故なら、海苔でＬＯＶＥとか書いてあったり、ハートマークのハンバーグがあったりしたからである
これは、他の人には見せられないな・・・と、思い、周りから隠すように食べる事にしたのであった
そして、時間が過ぎて、午後の授業が始まる
午後の授業は、それなりに簡単と言うか、教師が既にやる気なさそうだった
だって、プリントを終わった者から、自由にしていいぞ～とか、言っていたからである
先生がそう言ったので、俺はプリントを終わらせて、寝る事にした
そして時間が過ぎて、放課後
目が覚めると、既に誰もいなかった、どうやら、俺に声をかけないで、そのまま皆、帰って行ったようである

まったく・・・誰か起こしてくれてもいいんだがな・・・とか、思っていると
「ん？南山、まだ残ってたのか？」
そう言ったのは、翠先生だった
「あ、はい、今から帰りますね」
そう言って、俺は、帰り支度をして、教室から出ようとすると
「あ、そうだ、南山、これから暇か？」
「暇と言われれば、暇ですけど・・・」
「そうか、じゃあ、私についてきてくれ、ちょっと頼みたい事があるんだ」
「分かりました」
そう言って、俺は、先生の後をついていく
先生の後をついていって、たどり着いた場所は、宿直室と書かれている部屋だった
翠先生は、その部屋の鍵を開けて、中へと入る
俺も中に入ると、先生はすぐにパソコンの電源を入れた
「あの、先生、用事って何ですか？」
「ああ、芹と一緒にやろうと思ってたゲームがあるんだがな？芹の奴が断わりやがったから、他に誰か探そうと思ってた所に、南山がいたからな、誘ったわけだ」
「はあ・・・ところで、何のゲーム何です？」
「ああ、これが、そのゲームだ」
そう言って、パソコン画面を指差す
画面の中には、リバース・ファンタジアと書かれたサイトが、表示してあった
「リバース・ファンタジア？」
「そう、まあ所謂、ＲＰＧのネットゲーだな、それを一緒にやろう」
「はあ、でも、いいんですか？」
「何がだ？」
「勝手にこんなゲームとかやってですよ、一応これ、学校の備品じ

ゃないですか？」
「大丈夫だ、問題はないぞ、今までつかってきて、一度も文句や苦情とか来てないからな？」
「・・・・そうですか」
「じゃあ、早速やろう？私が、操作方法教えるからな？」
「分かりました、じゃあ、やってみます」
こうして、俺は、先生と一緒に、ネットゲーム、リバース・ファンタジアを、やる事になったのであった・・・

～第五十七話～俺と先生とネットゲーム～（後書き）

零堵です、この物語もそろそろ六十話行きますね～

～第五十八話～俺と先生とネットゲームその2～（前書き）

続きの話です

～第五十八話～俺と先生とネットゲームその2～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、担任の朝崎翠（あさざきみどり）先生に誘われて、ネットゲーム、リバースファンタジアを、やる事になったのであった
「じゃあ、早速、やり方を教えるわ、まず、キャラ設定を決めてな？」
「キャラ設定？」
「画面に表示されているだろう？」
そう言って、パソコンを指差す
画面上には、キャラを選択してくださいと、表示されたので、俺は、キャラを女に設定した
「じゃあ、次はそのキャラの名前だな、一度つけるともう、変えられないから、大事に決めるんだ」
「ちなみに先生は、どう言った名前に？」
「私か？私は、これだ」
そう言って、ノートパソコンの画面を見せる
そこに映っていたのは、剣を装備した女戦士で、キャラの名前にグリーンと書かれてあった
「翠先生だから、グリーンですか？」
「まあな、南山は、どうする？」
「そうですね・・・じゃあ」
俺は、考えた後、トゥルーと、名前をつけた
「真琴＝真実でトゥルーか？」
「まあ、そうです」
「じゃあ、次は、職業を決めてな？」
「職業？」
「そう、ちなみに全部で、七種類あるぞ？剣士、魔法使い、僧侶、商人、魔剣士、魔物使い、賢者があるぞ」
そう言われて、俺は何にしようと考えて、魔法使いに決めた

「魔法使いだな、じゃあ、まず操作方法だ、移動は移動キーで、マウスで選択、基本的な操作は、そのぐらいだな」
「そうですか」
そう言って、俺は操作をする
操作をしていると、でろでろリーンとか音がなって、モンスターらしき物が現れた
「なんかえらく、劣悪なスライム？」
その姿は、スライムの形をしていて、顔が物凄い顔をしている
「そいつは、デススライムだな、死の呪文、デットスペルには気をつけろよ？」
「そう言われても、あ、死んだ」
デススライムの一撃と言うか、死の呪文？らしき言葉で、トゥルーは、死んでしまったと表示された
すると画面が真っ暗になり、白髪の爺さんが画面上に現われて、「死んでしまうとは何事じゃ、もう一回再チャレンジするのじゃ」とか、ボイス有りで言ってきた
「先生、このキャラは？」
「ああ、こいつは、リロード爺じゃ、プレイヤーが戦闘不能に陥った時に現われるキャラだな、声優もハマリ役のあの人を使ってるし、なかなか豪華だぞ？それにこの声、あの太鼓の神様の声も当ててるしな？」
どうりで聞いた事がある声だと思った
前にゲーセンで、太鼓の神様をやったからである
結局、何回かやられた後、プレイ方法に慣れてきて、レベルも結構上がっていった
そんな事をしていると
「南山、もうすっかり暗くなったけど、大丈夫か？」
確かに、外を見てみると、日が落ちて真っ暗になっている
「あ、本当だ、じゃあセーブしてやめますね」
「おう、そうした方がいいな、そうだ、これを貸してやろう」

そう言って、先生は小型のノートパソコン、通称ミニパソと呼ばれる物を出してきた
「これは？」
「これは、今、結構使われてるミニパソだな、これを貸してやる、まあ飽きたら返してくれて構わないぞ」
「でも、いいんですか？こんな物を貸してくれて」
「一緒に遊んでくれたお礼だな、まあ気にするな、じゃあ帰るとしようか」
「はい、そうですね」
俺は、先生と一緒に宿直室から出て行って、先生に送って貰って、家に着く
家に着くと、妹の亜季（あき）が泣きそうになりながら、待っていた
「お姉ちゃん、遅い・・・」
「ごめんごめん、ちょっと先生と盛り上がってね」
「先生と？？？何で？？」
「まあ、気にしないで、それよりお腹すいたから、亜季、ご飯出来てる？」
「あ、うん、出来てるよ？お姉ちゃん、一緒に食べよう？」
「そうね」
こうして、俺は、先生にミニパソを貰ったので、明日は丁度、学校が休みの日
休日に、今日やったリバース・ファンタジアをやろうかな？と、思っていたのであった・・・

～第五十八話～俺と先生とネットゲームその2～（後書き）

ちなみに自分は、ネットゲーム、登録がいちいち面倒で、ほとんどやってないんですよね
登録しても、パスを忘れるとか・・・（だめじゃんw）

～第五十九話～俺と先生とネットゲームその3～（前書き）

続きの話です

～第五十九話～俺と先生とネットゲームその3～

学校が休みの休日の日、俺こと南山真琴（みなみやままこと）は、朝起きて、朝食を取り、妹の亜季（あき）に外に行かないか？と、誘われたが、それを断って、家にいる事にした
亜季は、それを聞いて、「じゃあ行ってくるね」と言って、出かける
美鶴（みつる）母さんも、朝からいなかったので、この家には、俺一人だけになったのである
俺、一人だけになったから、まず何をやろうか・・・と、考えて、先生から借りた、ミニパソを起動させる事にした
ミニパソを起動して、さっそく、先生に紹介されたネットゲーム、リバース・ファンタジアの続きをプレイする事にしたのである
ちなみに、俺の使用しているキャラは、主に魔法攻撃が中心の魔法使いで、キャラ名にトゥルーと、名付けたのであった
早速プレイして、デロデロリーンとか鳴ったので、戦闘になった
相手は、不細工な顔に、こん棒を持って頭に二本角を生やしていた
名前にコーブリンと書かれている
俺は、早速コマンドを表示させて、魔法を発動する
「ファイヤーボール！」
ミニパソから、呪文を言うボイスが聞こえてきた
どうやらこのゲーム、メインシーンはテキストだけで、戦闘シーンやイベントシーンになると、ボイス有りのゲームのようである
魔法が命中して、コーブリンをやっつけた、トゥルーは、レベルが上がったと表示された
ちなみにレベルを確認してみると、レベル１０になっていた
最初の頃と比べて、ゲームオーバーにならなくはなったし、結構やりだすと、楽しいかな・・・とか、思い始めてしまったのである
そして時間が過ぎて、リバース・ファンタジアをやっていると、家の電話が鳴ったので、出る

「はい、南山です」
「お、その声からして、真琴か？」
「その声は、先生ですか？」
「ああ、そうだ」
「って、自分の名前、呼び捨て・・・」
「まあいいじゃないか、私の事も翠でいいぞ？」
「じゃ、じゃあ、翠先生と呼びます・・・、で、翠先生？一体何の用事ですか？」
「いやな？丁度今、起きてな？早速リバース・ファンタジアをやろうと思ったんだが」
「今起きてって・・・今、お昼ですよ？それまでずっと寝てたんですか？」
「まあ、そう言うな、でな？パーティを組んでやらないかと、電話したんだ、どうだ？」
俺は、それを聞いて考えて、こう言った
「まあ、いいですよ」
「よし、分かった、じゃあ私がどのエリアにいるか、教えるな？」
そう言って、先生はどこのエリアにいるか、示して電話が切れる
俺は、それに従ってキャラを移動させる
そして、そのエリアにたどり着くと、既に先生の使ってるキャラともう一人いた
「よう、待ってたぞ」
そう先生のキャラが、チャット機能を使って、話しかけてくる
「お待たせしました、あの先生の隣にいる人は？」
「あ、そう言えば言ってなかったな、おい」
「まさか、南山さんが一緒にやってるなんてね？翠に付き合ってくれてありがとね？」
「何でお前が礼を言っているんだ？」
「あの、もしかして・・・」
「そう、ここでは初めましてですね、私、体育教師の川原芹（かわはらせり）ですよ、

よろしくね?南山さん」
「あ、そうだったんですか、よろしくです、先生」
「私のことは、芹でいいわよ?ほら、翠、今日は何所を攻略しに行くの?」
「そうだな?今日は、このダンジョンを攻略しようと思ってるんだ」
そう言って、マップ画面を開いて、表示したのは、死霊の森と呼ばれているダンジョンだった
「そこに行くの?私達のレベルでクリア出来る?」
「まあ、三人もいるんだ、何とかなるだろ?」
「そんな曖昧な・・・南山さんは、どう思う?」
「今さら、翠先生の言う事ですし、反論はないですよ・・・」
「そうね・・・全く、翠にも困ったものだわ、じゃあ行きましょうか?」
「おう」
「分かりました」
こうして、俺は、先生二人と、死霊の森とか言うダンジョンを攻略する事にしたのでした

～第五十九話～俺と先生とネットゲームその3～（後書き）

ネットゲームの話、まだ続く感じですね

～第六十話～俺と先生とネットゲームその４～（前書き）

続きの話です

～第六十話～俺と先生とネットゲームその４～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、休日の日、担任の先生から借りた、ミニパソでリバース・ファンタジアと呼ばれるネットゲームをやっているのであった
リバース・ファンタジアは、ＲＰＧなので、俺の他に一緒にやってるのは、女剣士のキャラの名前がグリーン（翠先生）と僧侶のキャラをしてる、セーリ（芹先生）と、俺は魔法使いのキャラで、名前がトゥルーと名付けた
そして、その三人で、死霊の森とか呼ばれるダンジョンに向かったのである
死霊の森は、森というだけあって、木で埋め尽くされている
「ここが、死霊の森・・・」
「えらく殺風景なグラフィックだな、もうちょっとマシなのはなかったのか？」
「翠・・・何言ってるのよ・・・全く、南山さんも、そう思うでしょ？」
「は、はあ・・・」
「ところで、芹、ここにいるモンスターって解るか？」
「ちょっと待って、え～っと、ここには死霊系のモンスターがいるみたい，法術系の魔法が効くみたいよ？」
「そうか、じゃあ通常攻撃はどうなんだ？」
「さあ、それは戦ってみないと・・・っと、敵が現れたわ！」
そう芹先生が言うと、デロデロリーンと音が鳴って、キュートな姿をしたウサギが現れた、しかし、名前に「デス・ラビット」とついている
「きゃ～可愛い～」
「お、おい、芹、あれは敵だぞ」
「何言ってるのよ？こんな可愛いモノが敵なわけ・・・」

そう言っていると、デス・ラビットの攻撃、サイレントノクターン！とか言う技を発動
一気にプレイヤーのライフゲージを三分の一まで減らしたのであった
「っぐ、おい芹、今の攻撃で、ダメージがやばくなってる、回復してくれ！」
「わ、解ったわ！ヒーリング！」
そう唱えたが、何も起こらなかった
「あ、あれ？」
「お、おい・・・」
「えへへ・・・どうやら、今の技、呪文禁止の効果もあるみたい、てへ♪」
「何だと～！っち、しょうがない、真琴、魔法攻撃じゃなくて、武器で攻撃してくれ、こっちは剣で応戦する！」
「わ、解りました！」
そう言って、戦闘が始まった
俺は、魔法使いなので、魔法が使えず、装備している杖で、デス・ラビットに物理攻撃を与えてみる
しかし、全く効果がなく、ダメージもほとんど減ってはいなかった
そこに、剣士の翠先生が、剣技で、デス・ラビットを一刀両断するデス・ラビットを倒したと、表示されて、レベルが上がったと、表示された
「ひ、酷い・・・あんなにかわいかったのに～」
「あれは、敵だったんだぞ・・・いい加減目を覚ませ」
「判ってるわよ・・・」
「じゃあ、奥に行くぞ」
「りょ～かい」
「判りました」
そう言って、死霊の森の奥深くへと、進む
すると再び、デロデロリーンと音がなって、モンスターが現れた
現れたのは、ゾンビーと名前が付いていて、明らかにアンデット系

のモンスターであった
「う〜わ〜、グラフィックが劣悪だな・・・こりゃ」
「確かに・・・」
「なんか夢に出てきそうな、キャライラストね・・・」
「とにかく倒すぞ、とりゃあ！」
翠先生が、そう言って剣を構えて、ゾンビーに攻撃
けど、全く効いていなかった
「こうなりゃ、魔法で頼む」
「やってみます、え〜っと、アンデット系だから、光魔法かな？シャインビーム！」
そう俺のキャラが唱える
すると、ゾンビーが消滅したと、表示された
「よし、先に進むぞ」
「りょ〜かい」
「判りました」
そう言って、先に進む
そして、数時間たって
「っと、翠に南山さん」
「何だ？芹」
「私、これから出かけなくちゃいけないから、落ちるね？それじゃね？南山さん、また学校で」
そう言って、芹先生がログアウトしたらしく、芹先生の姿が消えた
「って、おい、芹！」
「翠先生、自分もそろそろ落ちないと、妹帰ってきそうですし・・・」
「っち、しょうがないな、じゃあ今日の冒険はここで終わりにするか、じゃあ解散だな？それじゃ、学校で」
そう言って、芹先生もログアウトした
俺も、セーブしてからログアウトをする
いつの間にか夕方になっていて、さすがにゲームやりすぎたな・・・

と、後悔したのであった・・・

～第六十話～俺と先生とネットゲームその４～（後書き）

六十話行きました～、まだまだ続きますって感じです

～第六十一話～俺と体育祭～（前書き）

はい、零堵です。この物語も結構、続いてますね～
まあ、まだまだ続くと思います

～第六十一話～俺と体育祭～

季節もすっかり、秋になり、ちょっと肌寒くなってきた頃、俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、いつものように学校へと向かっていた
いつもと同じ通学路を歩いて、俺の通っている山野辺高校にたどり着く
校舎の中に入り、上履きに履き替えて、自分のクラスの中へと入る
中に入ると、数人いる程度で、そんなに騒がしくはなかった
そして、時間が過ぎて、チャイムが鳴り、担任の朝崎翠（あさざきみどり）先生が、やってきて、こう言う
「みんな、おはよう、さて、もうすぐ体育祭だが、この時間で、何の競技に出るか、決めたいと思うぞ、じゃ～委員長、よろしくな」
「は、はい」
そう言って、このクラスの委員長、西崎彩香（にしざきあやか）が、黒板の前に出た
「先生が決めろと言ったので、じゃあ早速決めたいと思います、先生、種目は何ですか？」
「そうだな、決めるのは、百メートル走、クラス対抗リレー、借り物競争、障害物競争ぐらいかと、思うぞ」
「わかりました」
そう言って、委員長は、黒板にチョークで、書き込む
「では、早速決めたいと思います、百メートル走に出たい人」
委員長がそう言うと、数人の男女が手を挙げた
それを見て、委員長が黒板に名前を書く
「はい、じゃあこれでいいですね、では、次にクラス対抗リレーのメンバーを、決めたいと思います、誰か、希望する人、いませんか？」
委員長がそう言うと、これもまた、数人の男女が手を挙げる
ちなみに、俺はと言うと、その光景をぼ～っと見ているだけである
「じゃあ、これで決まりですね、次は、借り物競走のメンバーを決

めたいと思います、やってみたい人いませんか？」
借り物競走ね・・・、なんか楽しそうだな・・・と、思い
とりあえず希望する事にして、手を挙げた
「はい、南山さんですね、借り物競走は南山さんっと」
そう言って、委員長は俺の名前を書く
すると、はいっと手を挙げた者がいた
「私も、やってみたいです」
そう言ったのは、このクラスでアイドル的存在の、汐崎美咲（しおざきみさき）だった
「じゃあ、汐崎さんも参加希望ですね？」
「はい、私も借り物競走に立候補します」
「わかりました、先生、借り物競走の人数って、何人ですか？」
「え～っと、そうだな、確か二人だったかな」
「じゃあ、他に希望する人もいませんし、これで決まりですね？よろしいですか？」
「はい」
「じゃあ、これで決まりました、次に障害物競争のメンバーを決めたいと、思います」
そう言って、障害物競争のメンバーを決めたのであった
障害物競争には、俺の親友の栗谷美鈴（くりやみれい）と、演劇部の有栖川美紀子（ありすがわみきこ）が、出るみたいであった
こうして、体育祭に出るメンバー、全て、決まったのである
そして、時間が過ぎて、放課後
帰ろうと、用意していると
「まこ～」
話しかけてきたのは、美咲であった
ちなみに、ちょっと苦手なのである
まあ、なぜ苦手なのかは、前に手紙をもらったからである
「な、なに・・・美咲さん・・・」
「私、まこと一緒の競技に参加したくて、同じ競技に立候補したんですけど、駄目だったですか・・・？」

「い、いや・・・自分としては、駄目じゃあないよ?」
「よかった・・・まこ・・・一緒に、頑張りましょうね?」
「う、うん」
そう話していると、美咲を呼ぶ声がした
「あ、呼んでますので、私は行きますね?私、まこの事、諦めてませんから、では・・・」
「さようなら・・・」
そう言って、俺の傍から、美咲が離れて行った
俺は、まだ諦めてなかったのか・・・と、思いながら
家に帰る事にしたのであった・・・

～第六十一話～俺と体育祭～（後書き）

アクセス数が三万五千超えましたｗ
ありがとうございます～

～第六十二話～俺と体育祭その2～（前書き）

はい、復活です～
これからも、続けたいと思います

～第六十二話～俺と体育祭その2～

体育祭に何に出るか決めて、そして、体育祭当日
その日は快晴で、雨なんか全く降る事は無かった
俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、体操着に着替えて、校庭へと出る
校庭には、既に他のクラスも集まっていて、結構な人数になっていた
そして、校長先生の話が、入る
「え～本日もお日柄もよく、絶好の体育祭日和となりました、皆さん、頑張って、いい体育祭にしましょう」
とか、言っていた
そして、競技が始まったのである
最初に始まったのが、百メートル走だった
俺は、この競技に参加していないので、観戦する事に決めた
他の選手の走りを見ていると
「まこ～」
いつの間にか、隣にいたのか、親友の栗谷美鈴（くりやみれい）が、話しかけてきた
「何？美鈴」
「今日、晴れてよかったね？」
「まあ、そうかな」
「ところで、まこの家族って、応援に来てたりするの？」
「さあ、朝、出る時に、妹は「絶対見に行くからね？」と言ってたけど、母さんは「仕事が終わったら、みにいくわ」とか言ってたかな、そういう美鈴は、どうなの？」
「私？ほら、あそこにいるよ？」
そう言って、美鈴は、指差す
その方向を見てみると、美鈴の家族らしき人が、こっちに気がついて手を振った
「あれって・・・美鈴のお姉さん？えらく美鈴に似てるというか、双子？」

そう、その手を振った人物を見てみると、美鈴そっくりだった、髪型も身長も同じぐらいなので、これは、間違えるのではないか?と、思われるほどである
「双子じゃないよ?あれは、私のお母さんだよ～」
「嘘・・・」
「嘘ついてどうするのさ?」
「思いっきり、双子に見えるんだけど・・・マジで?」
「マジだよ～」
ある意味凄いな・・・と、俺は、思ってしまった
そして、プログラムも進んで、お昼休憩になった
ちなみに、この体育祭は、色別で対抗しているので、俺達は赤組
後輩の東雲玲(しののめあきら)は、どうやら白組みたいであった
お昼は、教室か外で、食事休憩にしようかな?と思っていたら
「お姉ちゃん～」
俺に、声をかけてきたのは、妹の亜季(あき)だった
隣に美鶴(みつる)母さんもいる
「真琴、来てあげたわよ～」
「お姉ちゃん、お姉ちゃんの分のお弁当、作ってきたから、一緒に食べよ?」
「分かった」
俺は、そう言って、家族と合流して、食事にする事にした
食事をしていると、ひそひそと何か聞こえる
「なんか、聞こえるんだけど・・・」
「多分、お母さんを見て言ってるんじゃない?ほら、お母さん、女優だしさ?」
確かにそうかもな・・・美鶴母さん、全く変装とかしないで、来てるから
女優の美鶴って、バレバレなのだと思った
よく見てみると、母さんに「サイン下さい!」とか言っている生徒までいたし

母さんは「あらあら～」とか言いながら、きちんとサインとか書いていたりしていた
そして、食事も終わり、午後のプログラムを確認していると
「お姉ちゃん、お姉ちゃんは何に出るの？」
そう聞いてきたので
「自分は、借り物競走に出る事に決まったよ」
「そうなんだ、お姉ちゃん、頑張ってね？」
「真琴、私も応援してるから、頑張りなさいよ～」
「分かったよ」
そう言って、家族から離れて、自分のクラスがいる場所に向かった
そして、体育祭午後の部が、始まったのである・・・

～第六十二話～俺と体育祭その2～（後書き）

アクセス数が、三万六千以上超えました～ｗ
ありがとうございます～

～第六十三話～俺と体育祭その3～（前書き）

続きの話です

～第六十三話～俺と体育祭その3～

絶好の快晴で、体育祭日和の日、俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、山野辺高校の体育祭に参加していた
ちなみに、赤組、白組と対抗戦になっているので、俺の所属しているのは、赤組だった
午前の競技が全て終わって、途中結果はと言うと
若干、白組優勢で、赤組は負けているのであった
そして、午後の競技が始まった
俺が、出る事になっている競技は、借り物競走で、その出番を待つ
そして、プログラムが進んで、借り物競走の競技に入り、俺は、競技に参加するので、並んだ
俺の他にこの競技に出るのは
「まこ、頑張りましょうね？」
そう言ったのは、俺のクラスでアイドル的存在の、汐崎美咲（しおざきみさき）だった
「う、うん」
俺は、この汐崎美咲の事、ちょっと苦手なのである
まあ、理由は手紙をもらったからであるのだが・・・
そして、競技が始まり、俺の番になったので、用意する
「位置について、よ～い、ドン！」
そう言ったので、走り出す
走って、落ちている紙に書かれているのを見て、困惑した
紙に書かれてあった内容はと言うと「好きな人」であったからである
・・・一体、どうしたらいいんだ？別に今の所、好きな人＝男はいないし、かといって女が好きという訳でもないし・・・親友の栗谷美鈴（くりやみれい）でも連れていくか？でも、紙見られたら、誤解を生みそうだよな・・・とか悩んで、結局俺はと言うと
「亜季（あき）！」
「な、何？おねえちゃん？」

「一緒に来て！」
「う、うん」
結局、俺は妹の亜季を連れて、ゴールする事にした
ゴールして、紙を審判に見せたら、なんかいい笑顔で「はい、ＯＫです」とか言われた
何がＯＫなんだ？もしかして、俺ってそう言う趣味があるとか思われてるんじゃないだろ～な・・・とか、思ってしまうじゃないか・・・
「ねえ？お姉ちゃん」
「な、なにかな？」
「一体、その紙になんて書いてあったの？」
「え？え～っと・・・家族かな？」
「そう？なんか、別の事書いてあったんじゃない？」
「いやいやいや！そんな事はないよ？」
「なんかあやしいな～？」
妹の視線が物凄く痛かったが、なんとか誤魔化す事に成功した
そして、借り物競走も無事になんとか終わって、結果はと言うと、赤組が逆転したのであった
そして、障害物競争が始まった
これに参加するのは、美鈴と演劇部員の有栖川美紀子（ありすがわみきこ）だった
「今、赤組が勝ってるから、そのまま逃げきろ～ね？栗谷さん？」
「そうだね～、まこ？応援よろしく～」
「あ、ああ、分かった」
なんかこの二人、似てるな・・・性格か？行動とかが結構似ているのか？とか、俺は、思っていた
そして競技が始まり、結果はどうなったのかと言うと、美鈴がこけて、タイムロスになり、白組に逆転されたのであった
戻ってきた美鈴はと言うと
「なはは・・・失敗しちゃった～」
全く反省してないというか、かなりお気楽だった

ま、美鈴だからしょうがないか・・・とか、自分で納得する事にした
そして、最後の競技、クラス対抗リレーが始まって、俺は参加者じゃないので、それを観戦、結果は白組の勝ちに決まったのであった
計算してみたら、美鈴がこけなかったら、そのまま赤組の優勝が決まったのが、あとになって分かったが、皆、誰も美鈴の事を責めるという事はなく、ふつ～に終わりを迎えたのである
体育祭の後片付けをしていると、担任の翠(みどり)先生が
「みんな、おつかれ、差し入れに全員分のジュースを持ってきたぞ、まあ、受け取ってくれ」
そう言って、手に持っているかごに確かに、ジュースが入っていた
俺は、その中から一本受け取って、飲み干す
「とりあえず連絡事項だが、明日は学校が休みになったぞ、何でも体育祭頑張ったご褒美らしい、皆、十分に休んでくれな、それで、明後日から普通の授業だから、忘れんように」
それを聞いて、俺は明日何しようかな・・・とか、考えたのであった
こうして、俺の体育祭は、終わりを迎えたのである・・・

～第六十三話～俺と体育祭その3～（後書き）

アクセス数が結構いって、うれしいですｗ

～第六十四話～俺ととある秋の休みの日～（前書き）

アクセス数が、三万八千超えましたw
ありがとうございます～

～第六十四話～俺ととある秋の休みの日～

体育祭も終わって、次の日は、特別に学校がなく、お休みになったので、俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、どうしようか悩んでいた
本当は、いつものように学校に行く準備をして、家を出て、通っている高校へと向かうのだが、今日は、特別に休みになったので、学校へ行く事は無く、どうしようかな・・・と思ったのである
まあ、先生に借りたミニパソで、ネットゲームのリバース・ファンタジアの続きをやるのもいいし、それか、外に出かけるのをありかな・・・とか、思っていたりしている
そして、悩んだ結果、俺は出かける事にした
理由は、特には無い、まあ、なんか適当に歩いてるとするか・・・と、思ったからである
そうと決めて、俺は動きやすい格好に着替えて、朝ごはんを食べて、家を出るのであった
最初に何所に行こうかな・・・とか、悩んだ末、俺は、山之辺商店街に行く事にした
季節もすっかり秋になって、夏みたいに暑くは感じず、涼しい風が吹いているので、結構気持ちが良かった
数分歩いて、山之辺商店街に辿り着く、山之辺商店街と言うだけあって、午前中だというのに、結構人が集まっていた
俺はと言うと、その商店街の中に入って、色々と見て回る事に決めて、商店街の中を歩く
すると、俺に声をかけてくる者がいた
「あれ？まこ？」
「あ、美鈴（みれい）」
俺が、出会ったのは、俺と同じクラスで、親友の栗谷美鈴（くりやみれい）だった、
美鈴は、手に大きな手提げバックを持っていたりしている
「偶然だね～、まこも買い物？」

「いや、普通にぶらぶらと歩いているだけだよ、そういう美鈴は？」
「荷物見て分かるでしょ？私は、買い物だよ～、まあ買いたい物といっても、食料品だけどね」
「そっか、じゃあ邪魔しちゃ悪いから、行くね？」
「いやいや邪魔じゃないよ？むしろ一緒に行こうよ？」
いや、何でだ？行く理由が無いのだが・・・
「は？何で？」
「別にいいじゃない～、一人で買い物とか、ちょっとつまらないしさ？それに、時間は遅くなってもいいって言われてるし、一緒に見て行こうよ？」
「まあ・・・断る理由もないし、別にいいけど」
「じゃあ、決まりね？レッツゴ～」
「お、おお」
こうして、俺の散歩に、美鈴が加わった
美鈴と一緒に、歩いていると、美鈴がこう言って来た
「そういえばさ？」
「何？」
「まこと二人っきりで歩くの、久しぶりじゃない？」
「そうだっけ？」
「そうだよ、いっつもまこはさ？一人で帰っちゃうとかしてんじゃん、何で？」
何でと言われてもな・・・得に理由は無いんだが・・・
「別にいいと思うけど？」
「よくない、まこ大好き人間の私としてはさ？一緒に帰ったりとか、嬉しいわけよ？判ってる～？」
いや、そんな事言われてもな・・・てか、まこ大好き人間って何だ？
「だから、放課後とか一緒に帰ろうよ？駄目？」
「いや、別に駄目じゃあないけど・・・」
「そう？じゃあ、決まりね～」
そう話しながら歩いていると、福引をやっているお店を見つけて、

それに参加している人物も見つけた
「あれ？翠(みどり)先生じゃない？」
「あ、ほんとだ、翠先生～」
そう話しかけると、こっちに気が付いたのか、俺達のクラスの担任、朝崎翠(あさざきみどり)先生が、俺達に向かってこう言った
「お、栗谷に真琴か、丁度いい、ちょっと手伝え」
「手伝えって、何にですか？」
「何にって、福引に決まってるだろ？福引券は持ってるんだが、一人一回までしか参加出来ないみたいでな？お前たちに福引券やるから、ちょっと参加してくれないか？」
「別に私はいいけど、まこはどうする？」
「自分もいいかな、ところで先生、一体何の商品狙ってるんですか？」
「ああ、あれだな」
そう言って、先生は商品が置かれている所を指差す、先生が狙っている商品は、二等の「最高級食材詰め合わせ」だった
「二等の商品・・・？一等の海外旅行とかじゃないんですか？」
「そんなもん貰ってどうするんだ、第一、私はパスポートを作ってないからな？その為にわざわざ作りに行くとか面倒だし、それに海外は行こうとか全く思っていないしな？じゃあ、券、渡すから、頑張ってくれ」
そう言って、俺と美鈴に福引券を渡す
「じゃあ、まず私から、チャレンジしてみるね？」
そう言って、美鈴は、福引にチャレンジして、結果はというと
「五等のテッシュ箱三個ゲットしました・・・先生、いる？」
「・・・まあ、一箱ぐらいは貰っとく、あとはやるぞ・・・じゃあ、次は真琴だな？頑張ってくれ」
「まこ～頑張れ～」
そう言われてもな・・・こういうのは運任せじゃあないのか？
俺は、そう思いながら、福引の機械を思いっきり回す

中から出てきた玉は、青色だった
「大当たり～！二等の豪華食材詰め合わせです！」
「おお、真琴やったな！」
「まこ～凄い！」
「・・・本当に当たるとは思わなかったな・・・」
福引をやっている人から、食材引換券を貰った
それを先生に渡す
先生は、ご機嫌な顔でこう言って来た
「ありがとうな、真琴、早速引き換えにでも行って来るかなっと、食材が届いたら、鍋でもしようかと思うんだが、真琴、来るか？」
「え、いいんですか？」
「別に構わないぞ、じゃあ届いたら、連絡するな、それじゃあな」
そういって、先生は俺達から、離れて行った
「ところでさ？」
「何？」
「何で先生はさ？まこの事、呼び捨てにしてたの？私なんて栗谷さんだったのに、まこなんか、真琴って呼び捨てだったじゃない？何で？？」
「え～っと・・・まあ、気にしないで」
「そう？」
「うん」
「ならいいけど、じゃあ他の所に行こうか？」
「そうだね？」
そう言って、俺と美鈴は、別の場所へと行く事にしたのであった・・・

～第六十四話～俺ととある秋の休みの日～（後書き）

うん、まだまだ二学期編は、続きそうです

～第六十五話～俺ととある秋の休みの日～その2～（前書き）

はい、零堵です。
アクセス数もそろそろ四万いきそうですね

～第六十五話～俺ととある秋の休みの日～その2～

体育祭も終わり、次の日、特別に休みになったので、俺こと、南山(みなみや)真琴(まこと)は、出かける事にした
外に出歩いて、最初に向かった場所は、山野辺商店街で、その商店街で出会ったのは、俺の親友の栗谷美鈴(くりやみれい)だった
美鈴は、何か「買い物してたけど、まこと一緒に行く～」とか言って、俺にくっついてついていくみたいである
しばらく歩くと、福引をやっていて、そこで担任の朝崎翠(あさざきみどり)先生に会って、何故か福引を手伝わされる事になり、美鈴はテッシュが当たって、俺はと言うと、翠先生の欲しがってた、二等の豪華食材が当たり、先生に感謝されて、先生と別れたのであった

「さ～て、次、どこ行こっか？」
そう歩きながら美鈴は、言う
「ところで、買い物はいいの？」
「あ～大丈夫だよ、後で買えばいいしね～、で、どこ行く～？」
なんで、嬉しそうに言うんだ？まあ、何所に行こうか全く決めてないしな・・・
「どこ行く～とか言われてもなあ・・・普通にぶらぶらと歩いてたのを、美鈴がついてきたんだし？」
「え、もしかして、邪魔だったとか？」
「いや、別に邪魔と言う訳じゃあ、ないんだけどね」
「ならいいじゃん、じゃあどこ行こうか？」
そう悩んで、とりあえず暇つぶしにゲーセンに行く事にした
前に行ったゲーセンと同じ場所に、辿り着く
中に入ると、人が結構いて、賑わっている
「まこ～、今日は一緒に対戦しようよ？前は、レースゲームしか対戦しなかったでしょ？今回はさ？格闘ゲームで、対戦しよ？」

「格闘ゲームで？やった事ないんだけど？」
「じゃあ、私が操作方法教えるよ～」
そう言って、俺に操作方法を教えてきたので、俺は、とりあえず覚える事にした
数十分かかって、なんとか操作方法は覚えたので、俺と美鈴は、向かい合わせに座る
ちなみに俺がやる事になった台は「ＳＥＩＫＥＮ」と呼ばれる、２Ｄ格闘ゲームで、十五人のキャラを選んで戦うものであった
俺は、とりあえず簡単操作で動かせるキャラを選んだ
美鈴はやりこんでいるのか、操作が難しいキャラを選んだみたいである
そして、バトルが始まって、レバーやボタンを動かす
操作方法にいらついたりしたが、なんとか慣れてきて、まともに戦えるようにはなったが、結局美鈴には勝てなかった、ま、まあ、くやしくは・・・いや、ちょっとはくやしい、せめて一勝ぐらいはと思ったが、スリーポイント制で、先にスリーポイント取られて、完全敗北したからである
「まこ～弱いよ～？」
「あんまりやったことないんだから、当たり前だろ？」
「でも、初めての人だって、一勝ぐらいはするんじゃない？」
「そうか？」
「そういうもんだよ」
そういうもんなのか？と思ったが、深く考えないようにしていた
結構ゲーセンで、遊んだので、ゲーセンから出ると、もうすでに夕方になっていた
「あ、結構遊んだね？まこ～」
「そうだね、美鈴、買い物しなくていいの？」
「あ、そうだった、すっかり遊んでて忘れてたよ、じゃあ、私は買い物してくるよ、じゃあね？まこ」
「うん、またね」

そう言って、美鈴は俺から離れて行ったので、俺も家に帰る事にして、家へと帰った

家に帰ると、既に妹の亜季が帰っていて、こう言ってきた

「お姉ちゃん、今日、何所行ってたの？」

「何所って、まあ遊びに？」

「私も一緒に行きたかったのに、家に帰ってきたら、お姉ちゃんいないんだもん、家にいると思ったのにさ？」

「そう？なんかごめんね？」

「別にいいよ、あ、ご飯出来たから一緒に食べよう？」

「わかった」

そう言って、俺は用意されたご飯を、妹と一緒に食べた

こうして、俺の休日が終わったのである・・・

～第六十五話～俺ととある秋の休みの日～その２～（後書き）

結構読まれていて、嬉しい限りです。

～第六十六話～俺とコスプレデー～（前書き）

はい、零堵です。
うん、この物語も続きますね、まあ当分、終わる予定はないかと、思います

～第六十六話～俺とコスプレデー～

季節は、すっかりと秋に突入して、肌寒くなってきたころ、俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、行く所があった
それは、どこかと言うと、秋葉原の喫茶店、ラブ喫茶「アイライク」である
何故、俺がそのような場所に行くのかと言うと、このラブ喫茶で、働いているからで、まあ週に一日だけだけど、行く事にしているのであった
朝早く起きて、身支度を整えて、電車に乗って、目的地、秋葉原へとたどり着く
さすがに秋と言うだけあって、夏休みのように人が沢山いたりはせず、結構人が少なくなっていた
俺は、その秋葉原の街を数分歩いて、ラブ喫茶「アイライク」へと向かう
そして、辿り着く
朝早いからか、まだお店はやっていなく、スタッフ専用口から入って、店内に入ると
「あ、おはようございますね、まこさん」
そう言ってきたのは、ここの店長さんの東雲紫（しののめゆかり）さんだった
「あ、おはようです」
「今日は早いですね、まだ誰も来てはいませんよ？」
「そうですか？まあこんな日もありますよ、じゃあ、自分は着替えてきますね？」
「あ、今日はまだ着替えなくていいですよ？皆が集まってから、言いたい事があるので、ちょっと着替えるのは待ってくれませんか？」
「あ、はい、分りました」
言いたい事って何だ？まあ、気にはなったが、俺は、店長の言うとおり、待つ事にした

数分後、おはようございます～と言ってやってきたのは、同じバイト仲間の桐谷佐奈さんと、俺の親友の栗谷美鈴だった
「あ、まこ～おはよう、今日、早いね？」
「まこさん、おはようございます」
「今日は、早く起きたからね、早く着いたんだよ」
「ふ～ん、そうなんだ？なら私を誘ってよ？一緒に行こうと思ってたのにさ？」
「別にいいと思うけど？」
「あ、それより玲ちゃんは？まだ来てないの？」
「今日は、玲は体調悪いらしくて、来れないと言っていたから、今日は来てないわ、じゃあ皆、集まった事だし、言う事があるから言うわね？今日は、コスプレデーにしようと思うのよ、で、衣装を用意したんだけど、ちょっと選んでくれないかしら？」
そう言って、店長は、一端奥の部屋に行って、戻ってきた
手に、数着の衣装を持っている
「この中から選べって感じですか？」
「まあ、そうなるわね？ちなみに衣装は、魔女服、巫女服、水兵服の三つよ？どれがいいと思う？」
何で、その三つなんだ？それに、これ・・・サイズあってるのか、疑問なんだが・・・
「あ、じゃあ私は、魔女服で～佐奈はどうする？」
「そうですね・・・私は、ちょっと巫女服着てみたいかな・・・と、思います、まこさんは、やはり水兵服ですか？」
「あ、それ絶対似合うよ！まこ、それにしなよ！」
なんか勝手に決められてるんだが・・・、とりあえず、俺はどれにしようか悩んだ
魔女服、背の高い俺が着てどうなるんだ？うん・・・想像してみる・・・やっぱ無理、というか絶対に似合わないと思う、じゃあ巫女服はどうかと言われても、こういうのは長髪の髪の方が似合うと思うし・・・それに、なんか恥ずかしい、無難な所で水兵服か？と思っ

て、俺は
「じゃあ、水兵服にする」
そう言ったのであった
「じゃあ、決まりですね、今日はコスプレデー、れいれいは魔女服、さ～なは巫女服、まこさんは水兵服を着てください」
「店長は何を着るんです？」
「私は、これに決めています」
そう言って、取り出したのは、スーツだった
「私は、女教師スタイルにしたいと思います、じゃあ早速着替えましょう」
そう言って、俺達は、用意された服に着替える
数分後、着替え終わって、よく見てみると、サイズぴったりだったどうやってサイズを知ったのか、ちょっと怖かったが、まあ気にしない事に決めた
「お～やっぱりまこ、似合ってるね～」
「そういう美鈴こそ、似合ってるんじゃない？」
「お？そう見える？ありがとね？そう言ってくれて佐奈も似合ってるよ～」
「あ、ありがとうございます」
「皆着替え終わったわね？じゃあ、早速お店を開くわよ、今日も元気に頑張りましょう」
「はい、わかりました」
「りょ～かい」
「今日も一日、頑張ります」
こうして、俺のいつもと変わったバイトが、始まったのであった・・
・

～第六十六話～俺とコスプレデー～（後書き）

評価が上がって、うれしい限りです～

～第六十七話～俺とコスプレデーその2～（前書き）

アクセス数が四万こえましたw

～第六十七話～俺とコスプレデーその2～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、いつもとは違う格好で、バイトをする事になった

俺の働いている所は、ラブ喫茶「アイライク」と呼ばれていて、この作業服は、メイド服が基準だったのだが、俺の服装は、メイド服では無く、ギャルソンタイプの服装でバイトをしていたが、今日は、店長の東雲紫（しののめゆかり）さんが「今日はこの中から選んでね？」と言ってきたので、俺が選んだ服装はと言うと、海軍とかが着る水兵服を選んだ

他の人は、美鈴（みれい）は、アニメに出てきそうな魔女服で、佐奈（さな）さんは、巫女さんが着る、巫女服を選び、店長は、女教師に決めたみたいである

こうして、いつもと違った服装で、バイトをする事になったのであった

「すいません～」

「あ、はい、ただいま承ります」

働いてて思ったこと、なんか客層が分かれてるって感じがした、美鈴を呼んでるのが、主に男ばっかりで、眼鏡をかけてる奴がほとんどだった、佐奈さんを呼ぶ奴は、これも男で、何故か手にカメラや紙袋を持っていたりしているので、これは完璧にオタクに分類される奴だとは思う

で、店長を呼んでる奴は、男女両方呼んでいて、普通だとは思われたが、客の顔を見てみると、赤らめていたり、恍惚な表情を浮かべてる奴がいたりして、普通ではない感じがした

で、俺を呼ぶのはと言うと、ほとんど女というか、ほぼ女だった

まあ、前から女しか呼ばれなかったけど、これは変わらないのか？

と、思ったほどである

「ご注文は何でしょうか？」
「天使の微笑み、お願いします、あと・・・」
「天使の微笑みですね、あとはなんですか？」
「付き合ってる人がいるかどうか、教えてください・・・！」
「は・・・？え～っと、今はいませんけど・・・」
「じゃ、じゃあ私の付き合ってください・・・」
うん、こう言われるのこれで、七回目だった
なんでこう、女ばかりにモテルと言うか、こう言われるんだ・・・？
やっぱりこの服装のせいか？とか、思ってしまった
「すいません、それにはお答えできないです、天使の微笑みですね？では、お待ち下さい」
俺は、そう言って、厨房に入って、天使の微笑み＝ショートケーキを持ってきて、さっきのテーブルに戻ってこう言う
「お待たせしました、天使の微笑みです」
「私と付き合えませんか・・・？」
「付き合えません、でもこのお店に来てくれて、ありがとうございますね？自分が言えるのは、それぐらいです」
そう言って、俺はとびっきりの笑顔でそう言う
言ってきた客は放心したのか、動かなくてなんだかぼ～っとしてたうん・・・これでよかったのか？とか思ったが、仕事に戻る事にした
そして、また客に呼ばれて、行ってみると
「こんにちは、まこさん、今日は一段とかっこいいですね」
そこにいたのは、汐崎美咲（しおざきみさき）の従姉の汐崎茜（しおざきあかね）さんだった
「あ、ありがとうございます、ご注文は何ですか？」
「じゃあ、天使の微笑みで」
「かしこまりました、では、持ってきますね」
そう言って、俺は、再び厨房に入って、天使の微笑みを持って行った
「お待たせしました、天使の微笑みです」
「ありがとう、あ、そうだ、まこさんに教えるわね？私ね・・・漫

画家デビューしたのよ、あなたをモデルで書いて投稿してみたら、佳作に受かってね?で、連載持つ事になったわ、これもあなたのおかげよ?ありがとう」

「あ、そうなんですか?おめでとうございます」

「だから、私の作品、読んでみてね?週刊連載だから、来週から載る予定よ」

そう言って、茜さんは俺に、連載することになった雑誌の名前を言う

「わかりました、暇があれば読んでみますね?」

「うん、ここにちょくちょく来る事になると思うから、読んだら感想聞かせてね?」

「あ、はい」

そう言って、茜さんはショートケーキを食べ終わって、店から出て行った

そして、時間が過ぎて、バイト終了時間になったので、俺はあがらせてもらって、私服に着替える

「じゃあ、お疲れ様です」

「お疲れ様、まこさん、来週もよろしくね?」

「はい、わかりました」

俺は、店長にそう言って、家へと帰って行った

家に帰ると、既に妹の亜季(あき)が帰っていて、こう言ってきた

「ねえ、お姉ちゃん?」

「何?」

「この週刊誌に来週載る「ヒロイックストーリー」って漫画なんだけど、このキャラ、お姉ちゃんに似てない?というか、そっくりなんだけど?」

そう言って、週刊誌を俺に見せる

それを見てみると、確かに俺にそっくりだった

作者を見てみると「ＡＫＡＮＥ」と書かれてある

お店で茜さんが言ってたのは、これの事か・・・と、俺は思った

「この作者の人、知ってるの?お姉ちゃん」

「さあ、どうかな～」
「え～教えてよ～」
そう会話しながら、夕食を取って、寝る事にした
こうして、俺の一日が終わったのである・・・

～第六十七話～俺とコスプレデーその2～（後書き）

アクセス数が四万超え、ありがとうございます～ｗ

～第六十八話～俺と病気の一日～（前書き）

零堵です。
アクセス数が四万こえましたw
めちゃめちゃ読まれてるので、驚きって感じですw

～第六十八話～俺と病気の一日～

体育祭も終わって、俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、家にいた
何故、家にいるのかと言うと・・・
「三十八℃・・・これは、完全に熱があるなあ・・・」
そう、俺は、どうやら風邪にかかってしまったようなのである
いつものように起きて、学校の準備をしようと思ったら、なんか体がだるく、その事を美鶴（美鶴）母さんに言ったら、「風邪よ？今日は、学校休みなさいね？」と言ったので、俺は、大人しく寝る事にした
「お姉ちゃん、大丈夫！？」
そう言っているのは、妹の亜季（あき）で、何だか心配そうな顔をしている
「何とか大丈夫かな・・・ちょっとだるいけど・・・」
「お姉ちゃん、私、学校休んで、お姉ちゃんの看病する！」
亜季がそう言っていた
「亜季は学校ちゃんと行きなさい？真琴の事は、私が見ているわ」
「でも・・・」
「帰ったら、一緒に看病しましょうね？」
「・・・うん、分かった、じゃあ行ってくるね・・・」
亜季は、そう言って学校へと向かったのであった
「母さん、大丈夫なの？家にいて・・・」
「大丈夫よ、今日は丁度仕事が無い日だしね、そうね、学校に休むって連絡入れとくわね？」
母さんは、そう言って電話をかける
「あ、南山真琴の母ですが、真琴は病気なので、今日は学校休みますね？あ、はい、そんなに悪い病気じゃあないので大丈夫です、ええ、では」
そう言って、電話を切る
「真琴、何かして欲しい事はない？」

「ん～・・・ちょっと、お腹すいたから軽いもの食べたいかも・・・」
「じゃあ、作ってくるわね」
そう言って、母さんは何か作りに俺の傍から離れて行った
俺は、それを見た後、物凄い眠気に襲われたので、寝る事にしたのであった

「真琴・・・・」
そう呼ぶ声がした、俺は目が覚めて、気がつくと、母さんと
「まこ～！大丈夫!?」
「まこ、大丈夫ですか・・・？」
俺の親友の栗谷美鈴（くりやみれい）と、同じクラスの汐崎美咲（しおざきみさき）がいた
「あ、あれ・・・なんでいるの？」
「何でって、まこが病気と聞いて、心配だから来たんだよ？」
「私もです、まこ、大丈夫ですか？」
「えっと・・・今、何時・・・？」
そう言って、俺は時計を見る
時刻は午後になっていて、五時間以上は寝ていた事になった
「二人とも真琴が心配だから、お見舞いに来てくれたみたいよ？あ、そうだ、真琴、食事作っておいたから、食べられる？」
「うん、何とか」
「じゃあ、持ってくるわね」
そう言って、母さんがいったん離れる
「まこ、何かして欲しい事ある？」
「私も、何かまこの為にしたいです、何かして欲しい事ありませんか？」
して欲しい事ね・・・特に何もないんだが・・・なんか、期待されてるような目で見られると、かなり困るのだが・・・
「いや、今は特に・・・」
「そうですか？私、まこの為ならなんでもできますのに・・・」

「あ、私もだよ～」
そう話していると、母さんがおかゆを持ってきた
「真琴、持ってきたわよ」
「あ、私が食べさせてあげますね？美鶴さん、貸してください」
「え～？私がやるよ～」
「いいえ、私がやります」
「あらあら、もてもてね～？」
そう話していると、ただいま～と声がして、妹の亜季が帰ってきた
「お姉ちゃん！大丈夫！・・・・・・って、何でいるんですか・・・？」
「まこの看病しに来たから、いるんだよ？」
「私もです」
「いりません、お姉ちゃんの看病は、私一人で十分です！帰って下さい！」
「それはまこの妹でも聞けない相談だね？」
「ええ、本当にそうです・・・せっかく来ましたのに、なんてこと言うんです・・・・？」
うわ・・・なんか、空気が凍りついたというか、重い・・・
亜季は二人を睨んでるし、美鈴も美咲も亜季に向かって睨んでるし・・・
とりあえず俺は、この場を何とかしようと、こう言った
「二人とも来てくれてありがと、それと亜季、せっかく来てくれたんだから、睨まないの」
「で、でも、お姉ちゃん」
「そんな事言う亜季、嫌いになるよ？」
「！・・・ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！もう言わないから、嫌わないで！お姉ちゃん！」
「わかればいいよ・・・なんか、ごめんね？こんな妹で」
「凄い妹さんね・・・」
「亜季ちゃんは、まこの事本当に好きなんだなあ、まあ私もだけど」

美鈴!?何言ってるんですか!?ほら、二人とも驚いてるし!?
「もしかして・・・栗谷さんはライバル・・・?ここで消しとくべき・・・?」
なんか小声で、美咲がぶつぶつ言っているし
「お姉ちゃんは渡さない・・・お姉ちゃんは私の、誰にも渡すもんか・・・」
亜季もそんな事をぶつぶつつぶやいていた
うん、何とかしてくれって言いたい・・・
結局、ギャーギャー騒いで、二人は帰って行った
一日休んだからか、熱もすっかり引いて、平熱になった
そして思った事、これはうかつに休めないなと思ったのであった・・・

～第六十八話～俺と病気の一日～（後書き）

これからも続きますので、よろしくです～

～第六十九話～俺とクラスメイト～（前書き）

はい、零堵です。
アクセス数がいつの間にか、四万二千以上超えてますねｗ
驚きましたｗ

～第六十九話～俺とクラスメイト～

季節もすっかりと、秋になったので、結構寒く感じる頃
俺こと、南山真琴(みなみやままこと)は、いつものように学校へと向かっていた
いつものように起きて、制服に着替えて家を出て、学校へと向かった
校舎の中に入って、自分のクラスに行くと、結構速かったのか、ほとんど人がいなく、俺は、自分の席へとつく
席について、ぼ～っとしていると、俺に話しかけて来る者がいた
「ちょっと聞きたいことあるんだけど・・・いいかなあ？南山さん」
話しかけてきたのは、一緒に学園祭で劇をやった仲間、王子役だった住吉愛子(すみよしあいこ)さんであった
「えっと、何かな？住吉さん」
「私のことは、愛子でいいよ？私も真琴って呼んでいい？」
「別にいいけど」
「じゃあ、真琴に聞きたい事あったから、言うね？これ、真琴？」
そう言って、一枚の写真を見せる
そこに映ってあったのは、以前、バイト先のラブ喫茶「アイライク」で、天空カイザーのコスプレショーをした時に、親友の栗谷美鈴(くりやみれい)が撮影した、俺がレキの格好をしている姿だった
「こ、これをどこで！？」
「ネットで見つけたの、あ、それでプリントアウトしてみたんだけど・・・、あ、このサイトに載ってたんだよ？」
そう言って、俺に携帯を見せる
そのサイトは「あっきーのタビダチにっき～」と書かれてあり、そのサイトを見てみると、写真がいっぱい載っていた
しかも俺の他に店長の紫(ゆかり)さんや、美鈴、バイト仲間の美咲(みさき)さんが映っているものまであった
「サイト巡りしてて偶然見つけたサイトなんだけどね？ここに写ってるの栗谷さんでしょ？それで驚いちゃって、で、色々見てみたら、

真琴にそっくりな写真があったから、聞いてみたの、で、これ、真琴なの？」
俺は、ここは誤魔化すか？と思ったが、まあ隠してる訳でもないので、正直に言う事にした
「まあ、そうだけど・・・」
「へえ～じゃあ、もしかしてさ？夏にやった、天空カイザー～カイザーＶＳデルウイング～のレキ役も真琴？」
「そうだよ、あれは母さんがやってみない？って言ったから、やっただけだし」
「凄い！こんな近くに有名人がいるなんて思わなかった～！」
「べ、別に有名人じゃないよ、頼まれてやっただけだよ」
「それでも凄いよ、じゃあ、冬にやる事が決まった天空カイザーの続編、これにも出るの？」
「え？続編・・・？」
「そう、ほら」
そう言って、どこから取り出したのか、雑誌を俺に見せる
そこには確かに「スペシャルドラマ天空カイザー続編、制作決定！放送日は冬を予定」と書いてあった
「ほ、ほんとだ・・・で、でも別の人がやるんじゃないかな・・・」
「え～真琴がやってみたら？すっごい似合ってたし、もしやる事になったら教えてね？」
「う、うん」
多分やらないかと思う・・・いや、あの母さんの事だから、また「やってくれない？」とか言うと思う・・・
俺は、そう思っていると、いつの間にか結構クラスに人がやって来ていて、賑わっていた
「あ、じゃあ私、自分の席に戻るね？それじゃあね？真琴」
そう言って、住吉さんは自分の席に戻る
住吉さんが席に戻った後、美鈴が話しかけてきた
「ねえねえまこ？」

「何？」
「住吉さんと話してたけど、一体何話してたの？仲良かったっけ？」
「他愛のない世間話だよ、美鈴が気にする事はないよ」
「そう？」
「そう」
そう話していると、チャイムが鳴ったので、美鈴はそれ以上話しかけて来なかった
授業中、俺は気になってる事があった
あの「あっきーのタビダチにっき」は一体誰のサイトなのか？である
気になったので、俺は放課後、調べる事に決めて、授業に集中する事に決めたのであった・・・

～第六十九話～俺とクラスメイト～（後書き）

まだまだ続きます～

～第七十話～俺とクラスメイトその2～（前書き）

はい、零堵です。
今日で、なんと連載初めて二カ月目で、七十話達成しました
まあ、その記念？みたいな感じなので、今回はちょっと、長めな文章です

～第七十話～俺とクラスメイトその2～

放課後になったので、俺こと南山真琴（みなみやままこと）は、調べるものができた
それは、クラスメイトの住吉愛子（すみよしあいこ）が教えてくれた、サイト
「あっきーのタビダチにっき～」というサイトである
何故、そのサイトを調べようかと思ったのは、そのサイトで紹介してあったのは、俺が働いている、ラブ喫茶「アイライク」の画像が、展示してあったからである
しかも、限定イベントの天空カイザーのコスプレをした時の画像だからであった
それを写真に撮って、ネットにアップロードした人物が気になったので、調べる事にしたのである
俺は、早速どうやって調べようかと、考えて、ＰＣ室は部活動で使ってるから、邪魔は出来ないし、とりあえず俺の担任の朝崎翠（あさざきみどり）先生に聞いてみる事にした
「翠先生」
「何だ？真琴、もう放課後だぞ？帰らないのか？」
「いえ、まだ帰りません、ちょっと調べたい事が出来たので、で、ＰＣ使いたいんですけど」
「あれ、真琴に貸したミニパソはどうしたんだ？」
「持ってきてませんよ、家に置いてあります、で、確か宿直室にＰＣありましたよね？それで調べ物しようと思っているんですけど？」
「そう・・・分かった、じゃあ行くぞ」
そう言って、先生は宿直室に移動するみたいなので、俺は、先生の後をついていく事にした
宿直室について、先生は鍵を開ける
「さ、開いたぞ、で、ＰＣで何を調べるんだ？」
「それは、ＰＣを起動してから、調べます、先生、ＰＣ使っていいですか？」

「まあいいが、いかがわしいサイトでも見るのか？」
「違います！、ちょっと自分が映ってるサイトを見つけたので、調べようとしたんです」
「ほう、真琴が写ってるのか、ちょっと見てみたいな？」
「何で見てみたいんですか・・・」
「気になるからだ、で、どんな格好だ？」
「はあ・・・サイト名教えてもらったので、検索してみます」
そう言って、俺は「あっきーのタビダチにっき」と言うサイトを開くそこに展示してある画像を見てみるそこには、今日、愛子に見せて貰った画像の他に、新しい画像が追加されていた
「あ、これ、コスプレデーの写真だ」
そこに展示してあったのは、タイトル名「アイライクのコスプレデー」と言う題名してあって、店員達のコスプレした写真が載せてあった
「ほうほう、あ、これ栗谷じゃないか？それに、もしかしてこれが真琴か？」
先生は写真を見て、俺と美鈴を見つけたみたいであった
「あ、そうです、って先生、何、じろじろ見てるんですか？しかも、コメント書き込まないで下さいよ！？」
先生は、勝手に写真について「被写体の角度がグット」とか「表情がよく撮れてるぞ」とか、ＢＢＳに書き込んでいた
「まあ、いいじゃないか、それにしてもこの書き込み欄見てみると、真琴、かなりの人気みたいだぞ？」
「え？」
俺は、先生に言われて、書き込み欄を見てみると、「この水兵服着てる人、レキの格好した人だよね」とか「というか、テレビの天空カイザー、レキ役の人じゃない？」とか「物凄くかっこいい、私、付き合いたい！何所に住んでるんだろ？」とか書き込んであった
「な？」

「な?って言われても、それにどう答えればいいんですか?」
「面白そうだから、書き込んでみてはどうだ?どういった反応見せるか、たのしみなんだが?」
「は?書き込みですか?自分が?」
「そうそう、まあなんか書き込んでみたらどうだ」
先生がそう言っていたので、俺はどうしようか迷ったが、一言だけ書き込む事にした
「え~っと、とりあえずかっこいいとか言ってくれてありがとう、でも写真は恥ずかしいかな・・・」
そう、書き込んで名前の本名、名乗るのも何なんで、まこってつけて、投稿ボタンを押した
ＢＢＳに俺の書いた掲示が貼り出された、数秒のうちに返信が来たので、驚いた
「え?まさか、レキ役やってた人!?本人!?」「ウソだろ?まじか?」「でも、まこって確か、あのアイライクで働いてる人が呼ばれてたよ?」「それに天空カイザーの役者の人って、まことって名乗ってたし」「じゃあ、本人じゃん!」「マジかよ、じゃあこのサイトにまこが覗いたって事だよな?それって凄くね?」「またなんか書き込み希望!」とか
かなりの数の返信があった、一言書き込んだだけなのに
「真琴、凄い人気だな・・・私も、驚いたぞ」
「自分もですよ、まさかここまでとは・・・」
「とりあえず、どうするんだ?」
「どうするって、言われても・・・そうですね・・・」
俺は、どうしようか悩んだが、別に書く必要ないと判断して、そのままにしといた
「とりあえず、このサイト作った人がだれかを、調べようと思ってたから、調べて見る事にします」
俺は、そう言って、プロフィール欄を開く
そこに書かれてあったのは、あっきー年齢秘密、女性、趣味、漫画、

気に入ってる店「アイライク」とだけ、書かれてあった
「これだけじゃ分からないなあ・・・」
「ふむ・・・じゃあ、こう書き込んだらどうだ?真琴はそのお店で働いてるんだろ?そこで何かイベントとか発表したら、このサイトを作った管理人も来るんじゃないか?」
「あ、それ、いい考えですね、でも店長とかに相談しないと」
「まあ、それはそうだな、おっと、もうこんな時間だ、暗くなってきたから、帰ったほうがいいぞ?」
「あ、ほんとですね、じゃあ、そうします」
俺は、そう言ってPCの電源を切る
そして、宿直室を出て、帰ろうとしたら、先生が話しかけてきた
「真琴、私も、そのお店行っていいか?」
「え、先生も来るんですか?」
「どういった店なのか気になるしな?それに、なんか面白そうだ、普段は学校があるから、休日に働いてるんだろ?その時に連絡くれよ?」
「はあ、分かりました・・・」
俺は、そう言って、先生と別れて、家へと帰る
帰りながら、これは店長に相談しようかな・・・と、思っていたのであった・・・

～第七十話～俺とクラスメイトその2～（後書き）

零堵です。うん、七十話達成～ｗ
結構書いたって感じですねえ～
ちなみに作者的に好きなキャラ、一位はまあ真琴で、２位が美鈴、
３位が翠先生ですね～

～第七十一話～俺とクラスメイトその3～（前書き）

はい、零堵です。
うん、かいてて楽しいですねwにやにやしながら書いてたり・・・
（おいw）
アクセス数も増えて、うれしい限りです～

～第七十一話～俺とクラスメイトその3～

ネットで「あっきーのタビダチにっき～」を調べた次の日、俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、今日の放課後、バイト先のラブ喫茶「アイライク」に行く事にした
普段は、休日に行っているので、学校がある日に行くのは、初めてでもある
俺は、学校があるので、制服に着替えて、学校に向かう
学校について、教室の中に入り、自分の席につくと、俺に話しかけて来る者がいた
「おはよう、真琴」
「おはよう、住吉さん」
俺に話しかけてきたのは、昨日、サイトを教えてくれた、住吉愛子（すみよしあいこ）であった
「愛子でいいって、で、昨日の放課後さ？真琴、私の教えたサイトに書き込まなかった？ほら、これ」
そう言って、愛子は携帯を俺に見せる
そこに表示してあったのは、「あっきーのタビダチにっき～」で、そのＢＢＳ欄に物凄い数の書き込みがされてあった
「一言だけ書き込んだけど・・・よく分ったね？」
「もしかしてと思ったけど、やっぱり真琴だったんだ？なんか真琴、凄い人気よ？真琴が掲示板に書き込んでから、このサイトのアクセス数が物凄く伸びてるし？」
確かに見てみると、アクセス数が、俺が、書き込む前と全然違っていた
「あ、ほんとだ」
「またなんか書き込んでほしいって、書いてあるわよ？真琴、何か書き込むの？」
「いや、それは出来ないかな、自分、携帯とか持ってないし」

「え、そうなの？確かに、真琴が携帯とか持っていじってる姿、見たことないなあ・・・とか思ってたけど、そうだったんだ？でも、欲しいとか思わないの？」
「どうだろ・・・特別欲しい！とか、思わないんだよね？まあ、今まで無くても全然問題はなかったし」
「ふ～ん、じゃあ携帯買ったら、アドレスと電話番号教えてね？あ、先生来たみたいだから戻るね」
そう言って、愛子は自分の席に戻る
確かに見てみると、俺の担任の朝崎翠（あさざきみどり）先生がやって来ていた
そしてチャイムがなり、授業が始まる
俺は、授業中、携帯か・・・持ってた方がいいのかな・・・とか、考えていたりしていたのであった
そして、放課後、授業も普通に終わったので、俺はとりあえず、目的地、アイライクへ向かう事にした
一旦帰ってから、着替えて向かうか、それともそのまま行くかと迷って、結局、そのままの格好で向かう事に決めて、さっそく行こうかなっと思っていたら、声をかけられた
「真琴～」
声をかけて来たのは、愛子であった
「何？愛子」
「これからまっすぐ帰るんでしょ？私、一度、真琴と帰ってみたかったんだよね？一緒に帰ろう？」
「えっと、これから行く所があって・・・」
「行く所？どこ？」
「アイライク」
「そうなの？今日、バイトとか？」
「いや、バイトじゃあないけど、ちょっと店長さんに相談しに行こうかな・・・と」
「じゃあ、私も一緒に行く」
はい？何でだ？

「え・・・何で？」
「別にいいじゃない、何か困る事でもあるの？」
「いや・・・そうじゃないけど・・・ついてくるの？」
「うん、一回、どういう店か知りたかったしね、行ってもいいでしょ？」
まあ、断る理由も無いので、俺は
「まあ別にいいか、じゃあ行こう」
「そうだね」
こうして、俺は、ラブ喫茶「アイライク」へ愛子と二人で、行く事に決めて、俺は愛子にこう言った
「あ、そうだ、愛子、携帯貸してくれない？」
「なんで？」
「妹にちょっと遅くなるって、連絡入れたいから、駄目？」
「別にいいよ、はい」
そう言って、俺は愛子から携帯を受け取る
そして自分の家へかける
数秒コール音が鳴って、妹の亜季（あき）が出た
「はい、南山です」
「あ、亜季？」
「あ、お姉ちゃん、何？」
「ちょっと用事ができちゃって、少し遅くなるね」
「用事って・・・？」
「え～っと・・・」
俺は、どう言おうか悩んでいると、愛子が急に
「私と出かける所が出来てね、それじゃ真琴の妹さん、遅くなるけど、心配しないでね？」
そう言いました、うん、それを聞いた亜季は
「！お姉ちゃん！どういう事！ちゃんと説明して！」
「と、とりあえず遅くなるから！じゃ！」
俺は、そう言って電話を切って、愛子に返す

「なんか誤解されてるかもな・・・」
「面白い妹さんだね～」
「なんで、そんなにこやかな顔なんだ?はあ・・・まあ、いいや、とりあえず行こうっと」
「あ、待ってよ、私も行くわ」
そう行って、俺は、アイライクに行く事にしたのであった・・・

～第七十一話～俺とクラスメイトその3～（後書き）

やっと七十話行ったから、あと三十話で百話ですねえ

～第七十二話～俺とクラスメイトその４～（前書き）

はい、零堵です。
アクセス数も四万五千超えたましたｗ
ありがとうございます～

～第七十二話～俺とクラスメイトその４～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、学校が終わって放課後、いつもは真っすぐ帰っていたのだが、今日は行く所があった
その場所は、秋葉原にある喫茶店、ラブ喫茶「アイライク」である
一人で行こうと思っていたが、どういう訳か、同じクラスの住吉愛（すみよしあ）子（いこ）まで、ついてきたのであった
電車に乗って、秋葉原にたどり着く
「ここが、秋葉原か～はじめてきたけど、にぎやかだね」
「あれ、愛子、初めてなの？」
「まあね、普段電車とかは、乗らないしね、いっつも地元でいるって感じだしさ？」
「そうなんだ」
それより、ここから近いの？アイライクって」
「まあ、近いと言えば近いかな、こっち」
俺は、そう言ってアイライクへ向かって、歩き出す
その後ろから、愛子は黙ってついてきたのであった
数分歩いて、目的地、ラブ喫茶アイライクに辿り着く
いっつも休日に来ていたりするので、なんか新鮮だな・・・と、思っていたりしていた
「へ～っここがアイライクね～、結構きれいな店ね」
「確かに、綺麗といえば綺麗かな、じゃあ中に入るよ」
そう言って、俺は店内に入る
中に入ると、店長の東雲紫（しののめゆかり）さんが
「いらっしゃいませ～、あら？もしかして・・・まこさん？」
「はい、真琴です、紫さん、こんばんは」
「今日は珍しいわね？一体どうしたの？あら？まこさんの隣にいるのって・・・はは～ん・・・」
「あの・・・紫さん？」

「彼女と一緒に来るとは、見せつけてるのかな?もしかしてラブラブだったり?」
「い、いや、違いますよ、愛子は来たいって言ったから、ついてきただけです」
「初めまして、住吉愛子と言います、真琴のクラスメイトです」
「そう、私は店長の東雲紫よ?よろしくね、所で今日は何の用があって、来たのかな?」
「あ、ここじゃ何なんで、控室で話したいんですが、いいですか?」
「もしかして・・・バイトやめたいから来たって事じゃ、ないわよね?」
「いや、違いますよ、そう言ったのじゃないです」
「そう、じゃあちょっと待って、先に控室に行っててくれる?すぐに向かうわ」
「分かりました」
俺は、そう言って控室に向かった
愛子は、「ここでケーキとか注文しながら、待ってるね?」と言って、座席についたみたいである
俺は控室に入って、数分待っていると、紫さんがやって来た
「待たせたわね?で、話って?」
「あの、紫さんは「あっきーのタビタチにっき~」というサイト知ってます?」
「「あっきーのタビタチにっき~?知らないわね?」
「そのサイトの中を見てくださいませんか?」
「そう?じゃあ、見てみるわ」
そう言って、紫さんは、控室に設置してある、PCの電源を入れて、サイトを検索した
「あら、これって、うちの店よね?」
「はい、そうなんです、ここの店でコスプレした姿とか、アップされてるんですよ」
「ほんとだわ、一体だれがこんな事を・・・」

「店長としては、どうしますか？このサイトの管理人に行って、やめさせるとかします？自分は、その事について来たんです」
「そうね・・・」
紫さんは、少し考えて、こう言った
「写真の写り具合は悪くないわ、ひとりひとり綺麗に撮れてるしね、けど勝手に使われたのは少し許せないわね、一度このＨＰの管理人に話つけとかないといけないわね・・・まこさん、教えてくれてありがとね」
「いえ、で、結局どうします？」
「そうね・・・このＨＰの管理人に連絡してみるわ、反応があったら、このお店に来てもらう事にするわ、このお店に結構来てる客みたいだしね」
そう言って、紫さんは管理者あてにメールを開いて、何か書きこんで、送信した
「これでよしっと、あとは来てくれるかを待つだけね」
「そうですか、じゃあ自分、もう用ないので、帰りますね？」
「え？もうちょっといる事は出来ない？」
「妹が帰りを待ってるので、すいません・・・」
「そう、じゃあまた、休日によろしくね？まこさん」
「はい、分かりました」
俺は、そう言って控室を出る
ホールに行くと、愛子が結構な量のスイーツを食べた後だった
「ただいま」
「あ、お帰り、話、終わったの？」
「まあね、それより愛子、食べすぎじゃない？太らない？」
「大丈夫、こう見えても太った事一度もないよ？」
「そうなんだ、それはうらやましい体格してるなあ」
「そうかな？真琴もスレンダーで、全然太ってなんかないじゃん？お互い様だって」
「そう？」

「そうだよ、じゃあ帰ろうか?暗くなってきたしね?」
「あ、ほんとだ、じゃあ行こう」
そう言って、俺と愛子は食べた料金を支払って、店を出て電車に乗り、山野辺市に戻った
「じゃあ、私、こっちだから、今日はありがとね?真琴、じゃあね～」
そう言って、愛子は俺のそばから、離れて行った
俺は、さよなら～と言って、自分の家へと帰る
家に帰ると、妹の亜季(あき)が怒っていたので、それをなだめながら、今日の一日は、終わったのであった・・・

～第七十二話～俺とクラスメイトその４～（後書き）

うん、結構本当に長く続いたな・・・って、感じしますね～

～第七十三話～俺とＣＭ撮影～（前書き）

零堵です。アクセス数も、近いうちに五万行きそうな感じですね

～第七十三話～俺とＣＭ撮影～

季節もすっかり、寒くなり、冬に近づいた頃、俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、とある場所に来ていた
その場所とは・・・
「ここで、撮影するらしいわよ」
「そう・・・」
俺が、いる場所は、山野辺市民公園と呼ばれる場所で、なぜそこにいるのかと言うと、事の始まりはこうであった

いつものように起きて、今日は学校が休みなので、朝食をとっていると、母親の美鶴（みつる）母さんが、こう言ってきた
「そうだ、真琴、ちょっと手伝って欲しい事があるのよ」
「手伝ってほしいこと？」
「そう、丁度今日ね？山野辺市民公園に行ってほしいの」
「何で？そんな場所に？」
「行けば解るわ、だから行ってくれない？」
「う～ん・・・」
俺は、悩んだが、今日は特にこれと言って、予定入れてないので、行く事に決めた
「わかった、山野辺市民公園に行けばいいんでしょ？」
「ありがと、じゃあ行きましょう」
そう言って、俺と母さんは家を出る
そして、数十分後、目的地、山野辺市民公園にたどり着いた
公園の中に入って、しばらく歩くと、人が集まっている場所があって、母さんはその中に入って行った
「おはようございます、助っ人連れてきました」
そう母さんが言うと、グラサンをかけた男の人が、こう言った

「美鶴さん、助かります、おや？もしかして・・・天空カイザーでレキやった、まこと君じゃないか？」
「あ、はい、そうです」
「そうか、まこと君、来てくれてありがとう、私の名前は新井（あらい）と言う、まあ監督をしているな、よろしく、で、まこと君にやってもらいたいのは、ＣＭに出演して欲しいんだ」
「ＣＭ？」
「そう、ほんとは二人で録る事になってたんだが、一人がキャンセルしてきてね、困ってたんだ、じゃあほかに誰かいないか？と言う話になって、そしたら美鶴さんが「代役連れてくるわ」って言ってきてくれたのだ、まこと君、ＯＫかな？」
「はあ・・・母さん、そんな事言ったの？」
「まあ、そうね、でもいいじゃない？真琴、参加してくれないかしら？」
「・・・分かった、いいよ」
「ありがとう、ところで・・・まこと君は、男の子なのかな？」
「違いますよ？」
「ふむ・・・そうか、女なのか・・・・・・まあ、いいか、別に問題はなさそうだし、じゃあ早速撮影を始めるとするか、まず、まこと君、衣装に着替えてきてくれ、中沢（なかざわ）メイクよろしく」
「わっかりました～」
そう言ったのは、頭にバンダナを巻いた、二十代ぐらいの女性だった
「まことさん、じゃあついてきてね？」
「は、はあ・・・」
俺は、言われるまま中沢さんについていく
ついてくと、ワゴン車が用意してあって、その中に案内されたそこで、衣装とかメイクをさせられて、車から出ると
「ふむ・・・似合ってるあぞ、これなら問題ないな」
監督がそう言って、母さんが
「あらあら、かっこいいわよ？真琴、美少年に見えるわ」

そうなのであった、自分で鏡を見てみたら、美少年に見えるのであるもともと胸とか大きくないので、男の子にばっちり見えるのであった
「母さん、かっこいいとか言われても、あんまりうれしくないんだけど・・・」
「そう？」
「まあいいじゃないか、じゃあまこと君、相手役を紹介するぞ、さ、来たまえ」
そう監督が言うと、やって来たのは、俺が知っている人物だった
「初めまして～蓮城麗華（れんじょうれいか）といいま・・・って、真琴じゃない！久し振り～」
「相手って麗華？」
「おや？二人は知り合いって、あ、そうか、天空カイザーで共演したんだったな、知ってて当然か」
「相手役って真琴なの？」
「どうやら、そうみたい」
「そう、じゃあこの撮影が終わったら、遊びに行きましょう？なかなか時間取れなくて、真琴の家に電話とかできなかったし、いい？」
「まあ、いいかな、特に予定ないし」
「じゃあ、決まりね」
そう話していると、監督がこう言ってきた
「じゃあ、早速ＣＭの撮影に入りたいと思います、麗華さん、まことさん、準備いいですか？」
「あ、私はＯＫです、真琴は？」
「自分もＯＫかな」
「私は、見学してるわね？真琴、頑張るのよ～」
そう母さんが言っていた、こうして、何のＣＭかは、分からなかったが
ＣＭ撮影が始まったのであった・・・

～第七十三話～俺とＣＭ撮影～（後書き）

まだまだ続きます～

～第七十四話～俺とＣＭ撮影その２～（前書き）

はい、零堵です。
アクセス数も増えて、うれしい限りです～

～第七十四話～俺とＣＭ撮影その２～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、ＣＭに出演する事になった
相手は、以前、天空カイザーでヒロインをやった、蓮城麗華（れんじょうれいか）で、麗華と二人で、ＣＭに出演する事になったのである
「じゃあ、早速撮ろうか～」
そう言ったのは、このＣＭ撮影の監督の新井（あらい）であった
「ところで、監督？一体何のＣＭなの？」
そう麗華が言うと、監督はこう答える
「そうだった、まだ教えてなかったな、今日撮るのは、スポーツドリンク「スプレイト」と呼ばれる炭酸飲料の紹介ＣＭを撮ろうと思う、台詞は、そうだな・・・シンプルに「スプレイト誕生」とまこと君が言って、それを笑顔で麗華君が「美味しい～」とか言ってくれればＯＫだ」
「えらい、簡単だけど、それでいいの？監督」
「ま、いい絵が取れればそれでいい、じゃあ、始めるぞ」
そう言って、スタッフらしき人が、俺と麗華に炭酸飲料「スプレイト」を渡す
「はい、じゃあ行くぞ、アクション！」
そう監督が言った
俺は、まず監督に言われたので、こう言う
「スプレイト誕生！」
そこに麗華がやって来て、こう言った
「美味しい～」
「カ～ット！う～ん・・・」
「どうしたんですか？監督」
「そうだな、もう少し、台詞を追加しとこうか、まことくんが「スプレイト誕生」と言った後に、スプレイトを飲んで感想を述べてくれ、そうだな・・・麗華君もスプレイトを飲んで、感想言ってくれ、

それを撮ろうと思う、それでいいか？」
「了解～真琴もいいよね？」
「まあ、いいかな」
「よし、じゃあもう一回、撮るぞ、アクション！」
そう監督が言ったので、俺と麗華は再び、演技をする
「スプレイト誕生！」
そして、俺はスプレイトを飲む
はっきり言って美味しくはなかった、けど、撮影してるので、感想を言う事にした
「すっきりな味で、爽快さ満点！」
ま、こんな所でいいだろ・・・と思った
そこに麗華がやって来て、こう言う
「美味しいスプレイト」
そう言って、スプレイトを飲む
「抜群の美味しさ！」
「カ～ット！よし、Ｏｋだ、これで撮影は終了だ、お疲れ様！」
「お疲れ様です」
「お疲れ様」
そう言って、俺はメイクを落としに、ワゴン車に入った
メイクを落として、外に出ると、麗華が話しかけてきた
「無事、撮影終わったわね、ところでさ？」
「何？」
「あのスプレイト・・・どうだった？正直に言ってみて、美味しかった？」
「正直に言って、うまくはなかったな」
「やっぱり？私も思ったわ、あれ・・・売れるのかしらね？」
「さあ？」
そう話していると、美鶴（みつる）母さんが話しかけてきた
「真琴、撮影お疲れ様、じゃあ帰りましょうか？」
「母さん、麗華と遊ぶ約束したんだけど、行っていいかな？」

「あら、そう？じゃあ、麗華ちゃん、真琴の事、頼めるかしら？」
「あ、はい、分かりました、美鶴さん」
「じゃあ、私、先に帰ってるわね？」
そう言って、母さんは帰って行った
「じゃあ、美鶴さんにも言ったし、遊びにいこっか？」
「そうだね、でもどこいく？」
「私、山野辺アイランドに行きたかったのよね、そこに行きましょう」
「りょ～かい」
こうして、俺は麗華と、二人で山野辺アイランドに行く事にしたのであった
後日、撮影したＣＭが放送され、新発売のスプレイトは、大人気とはいかないけど、そこそこ売れたみたいでもあったのであった・・・

～第七十四話～俺とＣＭ撮影その２～（後書き）

まだまだ続くって感じですねえ

～第七十五話～俺と先生の家～（前書き）

はい、零堵です。
アクセス数もかなりいっていて、うれしい限りです。

～第七十五話～俺と先生の家～

季節もすっかり、冬になり、寒くなって来た頃、俺こと、南山真琴(みなみやままこと)は、いつものように学校へと向かっていた
冬になったので、かなり寒く感じられて、これはコートとか羽織ればよかったかな・・・とか、思いながら通学路を歩く
そして、俺の通っている山野辺高校にたどり着く
校舎の中に入って、自分の下駄箱を開けると、いちまいの手紙が入っていた
「これって・・・」
これで手紙を受け取ったのは、三枚目になるのか？と思った
一枚目は、俺と同じクラスメイトの汐崎美咲(しおざきみさき)からで、内容は「音楽室に待ってます」だったし、二枚目は後輩の東雲玲(しののめあきら)からで、これも「音楽室に待ってます」と、同じような内容であった
で、今回の三枚目の手紙・・・、一体何が書いてあるんだ・・・？と気になったので、俺はその手紙を開いて、中身を見てみた
中に書いてあった内容は
「放課後まで、教室に残っているべし」
と、書かれてありました
差出人を見てみると、差出人は書いていなく、ただ、その文章だけ書かれてあったのであった
一体誰からの手紙からだ？と思ったが、手紙をポケットに入れて、教室に向かう事にした
教室の中に入ると、もう既に何人か集まっていて、談笑をしていたり、何かノートに書いている人もいたりしていた
俺は、自分の席について、とりあえず手紙の書いてあった内容を思い出して、どうしようか・・・と考えていると、俺に話しかけて来る者がいた
「おっはよ～まこ」

俺に話しかけてきたのは、俺の親友の栗谷美鈴（くりやみれい）であった
「おはよう」
「ねえ、まこ、どうしたの？何か悩んでる顔してたんだけど？」
「ちょっとね・・・ねえ、この手紙、美鈴が出した？」
そう言って、俺は手紙を美鈴に出す
「何？この手紙？私じゃないよ？私が手紙出すわけないよ？何か言うなら、直接言うしね？」
「そう・・・じゃあ一体誰だろ・・・」
「放課後まで待つべしね・・・う～ん、もしかしてまこに告白したい奴がいて、手紙を出したとか？」
「そんなんじゃないと思うけど・・・てか、それはもういいし・・・」
「もういいって？もしかして前にもこんな事があったとか？」
「い、いや・・・なんでもない」
「そう？」
そう話していると、チャイムがなったので、美鈴は自分の席に戻っていった
俺は、結局どうしようかと、考えたが、放課後、教室に残る事にしたのである
そして、時間が過ぎて、放課後
俺は、教室に残っていた
皆、帰り仕度をして帰る者や、部活動に行く者がいて、教室から出て行ったりしている
教室で待っていると
「まこ、誰からの手紙なんだろ～ね？」
何故か、美鈴がいました
「・・・何で、美鈴まで残ってるの？」
「だって、気になったから？悪い？」
「・・・まあ、いいけど」
結局、二人で教室で待っていると、ガラっと教室の外の扉が開いて、

やって来た者がいた
「ん、残ってたか」
やってきたのは、担任の朝崎翠先生だった
「もしかして、自分に手紙出したのって、翠先生？」
「ああ、そうだぞ、それにしても・・・なぜ、栗谷までいるんだ？」
「まこに手紙を見せてもらって、気になったからいるって感じかな？で、先生、一体まこに何の用だったんですか？」
「ああ、そうだ、今日、私の家に来ないか？」
「家にって、先生の家にですか？」
「そうだ、実は今日な？いや、来てから話すとするか、で、来れるか？」
先生がそう言ったので、俺は、こう答えた
「えっと、遅くならなければ、自分は問題ないです、行きますよ」
「あ、じゃあ私も～、先生、いいでしょ？」
「ま、いいか、じゃあ真琴と栗谷、私の家に向かうぞ」
こうして、俺は、美鈴と先生の家に向かう事にしたのであった・・・

～第七十五話～俺と先生の家～（後書き）

この物語も、七十五話行きました。まだまだ続きますので、これからもよろしくです。

～第七十六話～俺と先生の家その2～（前書き）

アクセス数が、五万突破しましたW
ありがとうございます。
これからも続けたいと思います。

～第七十六話～俺と先生の家その２～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は昇降口に手紙が入っていて、その手紙に書かれてあった内容は、「放課後、教室にいるべし」と書かれてあり、そして放課後、待っていたら、手紙を差し出したのは、俺の担任の朝倉翠（あさくらみどり）先生だった
美登里先生は、「家に来い」とか言ってきたので、俺は先生の家に行く事になり、ついでに、俺の他に俺の親友の栗谷美鈴（くりやみれい）が、一緒に先生の家に、行く事になったのであった・・・

先生と歩いて、山野辺商店街を抜けて、その先を歩く事、数十分
「さ、ついたぞ」
そう、先生が言った
「先生って、マンション暮らしだったんですか？」
そう、たどり着いたのは、大きなマンションだった
「まあ、そうなるかな」
「ところで、このマンション、何階建てなんです？」
「確か、２５階だてかな、山野辺市の中でも、結構な高層ビルだと、思うぞ」
「そうなんだ」
「じゃあ、入るぞ」
そう言って、建物の中に入る
中に入るためには、オートロックの扉なので、鍵で、オートロックの扉を開けて、俺達はエレベータにーに乗った
そして、最上階にたどり着き、先生の部屋は、奥にあった
先生は、鍵を取り出して、扉を開ける
中は誰もいないらしく、真っ暗だった
「ようこそ、私の家へ」
「お邪魔します」

「お邪魔します～、先生ってもしかして、一人暮らし？」
「まあ、そうだな」
「で・・・先生、一体何のために自分に手紙を？」
「実は・・・、前に山野辺商店街で、福引をやっただろ？で、真琴が当ててくれた、豪華食材を使って、鍋でもやろうかと思ってね、それで呼んだんだよ」
「あ～確かに、まこが当てたよね、福引で」
そう、前に山野辺商店街で、先生が福引をやっていて、その福引券を俺に渡して、やったら、二等の豪華食材が当たったのであった
「あ、そうなんですか、じゃあごちそうになりますね、ところで、先生が作るんですか？」
「いや、違うぞ」
「え？じゃあ、一体だれが・・・」
「あいつに頼むのさ」
そう言って、先生は携帯を取り出して、こう言う
「私だ、今から来れるか？うむ、大丈夫だな？速攻で来い」
そう言って、電話を切った
「一体、誰に電話を？」
「まあ、来たら分かるぞ」
そして、数分後、ピンポーンと鳴って、やって来たのは
「いきなり呼びつけて、一体何なのよ・・・」
体育教師の川原芹（かわはらせり）先生であった
「芹、鍋、作ってくれ」
「要件ってそれ？全く・・・あ、南山さんに栗谷さんもいるのね？」
「芹ちゃん、こんばんは～」
「こんばんは」
「芹、頼むぞ」
「はいはい・・・分かりましたよ、じゃあ食材あるみたいだし、作るわね」
そう言って、芹先生は、台所に向かった

芹先生が台所に向かうと、美鈴がこう言った
「あ、先生、これって「ＳＥＩＫＥＮ３」だよね？先生、持ってたんだ？」
「お、知ってるのか？じゃあ、対戦するか？」
「いいよ～、私、結構これ、得意だよ？」
「私もかなり強いぞ？いつもは芹とやってるんだが、芹じゃ相手にならなくてな？じゃあ、勝負だ」
そう言って、二人はＳＥＩＫＥＮ３をやるみたいだった
俺は、どうしようかと迷ったが、芹先生を手伝う事にした
台所に向かうと、芹先生が野菜を切ったりしている
「芹先生、手伝います」
「あら、ありがとう、じゃあこれ、切ってくれる？」
「はい」
そう言って、俺は、渡された野菜を切っていく
「ところで、翠先生ってあんな感じなんですか？」
「まあ、そうね、高校の時から全然変わってないわ、ず～っと一緒にいるようなもんだし、腐れ縁みたいな感じかもね」
「そうなんですか」
俺と芹先生は、雑談しながら、調理していった
そして、鍋が完成して、テーブルに持ってくる
「翠、出来たわよ」
「お、そうか、じゃあ、ここでやめにするか？」
「了解、それにしても、先生やりますね？私とほぼ互角じゃないですか」
「そっちこそ、やるみたいだしな？見直したぞ」
「じゃあ、いただきましょうか？」
そう芹先生が言ったので、俺たちはは～いと、言って鍋を囲う事にした
「いっただきます～」
そう言って、鍋料理を食べる

「おいしい～芹ちゃん、料理上手～」
「ああ、いつも助かってるぞ、芹」
「もう・・・翠？自分で料理したほうがいいわよ？」
「いや、昔からやってはいるんだが、どうも上達しなくてな？だから、あきらめた、芹に作って貰ったほうがいいからな、これからも頼むぞ」
「はいはい、分かりましたよ・・・全く、まあ私も、嫌じゃないから、いいけどね」
そう言いながら、四人で鍋料理を食べた
あっという間になくなって、俺と美鈴は、帰る事にした
「先生、ごちそうさまでした、また遊びに来ていいですか？対戦しましょう」
「ああ、いいぞ、今度は腕をあげとくからな？そう簡単には勝てないと思うぞ？」
「私だって、腕あげときますよ、じゃあ、まこ、帰ろうか？」
「そうだね、じゃあ先生、さようなら」
そう言って、先生の家から帰る事にした
帰る途中、美鈴がこう言って来た
「それにしてもさ？」
「何？」
「翠先生と芹ちゃん、ラブラブだったね～いいなあ、私たちも、あんな関係になりたいかも」
「・・・どう反応すればいいんだ・・・？」
「つまり、いつまでも仲良くしたいって事、じゃ、私、こっちだから、じゃね」
そう言って、美鈴は俺から、離れて行く
俺は、考えながら、家へと帰って行ったのであった・・・

～第七十六話～俺と先生の家その２～（後書き）

うん、五万いって、お気に入りと評価も増えて、うれしい限りです～

～第七十七話～俺と二学期終了～（前書き）

はい、零堵です。
この回で、二学期編終了です
次回から、冬休み編突入です。

～第七十七話～俺と二学期終了～

季節は、すっかり冬に突入して、かなり寒く感じる頃、俺こと、南(みな)山真琴(みやままこと)は、いつものように学校へと向かっていた
風がびゅうびゅう吹いていて、結構寒く感じながら、俺の通っている高校、山之辺高校に辿り着く
そして、校舎の中に入り、自分のクラスに向かうと、教室の中は、暖房器具もないのに、結構暖かく、薄着でも寒く感じないな・・・と、思いながら自分の席につく
席について、まわりを見てみると、クラスメイトは、結構うかれてる表情をしていた
まあ、なんでうかれているかは、解る
何故なら、次の日から、冬休み、つまり学校がないからである
まあ、明日から冬休みと言われたら、嬉しいよな・・・と、思っていた
そう思っていると、栗谷美鈴(くりやみれい)が、俺に話しかけてきた
「おっはよ～まこ」
「おはよう」
「明日から、冬休みだよね～」
「そうだね」
「ところで、まこ？」
「何？」
「今年のクリスマスは、どうするの？」
「クリスマスか・・・」
俺は、去年を思い出す
去年は、妹の亜季(あき)が「お姉ちゃんを思って、心をこめて特大のクリスマスケーキ作ったよ？お姉ちゃん、一緒に食べよ？」と言って来たので、母さんは仕事でいなく、妹と二人でクリスマスケーキを食べた記憶があった

「去年は、妹と二人でクリスマスケーキ食べたかな、今年はどうなるか、まだ決めてないよ？」
「そうなのですか？じゃあ、まこ、実は、この券があるんですけど？」
いきなり話しかけてきたのは、このクラスのアイドル、汐崎美咲（しおざきみさき）であった
「券・・・？」
「はい、クリスマスコンサートの券です、まこと一緒に行きたくて、チケットとったんですが、まこ、いいでしょうか？」
「クリスマスコンサートね・・・」
俺は、どうしようかと迷ったが、たまにはいいか・・・と思い
「解った、じゃあ、ありがたく受け取るよ」
そう言って、美咲から、クリスマスコンサート券を貰ったのであった
「汐崎さん、私には～？」
「すいません、チケット二枚しか取れなかったので、あきらめてください」
うわ、笑顔で言ってるよ・・・なんか、怖いぞ・・・
「ちぇー・・・じゃあ、いいよ～、まこと遊ぶ予定立てるからいいもん」
「おい、自分は、ＯＫしてないんだけど・・・」
「え～？じゃあ、冬休みに何か予定あるとか？」
「いや・・・まだ解らないよ、決まってないし」
「じゃあ、いいじゃん～、冬休みにまこの家に電話するね～」
「そう・・・」
「やっぱり、栗谷さんは敵と認識して、いいのかしら・・・」
そう、美咲がぶつぶつ言っていたが、気にしない事にした
そして、チャイムがなり、翠（みどり）先生が「あ～校長のありがたくもなんともない話があるから、体育館に集合するように」と言ったので、俺達は、体育館に向かった
体育館には、全校生徒が集まっていて、壇上に校長がいて、こう言

った
「え～明日から、冬休みであるが、ハメを外して遊ばぬように、まあワシは忘年会とかお正月は、遊びまくってやるわい・・・グフフフフ」
・・・絶対、まともな校長じゃないだろ・・・
少なくとも俺は、そう思っていた
校長のありがたくもなんともない話が終わり、教室に戻ると、翠先生がこう言った
「校長も言ったとおり、明日から冬休みだ、次は来年に会おう、じゃあ、私は、もう行く、気をつけて帰るように、ではな」
そう言って、先生は教室から出て行った
俺も帰る支度をして、帰ろうとすると
「まこ、クリスマス、楽しみにしてますね・・・」
と、顔を赤くしながら美咲がそう言ってきたので
「は、はあ・・・解りました」
俺は、あいまいに返事する事にした
帰る途中、俺はさっきの言葉をよく考えて
「あ、さっきのって、二人っきりだからデートって事か?・・・初めてのデートが、同姓・・・」
俺は、もしかして断った方がよかったのか・・・?と、思いながら、帰る事にしたのであった・・・

～第七十七話～俺と二学期終了～（後書き）

この回で、二学期編終了です
次回から、冬休み編突入です～
二学期編、かなり、長く続いたって感じですかね？

～第七十八話～俺とドラマ撮影～（前書き）

はい、零堵です。
冬休み編最初の話は、ドラマの話から始めたいと思います。

～第七十八話～俺とドラマ撮影～

冬休みに突入して、次の日、俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、行く所ができたそれは・・・

「は～い、本番行きます！アクション！」

そう、俺は、ドラマの撮影の為、山野辺撮影所に来ているのである

事の始まりは、こうであった

朝、今日から冬休みなので、何しようかな～と悩んでいたら、母親の美鶴（みつる）母さんが、こう言ってきた

「真琴、今日から冬休みよね？」

「うん、そうだけど？」

「じゃあ、ドラマに出てくれない？」

「ドラマ？もしかして・・・それって」

「そう、雑誌とかで発表したと思うけど、「天空カイザー」の続編のスペシャルドラマよ、実は今日から撮影開始なのよ、もちろんやるわよね？」

「それって、断っちゃダメなんでしょ・・・？」

「まあ、もうキャストきまってるしね、さ、行くわよ」

「解ったよ・・・」

結局、俺は、夏休みと同じく、ドラマをやる事になったのであったそして、母親と一緒に山野辺撮影所に入る

中に入ると、もう既に準備が出来ているらしくキャストと監督とか色々いたりしていた

「お、久しぶりだな？まこと」

そう話しかけてきたのは、この天空カイザーの主役、カイザー役の暮見翔（くれみかける）であった

「久しぶり、夏以来だっけ？」

「そうだな、それにしても・・・」

「何？」
「やっぱり、お前・・・女だったのか・・・？」
「そうだけど・・・何か問題が？」
「いや・・・別にいい、今までどおりで話しかけていいか？」
「いいよ、自分も今までどおりに話しかけるし」
そう話していると
「あ、翔に真琴、おっひさ～」
この天空カイザーでヒロイン、アカリ役を演じている、蓮城麗華（れんじょうれいか）であった
「麗華、久しぶりって・・・数日前にあったでしょ」
「あ、そうだったね」
「そうなのか？麗華」
「うん、ＣＭ撮影した時に、真琴が相手役だったからね」
「ＣＭってあれか？あのまっずいジュースの」
「そうそう、てことは、翔も飲んだんだ？あのスプライト」
「おう、しかし買ってみて飲んだけど、うまくはなかったな」
「私もそう思ったわ、あれ、売れるのかしらね？」
そう話していると、監督が話しかけてきた
「どうも、この天空カイザー２～囚われの姫君～の監督をやる事になった、新井（あらい）です、まこと君と麗華君は、ＣＭで会ったね、じゃあ真琴君と麗華君は、メイクと衣装に着替えて、来てくれるかな？」
「あ、はい、わかりました」
「了解しました」
そう言って、俺は、控室に行くと、中にいたのは
「真琴君、麗華ちゃん、久しぶり～」
以前、俺の衣装やメイクをしてくれた、バンダナをしている中沢（なかざわ）さんだった
「お久しぶりです、中沢さん」
「京子（きょうこ）でいいわよ～じゃあ、早速メイクと衣装を用意するわね」
そう言って、俺は京子さんにメイクさせられて、衣装に着替える

俺の服装は、黒っぽい服装だった
「うん、バッチし似合うわ、次は、麗華ちゃんね？」
「あ、はい、よろしくおねがいします」
そう言って、京子さんは麗華にメイクをして、衣装を用意する
麗華の衣装は、ピンク色をした、服装であった
「よし、完璧よ、さあ、行ってらっしゃい」
「はい、行ってきます、真琴、行きましょう」
「そうだね」
こうして、俺と麗華は、控室を出て、ドラマ、天空カイザー2～囚われの姫君～の撮影をするのであった・・・

～第七十八話～俺とドラマ撮影～（後書き）

まだまだ続きます～

～第七十九話～俺とドラマ撮影その２～（前書き）

はい、零堵です。
まだまだ続けたいと思います。

～第七十九話～俺とドラマ撮影その2～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、ドラマに参加する事になった
俺が出るドラマと言うのは、夏休みにやったドラマの続編、天空カイザー2～囚われの姫君～である
そのドラマで、俺がやる役は、カイザーの仲間のレキと呼ばれる役であった
カイザー役の暮見翔（くれみかける）と、ヒロイン、アカリ役の蓮城麗華（れんじょうれいか）と一緒に、ドラマの撮影を始めたのである・・・

「じゃあ、シーン1から撮るよ、よ～い、アクション！」
そう監督が言ったので、俺達は演技する事にした
「カイザー！」
「どうした？アカリ」
「敵が、現れたみたいよ、どうやらデルウイングの手下みたい、すぐに向かうわよ！」
「わかった、レキ、行くぞ！」
「いや、俺は留守番してる」
「何故だ？」
「それは、待機も重要な任務だからな、ここの守りは、俺に任せとけ！」
「・・・分かった、じゃあ、アカリ、現場に行くぞ！」
「わかったわ」
「カ～～ット！はい、ＯＫです、このシーンはこれでＯＫ，じゃあ次のシーン、撮るぞ」
そう監督が言ったので、次のシーンの準備をする
「準備Ｏｋだな？じゃあ、シーン2、よ～い、アクション！」
監督がそう言ったので、このシーンは俺の場面だけだったので、台詞を言う

「ふう・・・一体何なんだ?残ってるようにと言われて、残ってはみたけど・・・うむ・・・とりあえず、待ってみるかな」
「カ～ット!はい、ＯＫです、じゃあ次にシーン３の、収録、始めます、よ～いアクション!」
そう言ったので、続けて俺の出番みたいなので、セリフを言う
「あ、長官、俺に一体何の用があって残れと?」
「レキ、お前の武器の事で、残ってもらったのだ」
「武器、俺の?」
「ああ、お前の武器、黒い刃は、前回の戦闘で、だめになってしまってな?新しいものを用意したんだ」
「新しいもの?俺に?」
「そうだ、この剣を使ってみてくれ」
「この剣・・・前のと比べて、ちょっと重い気がするんだが・・・」
「ああ、前と比べると、少し重くしてある、だが、以前のモノと比べて、威力があがってるから、それでデルウイング軍を倒してくれ」
「分かった、カイザーとアカリが、デルウイングの手下の所に向かったみたいだし、長官、俺も加勢に行くぜ?」
「ああ、頼んだぞ!」
「カ～ット!まこと君、彰吾(しょうご)さん、ＯＫです、じゃあ、休憩に入ります～」
そう監督が言ったので、俺は、休む事にした
俺が休んでいると
「そういえばはじめましてだね?まこと君でいいのかな?」
「あ、はい、そうです」
「このドラマで長官役をやる事になった、三島彰吾(みしましょうご)だ、娘ともどもよろしくな?」
「娘?」
「ああ、娘の陽子(ようこ)が、この天空カイザーの姫君のエリカ姫をやる事が決まってな?今日は、撮影がないので、来てないんだが、このドラマに出る事になったので、よろしく頼む」

「あ、はい、解りました」
そう話していると、監督が
「休憩終わりです、じゃあ次のシーン3、撮りたいと思います、翔君、麗華君、準備はいいかな?」
「はい、Ｏｋです」
「私も、ＯＫです」
「じゃあ、シーン3、よ～い、アクション!」
今度は、俺の出番は、ないので、彰吾さんと一緒に見学する事にした
「カイザー、この付近に敵が現れたって、長官が言ってたけど・・・」
「見渡しても、誰もいない風に見えるんだが・・・まさか長官、ミスったのか?」
「油断しないで、姿は見えないけど、かすかに気配を感じるわ」
「本当か・・・なら、警戒しとこう・・・」
「あ、あそこ!」
「アカリ、何か見つけたのか!って、あれは!」
「カ～ット!はい、ＯＫです、今日の分は、これで終わりにしたいと、思います、おつかれさまでした～」
監督が、そういったので、俺達も挨拶して、控室に行く事にした
控室に行くと、俺のメイクとかしてくれた、京子(きょうこさん)がいて、こう言ってきた
「まこと君、麗華ちゃん、おつかれさま」
「お疲れ様です、京子さん、次の撮影日って、いつですか?」
「スケジュールによると、明日は休みで、明後日になるわね、まこと君も大丈夫かしら?」
「はい、学校とかないので、大丈夫ですけど・・・あの・・・」
「何?まこと君」
「自分の事、君付けですか?京子さん・・・」
「別にいいでしょ?そっち方が似合ってるしね?」
「はあ、まあいいですけど・・・」

そう話しながら、メイクを落としてもらって、私服に着替えて、控室を出る
控室を出て、外に出ると、母さんがいたので、母さんに話しかけた
「母さん、そういえば出番無かったね」
「そうね、今日は、真琴を連れてきただけで、私はず～っと見学してたのよ、まあ、次からは出番とかあると思うわよ、じゃあ、撮影も終わった事だい、帰りましょうか？」
「うん、解った」
こうして、俺は、母親と二人で、家に帰る事にしたのであった・

～第七十九話～俺とドラマ撮影その2～（後書き）

次で、八十話、うん・・・
かなり長く続いたな・・・って感じですね
まだまだ続きますので、よかったら見てやってくださいませ

～第八十話～俺とドラマ撮影その３～（前書き）

はい、零堵です
この回で、八十話達成しました
これからも続けたいと思います

～第八十話～俺とドラマ撮影その３～

俺こと、南山真琴は、冬休み中に、ドラマに参加する事になっていた
俺が、参加するドラマと言うのは、元はアニメが原作の、天空カイザーと言うアニメで
それの実写ドラマ化した作品を、やる事になったのである
一回目の収録が終わって、明後日になり
二回目の収録があるので、俺は、母さんと一緒に、山野辺撮影所に来ていた
山野辺撮影所に着くと、美鶴(みつる)母さんが
「真琴、私は、寄る所があるから、行くわね？控室にメイク担当の京子(きょうこ)さんが、いるから、メイクと衣装、彼女にやって貰いなさいね？じゃあね」
そう言って、母さんは、俺から離れていく
俺は、母さんに言われたとおりに、控室に行くと、中に京子さんがいた
「あ、まこと君、おはよう、じゃあ早速メイクと衣装に着替えてくれる？」
「あ、はい、分かりました」
そう言って、俺は、京子さんにメイクして貰って、用意された衣装に着替える
俺がこの天空カイザーでやる役と言うのは、カイザーの仲間のレキと呼ばれる役であった
レキの衣装に着替えて、京子さんにお礼を言って、撮影現場へと向かう
撮影現場に向かうと、俺の知らない人物がいた
その人物が俺に向かって、話しかけてきた
「あ、もしかして、まことさんですか？」
「あ、そうだけど」

「はじめまして、父から話は聞いてます、彰吾(しょうご)父の娘で、三島陽子(みしまようこ)と言います、今日から撮影に入るので、よろしくお願いしますね？」
「あ、はい、自分は南山真琴です、こちらこそよろしくお願いしますね」
そう話していると、カイザー役の暮見翔(くれみかける)と、そのヒロイン、アカリ役の蓮城麗華(れんじょうれいか)が話しかけてきた
「よ、まこと」
「おはよう、真琴」
「おはよう、二人とも」
「今日から撮影に入る、陽子です、よろしくお願いしますね」
「よろしく、麗華、今日はどこからだっけ？俺の出番」
「私達は、後のほうよ、最初はエリカ姫が中心の話みたいだしね？あ、監督が始めるとか言ってるわ、陽子さん、準備できてる？」
「はい、こっちはＯｋです、じゃあ監督が呼んでるから、準備してきます」
そう言って、俺たちから離れて行った
そして、数分後、どうやら撮影が始まるみたいなので、俺の出番は今の所ないので、見学する事にした
「じゃあ、シーン５から撮るぞ、よーい、アクション！」
監督がそう言ったので、撮影が始まった
「私は、スカイエアーの姫、エリカ、私の持っている天空石、何としてもカイザー達がいる所に届けるわ」
「そうは行かないわ、お～っほっほっほ！」
「何者！」
「わたしは、冷笑のミレイユ！その天空石、デルウイング様に相応しい！さあ、よこすのよ！」
「いや！、この天空石は、デルウイングなんかに誰が渡すもんですか！」
「ならば仕方がない！お前を捕まえてでも、手に入れる！、氷の微笑（ウインターブリザート！）」

「キャーアアア！体がう・・・ご・・・か、ない・・・」
「最初から素直に渡してればいいものよ？オ～ッホッホッホ！さあ、子分ども、この者ともども、デルウイング様の所まで、連れて行くわよ」
「ウィー！」
「カ～ット！はい、Ｏｋです、陽子さん、美鶴さん、ＯＫです」
「ありがとうございました、それにしても、美鶴さん」
「ん？何？陽子ちゃん」
「すごい演技ですね？ちょっと感心してしまいました」
「そう？陽子ちゃんもなかなかよ？」
「そう言ってくれて、ありがとうございます」
そう話していると、そう言うと監督がこう言ってきた
「はい、じゃあ次のシーン撮りますね、じゃあ、まこと君、麗華君、翔君、準備して下さい」
「はい、分かりました」
「りょ～かい」
「了解です」
そう言って、俺は、準備する
「じゃあ、準備できましたみたいだから、撮りますね？よ～い、アクション！」
そう監督が言ったので、台詞を言う
「カイザー！」
「どうした、レキ」
「長官から連絡があった、スカイエアーの姫、エリカがデルウイングのに攫われたみたいだぞ！」
「何！それは本当か！レキ」
「ああ、どうやらエリか姫は、天空石を持っていたらしい、デルウイングの手下が、それを手に入れようとして、エリカをさらったみたいだぞ、どうする？カイザー」
「そうだな・・・アカリは、どう思う」

「私は、すぐに助けに行った方がいいと思うわ、カイザー！助けに行きましょう！」
「そうだな・・・よし、エリカ姫を助けに行くぞ！、まず、長官の所に行って、エリカ姫が何所にいるか、聞き出そう！アカリ、レキ、行くぞ」
「ああ、分かったぜ、カイザー！」
「ええ、行くわよ！カイザー！」
「カ～ット！はい、Ｏｋです、今日のシーンは、全て撮影終了です、お疲れ様でした、スケジュールの関係上、次は明日、外で収録したいと思います、皆さん、よろしくです」
そう監督言ったので、俺と麗華と陽子は、京子さんのいる控室に入る
控室に入ると、京子さんがいて、「三人とも、お疲れ様」と声をかけてきてくれて、メイクを落してくれた
そして、私服に着替えて、俺は外に出る
今日は、母さんはどうやら別の撮影があるらしく、スタジオを離れる訳には行かないみたいなので、俺は、一人で帰る事にした
家に帰ると、妹の亜季（あき）が出迎えてくれて、一緒にご飯を食べて、俺は、疲れたので
寝る事にした
こうして、今日の撮影は、終わりを迎えたのであった・・・

～第八十話～俺とドラマ撮影その３～（後書き）

八十話達成、まだまだ頑張ります～

～第八十一話～俺とドラマ撮影その４～（前書き）

零堵です。ばぐって消えてしまったので、内容を変更して書き込みます。

～第八十一話～俺とドラマ撮影その４～

ドラマ撮影を中で収録して次の日、俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、外で収録する事になったので、俺は家を出る
たどりついた場所は、山野辺自然公園と呼ばれた場所だった
そこには、すでに何人か集まっていて、機材のセッテイングや、キャスト同士で話し合っていたりしている
俺は、監督にこう言った
「おはようございます」
「おはよう、じゃあ真琴君、着替えてくれるかな、あとは真琴君だけ、用意出来てないからね？」
「あ、はい、解りました」
俺は、そう言って、用意されたワゴン車の中に入る
中に入ると、俺に衣装とメイクをしてくれる、中沢京子（なかざわきょうこ）さんがこう言った
「まこさん、おはようございます」
「おはようございます」
「じゃあ、早速メイクと衣装を着替えさせますね？」
「あ、お願いします」
俺は、そう言って京子さんに任せることにした
数分後、メイクをして貰い、衣装を着せてもらって、俺は、ワゴン車から出る
外に出ると、もう既にキャストの皆さんが集まっていて、打ち合わせをしていた
俺もその中に入る
「あ、真琴、おはよう」
そう言ってきたのは、一緒に共演する、天空カイザーのアカリ役の蓮城麗華（れんじょうれいか）であｓった
「おはよう」

「さっき、監督から聞いたけど、今日で撮影全て終わらせるらしいわ、だから頑張りましょう?真琴」
「そうなの?じゃあ、頑張るかな」
そう言っていると、監督が
「は＝い、じゃあキャストも揃った事だし、撮影始めたいと思います、じゃあシーン17、アクション！」
監督がそう言ったので、俺達は演技する事にした
「長官が言ったとおりの場所に来たけど、ほんとにいるのかしら?」
「いや、長官の考えだ、多分何かあると思うぜ?」
「そうだな・・・」
「オ～ッホッホッホ!よくここがわかったわね?」
「お前は!ミレイユ!」
「ミレイユがいると言う事は、エリカ姫はいそうよ!」
「エリカ姫を返して貰おう!ミレイユ!」
「そう簡単に行くかしら?さあ、子分達!やっておしまい!」
「ウィー!」
「カ～ット!はい、Ｏｋです、では少し休憩に入りたいと思います」
監督がそう言ったので、俺達は休憩する事にした
休憩していると
「どう?真琴?」
そう言ってきたのは、冷笑のミレイユ役の美鶴(みつる)母さんだった
「えっと・・・すっごい新鮮な感じがするかなあ」
「まあ、そうよね?家じゃこんなの絶対に言わないわよ?」
「言ったら嫌だよ・・・母さん・・・」
そう話していると、監督がこう言ってきた
「はい、じゃあ休憩終わりです、じゃあ次のシーン撮りたいと思います、シーン十八アクション！」
そう言ったので、撮影開始したのであった
「こんな事でやられるか!、レキ、アカリ、行くぞ!」
「ええ、解ったわ!カイザー!」

「ああ、了解だぜ！」
「行くぜ！うりゃあ！」
「えい！とう！やあ！」
「っふ、食らいやがれ！」
「ウイー！ウイー！」
「っく、なかなかやるわね・・・でも、これならどう！」
「助けて・・・・」
「エリカ姫！」
「この女の命がほしかったら、攻撃をやめるのよ！」
「っく、卑怯な・・・」
「何か手はないの？カイザー！」
「・・・俺に任せろ・・・」
「レキ？何をするつもりだ？」
「オ～ッホッホッホ！さあ、これで終わりよ！」
「終わりはお前だ！ミレイユ！」
「な！後ろからだと・・・卑怯な・・・」
「人質を取ったお前には、言われたくないぜ！いまだ！カイザー！」
「・・・ああ！解った！とどめだ！ミレイユ！天空剣！天空剣（カイザーブレード！）」
「キャアアア！」
「やったの？カイザー・・・」
「・・・ああ、どうやら終わったみたいだ・・・助かったぜ、レキ」
「協力するのは当たり前だろ？仲間なんだからな？」
「ああ、そうだな・・・それより、エリカ姫、大丈夫だったか？」
「ええ、なんとか・・・でも、天空石をデルウイングに奪われてしまったわ、何としても取り返して！」
「天空石か・・・解った、取り返すぞ！アカリ、レキ！」
「ええ、解ったわ」
「ああ！」
「カ～ット！はい、ＯＫです、じゃあちょっと場所を変えて、最後

の収録しま～す」
そう言って、俺達は少し、移動した
そして、移動した先で、最後の撮影をしたのであった
「デルウイング！天空石を返してもらうぞ！」
「フハハハハ！前みたいに我はそう簡単にはやられんぞ！行くぞ！」
「こっちだってやってやる！アカリ！レキ！行くぞ！」
「ええ、行くわよ！ルナティックイレイザー！」
「そんなの効かんわ！はあ！」
「嘘！無傷！」
「なら俺が！うおおお！黒い刃（ダークジェノサイドブレード）！」
「っく、前より威力があがっているが、まだまだ！」
「ならこれでどうだ！究極奥技！天空爆裂剣（カイザーブレードインフニティー）！」
「ぐおおおお！！でも、まだだ！」
「嘘だろ・・・カイザーの究極奥技でもやられないなんて・・・」
「私達ここで、負けるの・・・」
「あきらめてはいかん！」
「長官！」
「実は教えてなかったが、三人の合体技があるのだ、それでやつを倒せるぞ！やつは弱っている、チャンスだ！」
「合体技？なら、最初に言ってよ、長官！」
「すまぬ、忘れていたのだ、さあ、三人で叫ぶのだ！「光り集いし正義の光、我に力を！天空瞬殺剣！（カイザーブレードシンフォニー！）」と」
「やってみるぜ、長官！行くぞ！アカリ、レキ！」
「そうね、やってみるわ！」
「ああ！」
「「「光り集いし正義の光、我に力を！天空瞬殺剣！（カイザーブレードシンフォニー！）」」」
「グアアアアア！何だとこの我があああああ！」
「やったぜ、これでデルウイングを倒した！」

「ええ、そうね！」
「みんな、よくやったぞ！」
「皆さん、ありがとうございます、天空石も無事でした、ありがとうございます」
「カ～ット！あとは、ナレーションの撮りだけなので、今日の撮影は終了です、皆さん、お疲れ様でした～」
「お疲れ様～」
俺は、そう言って、ワゴン車の中に入り、京子さんにメイクを落として貰って、私服に着替えて外に出る
外に出ると、母さんが話しかけてきた
「お疲れ様、真琴、どうだった？」
「ちょっと恥ずかしかったけど、少し楽しかったかな？」
「そう？あ、私はこれから事務所に寄らなくちゃいけないから、行くわね？先に帰ってなさいね？真琴」
「解った」
そう言って、母さんは離れて行く
次に話しかけてきたのは、エリカ姫役の三島陽子（みしまようこ）と、長官役の三島彰吾
（みしましょうご）だった
「真琴君、お疲れ様」
「あ、お疲れ様です」
「また、いつか一緒にドラマとか共演したいかな、お父さんもそう思うよね？」
「まあ、いいんじゃないか？」
「え～っと、今の所、そういった予定はないんだけど・・・」
「あ、そうなの？ちょっと残念かな・・・」
「陽子、そう言うな、じゃあ私達は行くぞ、ではな？真琴君」
「じゃ～ね、真琴君～」
そう言って、三島親子は去って行った
俺は、一人で家に帰る事にした

こうして、ドラマ撮影全て、終わったのである・・・

～第八十一話～俺とドラマ撮影その４～（後書き）

内容を変更して、書き込みます。

～閑話～俺とキャラ紹介その４～（前書き）

キャラが増えてきたので、キャラ紹介パート４です

～閑話～俺とキャラ紹介その４～

＞ｉ３３４５８＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞２９７１＜
南山真琴＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞みなみやままこと＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞年齢１７歳、山野辺高校２年
身長大体１７０ぐらい、体重５０？いかないかぐらい
家族構成、母親と妹の３人ぐらし
黒髪のショート、大変スレンダーな体（つまりぺったんこ）、天空カイザーのレキのコスプレするとそっくりと言われる
週に一回、ラブ喫茶「アイライク」でバイト
一人称、俺か自分
この物語の主人公、普通な日常を過ごしていたが、ある日、それが非日常に変わってしまった、ある意味不幸な人物、なぜか異性より同姓にもてる（笑）
突っ込み体質でもある

＞ｉ３２９６６―２９７１＜
汐崎（しおざき）美咲（みさき）年齢１７歳、山野辺高校２年
身長１６０ぐらい、体重４５？ぐらい
家族構成、両親と３人家族
一人称私
黒髪のストレートで、グラビアアイドルのような体、クラス一の美少女、好きな人物南山真琴
この物語のヒロイン１？真琴にラブレターを送った人物、容姿端麗、運動抜群で成績も優秀

美咲ファンクラブ、通称（ＭＫＦＣ）があったりする
従姉に汐崎茜がいる、茜の事をお姉ちゃんと言っている
真琴が好きすぎて、少々暴走気味な妄想もする、真琴が絡むとヤンデレ化もする（笑）
真琴がもし男と付き合うような事があったら、全力で別れさせようとも思っている

＞ｉ３２８０６―２９７１＜

栗谷美鈴（くりやみれい）年齢１７歳、山野辺高校２年
身長大体１５５ぐらい、体重５０キロぐらい
家族構成、両親と弟の四人家族
一人称私
栗色のストレートで、幼児体型、アニメやゲームにはまっている、腐女子
バイト、ラブ喫茶「アイライク」で働いている
真琴の親友でヒロイン２？アニメが大好きで、コスプレもしたりしている、真琴と一緒に行動するのが好きなので、よく一緒にいようとする

＞ｉ２９５８５＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞２９７１＜
南山亜季＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞みなみやまあき＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞年齢１５歳、山野辺中学３年
身長１５０ぐらいで、体重４０ぐらい
黒髪のツインテール、幼児体型、真琴の妹

一人称私
真琴の妹で、料理が得意、真琴、つまりお姉ちゃんの事が大好き、お姉ちゃんに近づく者は、誰であろうと嫌だと思っている、姉の事になると、ヤンデレ化もする

ＭＫＦＣ（美咲ファンクラブ）
美咲のファンクラブ、美咲を彼女にしようと色々と行動しているが、当人に断られている
クラスの中でも数人はいる程度

＞ｉ３３５８５―２９７１＜
南山美鶴（みなみやまみつる）年齢３９歳、真琴と亜季の母親
一人称私
真琴と亜季の母親で、女優、普段家にいなく、家事を娘にまかせっきり

＞ｉ３３６１７―２９７１＜
東雲紫（しののめゆかり）　年齢２２歳
身長１５７ｃｍ　体重５０ぐらい
ショートカットな黒髪、モデル体系
一人称私
ラブ喫茶「アイライク」の店長さん、腐女子なので、美鈴と話があう
弟の玲をおもちゃにしている

＞ｉ３３７５３＜ｒｕｂｙ＞＜ｒｂ＞２９７１＜
東雲玲＜／ｒｂ＞＜ｒｐ＞（＜／ｒｐ＞＜ｒｔ＞しののめあきら＜／ｒｔ＞＜ｒｐ＞）＜／ｒｐ＞＜／ｒｕｂｙ＞　年齢１５歳、　山之辺高校一年
身長１５０ぐらい、体重５０ぐらい
短髪の黒髪で、童顔
一人称僕
真琴の後輩で、ラブ喫茶アイライクで、女装して働いている
同姓によくモテル、真琴の事を先輩と言っている

桐谷佐奈（きりやさな）年齢１８歳
身長１４７ＣＭ　体重４５?ぐらい
茶髪の髪の毛で、ポニーテール
一人称私
ラブ喫茶アイライクで働いてる、真琴を見ると、ちょっとどきどきしてしまうとか思っている

汐崎茜（しおざきあかね）年齢２１歳、　漫画家
身長１５５ぐらい　体重５０ぐらい
黒髪のストレート
一人称私
汐崎美咲の従姉、漫画家志望、真琴をメインに漫画を書く事にした

川原芹（かわはらせり）年齢二十五歳　体育教師
身長１６０ぐらい、体重５０ぐらい
黒髪のショート
一人称私
山野辺高校の体育教師、せりちゃんと言う愛称で、呼ばれて

生徒にも先生にも人気がある
朝崎翠と、同期で、同じネットゲームをやる仲でもある

朝崎翠（あさざきみどり）年齢二十六歳　国語教師
身長１７０ぐらい、体重五十ぐらい
黒髪のロング
一人称私
山野辺高校の国語教師で、真琴のクラスの担任
性格は大雑把でかなりマイペース、授業中に寝るなど、勝手な行動も多く、また、上の秘密を握ってたりしている
ネットゲームやゲーム大好き人間でもある
ちなみに川原芹と同期で、仲が良かったりしている

暮見翔（くれみかける）　俳優
年齢十八歳　体重六十ぐらい
短髪の髪
一人称俺
俳優として、色々と出ていたりしている、脇役や主役もやったりしていて
天空カイザーのドラマをやった時、真琴の事を男だと思っていたりしていた
蓮城麗華（れんじょうれいか）とは、幼馴染で、友達以上恋人未満な関係だったりしている

蓮城麗華（れんじょうれいか）アイドル
年齢十七歳　体重四十五キロぐらい
茶髪のショート

一人称私
バラエティーやドラマ、歌を歌ったりしている、国民的を目指しているアイドル
暮見翔とは、幼馴染で仲がよい

西崎彩香（にしざきあやか）　年齢十七歳　山野辺高校２年
身長百六十ぐらいで、体重五十ぐらい
黒髪のお下げ
一人称私
真琴のクラスの委員長、しっかりしようと、常に努力しているクラス委員長なので、色々と頼まれる事が多い

有栖川美紀子（ありすがわみきこ）年齢十七歳　山野辺高校２年
身長百五十五ぐらいで、体重四十五ぐらい
黒髪のポニーテール
一人称私
真琴のクラスメイトで、演劇部員
面白い事が大好きで、周りを巻き込む事を多々あったりしている

住吉愛子（すみよしあいこ）　年齢十七歳　山野辺高校２年
身長百四十九ぐらい、体重５０ぐらい
黒髪のショートで、真琴と同じく貧乳
一人称私
真琴のクラスメイト、クラスでは、結構地味な存在であったが真琴と会話するようになって、真琴の事を友達だと思っている
趣味にネットサーフィンをしたりしている

新井年齢３０歳　監督
身長百七十ぐらい、体重六十ぐらい
一人称俺
映画とかの監督、丁寧な口調で、言っている
誰に対しても君付けで呼んでたりしている
天空カイザーの監督をやったりした

中沢京子年齢二十四歳　メイク担当
身長百六十ぐらい、体重五十ぐらい
一人称私
黒髪で、頭にいつもバンダナをまいてたりしている
衣装とメイクを手掛ける、スタッフさん
天空カイザーでは、キャストの衣装とメイクを担当している
実は隠れ腐女子、誰にもばれないように装っている

三島彰吾年齢四十歳　俳優
身長百八十ぐらい、体重七十ぐらい
グラサンの似合う渋いおじ様的な人
俳優、天空カイザーでは、カイザー達の長官役として、出演

娘がいる

三島陽子年齢十九歳　女優
身長百五十ぐらい、体重五十ぐらい
ロングの黒髪に、スレンダーな体
一人称私

父も俳優、母も女優の芸能一家
天空カイザーで、エリカ姫役を演じた
実は、麗華と仲が良く、いつも遊んだり、相談しあったりしている

～閑話～俺とキャラ紹介その４～（後書き）

キャラ、結構増えましたね
イラストも随時載せようかな・・・とか、思ったり・・・

～第八十二話～俺とクリスマスデート～（前書き）

はい、零堵です
さっきアクセス数見たら、５５５５５でした、ゾロ目ってすごいですね～
まあ、今は変わってますが

～第八十二話～俺とクリスマスデート～

ドラマの撮影も終わり、俺こと南山真琴（みなみやままこと）は、用事があるので、出かける事にした
その用事というのは、同じクラスの汐崎美咲（しおざきみさき）から「クリスマスコンサート、一緒に行きましょう？」と誘われたからである
俺は、どういった服装で行こうかな・・・と迷い、結局、ジーンズにジャンバーと、厚手の恰好で外に出た
外に出て、山野辺駅のほう行くと、既に待っていたのか、美咲がいた
「あ、まこ、来てくれてうれしいです・・・」
「う、うん、約束したからね・・・ところで、その格好・・・えらい決めてきてるね・・・」
「ええ、まことのデートですから、バッチリ着こなしてきました、さあ、行きましょう？まこ」
そう言って、俺の腕を掴んで、カップル繋ぎで街中を歩く羽目になった
クリスマスなので、外にはカップルが多く、いつも以上に賑わっていたりしている
俺と美咲は、その街中を歩いて、クリスマスコンサートが、行われる山野辺ホールに辿り着いた
「ここで、クリスマスコンサートやるんですよ、さあ、中に入りましょう」
「そうだね」
そう言って、山野辺ホールの中に入る
山野辺ホールは、結構広く、俺達が座る席は、後ろのほうで、コンサートよく見える位置だった
座席について、開演時間になり、クリスマスコンサートが始まる
中身は、有名な作曲家のクラシックと、アニソンとかアイドル曲とか色々演奏するみたいだった

演奏中、美鈴が話しかけてきた
「まこ、どうですか？ここにきて」
「う～ん、来た事がなかったから、ちょっと新鮮かな？ありがとね？」
「いえ・・・まこが、よろこんでくれるのならばいいです・・・」
そう雑談しながら、演奏を聴く
そして、演奏が終わり、山野辺ホールを出たら、美咲がこう言った
「まこ、ゲーセンに行こ？」
「別にいいけど、なんで？」
「ちょっとまことやりたいゲームがあって・・・いい？」
「解ったよ、付き合うよ」
「ありがと～」
そして、俺達は、ゲーセンに向かう事にした
山野辺商店街に入り、その中にある、ゲーセンに入る
中に入ると、クリスマスだからか、カップルが多くいて、結構賑わっていたりしている
美咲は、そのゲーセンの中にあるものを、指差した
「まこ、あれ、やろう？」
「あれって、プリントクラブ？」
「そう、一度まことやってみたくて、さあ、中に入ろう？」
「解った・・・」
俺は、そう言って、美咲と一緒に、プリント倶楽部と書かれた、機械の中に入る
中に入ると、画面があって、カメラが備えつけてあり、お金を入れて写真を撮ってくれるものである
美咲は、お金を入れて、フレームを選ぶ
美咲が、選んだのは、中央にハートマークがあるものだった
うん、かなり恥ずかしいと思うんだが・・・美咲は、恥ずかしくないのか？と、思ってしまった
「じゃあ、撮るぞよ、３・２・１」

そう機械から、カウントダウンが始まって、写真を撮ろうとした時
美咲の手が俺の顔を掴んで
「まこ、大好き！」
そう言って、俺にキスして来た、俺は驚いて、固まってしまった
しかも唇に、その姿がカシャと音が鳴り、写真には、俺と美咲がキスしてる場面がバッチリと写っていた
「えへへ、まことのキスしてる写真撮れました、これ、保存して大切にします」
「い、いきなりの事で、びっくりしたんだけど・・・」
「もしかして、嫌でした・・・・？」
そう美咲は、悲しそうな顔で言う
「・・・嫌じゃないよ、嫌いってわけでもないし・・・ちょっとびっくりしただけ・・・」
「よかったです・・・私、まこになら抱かれたって構いませんし・・・」
「そ、それはさすがに・・・ちょっと・・・」
「そうですか・・・でも、私はいつでも準備Ｏｋですよ？」
俺は、それを聞いて、どう答えたらいいんだ・・・？と、迷ってしまった
それにちょっとドキドキもしている、さっきキスされたからか？もしかして、俺も美咲を好きに？とか、思ってしまったりもして、一体なんなんだ？とそんな考えが浮かんでしまったのであった
そして、ゲーセンでちょっと遊んで、外に出ると
「あ～お姉ちゃん！」
外にいたのは、妹の亜季（あき）だった
「亜季？」
「お姉ちゃん、朝から何処に行ってたの？私、今日、お姉ちゃんと過ごそうと思って、探してたんだよ？あえてよかった～・・・で、お姉ちゃん・・・その人は・・・？」
「前にも会いましたよね、まこの彼女の美咲です」

「彼女・・・!?お姉ちゃん、ほんと!?」
「い、いや違うって、美咲さん、何言ってるの!?」
「だって、今もデートしてるじゃないですか?それにキスもしましたし・・・まこ、妹といつまでも一緒と言う訳にはいけないわ」
「キ、キス・・・?お姉ちゃん!?どういう事!?」
「そ、それは、無理やり・・・」
「気持ちよかったです・・・」
「な、何言ってるの!?」
「許さない!お姉ちゃんは私のなの!」
「いいえ、私のです!」
「私の!」
「私のものよ!」
「・・・あ~もう、喧嘩するなら!俺は、帰る!、じゃあな!」
俺は逃げるようにその場から立ち去る事にした
なぜなら、かなり目立ってたからである、恥ずかしいって!
俺は、家に戻ると、電話がかかって来て、それに出ると、美咲からだった
「さっきはすいません、お、怒ってます?」
「当たり前だよ!恥ずかしくないの!?それに付き合ってないからね!」
「でも、私は本気です!絶対に付き合って見せます、それにまこ、私の事、嫌いじゃないでしょ?」
「友達としてならって事だよ・・・なんか、疲れた、電話切るよ・・・」
「あ、待っ」
美咲が何か言う前に、俺は電話を切る
数分後、亜季が帰って来て、泣きそうな顔で質問して来たので、俺は妹を慰めながら
亜季の作ってくれた、クリスマスケーキを食べる事にしたのであった
こうして、俺のクリスマスは終わったのである

今後、美咲とどう接すればいいんだ・・・？と、思ってしまったのであった・・・

～第八十二話～俺とクリスマスデート～（後書き）

ここに来て、初めて恋愛っぽい話書いたかもって感じですうん、恥ずいｗ
この物語は、まだまだ続きます～

～第八十三話～俺と新しいバイト仲間～（前書き）

はい、零堵です。
新キャラ一名追加しました。

～第八十三話～俺と新しいバイト仲間～

冬休みに入って、俺こと、南山真琴は、行く所があった
その場所とは、俺が働いている喫茶店、ラブ喫茶「アイライク」である
そう、今日は、そのバイトの日なので、冬休みの最中でも、お店に行くのであった
電車に乗り、秋葉原へとたどり着く
冬休みに入ってるせいか、人がたくさんいて、結構にぎわっている
寒い中、元気だな・・・と、俺は思っていた
そして、移動して、お店、アイライクに辿りつく
もうお店は、営業しているらしく、店内はちょっと賑やかだった
俺は、店内に入り、店長の東雲紫（しののめゆかり）さんに、挨拶をする
「おはようございます」
「あ、おはよう、まこさん、今日もよろしく頼むわね？」
「あ、はい、じゃあ着替えてきますね」
そう言って、俺は、控室に入る
中に入って、用意されている服に着替える
ここ、アイライクでは、メイド服が基本的なのだが、俺の服は、メイド服では無く、ウエイターとかが着る、執事服のような物を着て、ホールに出た
ホールに出ると、俺に話しかけてきたのは
「おはようです、まこ先輩」
店長の弟の東雲玲（しののめあきら）であった
玲は、男なのにメイド服を着て、ウイッグを漬けているので、美少女に見えたりしていた
「おはよう、玲は、今日もモテモテかな？一部に」
「はい・・・僕を呼ぶ客って男性ばっかりですよ・・・まこ先輩は、逆に女性ばっかりですよね」

「まあ、そうなるなあ・・・お互い大変だよね・・・」
「はい、・・・いつ男ってばれるか不安ですよ、まあ、今のところ、バレテはいませんが・・・
あ、お客様が呼んでるので、行きますね?」
そう言って、玲は、俺のそばから離れていく
確かに、男の声で「あきらちゃん~」とか呼んでいるのが聞こえた
本当にモテモテだな・・・同姓に・・・まあ、俺も人のこと言えないけど・・・
俺は、そう思って、接客する事にした
相変わらず、俺を呼ぶ客は、主に女性ばっかりだった
男性客は、ほとんど玲を呼んでいたりする
そうして、接客をして時間が経ち、休憩時間になったので、控室に行って休んでいると、俺の知らない人が入ってきた
「あ、あの、まこさんですか?」
「あ、はい、そうですけど」
「始めまして、ここに新しく働く事になった、秋村真帆(あきむらまほ)です、真琴さんが本名なんですよね?店長の紫さんに教えてもらいました、あと、天空カイザーのレキ役やってましたよね?私、それ見てすごくかっこいいなと思ったんですよ、まさか、あのドラマに出てる役者さんがこんな所にいただなんて、本当にびっくりです、あの、他にドラマとか出る予定とかはあるんですか?あれ?でも、あったらここにはいませんよね?忙しいですし、やっぱりテレビで見るより、本当に素敵です」
何か凄いマシンガントークだな・・・この子
「あ、ありがと、秋村ってことは・・・もしかして・・・」
「あ、はい、私、ネットで「あっきーのたびたちにっき」と言うサイトを運営してます、掲示板に真琴さん、書き込んでくれましたよね?」
「う、うん、一言だけ書き込んだかな」
「あれから、凄い数の返信が来て、また真琴さんの書き込みを待っ

てる方が大勢いるんですよ、また、何かサイトに書き込んでくれません？」

「・・・わ、わかった、なるべくそうするよ・・・」

なんで、そんなに人気が出てるのかが、不明なんだが・・・

秋村さんと、話していると、紫さんがやって来て「休憩終わりですよ」と言ってきたので、俺と秋村さんはホールに戻った

戻る途中「あ、私の事はあっきーでいいですよ？私もまこさんって、呼んでいいですか？」って言ってきたので、俺は、あっきーと呼ぶ事にしたのであった・・・

～第八十三話～俺と新しいバイト仲間～（後書き）

～思ったこと、パート2～

最近、この小説にもし、イメージとして声優を当てたら、誰になるかをやった所

南山真琴　小林ゆうさん
南山亜季　小見川千明さん
栗谷美鈴　田村ゆかりさん
汐崎美咲　中島愛さん
南山美鶴　住友優子さん
東雲紫　皆口裕子さん
東雲玲　堀江由衣さん
桐谷佐奈　伊藤静さん
汐崎茜　平野綾さん
川原芹　新谷良子さん
朝崎翠　生天目仁美さん
暮見翔　宮田幸季さん
蓮城麗華　ゆかなさん
西崎綾香　榊原ゆいさん
有栖川美紀子　金田朋子さん
住吉愛子　國府田マリ子さん

こんな感じですかね？あくまで、作者のイメージとしています。

～第八十四話～俺と新しいバイト仲間その2～（前書き）

はい、零堵です。
もうすぐ百話ですね～
うん、この物語もよく続いたものです

～第八十四話～俺と新しいバイト仲間その2～

俺こと、南山真琴は、新しい人に出会った
その名前は、秋村真帆(あきむらまほ)さん、あっきーと呼んでほしいと言ったので、
あっきーと呼ぶ事にした
俺の働いている、ラブ喫茶「アイライク」に新しく入ったメンバー
である
俺は、新しく入ったあっきーと一緒に、接客する事にしたのであった
無事にバイトが終わって、控室で着替えて、私服を着て、ホールに
行くと、アイライクのスタッフが集まっていた
「あ、まこさん、実は話したい事があるんですけど、いいですか？」
店長の東雲紫(しののめゆかり)さんが、そう言ってきた
「あ、はい、話したいことって、なんですか？」
「実は、年があけたら、社員旅行って話になっているんです、まこ
さんもどうですか？」
「まこ～一緒に行こうよ？旅行～」
「まこさんと、一緒に行きたいです・・・」
そう言ったのは、栗谷美鈴(くりやみれい)と桐谷佐奈(きりやさな)さんだった
俺は、どうしようか迷ったが、旅行は楽しみなので
「あ、じゃあ、自分も参加でいいでしょうか？」
「いいですよ、じゃあ決まりですね、旅行に参加するメンバーは、
私、佐奈、真琴、美鈴、真帆の五人で行きましょう」
「あれ？あきらちゃんは、参加しないの？」
「はい、僕は、友達に誘われてるので、断わります」
「そう、ちょっと寂しいね～」
「皆さん、旅行、楽しんで来てくださいね？」
「日にちは、年があけたら、連絡しますね、じゃあ、今日も仕事、
お疲れさまでした」
そう店長が言ったので、俺は、帰る事にした

俺は、美鈴と住んでいる町が一緒なので、一緒に帰っていると、あっきーが話しかけてきた
「まこさん、美鈴さん、今日はお疲れ様でした」
「あっきーもお疲れ様、どう？バイト？」
「はい、ちょっと大変でしたけど、結構楽しいです、じゃあ、私、バスで帰るので、ここで、お別れです、では～」
そう言って、あっきーは、離れていく
「ねえ、まこ？」
「何？美鈴？」
「あっきーって結構元気だよね？店内でも男女両方に人気あるみたいだよ？」
「そうなの？」
「うん、私も頑張らないとね～、あ、そういやまこ？」
「何？」
「大晦日って、どうするの？」
「そうだな・・・家族と一緒に過ごすかな、でもなあ、母さんが特番の番組に出演するかもだし、まだ未定かな」
「じゃあさ？私と一緒にお参りに行こうよ？」
「そうだね、そうしようか」
「じゃあ、決まりだね」
そう話しながら、電車に乗って、山野辺市に辿り着く
美鈴は、「私、寄る所があるから、じゃね？まこ」と言って、俺と離れて行った
俺は、まっすぐ家に帰って、家の中に入ると、母親の美鶴（みつる）母さんが、こう言ってきた
「真琴、お帰りなさい」
「母さんが家にいるなんて珍しいね？いっつも遅いのに」
「今日は、早く収録が終わったのよ、あ、そうだ、真琴」
「何？」
「実はね？特番の番組に出てほしいのよ、大晦日にやる生放送の」

「え、生放送の？」
「そう、私、真琴が出るって言っちゃったのよね？別にいいでしょ？何か予定は、あるの？」
「さっき美鈴と神社にお参りするって約束しちゃったんだけど・・・」
「そう、じゃあちょっと待って」
そう言って、母さんは電話を取り出すと、どこかにかける
そして「あ、もしもし？美鶴です、うん、実はね？」とか話しだして、数分話して、電話を切ると
「ＯＫだって」
「一体誰に電話したの？母さん」
「美鈴ちゃんよ、美鈴ちゃんが言うには「私も一緒に見学する～」とか言ってきたから、Ｏｋしたわ」
「何で母さんが美鈴の番号を・・・」
「前に家に来た日あったでしょ？その時に教えてもらったのよ、私、よく家にいないから、真琴と亜季の事を見ててってお願いとかしたしね」
「そ、そう・・・」
母さん、美鈴にそんな事、頼んでたのか・・・
「じゃあ、大晦日、よろしく頼むわね？真琴」
「解ったよ、母さん・・・」
そう言って、俺は、自分の部屋に行く
そして、着替えて、疲れたので、寝る事にした
こうして、俺の一日が、終わったのであった・・・

～第八十四話～俺と新しいバイト仲間その2～（後書き）

アクセス数が、もうすぐ六万行きます～
かなり読まれているので、うれしいです
感想くれると、作者のやる気があがります。

～第八十五話～俺と大晦日～（前書き）

はい、零堵です。
今日から、毎日じゃなくて、投稿できそうなら、投稿したいと思います。

～第八十五話～俺と大晦日～

時間が過ぎて、大晦日、俺こと南山真琴（みなみやままこと）は、ある場所に、来ていた
その場所は、山野辺放送局と呼ばれる建物にたどり着いていた
なぜ、その場所にいるかと言うと
美鶴（みつる）母さんが、「番組に出てくれない？」と、言われたからである
朝起きて、出かける準備をしようと着替えようと思ったら、家に俺
の親友の栗谷美鈴（くりやみれい）が、やってきた
「まこ、おはよう～」
「おはよう・・・って、美鈴・・・何で家に？」
「何言ってるの、美鈴？今日出かけるんでしょ？だから、私も一緒
に行こうと思って、来たんだよ？それにしても・・・まこの寝顔っ
て、かわいいねえ～」
「何、見てるの！？」
「いや～堪能させてもらいました～、あ、着替えるなら手伝うよ？
まこ？」
「い、いいよ、自分で着替える」
俺は、すばやく着替えると、母さんと美鈴と三人で、外に出る
数十分歩いて、山野辺放送局と言う所に辿り着いた
「そう言えば、真琴も美鈴ちゃんも、ここに来るのは初めてよね？」
「あ、はい、初めてです、まこもそうだよね？」
「まあ、そうかな、ドラマの撮影場所に行ってたのは、山野辺撮影
所だし」
「じゃあ。中に入ったら、きちんと挨拶するのよ？それが基本だか
らね？」
「は～い」
「分かった」
そう言って、俺達は、山野辺放送局に入る
中に入って、挨拶をして、歩いていると

「うわ～芸能人いっぱいいるね～、すご～い」
「美鈴・・・楽しそうだね・・・」
「そりゃ、楽しいよ～、こういうの初めてだしさ～？」
「そう」
「え～っと、私達が向かう場所は・・・二階ね」
そう言って、三人でエレベーターに乗って。二階に行く
少し、歩いて、スタジオと書かれた場所の中に入ると
「美鶴さん、お早うございます。待ってました」
と、男の人が話しかけてきた
「時間は大丈夫ですか？」
「はい、大丈夫です、え～っと、そちらの方々は？」
「私の子供の真琴と、その友達の美鈴ちゃんです、美鈴ちゃんは、
見学でよろしいですか？」
「そうですか、じゃあ、ＯＫですね、真琴さん、控室に案内します
ので、準備してきて下さい」
「あ、はい、じゃあ、美鈴、行ってくるね」
「りょ～かい、まこ、行ってらっしゃい～」
そう言って、俺は、控室に案内されて、中に入ると
「まこさん、久しぶり～って、数日前にあったばっかりよね」
中にいたのは、天空カイザーの時、衣装とメイクをしてくれた、中沢京子さんだった
「京子さん、こんにちは」
「こんにちは、じゃあ早速メイクするわね、今回は衣装は着替えな
くていいわ、メイクだけするように言われたから」
そう言って。俺にメイクを施す
メイクだけなので、そんなに時間掛からなかった
「はい、終わり、じゃあ、頑張っていってらっしゃい」
「あ、はい」
そう言って、俺は控室を出る
そして、スタジオに戻ると、美鈴と話している者達がいた

「あ、まこ～お帰り～」
「ただいまって・・・何、話してたの？」
「いや～ドラマの収録どうだったとかね～」
「真琴、こんにちは」
「こんにちはです、まことさん」
「おう、まことも来たんだな？やっぱ」
美鈴と話していたのは、天空カイザーのドラマで、カイザー役の暮見翔と、そのヒロイン、アカリ役の蓮城麗華、エリカ姫役の三島陽子であった
「三人とも、こんにちは」
「おう、まこと、一緒の席に座る事になったみたいだぜ？」
「一緒の席に？」
「まあ、つまりこの天空カイザー2の番宣の為ね、だから私達が呼ばれたんだし」
「そう言う事、私達が出る番組は、バラエティー番組で、天空カイザーチームとして、参加する事になっているみたいよ？まこと、一緒に座りましょう？」
そう言われたので、俺は、天空カイザーチームと書かれている、座席に座った
右に麗華、左に陽子、そして後ろに翔と美鶴母さんが座った
美鈴は、隅っこで見学という形になっている
こうして、生放送の番組が、始まったのであった・・・

～第八十五話～俺と大晦日～（後書き）

うん、この物語もついに八十五話行きましたね～
百話まで、あと少し～

～第八十六話～俺と大晦日その2～（前書き）

はい、零堵です。
今日は投稿できるので、投稿します
もうちょっとでアクセス数６万いきますね～ｗ

～第八十六話～俺と大晦日その2～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、山之辺放送局に来ていた
大晦日の日、生番組に出演が、決定したからである
親友の栗谷美鈴（くりやみれい）と一緒に、山之辺放送局に向かい、俺は、その中で、
生放送の番組に出演するのであった
スタジオに辿り着くと、俺と一緒に出るのは、俺の母さんの南山美鶴（みなみやまみつる）、天空カイザーでカイザー役の暮見翔（くれみかける）、そのヒロイン、アカリ役
の蓮城麗華（れんじょうれいか）、そしてエリカ姫役の三島陽子（みしまようこ）であった
俺達は、用意された座席に座り、美鈴は、隅の方で、見学という形
を取っていた
俺が座っている席に右に麗華、左に陽子、後ろに母さんと翔がいる
こうして、生放送の番組が、スタートしたのであった
「始まりました～、大晦日特番、司会は私がお送りします！」
そう司会者が言う、その言葉にスタジオにいる、客席の観客が、騒
いだ
「じゃあ、まず自己紹介から、いってみようか？天空カイザーの皆
さん、よろしくお願いします！」
そう言って、マイクを渡されたので、自己紹介を言うみたいであっ
たので、自己紹介をする事にした
「じゃあ。僕から、天空カイザーで、カイザー役の暮見翔です」
「次は、私ですね、そのヒロイン、アカリ役を演じた、蓮城麗華で
す」
麗華が、小声で「次は真琴よ？」と言って来たので、俺も自己紹介
をする
「えっと・・・レキ役の南山真琴です」
「じゃあ、次は私です、天空カイザー2に出演した、エリカ姫役の
三島陽子です」
「最後は私ですね、冷笑のミレイユ役の、南山美鶴ですわ」

「ありがとうございます！おや？そういえば、真琴さんは、美鶴さんと同じ苗字ですが、何か関係が？」
司会者がそう言ってきた、関係も何も親子だけどな？それを言おうとしたら
母さんが
「真琴は、私の子供ですわ」
「そうですか！びっくりです、もしかしてこれからも芸能活動を？？」
「い、いやそれはまだ・・・・判らないかと」
「そうですか、親子での他の出演楽しみにしてます」
そう言われても困るんだがな・・・、少なくとも、俺はそうおもっていた
そして、収録が始まって、数時間が経ち、番組宣伝をしたり、クイズゲームに参加したりして、何とか無事に生放送の収録が終わった
収録が終わって、俺は、美鈴に話しかける
「ただいま、美鈴」
「まこ、お疲れ様～でさ？」
「何？」
「これから、神社に向かわない？お参りしようよ？まこ」
「そうだなあ・・・そうしようか？」
「うん、じゃあ決まりね？美鶴さん、まこと一緒にお参りしてきますね？」
「そう？じゃあ、真琴？行ってらっしゃい」
「判った、じゃあ行ってきます」
そう言って、俺は美鈴と神社に向かった
向かった神社は、山之辺神社と言い、大晦日と言うだけあって、お参りする客が大勢いた
辿り着くと、人々が騒ぎ出す
「あ、カウントダウンが、始まったみたいだよ？まこ」
「あ、ほんとだ」

確かに、人々が「１０．９．８」とか、言っている
「私たちも言うよ～、ほら、まこも」
「判った、５」
「４」
「３」
「２」
「１」
「０！～～～まこ～、あけましておめでとう！これからもよろしくね？」
「あけましておめでとう！こっちもよろしく」
「じゃあ、お参りしよっか？」
「そうだね」
そう言って、俺と美鈴は、大勢いる人ごみに並んで、お参りをした
お参りが終わって、実鈴が俺に、話しかけて来る
「まこはさ？何を願ったの？」
「そう言う美鈴は？」
「私？私はね～まこと一緒にいられますようにかな？まこは？」
「自分は・・・平穏に暮らせますようにかな」
まあ、いつもの日常が、非日常になってるしな・・・
「ふ～ん、ま、いっか」
こうして、俺の大晦日が、終わったのであった

～第八十六話～俺と大晦日その2～（後書き）

これからも、この物語をよろしくです～

～第八十七話～俺とお正月～（前書き）

はい、零堵です。
この物語もアクセス数六〇〇〇〇行きましたｗ
ありがとうございます。

～第八十七話～俺とお正月～

季節は、年が巡って、お正月、俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、家にいた
正月と言うだけあって、出かけてもいいのだが、別に何所に行くとか決めてないので、家にいるのである
夜中は、親友の栗谷美鈴（くりやみれい）と一緒に、山野辺神社にお参りして、それから別れたので、夜遅くに帰ってきて、寝たので、ちょっとだけ眠かった
初日の出は寝過して見れなかった、まあ、特別に見たいとは思ってはいなかったので、これは、よしとして、そういえば・・・疲れていたからか、初夢も見なかった
まあ、見たよ～な気もするのだが、全く覚えていなかったのであった
そして起きて、妹の亜季（あき）と母親の美鶴（みつる）母さんに挨拶した
「おはよう、母さん、亜季」
「あ、お姉ちゃん、起きたんだ？」
「真琴、ぐっすり眠ってたわね～一度起こしたのよ？」
「え、そうなの？」
「ええ、初日の出一緒に見ようと起こしたのだけど、寝ぼけてて覚えてないでしょ？」
「う、うん、覚えてない」
「やっぱりね、まあいいわ、で、よく眠れた？」
「うん、ちょっと眠いけど、眠れた気はするよ」
「そう、じゃあ、私は、正月特番の収録があるから、行くわね？」
そう言って、母さんは外に出て行った
「お姉ちゃん、わたしね？」
「何？亜季」
「おせち料理作ったから、一緒に食べよ？」
「え、亜季ってそんな事までできるの？」
「これは本とか見て、勉強したんだ、ちょっと自信ないけど、食べ

てみて？」
そう言って、亜季は、一度キッチンに行って、重箱を持ってきた
「じゃ～ん、お姉ちゃん、食べてみて？」
「うん、わかった」
そう言って、重箱を開ける
中に入ってきたのは、黒豆、栗きんとん、田作り、蒲鉾といった、おせち料理に使われる食材だった
俺は、亜季の作ったおせち料理を食べてみて、こう言う
「あ、旨い」
「ほんと？」
「うん、美味しいよ？亜季」
「よかった～じゃあ、成功なんだあ、かなりうれしいかも～、じゃあ私も食べよっと」
そう言って、亜季もおせち料理を食べだした
うん、思ってみれば、亜季の料理の腕・・・かなりあがったんじゃないか？と思ってしまった
姉として、これは料理まかせっきりでいいのか？と思ったが、まあ、笑顔なので、まあいいか・・・と思ったのであった
おせち料理も食べ終わったので、家にいるのも何だし、外で何かやってるかも知れないので、俺は、外行きの格好をして、出かけようとすると
「お姉ちゃん、出かけるの？」
「うん、あ、亜季もついてくる？」
「うん、行く！」
こうして、俺は、亜季と二人で、お正月の街中を繰り出したのであった・・・

～第八十七話～俺とお正月～（後書き）

まだまだ続きますね、書ける限り書こうと思います。

～第八十八話～俺とお正月その2～（前書き）

はい、零堵です。
この物語も、ついに八十八話、うん、まだまだ続くけど、かなり書いたって感じですねぇ～

～第八十八話～俺とお正月その2～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、正月の日に出かける事にした
俺と一緒に出かける事になったのは、妹の亜季（あき）だった
俺は、亜季と一緒に、とりあえず山野辺商店街から、行く事にしたのである・・・
山野辺商店街にたどり着くと、正月と言うだけあって、人が多く、やっているお店と正月休みと書かれた店があったりして、ちょっとにぎわっていたりしている
「お姉ちゃん、何所から行こうか？」
そう言って、亜季は俺の腕を組んできた
ちょっと待て・・・手を繋ぐのはまだいい、何故腕を組む・・・？
これって、所謂恋人繋ぎとか、そういうのではないか？
「あのさ・・・亜季」
「何？お姉ちゃん」
「何で・・・・腕組むの？」
「え・・・駄目だった？」
「い、いや、駄目じゃないけど、ちょっと恥ずかしいな～とか・・・ね？」
「いいの、私、お姉ちゃんと腕組んで歩きたいもん」
「そ、そう・・・」
もう何を言っても、無駄だと判ったので、俺は、あきらめる事にした
商店街を歩いていると
「あ、真琴、あけましておめでとう～」
と、俺に声をかけてくる者がいた
俺に話しかけて来たのは、同じクラスの住吉愛子（すみよしあいこ）であった
愛子は、手に福袋らしき物を持っている
「あ、愛子、あけましておめでとう」
「ところでさ・・・？」

「何？」
「真琴と腕組んでるのって、もしかして・・・彼女？」
「そう見える・・・？」
「うん、まあ、なんか仲よさげだし？」
「彼女じゃないよ、妹、亜季、同じクラスの愛子」
「・・・初めまして、南山亜季です」
「ふ～ん・・・妹さんね～？」
「・・・なんですか？」
「いや、真琴と似てないね？って思ったかな、真琴はかっこいい系で、亜季ちゃんはかわいい系かな」
「それ、他の人にも言われたな・・・前に」
「・・・とりあえず、ありがとうと言っておきます、お姉ちゃん、行こう？」
「あ、ああ、じゃあ、自分達は行くから、愛子、さよなら」
「そう？まあ、私も行く所あったしね、また、学校で、じゃあね？真琴」
そう言って、愛子は、俺達から離れて行く
愛子が離れた後
「お姉ちゃん」
「何？」
「あの、愛子さんって人と仲いいの？」
「まあ、いいかな、同じクラスメイトだしね」
「そうなんだ・・・」
「亜季？」
「ううん、何でもない、さっき愛子さんが、福袋持ってたけど、私もほしくなったから、お姉ちゃん、福袋、買いに行こう？」
「福袋ね・・・わかった、じゃあ、行こうか」
そう言って、俺と亜季は、福袋を売っているお店へと向かった
福袋を売っているお店にたどり着くと、人が多くいて、福袋を取り合っている

俺も、妹に頼まれたので、その中に入り、もみくちゃにされながらも、何とか福袋、二つ購入する事が出来た
ひとつを亜季にあげて、ちょっと疲れたので、家に帰る事にして、家にたどり着いてから
福袋の中身をあけてみると、俺の福袋の中には、リクルートスーツと革靴のビジネスマンご用達の一品が入っていた
うん・・・はっきり言うと、これ、貰っても嬉しくないんだが・・・
ちなみに亜季の福袋の中身は、最新オーディオ機器と、付属品なのかお菓子セットが入っていた
組み合わせおかしくないか?と思ったが、亜季はまあ、よろこんでいたので、ほっとく事にした
こうして、俺のお正月が、終わったのである・・・

～第八十八話～俺とお正月その2～（後書き）

これからもできる限り続けようと思います。
読んでくれるのは、嬉しいです。感想くれると作者のやる気があがったりします。

～第八十九話～俺と旅行～（前書き）

はい、零堵です。
この物語もついに、次で九十話ですね～
うん、かなり長く続いたって感じです。

～第八十九話～俺と旅行～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、行く所が出来た
それは、俺が、働いているアイライクの皆と、旅行に出かける事にしたのである
俺の他に行く事になったのは、アイライクの店長の東雲紫（しののめゆかり）さん、同じクラスで親友の栗谷美鈴（くりやみれい）、バイト仲間の桐谷佐奈（きりやさな）さん、新しく入った新人の秋村真帆（あきむらまほ）さんで、五人で行く事になったのである
俺は、旅行の準備を終えて、待ち合わせ場所の駅に辿り着く
俺が辿り着くと、俺が、一番最後だったらしく、もう既に四人集まっていた
「まこさん、あけましておめでとうございます、今年もよろしくお願いしますね」
「あ、はい、よろしくお願いします」
「まこ～、一番遅かったけど、準備に時間かかったの？」
「そんなんじゃないけど、一番遅かったのは、偶然だと思う」
「そう？」
「そうだよ」
「じゃあ、全員揃った事ですし、行きましょうか」
「了解～、じゃあ、出発～」
そう言って、俺達は、まず移動する為に、電車に乗った
電車に乗って、大型の駅で新幹線に乗り換える
新幹線に乗って、行く場所は、店長の紫さんが決めたらしいので、俺達は、それに従う事にした
新幹線で移動中、美鈴が「暇だからゲームしよ～」とか言ってきたので、俺は、それに参加する事にした
美鈴が、バックから取り出したのは、ボードゲームだった
このボードゲーム、ルーレットを回して、自分のキャラを進めて、ゴールまでを競う遊びでもある

よくそんな大きいの入れたな・・・と思ったが、まあ暇なんで、一緒にやる事に
紫さんは、カメラを片手に、新幹線の車窓から映る景色を、パシャパシャ撮っていたりしている
結局、ゲームに参加するのは、俺、美鈴、佐奈さん、あっきーの四人だった
「じゃあ、まず私からだね」
そう言って、美鈴はルーレットを回す
出た数字は、一、駒を進めて、書いてあった事は「人生の岐路、誰か一人選んで笑わす事が出来れば、十マス進める」と書かれてあった
「う～ん、じゃあ佐奈～行くよ～えい！」
そう言って、美鈴は佐奈に向かって、なんか面白い顔をした
佐奈さんはと言うと
「まだまだですね、れいれい、笑えないよ？」
「っち・・・駄目か～」
それで笑えると思ったのか？美鈴・・・
次にルーレットを回す事になったのは
「じゃあ、私ですね」
佐奈さんだった、佐奈さんが出した目は、６で
六進めると、そこに書かれてあったのは「自分の好きな人物を正直に言う、言えたら５マス進めて、言えなかったら一回休み」と書かれていた
「好きな人物・・・」
「さな～だれだれ？気になるな～？」
「えっと・・・じゃ、じゃあ、まこさん・・・」
小さい声でよく聞こえなかったが、俺の事言わなかったか・・・？
佐奈さん・・・
「と、とにかく！私は言ったので、進めますね！」
そう言って、佐奈さんは自分の駒を進める
「じゃあ、次は私だね～えい！」

次に回したのは、あっきーだった
あっきーが出した目は、四で
そこに書かれてあったのは「早口言葉を言う、上手く言えたら3マス進めて、失敗したら一回休み」と書かれていた
「早口言葉か～、よ～っし、じゃあ・・・赤パジャマ、青パジャマ、黄パジャマ、白パジャマ、黒パジャマ、紫パジャマ、緑パジャマ、こんくらいかな～」
普通、3色ぐらいでいいのでは?と思ったが、とりあえず言わない事にした
最後に回したのが、俺で
出た目は、2で、書かれてあった内容は「一回休み」と書かれてあった
そんな感じでゲームが進み、結果はどうなったのかと言うと
1着が美鈴、2着が俺、3着があっきーで、4着が佐奈さんになったゲームが終わって、しばらくのんびりしていると
「目的地に着いたから、降りましょうか?」
と、紫さんが言ったので、俺達は、新幹線を降りる事にした
着いた場所は、北国で、雪がかなり降り積もっている場所だった・・・

～第八十九話～俺と旅行～（後書き）

はい、出来る限り続けたいと思います。

～第九十話～俺と旅行その2～（前書き）

はい、零堵です。
ついに九十話達成wいや～、長く続きましたね～この物語も

～第九十話～俺と旅行その2～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、北国に辿り着いていた
新幹線に乗って、辿り着いたのは、雪が降り積もる極寒の地だった
薄手だと絶対に風邪ひくレベルの風が吹いていたりしている
何故、この北国に来たのかと言うと
俺が働いているメンバーと、旅行に来たのである
「うわ～凄い寒い・・・」
そう言ったのは、俺の友達の栗谷美鈴（くりやみれい）だった
「じゃあ、泊まる宿に行きましょうか」
そう言ったのは、アイタイクの店長の東雲紫（しののめゆかり）さんだった
俺たちは、紫さんの指示に従って、歩く
数分歩いて、辿り着いた場所は、大きな旅館だった
その名前は「縁露園（えんろえん）」と書かれている
「じゃあ、着きましたし、入りましょうか」
紫さんが、そう言ったので、俺たちは、縁露園の中に入る事にした
中に入ると、三十代ぐらいの美人な女将さん？らしき人が
「いらっしゃいませ、ようこそお越しくださいました」
と言ってきたので、紫さんが
「予約していた者です」
と言って、女将さんが「そうですか、え～と、アイライクの従業員の皆さまでしたっけ？」と言ってきたので、紫さんが、「ええ、そうです」と言った
「では、お部屋に案内します」
と言ってきたので、俺達は、女将さんに従って、部屋へと移動する事にした
女将さんに案内されて、たどり着いた場所は、結構広々とした和室だった
「ここが、みなさんの泊るお部屋になります、何かご用がありまし

たら、ブザーを用意しておりますので、それを押して、要件を言ってくださいませ」
そう言って、女将さんはいなくなった
ブザーって・・・ここは、ファミレスかなんかなのか？
「ここが私達の泊る部屋みたいですね」
「うわ～なんか広いね～、みてみてまこ？」
「何？」
「景色が凄く綺麗だよ～」
確かに、窓から景色を見てみると、絶景だった
まあ、雪が降り積もっているので、一面真っ白ではあったが
「さてと、夕食の時間まで、時間ありますし、皆さんは、これからどうします？」
そう紫さんが、言ったので
「私は、ここの温泉でも入ろうかなと、思います」
「じゃあ、私はこの町の探検かな、何があるか興味があるし、あっきーとまこは？」
「私は、佐奈さんと一緒に、温泉でも行こうかな？、まこさんは、どうする？」
あっきーが、そう言ったので、俺は考える
佐奈さんとあっきーと一緒に温泉に行くか、美鈴と一緒に外に探検しに行くか迷ったが、外に何があるのか気になったので
「じゃあ、自分は、美鈴と一緒に、外に出るよ」
そう言う事にした
「じゃあ、私も温泉に行くとします、れいれい、まこさん？暗くなるまでに帰って来てくださいね」
「りょ～かい、じゃあ、いこっか？まこ？」
「そうだね、じゃあ、行ってきます」
こうして、俺と美鈴は、北国の外の町へ、探検しに行く事にしたのであった・・・

～第九十話～俺と旅行その2～（後書き）

九十話達成～、あと十話で、百話って感じです
これからもできる限り、続けたいと思います。

～第九十一話～俺と旅行その3～（前書き）

はい、零堵です。
九十一話目、あと九話で百話ですね～
もう少しって感じです

～第九十一話～俺と旅行その3～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、北国に来ていた
何故、来る事になったのかと言うと、俺が働いている、アイライクの皆と、旅行に行く事になって、新幹線に乗り、たどり着いたのである
泊まる旅館の名は、縁露園（えんろえん）と言って、結構大きな旅館だった
旅館の中に入って、部屋の中に入り、夕食まで時間があるので、俺は、親友の栗谷美鈴（くりやみれい）と、一緒に、この北国の探検に行く事になったのである・・・

「しっかしさ～」
俺は、美鈴と一緒に雪が降り積もっている町並みの中を、歩いている
「何？美鈴」
「山野辺市と違ってさ？ここの地域って、すっごく寒くない？」
「確かに・・・」
確かに、美鈴の言った通りに寒かった
晴れてるというのに、物凄く寒く感じる
まあ、山野辺市と違って、雪が降り積もってるから、かなり寒く感じるのも当たり前か？と思ってしまうほどだった
「でさ？美鈴、何所に行く？」
「ん～そうだね～、あ、立札に「白龍の滝」って書いてあるよ？行ってみようよ？」
「分かった、じゃあ行こう」
俺と美鈴は、立札に書かれてある道を、歩く事にした
数分後、白龍の滝と呼ばれるスポットにたどり着く
「うわ～！でっかい滝～」
「ほんとだ・・・」
目測から見ても、４，５メートル以上はある滝だった

観覧できるスポットが高台になっているらしく、滝壺がかなり深く、落ちたら助からないレベルの滝であった
俺達の他にも数人の観光客らしき人物が、滝を眺めていたり、写真を撮っていたりしている
「まこ～記念撮影しとこっか？」
「カメラ持ってきてるの？美鈴」
「だいじょーぶ、だいじょーぶ！あ、すいません～！シャッター押してくださいませんか？」
そう美鈴は、若い女性に声をかけて、そう言っている
女性は、「はい、いいですよ」と言って、美鈴が用意したカメラを持った
「ほら、まこ、笑って笑って」
「こ、こう？」
てか、美鈴・・・近いんだが・・・くっつく必要あるのか？
美鈴は、俺に抱きつくような格好でカメラに向かってVサインをしている
とりあえず、俺もVサインをする事にした
女性は「はい、チーズ」と言って、シャッターを押して、美鈴にカメラを返す
「ありがとうございます」
「いえいえ、困った時は、お互い様・・・・って、あの・・・」
女性は、俺の姿を見て、なんか驚いていた
「は、はい？」
「もしかして・・・真琴さんですか？」
「え？ええ、そうですけど・・・？？」
「やっぱり！ドラマ「天空カイザー」観ました！かっこよかったです！握手してください！」
「は、はあ・・・まあいいですけど・・・」
俺は、女性に握手をした
「もしかして、なんかドラマの撮影とかで来たんですか？」

「い、いや、そうじゃないけど・・・」
「ほ、ほら、まこ、行こう！じゃあ、シャッター押してくれてありがとうございました！」
「あ、ちょっ・・・美鈴」
美鈴がいきなり俺の手をつかんで、足早に移動した
そして数分後、人が全くいない所まで来て、美鈴がこう言ってきた
「まこ・・・有名人になっちゃったね・・・」
「そうかな・・・」
「そうだよ、あの女の人が大声で言っちゃったから、まわりのひと、皆、まこの事見だしたんだよ？」
「そうだったんだ・・・とりあえず、ありがと、美鈴」
「いいよ、まこと一緒にいられるの嬉しいしね、あ、もう暗くなってきたし、紫さんが言ってたように、戻ろうか？」
「そうだね」
そう言って、俺達は、縁露園に戻ったのであった
縁露園の泊まっている部屋に戻ると、既に料理が用意されていて、紫さん達が、もうすでに食べていた
「あ、お帰りなさい、先に頂いてますよ」
「まこ、私達も食べよっか？」
「うん」
俺も、席について、出された料理を食べる
はっきり言ってかなり美味い、山の幸と海の幸の両方用意されていて、満腹になるまで、食べつくした
食べ終わって、俺はと言うと、温泉に入る事にした
俺は、女湯に入り、着替えて、体にバスタオルを巻いて、湯船の中に入る
「ふ～・・・なんか疲れが凄いとれるって感じ・・・景色もいいし・・・」
俺の他に人がいなく、ほぼ貸切状態で、湯船に浸かる事が出来て、結構満足だった

そこに
「やっほ～まこ、私も入る～」
そう言って、美鈴が入ってきた、素っ裸で
「ちょっと・・・美鈴、恥じらいもとうよ？恥ずかしくないの？」
「ん～？全然、だって、私、まこに見られてもＯｋかなって思ってるし？それにさ・・・胸ないし、幼児体型だから、子どもとかわんないでしょ・・・」
あ、なんか美鈴、ちょっと落ち込んでしまった感じだった
「そ、そう・・・？」
「そうだよ・・・あ、まこ？」
「何？」
「湯船の中にタオル入れるのは、マナー違反だよ？別に私だけなんだしさ？恥ずかしくないでしょ？」
「・・・わかったよ」
そう言って、俺は、体に巻いているタオルを外す
「ほほ～・・・」
「何・・・」
「いや～、まこってさ？肌白くてきれいだね～、こりゃ人気出るわけだ～」
「っちょ、どこ見てるの！」
「いいじゃん、減るもんじゃないし～♪」
確かにそうだけど・・・なんかジロジロ見られるのは、恥ずかしいんだが・・・
俺は、そう思って、とりあえず体を洗う事にした
俺が、体を洗っていると、美鈴がやってきて
「まこ～背中洗うの、手伝ってあげるよ～」
「え、いいよ、悪いし」
「遠慮しないでさ？ほらほら～」
「・・・分かったよ、じゃあ、頼む」
そう言って、体を洗っていると、なんか背中に柔らかい感触を感じ

て、振り向いてみると
「何してんの・・・美鈴」
「いや～この方が、いいかと思って？」
美鈴が自分の体にセッケンとかつけて、こすりつけて俺の背中に密着していた
はっきり言ってやばいだろ！？って思うんだが・・・
「ま、いいじゃない？」
「そういうのは、彼氏にでもやってあげたら？」
「いないもん～彼氏なんか～それに、まこがいるだけでいいし～で、どう？」
「どうって・・・？」
「私の体、結構気持ちいい？」
「・・・何言ってんの・・・？」
「え～？だって、せっかく密着してるんだからさ？感想聞きたいもん～、あ、前も洗ってあげよっか？」
「いい、自分でやる・・・」
「え～？」
そんな感じな事をやりながら、体を洗い、温泉から出て、浴衣に着替えて、部屋に戻るともう既に、蒲団が用意されていて、あっきーと佐奈さんは、既に寝ていた
「あ、おかえりなさい、随分長く入っていましたけど、のぼせませんでしたか？」
「あ、大丈夫です、長く入っていたのは、まあ美鈴のせいで・・・」
「何で私のせいなの？そんなに長く入ってないじゃ～ん」
「美鈴が、泳いだりしたからでしょ・・・まあ、いいや、もう眠いから、寝る・・・」
俺は、そう言って、蒲団の中に入る
「じゃあ、私、まこの隣～」
そう言って、美鈴は、隣の蒲団に入った

蒲団に入って、俺は、疲れていたからかすぐに眠ってしまった
こうして、俺の良好一日目が、終わったのである・・・

～第九十一話～俺と旅行その3～（後書き）

なんだろ・・・美鈴のフラグがたった？って感じかも・・・

～第九十二話～俺と旅行その４～（前書き）

はい、零堵です。
明日で、連載三ヶ月ですね～
よく続いたもんです。

～第九十二話～俺と旅行その４～

旅行に来て、二日目、俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、いつもより早くに目が覚めた
いつもの家じゃないので、おまけに隣に人がいたりしてるので、ちょっと新鮮な感じがした
目が覚めて、顔を洗い、部屋の外に出てみる
旅館の中なので、既に女将さん達が動いていて、ちょっと慌しく感じられた
少し散歩して、部屋の中に戻ると
既に全員起きていて、何か話し合っていた
「あ、まこ、お帰り、散歩しに行ってたの？」
そう言ったのは、俺の親友の栗谷美鈴（くりやみれい）だった
「うん、まあね」
「まこさん、今日の午後に戻るつもりですが、午前中何所に行きます？」
そう言ったのは、アイライクの店長の東雲紫（しののめゆかり）さんで
「私は、お土産物とか買いたいですね、ここの地元の名産品とか」
「私も同じ～、写真とって、ブログにアップしようと思ってるしね～」
そう言ったのは、桐谷佐奈（きりやさな）さんとあっきーこと、秋村真帆（あきむらまほ）さんだった
「じゃあ、自分もお土産買うのに、賛成します」
「そうですか、じゃあ、食事をしたら、行きましょう」
そう決めて、朝食を取る
朝食は、シンプルに定食風な感じだった
これも、美味しく、残さず食べて、浴衣から私服に着替えて、俺達は、旅館から出たのであった
旅館から出て、何所に行こうか迷って、ガイドブックを見ながら、地元の名産品を売っている、お店に向かった

数十分歩いて、そのお店にたどり着く
店内は、結構品物が多く、何を買おうか迷った
俺は、母さんのと妹の亜季(あき)のお土産を買って、店内を見ていると
「ねえねえ、まこ？」
「何？美鈴」
「このキーホルダーさ？おそろいで買わない？」
美鈴が指差したのは、イルカの形をしたキーホルダーだった
「別にいいけど」
「よし、決まり～」
「あ、じゃあ、私も同じの買います」
「あ、私も～」
「どうせなら、五人全員で同じ物買いましょう」
紫さんが、そう言ったので、それぞれ色違いのキーホルダーを買う事にした
紫さんが紫、佐奈さんが黄色、あっきーが青で美鈴が赤、俺が白色のを購入した
お土産も買い終わって、俺達は帰る事にして、新幹線に乗った
帰りは、売店で買ったお菓子を食べながら、談笑する事にした
「そう言えばさ？気になったんだけど」
「何？」
「あっきーと佐奈さんって、学校行ってるの？」
「あ、確かに、あっきーと佐奈さんって、同い年ぐらいだよね？」
「あ、はい、私は十八なので、高校三年です、で、高校は・・・女子高に通っています」
「私は、十七で、共学かな」
「そうなんだ、佐奈さんの所って、挨拶に「ごきげんよう」とか言う？」
「言いませんよ～、普通ですって、でも、お嬢様とか数人いますから、そういう人達は言うかも知れないですね」
「そうなんだ～」

「私の所は、体育会系が多いかな～、美形とか全くいない～、だからカップルとか全くいないよ？」
「それはそれで、凄い学校かも・・・」
「れいれいのとこは？あれ？そういえば、まこさんとれいれいって、同じ学校だったよね？」
「そうだよ～しかも同じクラス」
「うん、まあそうだね」
「どんな感じ？」
「まこが、異様にモテテルかな～」
「何言ってんの・・・美鈴」
「だって、そうじゃん？」
まあ、確かに・・・そうかもしれないけど・・・
異性にモテルと言うより、同姓にモテテルんだが・・・
そんな会話をしながら、駅に辿り着いて、乗り換えて、山野辺駅に着いた
「じゃあ、ここで解散ですね、皆さん、お疲れ様でした」
「お疲れ様～」
「じゃあ、次はアイライクで会いましょう、では」
そう言って、紫さんは、俺達から離れて行った
「じゃあ、帰ろうか？まこ」
「そうだね、じゃあ、お疲れ様」
「お疲れ様～」
俺は、美鈴と一緒に帰る事にした
美鈴と途中までは同じ道なので、一緒に帰り、途中で別れて、俺は数分歩いて、家に着く
家に着くと、妹の亜季が「お帰り、お姉ちゃん」と言ってきて、俺は亜季に買ってきたお土産を渡した
こうして、俺の旅行は、終わったのである・・・

～第九十二話～俺と旅行その４～（後書き）

この物語は、まだまだ続くって感じですかね～

～第九十三話～俺と三学期～（前書き）

はい、零堵です。
祝、連載三カ月～
うん、よく続いたものです～
まだまだ続けるので、よろしくです～

～第九十三話～俺と三学期～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、冬休みが終わったので、学校に行く事になった
朝起きて、制服に着替えて、朝食を取り、家を出る
外に出ると、冬だからか、結構寒く、手袋やマフラーをしている者がいたりしていた
俺もすればよかったかな・・・と思いながら、山野辺市の通学路を歩く
数分歩いて、俺の通っている山野辺高校にたどり着いた
下駄箱で上履きに履き替えて、教室の中に入ると
「あ、南山さん！」
いきなり数人のクラスメイトに囲まれた
いきなりの事だったので、ちょっとびっくりしてしまった
「な、何・・・」
「南山さん、テレビに出てたでしょ？大晦日の生番組」
「そうそう、テレビ見たら、同じクラスの南山さんが映ってたから、びっくりしちゃったよ？」
「それに天空カイザーのレキ役やったんでしょ？天空カイザー2見たよ～」
「あ、ありがと・・・」
「また、なんかドラマとか出るの？」
「い、いや・・・そういった話は聞かないかな・・・」
「そうなんだ～、あ、共演者の翔君とは仲良くなったの？」
「まさかうちのクラスに芸能人がいるなんて～、すっごいびっくり～」
なんか・・・物すごい声掛けられるな・・・
そんなに凄い事か・・・？と、思ってしまった
クラスメイトの質問に答えながら、自分の席についても、話しかけられた

いい加減疲れてきたころ、「皆、おっはよ～」と言ってきたのは、
このクラスのアイドル的存在の汐崎美咲(しおざきみさき)だった
彼女が来て、このクラスの男子どもは「おお～、美咲様～！」とか
「なんかすげ～きれいになってる！さすが美咲様！」とか言っている
そんな男子の言葉に、美咲はと言うと
「ふふ、ありがと」
とか、言っていた
そして、美咲が自分の席に着いたと同時にチャイムが鳴り、担任の
朝埼翠(あさざきみどり)先生がやって来て、こう言う
「あ～お前ら、冬休みは楽しめたか？私は、楽しめたぞ、まあ色々
あったしな、んで、校長の話があるから、体育館に集合するように、
あ、そうそう南山、放課後、ちょっと残ってくれ」
「あ、はい」
なんだ？放課後、俺に用なのか？と思ってしまった
とりあえず、俺は、先生が言われたとおりに体育館に向う
体育館に着くと、もう既に他のクラスの人達は、集まっていて、俺
達のクラスもその中に加わった
そして、校長の話が始まる
「え～冬休みは、いかが過ごしたかな？ワシは、十分な休日を過ご
せたぞ、競馬で儲かったりもしたしな、わっはっは、まあそんな訳
で、今学期で最後の学期になる、、すこやかに過ごすのだな」
なんか校長の髪がロン毛になっていた
ありえないだろ！？って突っ込みたくなったが、誰もその事には触
れないで置こうという雰囲気だった
そして、校長の話も終わり、教室に戻り、授業がないので、すぐに
解散になった
クラスメイトが帰っていく中、俺は、先生に残るように言われたの
で、俺は教室に残っていた
そして俺一人しかいなくなり、やっぱ帰ろうかな・・・と思ってい
ると、翠先生がやって来た

「真琴、待たせちゃって悪いな」
「いえ、別にいいですけど、先生、一体何の用ですか？」
「真琴に貸していたミニパソなんだが、真琴、使っているか？」
「あ、そういえば先生に借りたまま全然使ってませんでした、返しましょうか？」
「いや、別にいいぞ、返さなくても、実はな・・・私の姪が、真琴のファンになったらしくてな・・・」
「先生の姪ですか？」
「ああ、なんでも真琴、テレビに出たそうじゃないか？」
「あ、はい、ちょっと出ましたけど」
「私もテレビを見て、驚いたぞ、クラスメイトの真琴が出てたからな？それで、姪に話したら、「会ってみたい！」って言って来たんだ、会ってくれるか？」
「そう言う事でしたら、いいですよ？でも、自分、芸能人でもなんでもないんですけどね・・・」
「そうかも知れんな、ま、引き受けてくれてサンキューな、休日に私の家にくるみたいだから、休日に来てくれないか？」
「先生の家にですか？」
「ああ」
「すいません、休日はバイトがあって、行けないんですけど・・・」
「そうか、じゃあバイト先に行ってもいいか？」
「あ、はい、それは構わないです」
俺は、先生にバイト先を教えて、帰る事にした
こうして、俺の三学期が、はじまったのである・・・

～第九十三話～俺と三学期～（後書き）

アクセス数も六万五千行きました～
ありがとうございます。

～第九十四話～俺と先生の姪～（前書き）

はい、零堵です。
新キャラ一名追加しました。

～第九十四話～俺と先生の姪～

学校が始まって、休日、俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、行く所があった
それは、秋葉原である
休日にバイトを入れているので、バイトに行くのであった
今日は、天気予報で寒いと言っていたので、なるべく厚着をして、
外に出て、電車に乗り、秋葉原にたどり着く
秋葉原の町は、夏とは違い、人が少なかった
寒さの影響かもしれないな・・・と思いながら、俺は街中を歩き、
俺が働いている店
ラブ喫茶「アイライク」にたどり着いた
お店は、もう既に営業しているらしく、お客も少しだけど、いるので、裏口から入る事にした
店内に入って、控室に行くと、俺に声をかけてくる者がいた
「あ、おはようございます、まこさん」
「おはよう」
声をかけて来たのは、新しく入った秋村真帆（あきむらまほ）、通称、あっきーだった
「まこさんは、メイド服じゃあないんですね」
「うん、自分のだけ、違う服なんだ」
そう言いながら、俺は服を着替える
俺に用意されている服は、ここのウエイター服だった
ウエイター服に着替えると、あっきーが話しかけてきた
「なんかいいですね～でも、まこさんはやっぱりメイド服より、そっちの方が似合います」
「そうかな・・・」
「そうですよ、あ、まこさん」
「何？」
「私の運営している「あっきーの旅立ち日記」にまこさんとツーショットの写真をアップロードしたいんですけど、載せていいですか

ね？」
俺は、どうしようか迷ったが、ま、今さら写真撮られても、問題はないので
「ま、いいかな」
「ありがとうございます、じゃあ、撮りますね」
そう言って、あっきーは、携帯を取り出して、俺と手を繋ぐ形で一枚、撮った
「ありがとうございます、バイトが終わったら、早速載せますね、じゃあ、まこさん、ホールに行きましょう」
「うん、解かった」
そう言って、俺とあっきーは、控室を出るホールに行くと、客が多くなっていて、結構忙しくなっていた
「あ、まこ～おっはよ～」
そう、話しかけて来たのは、俺と同じクラスで、親友の栗谷美鈴（くりやみれい）だった
「おはよう、あ、そうだ、美鈴」
「何？まこ」
「今日ね？多分、翠先生来ると思うよ」
「え？先生が？なんで？」
「なんか、先生の姪が、自分のファンになったらしくて・・・先生に会いたいって言ったんだって、で、ほんとは今日、先生の家に行く予定だったけど、バイトあるしさ？、このお店に来ると思うよ」
「ふ～ん、そうなんだ、じゃあ、いつ先生が来るか、分からないけど、来たら相手しますか～」
「そうだね」
そう言って、俺達は仕事をする事にした
そして、数時間が経過して、人も少なくなって来た頃、俺は、休憩を取って、控室で休んでいると、控室に美鈴がやって来た
「まこ～、先生来たよ、ホールに来て～」
「分かった」

そう言って、俺は、ホールに行く
先生を探して、見つけてみると、先生の隣に美少女が座っていた
「お、真琴、来たぞ～」
「あ、はい、こんにちは、翠先生」
俺は、そう言って挨拶をする
「で、こっちが姪の志乃だ、志乃、挨拶」
「あ、あの・・・私の名前は、朝崎志乃と言います、真琴さんのファンです！握手して下さい」
そう言ってきたので、俺は、握手した
「え～っと、志乃ちゃんでいいのかな？」
「あ、はい」
「志乃はな？中学生で、山野辺中学に通っているんだ」
「そうなんですか、自分の妹も山野辺中学に通ってますよ、ちなみに志乃ちゃんは、何年生？」
「あ、三年です」
「じゃあ、妹と同じだ、妹の事は知ってる？亜季って言うんだけど」
「いえ、知りません、クラスが違うので・・・」
「そっか、同じ学校だし、出来ればでいいけど、妹と仲良くなってくれないかな？」
「あ、はい、真琴さんの頼みなら・・・」
そんな会話をして、先生と志乃ちゃんは、スイーツを注文して、帰って行った
俺もバイト終了時刻になったので、着替えて外に出ると、美鈴がいた
「まこ～バイトお疲れ～」
「お疲れ様」
「でさ？一緒に帰ろう？」
「そうだね、分かった」
俺は、そう言って美鈴と一緒に帰る
帰る途中、美鈴がこんな事を言ってきた
「それにしてもさ？」

「何？」
「先生の姪って、すっごい美少女だったね、しかも魔女っ子メイルRのケイちゃんに似てるし～、あの子と一緒にコスプレしてみたいかも～まこも一緒にやらない？」
「・・・考えとく・・・」
俺は、そう言っていた
こうして、俺のバイトの一日が終わったのである・・・

～第九十四話～俺と先生の姪～（後書き）

補足
魔女っ子メイルR
日曜朝八時半にやっていた、魔女っ子メイルの続編
メイルが仲間達と一緒に、悪の帝王キレイドルとのバトルを描いている
笑いあり、涙あり、百合要素ありのアニメ

～第九十五話～俺と携帯電話～（前書き）

はい、零堵です。
あと、五話で、百話ですねえ～
この物語は、まだまだ続きます。

～第九十五話～俺と携帯電話～

季節もすっかり冬になっていて、寒く感じる頃、学校も始まって、俺こと、南山真琴は（みなみやままこと）は、行く所が出来たそれは・・・ケータイショップである

何故、ケータイショップに行くのかと言うと、俺も、携帯を持ってみたくなったし、母親の美鶴（みつる）母さんが「真琴も携帯があった方が便利よ?それに連絡するかもしれないしね?今日は、学校休みでしょ?ちょっと買いにでも行ってきたら?」と、言ってきたからであるバイト代も出たので、俺は、山野辺商店街にある、携帯ショップに行く事にあしたのであった

山野辺商店街に辿り着いて、携帯ショップの中に入ると、店員が「いらっしゃいませ」と言ってきた

俺は、店内を見渡していると

「あれ?南山さん?」

そこにいたのは、俺と同じクラスで、クラス委員長の西崎綾香（にしざきあやか）さんだった

「あ、委員長」

「ちょっと・・・委員長はないでしょ?ここは、学校じゃあ無いんだし・・・」

「確かにそうだった、じゃあ、西崎さんは、何故ここに?」

「何故って、ここは携帯ショップよ?だから、やる事は、決まってるじゃない、私は、携帯の機種を替えに来たのよ、そう言う南山さんは?」

「自分は、携帯を買おうかと・・・あ、そうだ、西崎さん、おすすめのって教えてくれない?」

「私のおすすめね・・・まあ、ここに展示してある会社のは、ＣＵ（シーユー）とＴＥＲＦＯＯＮ（テレフォーン）よ、ちなみに、私は変えようと思っているのは、ＣＵのこれね」

そう言って、西崎さんが指さしたのは、ピンク色の携帯だった
「それって、使いやすい？」
「まあ、ネット回覧、デコメール、写メールとか出来るから、使いやすいかな、基本料金も安めの設定だしね、南山さんは、どういったのにするの？」
そう言われて、俺は、考える
確かにいろいろあった方が、便利そうだが、そんなにごちゃごちゃしたのは、必要ないので
「シンプルで使いやすい奴かな」
「使いやすいやつね・・・じゃあ、これね」
そう言って、指さしたのは、ラクラクフォンと書かれた携帯だった
「動作も簡単で、余計な機能がついてないから、これがいいかもね？それにする？」
どうしようかと、迷ったが
「うん、これにするよ」
そう言って、俺は、そのらくらくフォンを手にとって、購入した
色々な色があったが、シルバーにしといた
購入したので、外に出る
これからどうしようかな・・・と迷っていると
携帯を買い換えたのか、西崎さんが、お店から出てきた
「南山さん」
「あ、西崎さん、教えてくれてありがとうね」
「いえいえ、あ、そうだわ、ついでに操作方法も教えとくわね？」
そう言って、西崎さんは、携帯の操作方法を分かりやすく教えてくれて
最後に
「じゃあ、私の携帯番号と、メアドも教えとくわ、いつでも電話やメールして来てね？じゃあ、私は、用事があるから、じゃあね、南山さん」
そう言って、西崎さんは、離れて行った

俺も、家に帰る事にして、家に戻ると、美鶴母さんがいた
「お帰りなさい、真琴、携帯は買えたかしら?」
「うん、買えたよ」
「じゃあ、私の携帯番号とか教えとくわ、何かあった時に必要だしね」
そう言って、母さんは、携帯番号とメアドを俺に教えてきた
こうして、俺に、新しく携帯が加わったのであった・・・

～第九十五話～俺と携帯電話～（後書き）

ちなみにこの作品のキャラで一番人気なのって、誰なんだろう・・・
主人公の真琴？それとも美鈴？それとも美咲？
キャラ人気投票やろうかなあ・・・とか、考えてたり・・・
でも、やり方がわからん、うん、出来るようになったらやろうかな
って感じですかね？

～第九十六話～俺とラジオ放送～（前書き）

はい、零堵です。
アクセス数七万突破しましたw
ありがとうございます。

～第九十六話～俺とラジオ放送～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、いつもと違う場所にいた
その場所とは・・・
「はい、もうすぐ本番が始まりますから、よろしくです」
そう言ったのは、番組のアシスタントの人だった
「じゃあ、頑張ろうか？真琴？」
「は、はあ・・・」
そう、俺は、山野辺放送局にいるのである
なぜ、その場所にいるのかと言うと・・・事の始まりは、こうだった
学校が休みの日、俺は、いつものように起きて、朝ご飯を取っていると、母親の美鶴（みつる）母さんが、こんな事を言ってきた
「あ、そうだ、真琴」
「何？」
「実はね？麗華ちゃんが、真琴を呼んでほしいって言っていたのだけど、真琴、今日は、何か用事ある？」
麗華ちゃんと言うのは、俺が以前、ドラマの天空カイザーで一緒に共演した、蓮城麗華（れんじょうれいか）の事だと思う
その麗華が、俺に何の用なんだ・・・？と、思ったが、今日は別に予定は、何も入れてないので
「用事はないけど、一体その麗華が、自分に何の用なの？」
「何か、手伝ってくれると助かるとか言ってたわ、真琴、朝食を食べ終わったら、一緒に行きましょうか？」
「・・・何の用かわからないけど、わかった」
そう言って、俺は、母さんと一緒に、出かける事にした
向かった先は、山野辺放送局という場所で、以前に来た事があった
その建物の中に入り、母さんの後をついていくと、三階に向かった
三階に辿り着くと、収録ブースがあって、そこに母さんと一緒に入ると、中にいたのは

麗華と、数人の男女だった
「麗華ちゃん、真琴を連れて来たわよ？」
「ありがとうございます、美鶴さん、真琴、久しぶり」
「久しぶり・・・で、一体なんの用で呼んだの？」
「実はね・・・私がやっているラジオに出演して欲しいの、前回の放送で言っちゃたのよね「来週は特別ゲストをお招きして、お送りします」って、だから真琴に来てもらったの、真琴、参加してくれない？」
麗華がそう言ってきたので、俺は、迷った
あきらかに断る雰囲気じゃあない事はわかってたし、断ったら母さんに何言われるかわかったもんじゃないし・・・
「解ったよ・・・今回だけだよ？」
「ありがと、出来れば毎週私と一緒に出演してくれると、助かるんだけどね？」
「それはちょっと・・・」
「まあ無理強いはしないわ、じゃあ真琴が参加してくれる事になったから、打ち合わせ、始めましょう」
「私は、見学するわね？真琴、頑張るのよ」
母さんがそう言っていた
こうして、俺は、ラジオに出演することになったのだった
ちなみにラジオのタイトルは「麗華のスマイルファンタジー」というらしい
一年も続けていて、結構長く放送しているらしかった
俺は、その中に入って、スタッフさん達と打ち合わせをした
数十分打ち合わせして、ブースの中に入る
ブースの中は、収録に使うマイクが用意されていて、マイクに向かって、話すみたいであった
なんかアフレコみたいだな・・・と思う
麗華と俺は、向かい合わせに座って、用意された台本を見る
「真琴、初めてだろーけど、リラックスして話せばいいからね？」

「うん、そうしてみる」
そう話していると、スピーカーから
「もうすぐ本番の収録を始めます、二人とも、準備いいですか？」
と言ってきたので
「こっちは、Ｏｋです、真琴は？」
「あ、自分もＯｋです」
ちょっと緊張はしていたが、問題はないと思ったので、そう言った
「じゃあ、本番収録始めまーす、５、４、３、２、１、キュー」
こうして、俺と麗華のラジオ放送が始まったのであった・・・

～第九十六話～俺とラジオ放送～（後書き）

もうすぐ百話～

百話記念に何かスペシャル話でも書こうかな・・・とか、思っていたりします。

～第九十七話～俺とラジオ放送その２～（前書き）

はい、零堵です。
もう少しで、百話～
うん、本当に長く続いたって感じですねぇ

～第九十七話～俺とラジオ放送その２～

俺こと、南山真琴（みなみやままことは、ラジオに参加する事になった
参加するラジオは、蓮城麗華（れんじょうれいか）の「麗華のスマイルファンタジー」と言う番組である
俺は、麗華と一緒に、その番組の収録をやったのであった
「じゃあ、本番行きます！５、４、３、２、１、キュー！」
スタッフが、ブース内にそう言ってきたので、ラジオの収録が始まった
「皆さん、こんにちは、麗華のスマイルファンタジー！お送りしているのは、私、蓮城麗華です
そして、前回、私が、特別ゲストを呼んじゃいます～と言っていたのを覚えてるかな？
そして、今回、特別に来てもらったのは、私が出演したドラマ、天空カイザーで一緒に共演した、レキ役の南山真琴さんです、真琴さん」
「はい、天空カイザーでレキをやらせて頂いた、南山真琴です、よろしくお願いします」
「今日は、南山さんと、一緒にこの番組をやっていきたいと思います、生放送ですので、メールでの質問を今から受け付けますね、真琴さんに聞きたいことをどしどし送ってきてね？では、一旦ＣＭです」
麗華が、そう言うと、スタッフが「ＣＭ入ります～」と言ってきた
「Ｏｋよ？真琴、噛まずに言えてたわね」
「ちょっと緊張した・・・」
「まあね、生だしねえ、ぶっつけ本番だし、とりあえず、頑張ろうよ？」

「わかった・・・」
そう言っていると、スタッフが「CM終わります～5、4、3、2、1、キュー」
と言ってきたので、ラジオの収録を開始した
「改めましてこんにちは、蓮城麗華です、では最初のコーナーに行きたいと思います、麗華のぶっちゃけトーク～！このコーナーは、リスナーの皆さまから麗華に言って欲しい事を募集します、今日は、特別に真琴さんもいるので、真琴さんにも言って欲しい事を募集しますね？皆さん、どしどし送って来てください、ところで真琴さん」
「何かな？」
「真琴さんは、普段使っている言葉ってあるの？」
「そうだなあ・・・自分の事を自分か俺って言ってるかな、少なくとも私とは、全く言っていないかと」
「へえ、そうなんですか～でも、真琴さんには、あってるかもですね～、あ、どうやらメールが来たようです、では、最初はえ～っと、ペンネーム「あっかりん」さんから、真琴さんに言って欲しい台詞、朝の目覚ましボイスをかっこよく言って下さいって書いてあります、じゃあ、真琴さん、どうぞ～」
「目覚ましボイスね・・・え～っと・・・じゃあ、「ほら、もう朝だぜ？起きろよ？」、こんな感じでいいのかな・・・」
「お～カッコいいですね、台詞もなかなかグッとです、じゃあ次のメール読み上げますね？え～っと・・・ペンネーム「まこさん大好き」さんから、真琴さんに愛の言葉を囁いて下さい」って書いてありますね、では、真琴さん、お願いします」
「愛の言葉ね・・・なんか恥ずかしいなあ・・・まあ・・・「お前の事、滅茶苦茶大事に思っている、大好きさ・・・」、こんな感じ・・・？」
「おお～、素敵ですね？まこさん大好きさんも、気に入ってくれてると思います、あ、一旦CM入ります～」
そう言って、CMになった

「どう真琴？」
「どうって？」
「結構楽しくない？ラジオってさ？」
「う～ん・・・確かにそうかもなあ、でも、やっぱり緊張するかも、麗華は、よく続けられるね？」
「まあ、好きだから別に嫌ってわけでもないしね？あ、もうそろそろＣＭあけるわね」
そう言うと、確かにスタッフが「ＣＭ終わります」と言っていた
「じゃあ次のコーナーに行きたいと思います、麗華のミニドラマ～、このコーナーは、リスナーから送っていただいた文章を繋げて、ミニドラマにしてみようってコーナーです、今日は真琴さんもいるので、真琴さんにも手伝って貰いたいと思います、ジャンルは、そうですね・・・コントをテーマにしとこうと思います、ランダムに選ぶので、真琴さんと私と別々のを選んで見ましょう、文字は四個を選びたいと思います、私と真琴さんで、二つの言葉を選んで繋げてみてみましょう、真琴さん、文章二つ選んでみてくださいね？」
「分かった、え～っと、どれにしようかな・・・よし、これにしてみよっと」
「じゃあ、私から行きます・・・「伝説の剣を手にした勇者が」」
「カツラだとバレバレな四十代のおっさんと」
「ありふれた居酒屋で」
「野球拳をした」
「・・・なんか、繋げたら凄い文章になりましたね～、というか凄い状況かと・・・」
「確かに・・・適当に選んだ文章を繋げたら、凄い事に・・・」
「ちなみに送ってくださった方は、ペンネーム、霧子さん、まつさん」
「こっちは、ペンネーム、まーちゃんさん、としさんでした」
「っと、時間がたつのが早いですね～、もうお別れの時間となりました、今日の特別ゲストは、南山真琴さんでした」

「どうも、南山真琴です」
「来週も、この麗華のスマイルファンタジーを、見てくださいね？
では～、この番組は、ごらんの各社の提供でお送りします」
麗華がそう言ってから、スタッフが「ＯＫです」と言った
これで、どうやら収録が終わったようである
ブースから出ると、母さんが声をかけてきた
「お疲れ様、真琴、なかなかよかったわよ？」
「そ、そうかな・・・」
「そうよ、麗華ちゃんもお疲れ様」
「ちょっと新鮮だったけど、結構楽しめたって感じですかね？」
「真琴、私は、これから別の収録があるけど、真琴は、どうする？」
「じゃあ、家に帰るよ、ちょっと疲れたし」
「そう、じゃあ、帰りなさいね？私は、行くわ」
そう言って、母さんは、どこかに移動したのであった
「あ、そうだ、真琴」
「何？」
「美鶴さんに聞いたんだけど、携帯買ったそうね？」
「う、うん、まあね」
「じゃあ、私のメアドと携帯番号教えるわ、いつでもかけていいわよ？」
そう言って、麗華から、携帯番号とメアドが書かれた紙を受け取って、俺は、家に帰る事にした
こうして、俺の初めてのラジオ収録は、終わったのである・・・

～第九十七話～俺とラジオ放送その２～（後書き）

この物語は、まだまだ続くって感じです～

～第九十八話～俺ととある冬の一日～（前書き）

はい、零堵です。
もう少しで、百話って感じですｗ

～第九十八話～俺ととある冬の一日～

俺こと、南山真琴は、いつものように家を出る
冬になったので、かなり寒く感じる
まあ、厚着をしているので、とりあえず暖かく感じるのであった
そんな、冬の通学路を、歩いて、俺は、山野辺高校に辿り着く
下駄箱に入り、上履きに履き替えて、自分のクラスに行くと、既に何人かいて、話し合っていたりしていた
俺は、自分の席について、教科書とかノートを机に入れて、ぼ～っとしていると
「おっはよ～、まこ」
そう声をかけてきたのは、俺の親友でもある、栗谷美咲（くりやみさき）だった
「おはよう」
「まこさ？みっきーから聞いたんだけど、ラジオに出たんだって？」
「みっきー？誰それ？」
「同じクラスの、有栖川さんの事だよ～」
有栖川さんと言うのは、本名有栖川美紀子（ありすがわみきこ）で、演劇部員でもあったあれ？？そう言えば、美鈴と有栖川さんって、仲良かったっけ？
「そう言えば、なんでみっきーって呼んでるの？」
「いや、実はさ？夏にコミックマーケット行ったでしょ？」
確かに、俺は、夏に美鈴と一緒に、ビックドームと呼ばれる所に行き、そこで行われた、コミックマーケットというのを行ってきたのである
「そのビックドームでね？冬の祭典、コミックマーケット、通称冬コミに行ってきてね？そこで、有栖川さんに会ったの、それからすっかり話しこんじゃってというか、仲良くなってね？だから、みっきーって呼んでるんだ」
「そうなんだ」
「うん、でね？みっきーから、聞いたんだけど、まこさ？蓮城麗華（れんじょうれいか）

の「スマイルファンタジー」に出演したってホント?」
「本当だよ、朝、いきなり母さんに言われてね?急遽参加する事になったんだ」
「へ~聞きたかったな~その時、まこが何話したか、知りたかったよ~、でさ?またラジオとかに出演するの?」
「いや、しないと思う、特別ゲストだったしね、まあ、麗華から毎週出てもいいかもとかは言われたけど・・・」
そんな会話をしていると、チャイムが鳴ったので、美鈴は自分の席に戻って行った
そして、担任の朝崎翠(あざさきみどり)先生がやって来て、こう言う
「皆、おはよう、今日もいちだんと寒いが、授業は普通に行うぞ、まあ、私はかったるいから自習のプリントを持ってきた、これをやっててくれ、私は、クリアしたいクソゲーがあるから、それをやっている、邪魔するなよ?」
そう言って、先生はクソゲー?をやり始めた
うん・・・本当になんでこの先生は、クビにならないんだろ~な・・・と思ってしまった
そんな感じな授業が続き、お昼
俺は、妹の亜季(あき)が用意してくれた、弁当箱を取り出して、何所で食べようか迷った
教室で食べようとすると、同じクラスにいる汐崎美咲(しおざきみさき)が何かを期待している目でジロジロ見ているからである、はっきり言ってちょっと怖かった
俺は、とりあえず屋上に行って食べようと思い、移動する
俺が動くと同時に美咲も動こうとしたが、美咲ファンクラブの連中が「美咲様一緒に食べましょう」とか、「今日は、美咲様の為に一生懸命作りました」とか「美咲様、一緒に食べる事を誇りに思います」とか言っていて、美咲の行動を防いでいた、俺としてはちょっと助かっていたので、そのまま屋上に行く事にしたのであった
屋上に行くと、寒空の下なのに、何人かいて、弁当を食べていたり、

話し合っていたりしている
俺も、あいているスペースを見つけて、お弁当を食べる事にした
中を見てみると、やっぱりというか、ご飯の上にハート型で「ＬＯＶＥ」と書かれている
これじゃあ、愛妻弁当とかわらないじゃないか・・・と思い、亜季に普通の弁当にしてくれ・・・と頼まないとな・・・と、思いながら、残すのももったいないので、全部食べきった
食べ終わって、教室に戻ると、美鈴が「何処行ってたの～一緒に食べようとおもってたのに～」とか、愚痴をこぼしていた、そんな約束はしてないんだが・・・と思ったが、「まあ、次から一緒に食べよう」と俺が言ったので、なんとか納得してくれたみたいであった
そして、午後の授業に入り、真面目に勉強をする
先生は、担任の翠先生だった
やっぱり先生はやる気がなく、午後も自習だった
楽でいいかと思ったが、これでいいのか・・・？と、疑問にも思いたくなるぞ？
そして、授業が終わり、帰る支度をして、家路につく
家に入ると、いつもは亜季がいるのだが、今日はいなく、家の中には誰もいなかった
俺は、どうしようかと、迷ったが・・・
せっかくなので、先生に借りた、ミニパソをいじる事にしたのであった・・・

～第九十八話～俺ととある冬の一日～（後書き）

まだまだ続きます
できればでいいので、お気に入りに登録された方、感想もくれるとうれしいです。

～第九十九話～俺ととある冬の一日その2～（前書き）

次で、目標の百話ｗ
いや～長く続いたものです

～第九十九話～俺ととある冬の一日その2～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、学校が終わったので、家に戻った
家の中は誰もいなく、俺一人だった
俺は、何しようか・・・と悩んで、翠（みどり）先生に借りている、ミニパソを起動する事にした
俺は、ミニパソで、ネットを開き、何を調べようかな・・・と、悩んで、とりあえず母さんの南山美鶴（みなみやまみつる）と入力して、検索してみた
すぐに検索結果が出て、一万件以上があった
「あ、母さんのファンクラブのサイトもあるんだ・・・」
俺は、そのサイトにクリックして見る
すると、南山美鶴公式ファンクラブと出て、母さんの写真とか、ドラマの出演経歴とか、書かれてあった
母さん・・・公式と言うことは、許可したんだな・・・と思いながら、見て
次に、自分の「南山真琴」って、入力して検索してみる
驚いたのは、俺の名前で、一万件以上、母さんと同じぐらいの検索結果が出ていた
「母さんより、任期はないとは思うけど・・・なぜなんだ・・？？」
そう思いどういったサイトがあるのか見てみると、「南山真琴ファンクラブ」やら「真琴様を愛でる会」とかそういった感じのサイトがばっかりあった
そのサイトの中身を見てみると、天空カイザーで俺がレキ役を演じた事や、ＣＭ、飲料の「スプライト」出演、ラジオ「蓮城麗華のスマイルファンタジー」に特別ゲスト出演と、かなり細かく書かれていたりして、ちょっと驚いた
しかも、あきらかに隠し撮り？みたいな構図の写真が添付してあったりして、ちょっと怖かった
気を取り直して、俺は、同じバイト仲間で、サイト運営している、

秋村真帆(あきむらまほ)こと、あっきーのサイト、「あっきーの旅立ち日記」を覗いてみた
前と比べて、デザインが変更されていたり、控室で撮った写真や、旅行先で撮った写真が、添付してあった
掲示板を見てみると
「この管理人、あっきーは真琴さんと同じバイトらしい」「それ、本当？」「あ、俺見たぜ？秋葉にある、喫茶店であっきー見つけたし」「それ、どんな店？」「店の名前はアイライクって言うらしい、俺も、今度行こうって思ってる」「じゃあ私も～、真琴さんに会いたいし」「私も、サインとかねだろうっかな～」とか書かれてあったなんか凄い盛り上がってるな・・・と思いながら、俺はあっきーが「何か、また掲示板に書き込んでね？」と言っていたのを思い出して、とりあえず書く事にした
ペンネームは、前につかったまこにして、え～っと・・・なんて書こうか迷って
「アイライクで働いてる者です、あっきーに何か書き込んでって言われたので、書き込みます、とりあえず来ようと思っていてありがと、サインは書いた事がないから、無理かと」
そう言った文字を書いて、送信した
すると、すぐに掲示板に返信が来る、えらく早いな・・・と思った
「まさか、本人？」「嘘だろ？」「いや、でもまこさんだし、あっきーに言われたって言ってるし、やっぱ本人じゃん！」「すげ～、またなんか書き込んでくるかな？」とか一気に書き込んできた
また何か書き込んだら、返信増え続けるかもな・・・と思い、書き込むのをやめて、ミニパソの電源を落とす
そして、なんか疲れたというか眠くなったので、俺は、寝る事にした
こうして、俺の一日が終わったのである・・・

～第九十九話～俺ととある冬の一日その2～（後書き）

次で目標の百話、百話記念として、番外編でも書こうかな・・・とか、思っていたりします。
実際何話まで、続けるか・・・今の所、全く考えてないってかんじですかね～

～番外編～俺と舞波学園～（前書き）

はい、零堵です。
百話記念として、番外編を書いてみました

～番外編～俺と舞波学園～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、いつもと違う場所にいた
その場所とは・・・
舞波市にある、舞波学園と呼ばれている場所である
事の始まりは、こうであった
ある日の教室の放課後、俺は帰り仕度をしていると、親友の栗谷美鈴（くりやみれい）が、話しかけてきた
「ねえ、まこ？」
「何？」
「明日暇？」
「暇と言っちゃあ、暇だけど・・・何も予定入れてないしね」
「じゃあさ、明日ね？友達に教えてもらったんだけど、舞波市って所の舞波学園で、文化祭があるらしいの、そこにいかない？」
「いいの？他の学校の者が行って」
「いいんじゃない？他の学校って言ったって、一般人と変わらないし？」
そういうもんなのか？と思ったが、まあ暇なので
「わかった、いいよ」
「じゃあ、明日ね？じゃあね、まこ～」
そう言って、美鈴は帰って行った
そして次の日、家に来た美鈴と一緒に行って、電車に乗り、舞波市にたどり着く
地図を頼りに進んでいって、舞波学園にたどり着いた
校舎は、山野辺高校と同じぐらい広く、文化祭と言うだけあって、結構にぎわっていたりする
「じゃあ、入ろうか？まこ？」
「そうだね」
そう言って、俺と美鈴は、舞波学園の校舎の中へと入って行った

文化祭と言うだけあって、一般人と学生が結構沢山いた
俺達は、どこから行こうか悩んで、とりあえず実践部と言うのを見つけたので、その部屋に入ってみる
中に入ると、軍服を着た男が、こう言ってきた
「ようこそ、我が実践部へ、私がここの部長である、ここで行われる競技は、銃を持って、的を当てる、まあ射的みたいなものである、そしてこれが使用する銃だ」
そう言って、軍服を着た男は、俺と美鈴に銃を渡す
その銃はよく出来ていて、まるで本物みたいであった
「まこ、なんか凄いね・・・」
「そうだな・・・」
「じゃあ、ルールを説明するぞ?まずこの銃で、的を用意してあるので、それを狙って撃ってくれ、うまく当てられたら、我が部特性マスコットを進呈しよう」
部長と名乗った男がそう言う
俺と美鈴は、銃を構えて、用意された的に向かって、銃をぶっ放すズガーンと音がして、発射された弾は、まっすぐ飛び、的の枠を撃ちぬいていた
ちなみに美鈴は、ど真ん中に命中したみたいである
これって、本物みたいじゃないか!?やばいだろ!?っと俺は、思ってしまった
「おお、どうやらど真ん中に命中したらしいな?よし、ならば景品を進呈する」
そう言って、部長は、美鈴にこの部のマスコットを渡した
「また、チャレンジするか?」
「いや、結構です、行こう、美鈴」
「あ、うん、じゃあ」
そう言って、俺と美鈴は、実践部から出ていく
「なんか凄かったね・・・まるで本物みたいだったよ?」
「本物なんじゃないかな・・・銃は・・・弾は、違うみたいだけど」

「う〜ん、そうかもね〜、ま、気を取り直して、別のところに行こうか？」
「そうだね、そうしようか」
そう言って、俺と美鈴は、別の場所へと移動する事にした
次にやって来たのは、喫茶店をイメージした場所であった
その喫茶店の名前は「コスプレ喫茶、フリーダム」と書かれている
結構人が集まっていて、特に男が多かった
俺達も列に並んで、順番を待つ
そして俺たちの番になり、教室の中に入ると
「いっらしゃいませ〜」と、言ってきたのが
黒髪の綺麗な人だった
何故かスーツを着てて眼鏡をかけているので、女教師に見えたりしている
「あいてる席は、こちらですので、お座りください」
「あ、はい、あそこだって、美鈴」
「あ、ほんとだ、それにしても凄い人気ですね」
「ありがとうございます・・・おや・・・」
綺麗な人は、俺を見て、こう言ってきた
「そこの貴方」
「は、はい？」
「テレビで見た事あるわね？もしかして芸能人？」
「いや・・・違いますけど・・・」
「え〜？まこは、テレビに出たじゃん？ドラマみたしね〜」
「ドラマと言う事は、やっぱりあれね？天空カイザーでしょ？」
「あ、そうですよ？まこは、その天空カイザーのレキ役をやったしね〜」
「っちょ、美鈴、なんで教えるの」
「別にいいじゃん、隠してなんかないんでしょ？」
「まあ、そうだけど・・・」
「ほ〜そんな有名人が来るとはね？驚いたわ、あ、ちなみに私は、

この自由部の部長、斉藤由奈(さいとうゆな)よ？よろしくね？貴方達は？」
「自分は、南山真琴で、こっちが」
「栗谷美鈴です、よろしく～」
「真琴に美鈴ね、覚えたわ、どう？このフリーダムは」
「色々な服装を着てる人がいて、すごいですね、とくにあのメイド服の子、めちゃめちゃ可愛いです」
そう美鈴が言っていた、そのメイド服を着た子をみると、確かに異様に可愛かった、客の男どもに声をかけられまくっている
「ああ、あの子？凄いでしょ～？じ・つ・は・ね？あの子・・・男の子なのよ？」
「ええ、うそ！？」
「ほんとよ、あ、真、ちょっと来なさい」
「何？由奈？」
由奈がそう言うと、真と呼ばれた子が由奈の前にやって来た
「じゃ～ん、この子凄い美少女に見えるでしょ？」
「う、うん・・・凄い」
「ほんと～美少女に見える・・・ほんとに男なの？」
「男だよ・・・って、この格好由奈が選んだんじゃないか、僕は嫌だったのに・・・」
「別にいいじゃない、かなり好評よ？」
「うれしくない・・・」
なんか、この・・・待遇が、俺の働いている喫茶店、アイライクの店長の弟、東雲玲(しののめあきら)と似てるんだろな・・・と思った
そう思っていると、アニメに出てきそうな魔女っ子っぽい衣装を着た人ｆがやって来た
「由奈～人、多くなってきたよ？ちょっと手伝って～」
「解ったわ、由香里、じゃあ行くわね？あ、真、この二人から注文取ってね？じゃあ」
そう言って、由奈は、真琴達から離れて行った
「はあ・・・解ったよ、じゃあご注文はなんですか？」

「じゃあ、私はショートケーキで、まこは？」
「じゃあ、自分も同じのを」
「かしこまりました、少々お待ち下さい」
そう言って、真は、注文を取って厨房に行ったのであった
数分後、すぐにショートケーキ二つがやってきたので、俺達は、のんびりとそれを食べた
そして、人が多くなってきたので、フリーダムから出ていく
次に何所に向かおうか悩んで、とりあえす色々な展示とかを見たり、ライブがあったので、それを見学して、夕方になったので、帰る事にした
帰る途中、美鈴がこう言ってきた
「まこ？」
「何？」
「今日は、楽しかったね？デート」
「デートだったの・・・？というか、違うんじゃない？普通男女でしょ？そういうのは」
「いいの、私はまこと出かけるだけで、うれしいんだから」
そういうもんなのか？と思ったが、深く聞かない事にした
「また、どっか二人で、行こうね？」
「・・・まあ、いいけど・・・」
こうして、俺のいつもと変わった一日が、終わったのであった・・・

～番外編～俺と舞波学園～（後書き）

ちなみに、ここに出てくる舞波学園と言うのは、昔書いた「舞波学園活動記」という作品です
まあ、ありていにいえばコラボ作品ですね
舞波の方は、斉藤由奈が主人公ではなく、主人公は有坂雄一となっております・・・
中身は、作品として掲載してあるので、興味があったら見てみてくださいませ

～第百話～俺とバレンタイン～（前書き）

はい、零堵です。
この物語も長く続きましたね～

～第百話～俺とバレンタイン～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、行く所があった
それは、俺が働いている喫茶店のラブ喫茶「アイライク」である
俺は、朝起きて、出かける準備をして、外に出て、電車に乗り、秋葉原へとたどり着く
秋葉原の町は、今日はイベントでーなのか、路上にアニメの服装を着た女の子が、歩いている男性に何か配っていた
俺は、それを見ながら、ラブ喫茶「アイライク」にたどり着く
中に入って、控室で用意された服に着替えて、ホールに行くと、店長の東雲紫（しののめゆかり）さんが、こう話してきた
「まこさん、おはようございます」
「おはようです」
「まこさん、今日は何の日か知ってますよね？」
「え～っと・・・確か、世間一般的にはバレンタインと呼ばれる日ですよね？」
「ええ、そうです、そこで、今日は「バレンタインイベントデー」としします、主にメニューは、チョコを使った商品しか出さないと言う事ですね、あ、ちなみに、はい」
そう言って、紫さんは、俺にラッピングされた箱を渡してきた
「あの・・・これは？」
「チョコですよ、空いた時間にでも、食べてくださいね」
「いや・・・こういうのは、男にあげるものでは・・・」
「まあ、あると思いますけど」
「同性同士でもあげる場合は、ありますよね？」
「じゃあ、それです、断るとかないですよね？」
「は、はい」
結局、俺は、紫さんからチョコを受け取ったのであった
そして、仕事を開始する

俺は、接客なので、客に呼ばれていくと、なぜか「これ受け取ってください！」とか「貴方を思って作りました！」とか、俺を呼んだ客（ほぼ女）から、チョコを貰った
なんでこんなに同性にモテテルんだ・・・と、疑問に思いながら仕事をする
仕事が終わるまでに、結局十三個のチョコを貰ってしまったのである
はっきり言って、こんなに食べられないんだが・・・それに量が多いので、紙袋を貰って、その中に貰ったチョコを入れる事にした
仕事が終わったので、着替えて、外に出ると
「まこ～」
「まこさん」
外にいたのは、親友の栗谷美鈴（くりやみれい）と、同じバイト仲間の桐谷佐奈（きりやさな）さんだった
「仕事、お疲れ様です」
「まこ・・・凄い貰ったんじゃない？」
「うん・・・ちょっと重い、まさかこんなに貰えるなんて、思ってなかったし」
「あの・・・じゃあ、私から貰ったら迷惑ですかね・・・？」
佐奈さんは、そう言ってラッピングされた箱を、出してきた
「あ、じゃあ私も～」
美鈴も箱を出す
「い、いや、迷惑じゃないよ、貰えるのはうれしいしね？二人ともありがとね」
「いえ・・・」
「いえいえ～、それより、まこ？」
「何？」
「これからどうするの？そのまま帰る？」
「う～ん・・・荷物多いし、持ち運びながら何所かに行くとか、疲れそうだからまっすぐ帰るよ」
「そっか～どっか遊びに行こうとか思ってたけど、確かに荷物多そ

うだよね」
確かに今の状況、両手に紙袋を持っているので、荷物は多かった
「じゃあ、またね。二人とも」
「あ、はい、お疲れ様です」
「お疲れ～、また学校でね？まこ」
そう言って、俺は、家へと帰る事にした
家に帰ると、ポストの中に何か入ってるのを見つけて、あけてみると
箱とメッセージカードが入っていた
そのメッセージカードを読んでみると
「バレンタインなので、チョコをお送りします、大好きです！貴方
の汐崎美咲(しおざきみさき)より」と書かれていたのである
いつから美咲は、俺の物になったんだ・・・と、思ってしまった
そして家の中に入ると、妹の亜季(あき)が、こう言ってきた
「お姉ちゃん！それって、もしかして・・・チョコ？」
「うん」
「貰いすぎだと思うんだけど？」
「さすがに自分もそう思う・・・あ、亜季、食べるの手伝ってくれ
ないかな」
「・・・分かった、お姉ちゃんがそう言うなら、でも、最初に私
の作ったチョコ食べて？」
「分かったよ」
そう言って、俺は亜季と二人で、貰ったチョコを食べる事にしたの
であった

～第百話～俺とバレンタイン～（後書き）

零堵の紹介コーナー

真琴「はい、ここでは、零堵の作品の紹介をしたいと思います、まず、お～い、作者」

零堵「はい、呼ばれて飛び出てジャジャジャジャーンとはいかないまでも、零堵です」

真琴「じゃあ、まず最初の質問、初作品はどれです？」

零堵「そうだなあ・・・まず最初に書いたのは、約七年前、ザ・小説とかいうサイトで「時の旅人」というのを書いたのが最初かな」

真琴「ほうほう、それで？」

零堵「で、次に書いたのが見習い勇者という物語、最初は声劇用の台本として書いたんだよ」

真琴「声劇とは？」

零堵「声劇は、チャットとかでマイク付きヘッドホンを使って、みんなで台本を読みあうとか、まあアフレコとかそういった感じのですかね、で、次に書いたのが、舞波学園活動記という作品です」

真琴「なるほどなるほど、あ、時間なのでここで、いったん終了しときますか」

零堵「え、時間ってっちょ・・・」

真琴「では、さよ～なら～」

零堵「いやいやまだあるでしょ！？」

～第百一話～俺と総合施設～（前書き）

はい、零堵です。アクセス数が八万超えましたｗ
ありがとうございます。
お気に入りも少しずつですが、増えてきていて、うれしい限りです。

～第百一話～俺と総合施設～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、いつものように学校へと向かっていた
冬の季節なので、気温はかなり低く、結構寒く感じるので、俺は、厚着をして、外に出る
外は、思っていた通りにやっぱり寒く、早く温まりたいな・・・と思いながら、通学路を歩いていた
そして、俺の通っている山野辺高校にたどり着いて、自分の教室の中に入る
中に入ると、もう既に数人はいて、話し合ってたり、ノートに何か書いている奴もいたりしていた
俺は、自分の席について、教科書とノートを机の中に入れる作業をしていると
「おっはよ～まこ」
俺に、話しかけてきたのは、親友の栗谷美鈴（くりやみれい）だった
「おはよう」
「実はさ？まこに話があるんだ」
「話？何？」
「じゃーん、これ見てよ？」
美鈴は、そう言っていちまいのチラシを見せた
そこに書かれてあった内容は、「新規開店、総合運動場、ＹＭＡＺＵ（ヤマーズ）」と書かれてあった
「総合運動場？」
「そう、この山野辺市にね？プールやスケートとか出来る、総合運動場が出来たみたいなんだ、だからさ？今日いかない？」
「今日？」
「うん、今日、授業って、午前中だけみたいだしさ？」
確かに、予定を見てみると、授業は、午前中だけだった
「あ、ほんとだ・・・まあ、いいかな」

「じゃあ、決まりね？他にも行きたい人誘ってみるね？」
そう言って、美鈴は、俺のそばから離れて行った
そして、チャイムがなり、授業が始まった
授業は、三学期だからか、結構難しい問題とか出されて、解くのがちょっと大変だった
少し苦戦しながら、どうにか解く事に成功して、ちょっと安心したのであった
そして、授業が終わり、俺は、帰り仕度をしていると
「まこ～、じゃあ行こうか？」
そう言って来たのは、美鈴だった
「行くって、まさか制服のまま？」
「うん、わざわざ家で着替えるの面倒じゃない？」
「まあ、それはそうだけど・・・問題とかないわけ？」
「大丈夫じゃないかな？ほら、ユニフォームと思えばいいし」
そういう問題ではないと、思うんだが・・・
「でね？他にも誘ってみたんだけど、みっきーと住吉さんが来る事になったよ」
美鈴は、そう言う
ちなみにみっきーと言うのは、同じクラスの有栖川美紀子（ありすがわみきこ）の事で、住吉さんは、住吉愛子（すみよしあいこ）の事だった
「そう、あれ？その二人は？教室にいないみたいだけど？」
「先に行ってるって、みっきーが言っていたから、先に行ってるんじゃないかな？ほら、私達もいこっか？」
「解ったよ」
そう言って、俺と美鈴は、制服のまま、新しく出来た総合運動場、ＹＭＡＨＡＺＵ（ヤマーズ）に、行く事になったのであった・・・

～第百一話～俺と総合施設～（後書き）

零堵の紹介コーナーその２～

真琴「は～い、またまた登場しました、南山真琴です、それでは早速呼びたいと思います～お～い、作者」

零堵「はい、呼ばれたので来ました、零堵です、今日は時間あるよね？前回みたく無理やり切られたりはしないよね？」

真琴「さあ、それはどうなんでしょ～、まあそんな事はおいといて、早速最初の質問、ズバリ！書き始めたきっかけは？」

零堵「そんな事って・・・え～こほん、そうですね、学生の頃、授業中だというのに、妄想ばかりしてましたね」

真琴「それは、エロエロな？」

零堵「なわけないでしょ！？普通に物語の構想ですよ、特にファンタジー物とか、ギャグ物は好きなので、で、書いてみようって気持ちが高まって、書き始めたんです」

真琴「なるほどなるほど、じゃあ、他にやった事は？」

零堵「そうですね、次にボイスドラマに参加しました、これは前に言ったとおりに、声劇に使われる台本の台詞を収録して、やりましたね、ちなみに参加もしたし、自分で作ったりもしました、そして、次にやったのは自作ゲームですね」

真琴「ほほ～自作とはすごいですね」

零堵「と言っても、かなりしょぼいノベルゲームだけどね、もちろん作ったのはいいけど、途中で挫折というか、あまりにも難しいので、結局黒歴史みたいな感じになっちゃいました」

真琴「ふ～ん、あ、もうこんな時間、じゃあ、さよ～なら～」

零堵「またですか！？」

～第百二話～俺と総合施設その2～（前書き）

はい、零堵です。
今日は、二本目を投稿します。

～第百二話～俺と総合施設その2～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、親友の栗谷美鈴（くりやみれい）に連れられて、総合レジャー施設、通称「ＹＡＭＡＩＺＵ（ヤマーズ）」に行く事になった
ちなみに学校帰りによる事になったので、制服のままである
本当にこのままで大丈夫なのか・・・と思いながら、二人で歩く
数十分歩いて、ＹＡＭＡＩＺＵに辿り着いた
そこで待っていたのは、同じクラスの有栖川美紀子（ありすがわみきこ）と、住吉愛子（すみよしあいこ）だった
ちなみにこの二人も、制服のままである
「遅いよ～二人とも」
「ごめんごめん、まこと話してたら、遅くなっちゃった」
美鈴、俺のせいで遅くなったとか言ってないか？それは、違うと思うんだが・・・
「じゃあ、早速中に入ろう～」
「お～」
愛子がそう言って、俺達は中に入る
中はかなり大きく、学校の体育館と変わらない広さであった
「うわ～大きいね～」
「確かに、それで美鈴」
「何？まこ」
「ここに来て、一体何をしようと？」
「そうね～・・・じゃあ、スケートにしよっか？みっきーと愛子はどう？」
「あ、私はＯｋだよ」
「私も」
「じゃあ、決まりね？スケート場にレッツゴ～」
そう言って、俺達四人は、スケートリンクを目指した
数分歩いて、スケートリンクを発見した

オープンしたてなのか、かなりの人が滑っていたりする
「じゃあ、早速滑ろうか？」
「ちょっと待て」
「何？まこ？もしかして滑れないとか？」
「そうじゃなくて、制服のままで滑るつもり？」
「あ・・・確かにそうだった・・・忘れてたよ～」
「忘れてたって・・・おいおい・・・」
「じゃあ、スポーツウェア借りよっか」
「普通そうでしょ」
そう言って、俺達はスポーツウェアに着替えた
ちなみに、四人ともバラバラの色で
俺が白、美鈴が赤、美紀子が青で、愛子が緑だった
スポーツウェアとスケート靴一式借りた金額が、五百円だったので、
結構安いかもな・・・と思ってしまった
俺達は、着替え終わったので、リンクの中に入る
「よ～し、滑るぞ～」
美紀子は、そう言って、リンクを移動し始めた
一回も転んでないので、経験者だろうな・・・と思ったのであった
「ところで、真琴は滑れる？」
愛子がそう聞いてきたので、俺は
「昔、やった程度で今も滑れるかどうか解らないって状態かな？愛子は？」
「私？もちろん滑れるわよ、実家の方でスケートとかスキーとか結構やってたしね」
「そうなんだ、じゃあ美鈴は？」
「私も滑れるよ？滑れなかったら、ここに来ないって」
それもそうか・・・と、俺は思った
「ねえ？真琴？競争しよっか？」
愛子がそう言ってきたので、俺はと言うと
「別にいいけど、他のお客さんに迷惑にならない？」

「じゃあ、あっちのあいているスペースでやりましょ？」
そう言って、愛子は指差す
確かに、そこには人がいなく、競争出来るスペースがあった
「じゃあ、やろうか？」
「負けたら、ジュースおごるってのはどう？」
「あ、じゃあ私も参加する～ふっふっふ～まこにジュース奢ってもらうわ」
美鈴もそう言ってきて、結局三人で話し合った結果、直線距離のスピードスケート方式で対戦する事にした
直線だけなので、曲がったりしないので、最初のスタートダッシュが肝心である
「じゃあ、私がカウントとるね～」
いつの間にか戻ってきたのか、美紀子がそう言った
こうして、俺と愛子と美鈴のスピードスケート対決が始まったのである
俺達は、スタート位置に着く
「じゃあ、位置について～よ～い、ドン！」
美紀子の合図により、スタートする
直線距離だけなので、勝負はあっさりとついたのであった
結果は、愛子が一位、俺が二位、美鈴が三位の順だった
「くっそ～、まこには負けないと思ってたのに～」
「じゃあ、美鈴、約束よ？」
「解ってるわよ、おごりますよ～だ」
そんな感じに滑っていたら、暗くなってきたので、俺達は帰る事にした
制服に着替え直して、外に出る
外は、もう既に真っ暗で、月が出ていたりしていた
俺達は、美鈴に奢ってもらったジュースを飲みながら、他愛のない会話をして、別れる
家に着くと、妹の亜季（あき）が、こう言ってきた

「お姉ちゃん、いつもより、帰りが遅かったけど、どこに行ってたの？」
なんか言い方が、ちょっと怒ってる感じがするんですが、気のせいでしょうか・・・？
「ちょっとスケートしに行ってたんだ」
「誰と？」
「クラスメイトと」
「それって・・・まさか、男子とかじゃあないよね？」
「そんなわけないよ、女友達とだよ」
「・・・だったら私も誘ってよ？私もお姉ちゃんと遊びたかったよ～」
「う、うん、今度からそうするよ・・・」
俺は、そう妹に言っていたのであった
こうして、俺の一日が終わったのである

～第百二話～俺と総合施設その2～（後書き）

零堵です。
マジで、ラストどうするか考えてないって感じです。
この物語、どこまで続くって感じですかね～

～第百三話～俺と友達と漫画家～（前書き）

はい、零堵です。
うん、まったく終わりが見えないですね
まあ、まだ最終話とか、書く気は全然ありませんが

～第百三話～俺と友達と漫画家～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、行く所あった
それはもちろん、俺が働いている場所、ラブ喫茶「アイライク」である
週一のバイトに入っているので、今日がその日なのであった
朝から、出かけて、電車に乗り、秋葉原の街へたどり着く
冬と言うだけあって、厚着をしている者が、結構多く、人も多くいた
俺は、その街中を歩いて、目的の場所へとたどり着く
店の中に入ると、店長の東雲紫（しののめゆかり）さんが、こう言ってきた
「おはようございます、まこさん」
「おはようございます」
「まこさん、今日もよろしくお願いしますね？」
「はい、分かりました、じゃあ、着替えてきますね」
そう言って、俺は、控室の中に入る
控室で、用意されたウエイター服っぽいのを着て、控室を出ると
「あ、まこ～おっはよ～」
声をかけてきたのは、俺の親友の栗谷美鈴（くりやみれい）であった
「おはよう」
「ねえねえ、まこ？」
「何？」
「今日、仕事終わったらさ？遊びに行かない？今の所、さな～とあっきーが、一緒に来る事になってるよ？」
「う～ん、別にいいよ」
「よし、決まりね？じゃあ、仕事が終わったら、声をかけてね？」
「わかった」
そう言って、俺は、仕事を開始した
相変わらず、俺を呼ぶ客は、女性客ばかりで、しかも
「ＴＶ見ました～」とか「かっこいいです・・・彼女はいますか？」

とか、「またＴＶに出る事があったら、教えてください」とか言ってきた
ＴＶに出た影響が、かなり強くなってるな・・・と思った
別に芸能人でもなんでもないと、思うんだが・・・
そんな感じに仕事をしていると
「お久しぶりです、まこさん」
そう言って俺を呼んだのは、汐崎美咲（しおざきみさき）の従姉の汐崎茜（しおざきあかね）だった
「え～と・・・茜さんでしたっけ」
「はい、そうですよ、実はですね？私の書いている漫画「ヒロイックストーリー」がね？アニメ化になったのよ、この作品って、真琴さんをモデルに書いたから、教えとこうと思ってね？」
「そうなんですか？おめでとうございます、アニメ化ですか、凄いですね？」
「ありがとう、あ、そうだ、私の仕事場に招待するわね？来てみない？」
茜さんが、そう言ってきた
俺は、どうしようかと迷ったが、漫画家の仕事場って行った事がないから、興味があったりするのである
「じゃあ、暇な日にお邪魔してもいいでしょうか？」
「いいわよ、じゃあ、はい、これ仕事場の住所と、私の携帯番号ね？なるべく出るようにするわ」
そう言って、茜さんは俺に、一枚の紙を渡してきた
「ありがとうございます、あ、お客様、ご注文はなんでしょうか？」
「そうだった、注文してなかったわね、じゃあ天使の微笑みをお願いするわ」
「かしこまりました、天使の微笑みですね？了解しました」
そう言って、俺は厨房に行く
数分後、天使の微笑みを持って、茜さんの席に行った
「お待たせしました、天使の微笑みです、ごゆっくりどうぞ」
「ありがとう、真琴さん」

そんな感じに接客して、紫さんが「今日はもう、あがっていいわよ？まこさん」と言ったので、仕事を終わりにする事にした
控室で着替えて、美鈴を探して、見つけたので、声をかける
美鈴も仕事が終わっているのか、すでに私服に着替え終わっていた
「美鈴、仕事終わったよ」
「あ、まこ～じゃあ、いこっか？」
「あれ？佐奈さんとあっきー、待たなくていいの？」
「大丈夫、行く先は決めてるからね？後で来るって」
「ふ～ん、そうなんだ？で、行き先って？」
「それは、行ってからのお楽しみ、じゃあ行こう～」
そう言って、俺と美鈴は、行く事にしたのであった・・・

～第百三話～俺と友達と漫画家～（後書き）

はい、零堵です。
これからも、この物語をよろしくです～

～第百四話～俺と友達と漫画家その２～（前書き）

はい、零堵です。
アクセス数が、八万五千行きましたｗありがとうございます。

～第百四話～俺と友達と漫画家その2～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、仕事が終わったので、遊ぶ事になったのであった
俺は、親友の栗谷美鈴（くりやみれい）に誘われたので、美鈴と一緒に行く事にした
そして、たどり着いた場所は・・・
「まこ～、ついたよ～」
そこは、大きなビルだった
「ここは？」
「総合ゲームセンター、通称「ワールドゲーム」だよ、このビルの一階から四階まで、ゲーセンになってるんだ、凄いと思わない？」
確かに、凄いと思う
山野辺市に、こんな巨大なゲームセンターとか、ないからな・・・
「じゃあ、入ろうか～」
「りょ～かい」
そう言って、俺と美鈴は、そのワールドゲーム店内に入って行ったのであった
店の中は、結構広く、一階に置いてあるマシンは、ほとんどクレーンゲームと、プリクラの写真機ばかりだった
「とりあえず、上の階行こう～」
「上の階って、何階？」
「え～っと、じゃあまず、二階から」
そう言って、エスカレーターで上の階へ行く
二階のフロアに置いてあるのは、音楽ゲームとビデオゲームが置いてあった
「あ、まこ、これやろっか？」
そう言って、指差したのは、ギターの形をした音楽体感ゲーム「ギタープレイツZ」と呼ばれてる物だった
「美鈴、これやった事ないんだけど？」

「大丈夫だって、まず簡単なのからやっていこ？」
「解ったよ」
そう言って、俺と美鈴は、そのゲームをプレイする
百円を挿入して、どうやら遊べる曲数は、四曲と、結構多いみたいである
初心者なので、ビギナーを選んで、曲も比較的簡単なのを選んで、プレイした
一曲目は、間違えながらもなんとかクリアした、ちなみに美鈴は、ノーミスでパーフェクトだったりしている
「まこ？操作方法はなれた？」
「一曲だけじゃなれないって・・・」
「じゃあ、ちょっと次は難しい曲選ぶね？」
そう言って、二曲目は、さっきのよりちょっとテンポの早い曲を選んだ
二曲目も、ぎりぎりラインを超えて、なんとかクリアする事に成功した
ちなみにこの曲も美鈴は、パーフェクトだったりする
「美鈴・・・手とか痛くならない？」
「ううん？全然痛くないよ？」
「そう・・・」
「じゃあ、次の曲選ぶけど、もうちょっと難しいの選ぶね？」
「それって、クリア出来ないかも・・・さっきもぎりぎりだったし」
「大丈夫だって、まこなら出来るよ～」
その自信はどっから来るんだと言いたいんだが・・・
そして三曲目、さっきの曲と違って、今度はかなりのスローテンポだが、格段に難しく、それでも何とかクリアする事に成功した
美鈴も、クリアしていて、次で最後の曲である
「よっし、調子上がってきた～じゃあ、最後の曲、入力するね～」
そう言って、美鈴は最後の曲を入力した
その曲は、俺の知っている人が歌っている曲だった

「あれ・・・この声って・・・」
「まこ、やっぱり気がついたんだ?そう、この曲ね?あの天空カイザーでアカリ役をやっていた、蓮城麗華(れんじょうれいか)の曲なんだよ～」
やっぱりそうか・・・麗華、歌出してたのか・・・知らなかったな・・・
麗華の曲は、かなりのハイテンポで、めちゃめちゃ難しかった
それでもなんとか必死に指を動かして、クリア目指してやってみる
麗華の曲を最後にプレイして、なんとか全面クリアする事に成功した
ちなみにこの曲も、美鈴はパーフェクトをたたき出し、プレイを見ていた観客が、「おお～」とか言っていたりしていた
俺はと言うと、指を動かしすぎたのか、ちょっと痛く感じたりもしたのであった
ゲームを終わらすと
「まこさん、お疲れ様」
「美鈴、ほんとうまいね～」
いつの間にか、桐谷佐奈(きりやさな)さんと、あっきーこと、秋村真帆(あきむらまほ)がやって来ていた
「あ、佐奈にあっきー来てたんだ?じゃあ、これで四人そろったから、上の階で遊ぼうか?」
「賛成～」
「あ、私もＯｋです」
そう言って、俺達は、上の階で遊ぶ事にしたのであった・・・

～第百四話～俺と友達と漫画家その２～（後書き）

お気に入りも評価も増えて、うれしい限りです～

～第百五話～俺と友達と漫画家その3～（前書き）

はい、零堵です。
この物語もまだまだ続くって、感じですかね？

～第百五話～俺と友達と漫画家その3～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、遊びに来ている
その場所は、ワールドゲームと呼ばれている場所で、結構大きなゲームセンターであった
そして、俺と一緒に遊ぶ事になったのは、親友の栗谷美鈴（くりやみれい）、同じバイト仲間の桐谷佐奈（きりやさな）さん、あっきーこと、秋村真帆（あきむらまほ）の四人で、遊ぶ事になったのである
「じゃあ、上の階、行ってみよ～」
美鈴が、そう言ったので、俺達は、上の階で、遊ぶ事にした
三階にたどり着くと、中においてあるのは、体感ゲームと、ビデオゲーム中心だった
「あ、まこ～、これやろっか？」
そう言って、指差したのは、四人対戦出来る、レースゲーム「首都高バトルスピリッツ」と言うゲームだった
「別にいいけどね」
「私も、ＯＫです」
「美鈴、勝負だね～」
「じゃ、早速やろ～」
そう言って、俺達は、それぞれ席につく
このゲームは、車体を選べるらしく、バイク、スポーツカー、バス、タクシー、パトカーと言った、ちょっと変わった機体も、選べるみたいであった
俺は、どれにしようか・・・と迷ったが、バイクを選んでみる
ちなみに、美鈴がスポーツカー、佐奈さんがバス、あっきーがタクシーを選んでいた
「負けても恨みっこなしだよ～」
「分かってるよ」
「こっちも、全力でやります！」

「私の実力、見せてあげるよ？」
そう言って、レースがスタートした
さすがにこういうのあまりやってないせいか、操作方法が難しく、
なかなか順位をあげられなかった
トップ争いは、美鈴とあっきーで、俺と佐奈さんは、約五十メートル
ぐらい離されてしまった
そして、結果はどうなったのかと言うと、そのまま美鈴が一着でゴ
ールして、あっきーが二着、三着が佐奈さんで、俺が最下位だった
「まこ、こういうの苦手？」
「まあ、そうかも、普段、ゲームとかやらないしね」
「そっか、じゃあ、別のゲームやろうか？」
「賛成～」
「他のゲームだったら、勝てそうかもです」
そう言って、次にやったのは、対戦型格闘ゲームだった
俺はやった事ないので、見学する事にして、見ていると
佐奈さんが、あっきーと美鈴を負かしていた
佐奈さんの意外な実力を知る事になったのであった
そんな感じに遊んでいて、時間も遅くなったので、一階でプリクラ
の写真を一枚撮って、俺達は、帰る事にした
電車に乗り、山野辺市に着く
途中で佐奈さんとあっきーと別れて、俺は美鈴と一緒に帰っていた
帰る途中、美鈴が話しかけて来た
「ねえ、まこ？」
「何？」
「たまには、皆で遊ぶのもいいね？」
「そうかも」
「また、皆で遊びにいこっか？あ、じゃあ私、こっちだから、じゃ
ね？まこ、お休み～」
「お休み～」
そう言って、美鈴と別れて、家にたどり着く

中に入ると、家の電気が真っ暗で、誰もいないのか?と思ったが、
妹の亜季(あき)は、すでに寝ているらしく、母さんもいないみたいなので、
真っ暗の理由が分かった
俺も、自分の部屋に入って、考えてみる
そう言えば、明日も学校無いので、明日は、今日、汐崎茜(しおざきあかね)さんに貰
った住所に行ってみるからな・・・と決めて、寝る事にしたのであ
った

～第百五話～俺と友達と漫画家その3～（後書き）

感想くれると、作者のやる気があがったりします。

～第百六話～俺と友達と漫画家その４～（前書き）

はい、零堵です
この物語もそろそろ終盤って感じですかね？
時間軸で言うと、二年生の冬ですし

～第百六話～俺と友達と漫画家その４～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、学校が休みの日に、汐崎茜（しおざきあかね）さんから、貰った住所に行く事にしたのであった
その住所は、山野辺市の郊外の方で、歩きだと、結構な距離なので、自転車を使う事にした
季節は冬なので、結構寒いので、ニット帽子にマフラーを装備して、外に出る
そして自転車に乗り、数十分、目的の場所に辿りついた
「うわ・・・結構大きな家」
そこは、一軒家で、表札に汐崎と書かれている
俺は、ほんとにここなのか？と迷ったが、表札が同じで、渡らせたメモに書かれてあった住所も一致したので、俺はとりあえず、チャイムを押す事にした
チャイムを押して、数秒後「はい？どちら様？」と、声が聞こえたので
「えっと、南山です」
と、答えると
「あ、真琴さん？早速来てくれたんだ？じゃあ、ちょっと待って」
そう言ってきたので、俺は、待つ事にした
一分後ぐらいに、ドアが開いて、中から出てきたのは、ジャージ姿の茜さんだった
「おっはよ、真琴さん、さあああがって？」
「あ、はい、お邪魔します」
そう言って、俺は中に入る
部屋の中は、結構広く、いくつか部屋があり、俺が案内された場所は、ある一室だった
その中は、机が結構置いてあって、原稿用紙やら、本棚やらいろいろな物が置いてあり、そこにいたのは

「あ、まこ、会えて嬉しいです」
同じクラスで、アイドル的存在の汐崎美咲がそこにいた
え～っと・・・なんでいるんだ?と、疑問に思ってしまった
「え～っと・・・美咲さん、なんでいる・・・?」
「私、時々、茜姉さんの手伝いをしてるんですよ?ほら、前にビックドームで売り子もしましたし、それにまこ?私の事は、美咲って呼び捨てでいいのに・・・」
「・・・これからは、そう言うよ」
この子ちょっと、苦手なんだよな・・・まあ、何故苦手なのかと言うと、春に手紙をもらって、俺に「彼女にして下さい」とか言ってきたし、クリスマスにキスされたし・・・
いかん、思い出してしまった
そう考えていると、茜さんがうやって来て、こう言ってきた
「真琴さん、私が連載している、「ヒロイックストーリー」見てくださいな」
そう言って、俺に一冊の漫画を渡してきた
タイトルに「ヒロイックストーリー」一巻と書かれている
もう単行本出来ていたのか・・・と、思った
表紙を見てみると、確かに主人公のキャラクター、俺の姿に似ていたまあ、茜さんは、俺をモデルに描くと言っていたしな
俺は、漫画の中身をみる
内容は、よくラブコメ物で、ところどころにギャグもいれてあって、結構おもしろかった
「どうですか?真琴さん」
「え～っと、面白いです、これはアニメ化もうなずけるって感じがしました」
「ありがとうございます、あ、そうだ、真琴さん、作画の資料として手伝ってくれませんか?」
「それぐらいなら別にいいですよ」
「ありがとうございます、じゃあ美咲も手伝ってくれる?」

「分かった、茜お姉ちゃん」
そう言って、俺と美咲は、茜さんの手伝いをする事になった
「じゃあ、こんなポーズをとってください」
そう茜さんが言ったので、俺と美咲は、ポーズを取る
ちなみに指示されたポーズは、美咲と抱き合ってるポーズだった
美咲の顔がかなり近いので、ちょっとでも唇が触れそうな位置でもある
「やっぱり、好き・・・」
そう頬を赤らめて、美咲が言ってきた
「あら、美咲は真琴さんが好きなの？」
「うん、大好き」
「ほほ～、真琴さん、美咲をよろしく頼むわね？ちなみにどっちが攻め？受けなの？」
「私は、まこに攻めて欲しい・・・」
「そう～、これは話のネタになるわね～」
一体二人で、何を言っているんだ！？
それにどう返事すればいいんだ・・・？と、返答に困ってしまった
「あ、二人ともそのままで動かないでね？今、スケッチしてるから」
そんな感じに時間が進んで、あまり長くいるのもなんなんで、俺は帰る事にした
「じゃあ、自分は帰りますね」
「今日は、ありがとう、真琴さん、また遊びに来てもいいわよ？」
「はあ、分かりました、じゃあ、さようなら」
「あ、まこ、また学校で会いましょうね？」
「う、うん、じゃあ・・・」
俺は、そう言って自転車に乗って、家に帰る事にした
帰る途中思ったのは、美咲の事を考えていた
学校で何か言ってくるのか？と思ってしまったからである
まあ考えても仕方がないので、考えるのをやめて、家路に着く
家に戻ると、妹の亜季（あき）がこう言ってきた

「お姉ちゃん・・・どこに行ってたの？」
「ちょっと、漫画家の家」
「漫画家の家？」
「そ、まあその人、クラスメイトの従姉の家だったけど」
「ふ～ん・・・あ、お姉ちゃん、ご飯出来てるよ？一緒に食べよ？」
「分かった」
そして、俺は妹と一緒に、食事をする事にした
こうして、俺の一日が、終わったのである・・・

～第百六話～俺と友達と漫画家その４～（後書き）

はい、零堵です。
このまま続けて三年生編を書くか
それとも、最終話を書くか、悩んでいたりって感じです。

～第百七話～俺とバンド活動～（前書き）

はい、零堵です。
この物語も、そろそろ終盤に近付いたって感じですかね？

～第百七話～俺とバンド活動～

ある日の冬の学校の放課後、俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、授業が終わったので、帰ろうとしていると、俺に話しかけてくるものがいた
「あ、まこ～ちょっといい？」
俺に、話しかけてきたのは、同じクラスで親友の、栗谷美鈴（くりやみれい）だった
「何？美鈴」
「実はさ・・・・バンドやらない？」
「バンド・・・・？」
「そ、一週間後に、卒業生を送る会があるでしょ？そこで、バンドで演奏しない？」
バンドか・・・、やった事がないんだが・・・
それにそれって、俺と美鈴と二人だけでやるのか？と気になってしまった
「それって、他にも声かけたの？」
「うん、まあみっきーは、ＯＫしてくれたから今の所、まこを入れると三人だよ？」
みっきーと言うのは、同じクラスの有栖川美紀子（ありすがわみきこ）の事である
「そう・・・」
「でさ？まこ？一緒にやらない？」
俺は、どうしようかな・・・と迷ったが、バンドやるのもいいかな・・・と、思ったので
「分かった、じゃあやるよ」
「さんきゅ～まこ、じゃあさっそく練習しにいこ？」
そう美鈴が言うと
「あ、なら私も参加したいです、いいですか？」
そう言ってきたのは、このクラスのアイドル的存在の、汐崎美咲（しおざきみさき）だった
「え～っと、参加ってもしかして、バンドの事？」

「はい、私もやってみたいです」
「う〜ん、ま、いっか、じゃあ汐崎さんも参加で、これでメンバーは四人になったね、じゃあ、練習しに行こうか？」
「美鈴、練習場所って？」
「翠先生に許可とって、音楽室、使わせて貰う事にしたからね？目的地は音楽室だよ〜、じゃあ行こう」
そう美鈴が言ったので、俺と美咲は、移動する事にした
そして、たどり着いた場所は音楽室で、中に入ると
「あ、美鈴〜真琴と美咲を誘ったんだ？」
中にいたのは、美紀子だった、美紀子はギターを持っていたりしている
他にもドラムセットとか置いてあるので、バンドをするには、いい条件が揃っていたりしていた
「うん、この四人でバンドする事になったよ、ところでバンド名ってどうする？みっきー」
「そうだなあ〜、四人の名前の一文字をとって、ＦＯＵＲＭ（フォーム）にしない？ほら、真琴、美咲、美鈴、美紀子で最初のアルファベットが全員Ｍだし」
「ＦＯＵＲＭ（フォーム）か〜、いい名かも〜二人は、どう思う？」
「私もいいと思いますよ？まこは？」
「自分もそれでいいよ」
「じゃあ、決まりね？早速パートを決めよっか？バンドに必要なのが、ギター、ベース、ドラム、ボーカルだけど、私はギター得意だから、ギターやろうと思ってるけど、三人は何をやる？」
美紀子がそう言ったので、俺は何をやろうか悩んだ
「じゃあ、私は、ドラムをやって見たいので、ドラム希望でいいですか？」
美咲がそんな事を言っている
「じゃあ、私はボーカル〜、カラオケで鍛えた歌声を披露する時が来たって感じかな？まこは、ベースでいい？」

なんかあっさりと決まった感じがするのだが、まあいいか・・・と思ったので
「分かった、じゃあベースやるよ」
「Ｏｋ、じゃあ早速練習始めよっか？」
美紀子がそう言ったので、俺達は、バンド活動を始める事にしたのである
こうして、新たにＦＯＵＲＭ（フォーム）と言う、バンドが結成されたのである・・・

～第百七話～俺とバンド活動～（後書き）

ちなみに翠先生も頭文字Ｍなので、入れるとｆｉｖｅｍに、なるって感じですかね？

～第百八話～俺とバンド活動その2～（前書き）

はい、零堵です
アクセス数九万突破ｗありがとうございます。

～第百八話～俺とバンド活動その２～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、バンド活動をする事になった
俺と一緒に活動するメンバーは、親友の栗谷美鈴（くりやみれい）、同じクラスの汐（し）崎美咲（おざきみさき）、有栖川美紀子（ありすがわみきこ）の四人で、活動する事になったのである
俺が、演奏する楽器はベースで、バンド名は、四人の名前の頭文字からとって、ＦＯＵＲＭ（フォーム）と決めたのであった
ＦＯＵＲＭ（フォーム）を結成して、二日目
俺は、平日なので、いつものように学校へと向かう
学校にたどり着いて、教室の中に入ると
「おっはよ～、まこ」
話しかけてきたのは、美鈴だった
「おっはよ～」
「まこ、今日の放課後、音楽室で練習するから、忘れないでね？」
「分かった」
「じゃあ、今日も一日頑張ろう～」
「おお～」
そう言ってると、チャイムがなったので、授業を受ける事にした
そして時間があっという間に過ぎて、放課後
俺は、美鈴に言われたとおりに、音楽室へと向かう
音楽室の中に入ると、もう既に他のメンバーは、集まっていた
「あ、まこ、来たね？じゃあ、早速始めようか？」
「そうだね」
そう言って、俺は使う楽器を手にする
俺は、ベースなので、ベースを持った
「ところで、美鈴、最初に何の曲を弾く？」
みっきーこと、美紀子がそう言ってきた
「そうだね～じゃあ、定番の卒業ソングいっとこうか？ちょうど楽譜あるしね？」

「卒業ソングかあ・・・確かに、卒業生を送る会に歌うから、ふさわしいかもね？」
「そうでしょ？じゃあ、楽譜プリントしたから、配るね？」
そう言って、美鈴は、俺達に楽譜を渡す
俺は、楽譜を見て、とりあえず弾いてみた
うん、ちゃんと音は出るが、ちょっと音程が変だった
「まこ、もしかして初めて？」
「そうだよ、で、どう？」
「う～ん、まあ初めてにしては、いいほうじゃない？とりあえず、ちゃんと音が出るように練習してみたら？」
「わかった、そうする」
そう言って、俺は弾けるように練習する
数十分後、なんとかまともな音が出せるようになった
「あ、いい感じだよ、美咲さんは、どう？」
「私ですか？まあ・・・」
そう言って、美咲は、ドラムをバシバシ叩く
おお・・・なんかプロっぽく聞こえる感じがするな・・・と思った
「とまあ、こんな感じです、どうですか？」
「凄いうまいと思うけど・・・美鈴はどうおもう？」
「私もそう思う、ドラムって結構難しいと思うんだけどなあ・・・」
「家に帰って、ネットでドラムの叩き方とか見て、研究してみたんです」
「そうなんだ～じゃあ、とりあえず一曲、あわせて演奏してみよっか？美鈴、歌える？」
「まっかせて、準備Ｏｋだよ」
そう言って、美鈴はマイクを構える
「じゃあ、カウントは、美咲、お願い」
「分かりました、じゃあ、１，２，３、４」
そう言って、演奏がスタートした
多少間違えなら演奏だったが、美鈴も音程を外す事無く、歌い出し

たので、出だしは順調だった
そして何とか演奏が終わった
「ふ～・・・で、どう？」
美鈴がそう言ってきたので、俺は、こう答える」
「多少間違えちゃったけど、練習すれば完璧になるかな」
「私もです、ちょっと手が痛くなりましたが、まだ大丈夫です」
「私は、完璧だよ、あとは皆とあわせるだけかな？」
「そっか、じゃあもうちょっと練習しよっか」
「りょ～かい～」
そう言って、練習を始めた
そして時間が過ぎて、暗くなってきたので、練習をやめて帰る事にした
帰る途中
「まこ～、明日も放課後練習だから、よろしく～」
そう美鈴が言ってきたので
「りょ～かい」
そう返事するのだった
こうして、バンド活動二日目が、終わったのである・・・

～第百八話～俺とバンド活動その2～（後書き）

この分だと、十万アクセス近いって感じですかね～

～第百九話～俺とバンド活動その3～（前書き）

はい、零堵です
もうすぐ、アクセス十万超すいきおいですって感じですね
これからも、続けたいと思います

～第百九話～俺とバンド活動その3～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）が、バンド活動をするようになって、三日目、俺は、いつものように学校へと向かう
学校にたどり着いて、教室内に入ると
「おっはよ～、まこ」
親友の栗谷美鈴（くりやみれい）が、話しかけてきた
「おはよう」
「まこ、今日も放課後、練習あるから、頑張ろう？」
「分かった」
「あ、あとさ？今日思ったんだけど、それ、放課後に言うね？じゃね？」
そう言って、美鈴は自分の席に戻る
思った事ってなんだ？気になったが、深く考えない事にして、授業に集中する事にした
そして時間が過ぎて、放課後
俺は、バンド活動があるので、音楽室へと行く
音楽室の中に入ると、まだ誰もいなく、俺だけだった
俺は、どうしようかな・・・と迷って、とりあえず一人でベースの練習をする事にした
ベースを弾いて数分後、俺と同じバンド活動をする事になった、美鈴、同じクラスの汐崎美咲（しおざきみさき）と、有栖川美紀子（ありすがわみきこ）がやってきて、全員そろったのであった
「あ、まこ、実はさ？」
「何？」
「オリジナルソング歌おうかなって思ってるんだけど、どうかな？」
「オリジナルソング？」
「うん、タイトルを考えたんだけど、カルテット・ダンスと名前付けたの、でね？家で考えた歌詞がこれだよ～」

そう言って、美鈴は一枚の紙を俺に渡す
紙に書かれてあったのは、カルテットダンスと言う名前と、その歌詞が書かれていた
「みっきーも美咲もＯＫしてくれたけど、まこはどう思う？」
俺は、悩んだが、別に問題はないんじゃないか？と思ったので
「別にいいんじゃない？」
と言う事にした
「じゃあ、ＯＫだね？じゃあこの歌詞に音をどう出すか皆で、考えよう～」
そう美鈴が、提案したので、俺達はカルテットダンスの音合わせをする事にした
数十分間意見を出し合って、何とか皆が納得する音が出せる事に成功する
「ドラムは、こんな感じで叩きますね？」
「私は、こんな感じで弾くよ～」
美咲も美紀子も、そう言って、音を出していた
俺も納得のいく音が出せたので、まあいっかと思っていたりするのであった
そんな感じで練習を続けていると、音楽室にやって来る者がいた
「おい、もう遅くなったぞ、生徒は下校の時間だぞ」
やって来たのは、俺達のクラスの担任、朝崎翠（あさざきみどり）先生だった
「あ、ほんとだ、じゃあ最後に一曲あわせて、終わろうか？先生、丁度いいので聞いてくれます？」
「そうか、分かった、じゃあ聞くな？」
「ありがとうございます、美咲、カウントお願い」
「分かりました、じゃあ行きます、１，２，３、４！」
そう言って、カルテットダンスの演奏をする
最初の頃と比べて、数倍うまくなっており、ほとんどミスがみられなくて、ちゃんと全員の音が揃っていた
美鈴も、それに乗じて歌いだす

そして数分の演奏が終わって
「先生、どうでした？」
そう先生に聞いてみると
「まあまあじゃないか？これってオリジナルソングか？」
「はい、そうです」
「オリジナルにしては上出来なほうだと思うぞ、頑張れよ？皆」
「はい！」
「じゃあ、下校時刻だから、帰るようにな？」
「は～い、じゃあ今日の練習、終わりにして帰ろうか」
「うん、そうだね」
「分かりました」
「りょ～かい」
そう言って、帰り仕度をして、俺達は家路に着く事にしたのであった
こうして、今日の練習は、終わったのである・・・

～第百九話～俺とバンド活動その3～（後書き）

うん、マジで三年生編書くかどうか悩むなあって感じですかね。

～第百十話～俺とバンド活動その４～（前書き）

はい、零堵です。
百十話突破ｗ、でもまだまだ続く感じですかね

～第百十話～俺とバンド活動その４～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、今日は学校がないので、バイト先に行く事にした
朝起きて、出かける準備をして、電車に乗る
着いた場所は、秋葉原の町で、その街中を歩いて、俺の働いている職場
ラブ喫茶「アイライク」に辿り着いた
店内に入って、店長を見つけたので、俺は挨拶をする
「おはようございます、紫さん」
「おはよう、まこさん」
そう言ったのは、ここの店長の東雲紫（しののめゆかり）さんである
「あ、そうだ、まこさん」
「何ですか？」
「れいれいから聞いたんだけど、バンド結成したんですってね？」
「あ、はい、クラスメイトと一緒に」
「へ～、で、どこで披露するの？」
「いや・・・披露と言っても、卒業生を送る会で、演奏するだけですけど」
「あ、そうなの？じゃあ、それが終わったら解散とか？」
「多分そうなると思います」
「ふ～ん、ちょっと残念ねえ～、あ、そろそろ着替えてきてね？まこさん」
「あ、はい、分かりました」
そう言って、俺は、控室に行く
控室の中に入って、俺は自分の制服に着替える
俺の服装は、ここの店は、メイド服が基本なのだが、俺の服装はそれじゃあなく
ウエイターが着るような服を着る事になっているので、それに着替

えて、控室を出て、ホールに行く
ホールに行くと、既にお客でにぎわっていて、ちょっと忙しそうだった
俺も、接客担当なので、仕事を開始する
相変わらず、俺を呼ぶ客は、女性客ばかりで、ＴＶに出た影響のせいか、サインを求められる事が、多くなった
サインと言っても、芸能人じゃあないのだから、無いんだけどな・・・
そんな感じに接客をして、時間が立ち、午後になって、店長の紫さんがこう言ってきた
「まこさん、今日はもうあがっていいわよ」
「あ、分かりました、じゃあ、そうさせて貰います」
そう言って、控室に入り、私服に着替える
着替え終わって、店長に挨拶をして、外に出ると
親友の栗谷美鈴（くりやみれい）が、そこにいた
「あれ？美鈴も終わり？」
「うん、紫さんに終わっていいって言われたからね、まこが終わるのずっと待ってたんだ」
何故、待つ必要が・・？？と思ったが、深く考えない事にした
「まこ？、仕事終わったから、暇だよね？」
「まあ、確かに用事はないから、暇だけど」
「じゃあさ、これからカラオケに行かない？ちょっと歌いたい気分だしさ？」
「カラオケね・・・まあ、いいよ」
「じゃあ、行こう～」
そう言って、俺と美鈴は、カラオケ店に行くのであった
秋葉原の町の中を歩いて数分、たどりついた場所は、歌野郎と呼ばれているカラオケ店だった
「美鈴、一体何時間歌うつもりなの？」
「ん～まこは、何時間希望なの？」

「長くいると、妹がうるさいから、大体一時間ぐらいかな」
「じゃあ、それでいいよ～」
そう言って、俺と美鈴は、一時間を希望して、個室に入る
内装が凄く豪華で、防音もしっかりとしている感じだった
「じゃあ、まこ～歌いまくろ～！」
「お、おお～」
なんか異様にテンション高いな・・・美鈴・・・
美鈴は、そう言ってマイクを離さず、歌い続ける
しかもアニソンの曲ばっか、聴いてて恥ずかしい歌詞とかもあり、
ある意味凄いな・・・と、思ってしまった
俺も、数曲選んで歌う
俺が選んだのは、メジャーな曲とかで、普通に歌う事にした
歌い続けて一時間がたって、かなりの体力を消耗した感じがした
帰り際、美鈴が、こう言ってくる
「いや～楽しかった～、まこ、また一緒に遊びにいこ～ね～」
「あ、うん・・・えらくご機嫌だね？美鈴、何かあったの？」
「ん？まあね～、それは、な・い・しょwじゃあ、またね？まこ～」
そう言って、美鈴は俺から、離れていく
一体何があったんだ？と気になったが、深く考えない事にして、家
へと帰るのであった・・・

～第百十話～俺とバンド活動その４～（後書き）

イラスト、東雲紫を追加いたしましたｗ

～第百十一話～俺とバンド活動その5～（前書き）

はい、零堵です。
この物語も、そろそろ二年生編終わりって感じです。
つづけて三年生編書くか、終わらすか・・・悩みどころでは、ありますね

～第百十一話～俺とバンド活動その5～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、いつものように学校へと向かった
クラスメイトとバンド、ＦＯＵＲＭ（フォーム）を結成して、これで六日目になる
明日が、卒業生を送る会なので、今日が最後の練習かと思われる
そう思いながら、教室内に入ると
「まこ～おっはよ～」
そう言ってきたのは、親友の栗谷美鈴（くりやみれい）だった
「おはよう」
「明日が、本番だから、今日の放課後、最後の練習しようか～」
「そうだね、わかった」
「うん、あ、授業始まるから戻るね？」
そう言って、美鈴は、自分の席に戻る
そしてチャイムがなり、いつもどおりの授業が始まったのであった
そして、あっという間に時間がたって、放課後
俺は、音楽室に向かう事にした
いつの間にか、他のメンバーがいなくなっていたので、先に音楽室に行ったと思われる
音楽室の中に入ると、既に、俺以外のメンバーが、集まっていた
「あ、まこ、やって来たね、全員揃ったし、練習始めようか？」
「おお～」
「了解しました」
「分かった」
そう言って、俺はベースを持つ
そして、練習が始まった
最初の頃に比べて、全くミスが無く、スムーズに演奏できて、最後まで、無事に演する事が出来た
歌い終わった美鈴が、こう言ってくる
「今の完璧に出来たんじゃない？」

「うん、私もそう思う、初めの頃は、音が全く合わさってなかったかね」
「私も、ドラムのたたき方とかちょっと変えてみたら、あうようになりましたよ」
「確かに、最初の頃より、上手くなってると思う、ばらばらじゃなかったし」
「よ～っし、このまま練習続けようかといきたいけどさ?明日、本番じゃない?
だから今日は早めに切り上げて、体を休ませた方がいいと思うんだけど、どうかな?」
美鈴が、そう言ってきたので、俺は、確かにそうかも・・・と思っていた
「あ、確かにそうかもね、本番で体痛めて、演奏できないとか嫌だしね」
「私も、賛成です、ドラムって叩き過ぎると、手とか痛めますし」
「まこは、どう思う?」
「自分も休ませた方がいいと思うよ」
「じゃあ、最後に一曲あわせて、おわろっか?美咲、カウントお願い」
「わかりました、じゃあ行きます!1，2，3，4!」
そう言って、演奏がスタートする
全くミスをせずに、最後まで演奏できて、美鈴も間違える事なく、歌い切り
無事に演奏する事が出来た
「ふ～、じゃあ、今日は終わりって事で、明日、がんばろ～」
「うん」
「そうですね、ちょっと緊張しますが、頑張ります」
「わかった」
そう言って、俺は、皆と別れて、家に帰る事にした
家に帰ると、美鶴(みつる)母さんがいて、俺に話しかけてくる

「真琴、最近帰りが遅いみたいじゃない、亜季が愚痴をこぼしていたわ、一体何をやってるの？」
そう言えば、母さんに遅れる理由、言っていなかったな・・・
「ちょっとバンド結成して、それの練習で遅くなってたの」
「バンド？ちなみに真琴の担当は？」
「ベース」
「へえ～真琴がね～、それはいつ演奏するの？」
「明日の、卒業生を送る会で、演奏する事になったんだ」
「そう、じゃあ、母さんも見に行こうかしら」
「母さん・・・卒業生の保護者じゃないんだから・・・」
「大丈夫、上手く紛れ込んでみせるわ？」
それでいいのか・・・？と、疑問に思うんだが
「はあ・・・、母さんが見に来るの、ちょっと恥ずかしいけど、頑張るよ・・・」
俺は、そう言って、自分の部屋に入り、疲れたので寝る事にしたのであった・・・

～第百十一話～俺とバンド活動その5～（後書き）

とりあえず、まだまだ続く感じです。
俺かののスピンオフ作品「ハウスメイド」も、よろしかったら見てやってくださいね。

～第百十二話～俺と卒業式～（前書き）

はい、零堵です。
アクセス数九万五千突破ｗ
もうちょっとで、十万アクセスいきますね～

～第百十二話～俺と卒業式～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、いつもと同じ時間に、学校へと向かう
今日は、卒業生を送る会なので、全ての授業は無く、体育館に集まるみたいである
教室にたどり着いて、すぐに体育館にと移動するのであった
体育館の中に入ると、すでに三年生が集まっていて、全校生徒集まっているので、かなりの大人数になっていた
後ろには、保護者の席が置いてあり、保護者の数も多く、大人数になっている
そして時間がたって、校長先生が壇上にあがった
「え～、三年生の皆さん、卒業オメデトウございます、色々な道を歩むと思いますが、頑張ってください」
そう校長が言って、卒業生を送る会が始まった
最初に下級生が、卒業生に「おめでとうございます、我々は下級生ですが、先輩方のこれからの未来に向かって、バンザイ三唱をしたいと思います」とか言っている
そして、下級生の大勢が「バンザーイ！」とか言って、かなりの大声だったので、結構うるさく感じた
そんな感じに式が進んで、俺は、席から離れて、体育館の裏手にまわった
そこで、楽器を持って、準備をしていると、翠先生が話しかけてきた
「真琴、それに皆、実はな？衣装作ってきたので、これに着替えて演奏しないか？」
「衣装？それって、ステージ衣装って事ですか？」
「ああ、そうだ、で、どうだ？」
先生がそう聞くと、みっきーこと、有栖川美紀子（ありすがわみきこ）は
「いいかも～私は着るね、美鈴はどう？」
「もちろん着るよ、まこは？」

「・・・皆が着るなら、自分も」
「じゃあ、私もOKです」
結局全員で制服から、ステージ衣装に着替える事にした
そして着替え終わって、改めて見てみると
美鈴のは、赤色の服で、美紀子は青、美咲が白で、俺が黒っぽい衣装だった
「とりあえず色の選定は私がしといたんだが、うん、皆、よく似合ってるぞ」
「ほんと～まこ、なんかかっこいいね？」
「ほんと、そう思います、まこ、かっこいい・・・」
美咲が、顔を赤らめて言ってきたので、ちょっと反応に困ってしまった
「じゃあ、そろそろ私たちの番だから、待機しよっか？」
「そうだね」
「りょーかい」
そう言って、舞台裏で出番待ちをする事にした
うん、改めて思うと、ちょっと緊張してきたんだが、他のメンバーを見てみると、緊張していないらしく、足とか震えていなかったもしかして、緊張しているの俺だけか？と、思ってしまったのであるそして、時間が過ぎて
「次は、下級生による、バンドです、よろしくお願いします」
と、放送が入ったので
「みんな、準備はいい？」
「OK」
「大丈夫です」
「行くよ！」
そう言って、幕があがる
うん、やっぱり緊張するが、それを表に出さないようにして、ステージに出ていくのであった・・・

～第百十二話～俺と卒業式～（後書き）

イラスト、東雲玲を追加しました。

～第百十三話～俺と卒業式その2～（前書き）

はい、零堵です。
今日は、世間ではハロウィンらしいですが、昨日にハロウィンにちなんだお菓子を食べた感じです（おいおい）
ちなみにカルテッドダンスの歌詞に四人の名前が隠れていたりますまあ直ぐに分かると思いますが・・・

～第百十三話～俺と卒業式その2～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、卒業生を送る会で、バンド演奏する事になり、
そして体育館のステージの上に、あがっていったのであった
ステージ上にあがると、結構な大人数の人がいるので、ちょっとと
言うか、かなり恥ずかしかった
俺は、ベース担当なので、ベースを持って、構える
美鈴（みれい）が、美咲（みさき）の方を一回向いて、合図すると
美咲が、こう言った
「1，2，3，4！」
そう言って、演奏がスタートする
最初の曲は、卒業をテーマにした曲で、卒業シーズンとかに流れそ
うな曲を演奏した
誰も間違えず演奏して、美鈴も歌詞を間違えず歌い上げる
途中、客席からおお～とか聞こえていたりして、結構盛り上がって
いるのであった
そして、美鈴が歌い終わって、マイクを使ってこう言う
「どうも、ＦＯＵＲＭ（フォーム）です、まず、三年生の皆さん、卒業、おめで
とうございます！で、私達のメンバー紹介したいと思います、まず、
ドラムの美咲！」
そう美鈴が言うと、ズダダダンとドラムを叩いて、美咲がポーズ
する
その反応に客席から「美咲さま～！」とか聞こえるので、言った奴、
美咲ファンクラブ、ＭＫＦＣだな・・・と、俺は思った
「次、ギター、美紀子（みきこ）～」
ギュイイーンと、音を鳴らして、美紀子もポーズする
じゃあ、次は俺の番か・・・と、待ち構えた
「次、ベース、真琴～」
美鈴がそう言ったので、俺も音を鳴らして、ポーズする

すると、客席から「キャー！」とか聞こえてきた
え・・・もしかして、俺にもファンがいるのか?とか、思ってしまった
まあ、テレビとかに出た影響かもしれないと思うのだが・・・
「最後に、私、ボーカル、美鈴です！」
美鈴がそう言う
すると、またうおー！とか、聞こえてきた
「じゃあ、次は、オリジナルソング、いきたいと思います、カルテットダンス！」
そう美鈴が言って、美咲の方を向く
一旦、会場が静まり返って、美咲がこう言った
「1，2，3、4！」
そう言って、ドラムを叩く
それに合わせて、俺と美紀子も音を出す
そして、美咲が歌いだすのだった
「真のような現実を見つけて、誘い出す心
胸が痛み、聞こえてくる鼓動
心が痛み、冷酷な微笑を浮かべてる
足が痛み、咲き誇れ、未来を掴む為に
カルテッドダンス、希望を信じて
カルテッドダンス、明日を掴む四人の乙女
真実はいつも一つだけ、私達のシンフォニー～♪」
美鈴が歌い終わった瞬間、拍手が沸き起こった
「皆、ありがとう～！どうも～ＦＯＵＲＭでした」
そう言って、四人で礼をして、ステージから出ていく
放送で「ＦＯＵＲＭの皆さんでした、ありがとうございました」と、流れた
こうして、無事にＦＯＵＲＭとしての、バンドが終わったのである
卒業生を送る会も無事に終わって、俺は家に帰ると
「真琴、お帰りなさい」

「お姉ちゃん、お帰り～」
美鶴母さんと、妹の亜季が、テレビに何か繋いで見ていた
「何、見てるの？」
「真琴の初ライブ映像よ」
「やっぱり、お姉ちゃん、かっこいい～」
テレビ画面を見てみると、体育館のステージで、黒っぽい衣装をきた俺がベースを弾いている姿が映し出されていた
「か、母さん・・・もしかして、ビデオに撮ってたの・・・」
「ええ、真琴のバンドだからね？そりゃあ撮ったわよ～亜季も見たいって言ってたし」
「お姉ちゃん、ほんとかっこいいよ？」
「あ、ありがと・・・」
ちょっと恥ずかしいが、まあしょうがないかとあきらめて、俺は自分の部屋に戻る事にしたのであった・・・
こうして、俺の一日が、終わりを告げたのである

～第百十三話～俺と卒業式その2～（後書き）

明日で、この物語、連載四ヶ月目です。
七月一日から始めて、もう百話以上・・・
うん、かなり書きましたって感じですかね～
イラストも暇ができたときに随時載せたいと思います。
スピンオフ作品の「ハウスメイド」もよかったら、見てやってくださいね

～第百十四話～俺とアフレコ～（前書き）

はい、零堵です
今日で、連載四ヶ月目です
まだ続きますので、よろしくお願いします

～第百十四話～俺とアフレコ～

「はい、本番行きます～」
そんな声がして、収録が始まる
俺は、ガラス越しに、その光景を見ているのであった
何故、そんな状況になっているのかと言うと、事の始まりは、こうである
俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、家で休んでいると、俺の携帯が鳴ったので、出てみる
「はい、南山です」
「真琴、私、蓮城麗香（れんじょうれいか）よ、久しぶり」
電話の相手は、以前、ドラマやラジオで一緒に、共演した蓮城麗香であった
「麗香、久しぶり」
「久しぶり、でさ？真琴、今日、暇よね？学校はないでしょ？休日だし」
まあ、そうなんだが、俺が用事あるとか、思っていないのか？
「え～っと・・・暇と言われれば暇だけど・・・」
「じゃあ、今からいう場所に来ない？歓迎するわよ」
俺は、どうしようかと迷ったが、別に何も予定は無いので
「分かった」
と、言って、麗香に教えて貰った場所に行く事にした
そして、辿り着いた場所は、山野辺スタジオと呼ばれていて、山野辺放送局より、ちょっと建物が小さくで出来ていたりしている
そこの二階にあがり、「スタジオA」と書かれた部屋の中に入ると、数人の男女が集まっていた
その中に麗香を見つけて、声をかける
「麗香、来たよ」
「真琴、久しぶり、元気してた？」

「まあ、元気と言えば元気だよ、ところでここで一体何を？」
「今日はね？アニメの収録をする事になったのよ、それで私はゲスト出演で呼ばれたってわけ、それにほら、あそこに知っている人もいるでしょ？」
そう言って麗香が指さす
するとそこにいたのは、以前、天空カイザー2で一緒に共演したエリカ姫役の三島陽子（みしまようこ）が、そこにいた
「あ、真琴さん、お久しぶりです」
「久しぶり、陽子さんも、出演するんだ？」
「はい、私もゲスト出演として、参加する事になったので、まあ麗香と一緒ですね」
「まあ私の方が、台詞多いけどね」
「何言ってるのよ、一つしか違わないでしょ」
「まあ、そうだけど」
うん、なんか見ているかぎり、この二人、仲がいいな・・・・と、思った
三人で話していると、男の人の声で
「はい、そろそろ収録始めますね、おや？君は？」
「あ、私の友達の南山真琴さんです、今日は見学に誘ったんですけど、いいですか？監督」
「う～ん、もしかして・・・天空カイザーでレキやった人？」
「あ、はい、そうです、ね、真琴」
「あ、うん、レキやりました」
「ま、いっか、そうだ、真琴さん、チョイ役だけど出てみないか？」
え？俺も？
「え、自分もですか？」
「うん、ダメかな？」
「真琴、一緒にやりましょうよ？」
「私も、一緒にやりたいです」
二人にそう言われて、俺はどうしようかと思ったが、ま、参加する

のもいいかな?と思ったので
「分かりました、じゃあ、参加します」
「Ｏｋ、じゃあ、あとで台本渡すから、今日は見学しといてくれるかな?」
「分かりました」
そう言って、俺は、案内されて、ブースの外に出る
そこで、待機する事にした
ちなみに、今から収録するのは、映画版アニメ「天空カイザーＴＨＥＭＯＶＩＥ」と言うらしい
天空カイザーの映画が作られるとは・・・凄い、作品だな・・・と、俺は思った
「じゃあ、収録始めます～」
そう監督が言ったので、俺は、収録を聞く事にしたのであった
こうして、天空カイザーの収録が、始まったのである・・・

～第百十四話～俺とアフレコ～（後書き）

補足
天空カイザーＴＨＥＭＯＶＩＥ
アニメ、天空カイザーの、映画版
カイザーＶＳデルウイングの戦いを、総集編としてお送りする

～第百十五話～俺とアフレコその2～（前書き）

はい、零堵です
ＰＶアクセス十万超えましたｗ
ありがとうございますｗ

～第百十五話～俺とアフレコその2～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、アニメに参加する事になった
俺が参加するアニメと言うのは、天空カイザーＴＨＥＭＯＶＩＥと言うアニメで、天空カイザーの映画版である
そのアニメの中の、ほんのちょい役で、参加する事になったのである
俺は、山野辺スタジオの中に入って、ブースの外のコントロールルームと呼ばれる場所にいる
その隣がブースとなっていて、録音機器があるので、そこで収録するみたいである
コントロールルームはにいるのは、俺と音響スタッフと監督の三人で、監督がこう言う
「じゃあ、収録始めます、真琴さん」
「はい？」
「真琴さんの出番は、まだ先にあるので、他の人のを聞いてみてください」
「わかりました」
監督が、そう言ったので、俺は、他の人の演技を聞く事にした
「じゃあ、シーン1、スタート！」
監督がそう言う
「俺は、カイザー！絶対にデルウイングを倒すぜ」
うん、改めて見てみると、本職の声優さんの演技は、かなり上手だった
さすが、声優だな・・・と、俺は、思ったのである
そんな感じに始まって、駄目だしも入れながら、収録が続く
「はい、ＯＫです、じゃあ、ちょっと休憩にします」
そう監督が言って、一時収録が中断する
コントロールルームの方に、蓮城麗華（れんじょうれいか）と、三島陽子（みしまようこ）が、やって来た
「真琴、どうだった？」

「麗華より、私の方が上手でしたよね？」
「何言ってるのよ、私の方がうまかったわよ？ね、真琴」
「・・・正直、どっちもよかったと思うんだけど？」
「そうだよ、二人とも、何張り合ってるの？」
「だって～・・・」
「麗華には、負けたくないって思うのよね」
「あ、私も、陽子にだけは負けたくないわって、思う時あるし、まあ、ライバルみたいなものよ」
「そうなんだ・・・」
「はいはい、現場では仲良くやって下さいね、あ、そろそろ休憩終わりですよ」
「あ、分かりました、じゃね？真琴」
「了解～」
そう言って、二人は、ブースの中に戻っていく
「真琴さん」
「はい？」
「真琴さんの役ですが、明日の収録で登場させる予定にしようと思うけど、明日もこのスタジオに来れるかな？」
「明日ですか・・・、学校があるので、学校が終わってからならこれますが？」
「そうですか、それで構いませんよ？今日は、あと一つの収録だけで切り上げようと思います、じゃあシーンアクション！」
そう、監督が言うと、録音がスタートする
「カイザー！ここは任せたぞ！」
「ああ、分かった、許さないぞ！デルウイング！」
「はい、ＯＫです、今日の収録は、これで終わりです、また明日も収録あるので、よろしくお願いします、では、皆さん、お疲れ様でした」
そう監督が言ったので、今日の分の収録が終わったみたいなので、俺は帰る事にした

帰ろうとすると、監督が
「あ、そう言えば私の名前教えてませんでしたね、木梨(きなし)と言います、真琴さん、明日、よろしくね」
「あ、はい、木梨さん、分かりました」
そう言って、俺は、山野辺スタジオから出て行くのであった・・・

～第百十五話～俺とアフレコその2～（後書き）

この物語は、まだまだ続きそうです～

～第百十六話～俺とアフレコその3～（前書き）

うん、まだ続くって感じですかね？

～第百十六話～俺とアフレコその3～

俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、行く所ができた
その場所とは、山野辺スタジオである
そこで、アニメにチョイ役として、出させて貰う事になったのであった
俺は、今日は、学校があるので、いつものように起きて、制服に着替えて、学校に行く
冬だからか、外はかなり寒く、厚着をして行かないと、風邪引く感じなので、マフラーと手袋を装備して、通学路を歩く事にした
数十分歩いて、通っている高校、山野辺高校にたどり着く
教室内に入ると、すでに何人かいて、ゆったりとしていた
ちなみにクラスの中は、暖房もつけてないと言うのに暖かく、結構快適な感じだったので、俺も自分の席で、ゆったりと休む事に決めて、自分の席に着くと
「おっはよ～まこ」
話しかけて来たのは、俺の親友の栗谷美鈴（くりやみれい）だった
「おはよう」
「まこ、今日、暇？」
「暇じゃない、行く所、出来たしね」
「行く所？何か用事？」
まあ、用事といえば用事なんだが、ここは素直に言うか？でも、別に言う事もないよな・・・と、思って
「まあね、今日は忙しいから、ところでなんか用だったの？」
「暇だったら、まこと遊びに行こうと思ってたんだけど、暇じゃないのか～、じゃあ、また今度誘うよ」
「そうしてくれるといいかも、あ、チャイム鳴るよ」
「あ、ほんとだ、じゃね、まこ」
そう言って、美鈴は、俺の席から離れて行った

そしてチャイムが鳴り、授業が始まる
終業式が近いからか、授業は短縮授業で、早めに終わったのであった
授業が終わったので、俺は、教室を出ていって、このまま行こうか
迷ったが、いったん家に帰って着替えてから、行く事にした
家に戻ると、誰もいなかったので、俺は何も言わないまま私服に着
替えて、外に出る
そして、山野辺スタジオへと向かうのであった
数十分移動して、山野辺スタジオにたどり着く
その建物の中の二階に行って、スタジオAと書かれた部屋の中に入
ると、もう既に収録が始まっているらしく、台詞を録音していた
俺は、コントロールルームの中に入り、監督の木梨(きなし)さんに、話しか
ける
「おはようございます、監督」
「あ、おはよう、真琴さん、はい、これが真琴さんの台本ね、と言
っても、台詞が三つぐらいしかないから、簡単だとは思うよ」
「あ、そうですか、じゃあ読んでみます」
俺は、監督に渡された、台本を読む
俺の役は、カイザーに助けられた子供の役だった
台詞も「がんばれカイザー」と「負けないで・・・」と、「ありが
とう～」の三つだけだった
うん、これだけだったら簡単かも・・・と、思ったのである
そして時間が進んで、監督がこう言う
「じゃあ、真琴さん、収録、お願いできるかな」
「あ、はい、分かりました」
そう言って、俺はコントロールルームから出て行き、ブースの中に
入る
中に入ると、声優の皆さんと、蓮城麗華(れんじょうれいか)と三島陽子(みしまようこ)がいた
俺は、とりあえず挨拶をする
「今から参加する、南山真琴です、初心者ですが、よろしくお願い
します」

そう言ったら、よろしく～とか言ってくれたので、場の雰囲気は良好だった
スピーカーから、監督の声が入る
「じゃあ、真琴さん、台詞、お願いしますね、3，2，1、キュー」
そう言ったので、俺は台本に書かれている台詞を、マイクに向かって言う
「ガンバレカイザー！」
「う～ん、もうちょっと子供が応援する感じで頼みますね、じゃあもう一回」
「分かりました」
そう言って、俺は台詞を言う
何回か、ダメ出しを食らったはしたが、なんとかＯＫを貰えたので、よかったと思ったのであった
出番が終わったので、俺は、コントロールルームの方に移動する
中に入ると、麗華と陽子も出番が終わったのか、中にいた
「真琴、お疲れ様」
「お疲れ様です、真琴さん」
「お疲れ様、どうだったかな・・・」
「なかなかよく出来てたわよ？ね、陽子」
「ええ、そうね、初めてにしては、結構出来てた方だと思いますよ？」
「よかった」
そう話していると、監督がこう言ってきた
「う～ん、君たち三人でユニットでも組んだら、人気出るんじゃない？君たち三人とも、いい線言ってると思うし」
「そうかな～、ね、麗華、それも面白そうじゃない？」
「まあ・・・私も、この三人ならユニット組んでもＯｋかな？って思うわね、真琴はどう？」
「う～ん・・・特別やりたい！って思わないんだよね、それに学校あるし、そういうのありかな・・・って感じかな」

「そう、でも真琴がＯＫするなら、私もＯｋ出すわよ、陽子もそうよね？」
「うん、私もＯｋ出すよ」
「そうか、まあ君たちの問題だから、とやかく言う事ではないな」
そう監督が言う
俺は、三人でユニット組むのも一つの手だな・・・とか、思っていた
そして収録もすべて終わったので、俺は、帰る事にした
帰る際に、監督がこう聞いてきた
「そうだ、真琴さん、ＥＤに出てくる名前だけど、そのままでいいのかな？」
「う～ん・・・じゃあ、ＭＡＫＯＴＯで、お願いできますかね？」
「分かった、そう言っておくね？それじゃ、さようなら」
「はい、お疲れ様でした」
こうして、俺のアフレコが終わったのである・・・

～第百十六話～俺とアフレコその3～（後書き）

話数、かなりいきましたって感じです～

～第百十七話～俺と終業式～（前書き）

はい、零堵です。
この回で、二年生編終了です。

～第百十七話～俺と終業式～

季節もすっかり温かくなり始めたころ、俺こと、南山真琴（みなみやままこと）は、いつものように学校へと向かっていた
今日、学校に行くと、明日から春休みに入るので、つまり、今日が二年生最後の日である
俺は、山野辺高校に辿り着き、自分の教室の中へと入る
中に入ると、騒いでいた
特に男子が「美咲様と、クラスが離れるかも知れない」「美咲様、一緒のクラスがいいです！」とか言っている
そう言えば、忘れがちだが、うちのクラスにアイドル的存在の、汐崎美咲（おさきみさき）がいたんだったな・・・と、俺は思った
自分の席に着くと、親友の栗谷美鈴（くりやみれい）と、同じクラスの住吉愛子（すみよしあいこ）が、話しかけてきた
「まこ、おはよ」
「真琴、おっはよ～」
「おはよう」
「今日で、二年生も終わりだね～」
「そうだね」
「真琴、また一緒のクラスになるといいね？」
「あ、私も、まこと一緒のクラスがいいなあ～そしたら、また一緒に遊ぶとか出来るしね～」
そんな事を思っていたのか・・・美鈴
そう話していると、チャイムが鳴って、担任の朝崎翠（あさざきみどり）先生がやって来た
「あ～お前ら、今日で二年生も終わりで、明日から春休みに入るのだが、あまり浮かれすぎんようにな？それと、体育館で、校長の話があるから、体育館に移動するように」
先生がそう言ったので、体育館に移動する事にした

体育館の中は、全校生徒が集まっていて、結構な人数になっている
まあ、終業式だから、集まるのも当たり前か・・・とか思っている
と、校長が壇上にあがって、こう言ってきた
「え～今日でとりあえず学校が終わるのじゃが、まあ浮かれすぎな
いで、新学期に備えるようにするのじゃ」
そんな事を言っている校長だが、それよりも気になったのは、頭だ
った
以前は、カツラ?を被っている風だったのだが、今回は、何故か金
髪だった、しかもメッシュとか入れていて、ロック風になっている
ありえないだろ!?年考えろよ!?とかツッコミたくなったが、我
慢する事にした
そんな校長の話も無事に終わって、教室に戻って、翠先生がこう言
ってきた
「じゃあ、通知表を配るのだが、なんかめんどくさいな・・・委員
長、まとめて渡すから、配ってくれ」
「あ、はい、わかりました」
そう言って、受け取ったのは、このクラスの委員長、西崎綾香(にしざきあやか)だった
委員長は、先生から渡された通知表を皆に配る
俺も、通知表を委員長から受け取って、中身を見てみると
平均の平均だった、まあ赤点がないよりマシか・・・とか、思った
のである
「じゃあ、通知表配ったから、もう何も言う事はないな、元気で新
学期にまた会おう、では、解散」
先生がそう言ったので、俺は、帰り仕度をして、帰る事にした
帰る途中、俺に話しかけてきたのは
「まこ・・・」
このクラスのアイドル的存在の、汐崎美咲だった
「えっと・・・何かな、美咲」
「まこは、この春休み、何してますか?」
「何してると言われても、まだ予定入れてないし、何かしら入るか

もしれないし・・・今の所、不明だよ」
「そうですか・・・、まこ、私は、まこに会いたいので、春休み中でも、家に押しかけていいですか？
「・・・えっと・・・何とも言えないけど・・・そん時はその時で・・・」
「分かりました・・・」
「と、ところで・・・、まだ自分の事を好きだったり・・・・？」
「当たり前じゃないですか、私、まこの彼女になりたいと思ってますし」
まだ諦めてなかったのか・・・と、俺は思ってしまった
「あ、この後、用事があるので、先に帰りますね？まこ、さようなら」
「あ、さようなら・・・」
そう言って、美咲は、帰って行った
俺も、帰る事にして、家路に着く
家の中に入ると、妹の亜季（あき）が、こう言ってきた
「お姉ちゃん・・・」
「な、何？」
「気のせいかもしれないけど、よくない事がおこったような気がするんだけど、気のせいかな・・・」
「そ、そうかな？気のせいじゃない？」
「お姉ちゃんがそう言うなら、そうなのかも・・・あ、ご飯出来てるから、一緒に食べよ？」
「分かった」
そう言って、俺は、妹と一緒にご飯を食べる事にした
こうして、俺の一日が、終わったのである・・・

～第百十七話～俺と終業式～（後書き）

うん、長かったですね～、物凄く書いた感じですが・・・
次からは、春休み編に突入って感じです
この物語は、まだまだ続くって感じです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5028u/

俺と彼女の非日常

2011年11月5日02時20分発行